

聖園ミカがシャーレに 馴染むまでの話

五色雨

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エデン条約関連のドタバタが一段落ついたころ、聖園ミカがシャーレに入部する。

ミカがシャーレに入部するためにあれやらこれやら準備をして、入部した後に先生との絆を深めてシャーレのメンバーと仲良くなっていくお話です。

※本作品独自の設定や独自の解釈が多々あります。

シャーレ初出勤日⑨	—	269
シャーレ初出勤日⑩	—	282
ある日のティーパーティー①	—	296
ある日のシャーレ②	—	311
シャーレ部員と一緒に		
シャーレ部員と一緒に①	—	323
シャーレ部員と一緒に②	—	335
シャーレ部員と一緒に③	—	348
シャーレ部員と一緒に④	—	361
シャーレ部員と一緒に⑤	—	375
シャーレ部員と一緒に⑥	—	387
シャーレ部員と一緒に⑦	—	401
シャーレ部員と一緒に⑧	—	414

シャーレ部員と一緒に⑨	—	427
シャーレ部員と一緒に⑩	—	442
シャーレ部員と一緒に⑪	—	455
シャーレ部員と一緒に⑫	—	469
シャーレ部員と一緒に⑬	—	483
シャーレ部員と一緒に⑭	—	495
シャーレ部員と一緒に⑮	—	511
ある日の便利屋68①	—	526
ある日のシャーレ③	—	539
シャーレ演習		
シャーレ演習①	—	554
シャーレ演習②	—	569
シャーレ演習③	—	584

シャーレ演習④



598

シャーレ演習⑤



616

プロローグ

プロローグ①

トリニティ総合学園3年生の聖園ミカは、初めて肉眼で見るシャーレオフィスの建物をゆつくりと見上げた。

思いのほか感動はなかった。トリニティの自治区の外へ出るのが久しぶりだというのに、すでに自治区では滅多に見かけない近代的なビルを見飽きてしまったのか。

それとも、あの建物の中にシャーレの先生が居ないのが分かり切っているからか。

「……あく、漸く着いたあ」

口に出してみるも、やはり感動は胸を満たさない。寧ろ虚しさと気怠さを感じた。

溜息をつき、ミカは肩から下げていた鞆から取り出したIDカードを、出入り口の入室管理用の端末に押し当てる。モニターにはミカの顔写真と名前、そして連邦捜査部「シャーレ」のロゴマークが表示される。数日前にミカの手元に届いたばかりの新品のカードだ。

自分の名前の横にトリニティの校章マークが掲げられていないのも、余り違和感を感じない。ティーパーティーに就任していたころは殆ど顔パスで、学生証など使う機会が

殆ど無かったからだろう。

電子音と共に自動ドアがスライドする。中に入ると、暖房の風がミカの髪を揺らした。

「おじやましませう」

一応言うだけ言ってみるも、周囲に誰も居ないのは入室した直後から分かっていたことだ。エデン条約に関する諸々の事件以降、様々な悪感情に塗れた視線と罵声を浴び続けてきたと言うのに、周りに誰も居ないのはそれはそれで寂しさを感じるのだから不思議なものだ。

IDカードと共にミカの手届けられたシャーレオフィスの地図を頭の中で思い出しながら、ミカはスタスタと歩き始める。

オフィスロビーの壁に掛けられているデジタルカレンダーの日付をチラリと見る。聖園ミカがシャーレに入部して初めての仕事を行う、3日前の日付だった。



総合学園の生徒にして元ティーパーティー、現一般生徒である聖園ミカが連邦生徒会の超法規的機関シャーレに入部するまでには、トリニティ上層部のほぼ全員を巻き込んだ騒動があった。ドラマであれば1シーズンは稼げそうなくらいの非常に濃い騒動である。

エデン条約に関する諸事件の後始末を一先ず終えたトリニティ上層部は、生徒会長権限を持つ桐藤ナギサとシスターフッドのリーダー歌住サクラコ、救護騎士団団長を務める蒼森ミネ、そして諸々の事情で生徒会長権限（ホスト）を手に入れてはいないものの、ナギサを補助しつつティーパーティーの一員として働く百合園セイアの4名を中心にまとめ（ティーパーティーが機能不全に陥っていたころと比べて）つつも、新たな問題に直面していた。

いや、正確に言えば、目を逸らしつつ後回しにしてきた難題に漸く向き合ったというべきか。トリニティ上層部、いや、トリニティである程度の役職を持つ生徒や、それに正確な情報を入力し俯瞰的に考えられるだけの時間的余裕がある生徒であれば、誰もがうすうすと感じていた問題。

つまりは、

「——トリニティ、シャーレの先生に借りを作りすぎじゃない？」

という問題である。

ほんの数カ月前はこうではなかった。寧ろアビドス対策委員会の件で、先生の方がティーパーティー（というよりはナギサ）に借りがあった。それが今やこの有様。いっただいどうしてこうなった。

だからどうした、という話ではある。シャーレの先生は「生徒のために先生が動くの

は当然」「先生が生徒の味方でいるのは当然」「そもそもシャーレは生徒のための組織だし、私は生徒を助けるためにここにいる」という考えを持っており、実際に常々口に出している。そんなことはトリニティ上層部も一般のトリニティ生徒も知っている。

しかし、シャーレが連邦生徒会の組織であり、トリニティ総合学園が自治組織であるというのもまた事実。何より先生がエデン条約に関わってきた根本的原因是はティーパーティーにある。

翻つてみれば先生はトリニティのために奔走し、トリニティは外部組織であるはずのシャーレの先生を長期間拘束してしまった。事件が解決した後も、先生は関係者のフォーやアフターケアに尽力してくれた。これだけでもトリニティ上層部は先生に頭を下げるしかないというのに、拳句の果てにはエデン条約締結日に先生を護りきれなかったという大失態である。しかも仕方がないとはいえ、治療を終えたばかりの先生をさらに働かせてしまうという始末。その間、肝心のナギサはベッドの中だ。

勿論、事件の解決にはトリニティの生徒も大きく貢献した。しかしアリウス分校の攻撃から先生を護ったのはトリニティの生徒だけではないし、アリウスの自治区から先生の脱出を助けたのは全てが解決した後だ。それで「先生、あの時の借りは返しましたよ」などと言うのは恥知らずが過ぎる。無論、実際にそんなことを口に出したトリニティ生はいない。言ってしまうと周囲から「頭ゲヘナか」とゴミを見るような目を向けられる

こと請け合いだ。

だからこそ、少しでも借りは返さなくては。ではどうやって返せばよいのか。

これから先、シャーレの先生が危機に陥ったら総力を挙げて助ける？ 当然過ぎる話だ。大体、この先いつ訪れるかわからない、そもそも訪れるかもわからない先生の危機を待つてどうする。

そこで考えられたのが、シャーレに人員を送り込むことだ。シャーレは多忙である。常に大量の依頼や相談が舞い込んでおり、常時キャパオーバー寸前である。先生は何度も過労で死にかけているのだ。それでも色々な雑務を行い、トラブルや事件が起これば積極的に戦闘を指揮している。

このため、シャーレは常に部員を募集している。現在シャーレには70名を超える生徒が所属しているが、基本的にシャーレ専属の生徒はおらずほぼ全ての生徒が母校での部活や委員会と兼任していることと、先生が生徒を自分の手伝いのために長時間拘束することを良しとしないことなどを理由に、大半の生徒が数日に一度、精々数時間ほどシャーレの手伝いに行くにとどまっている。設立時とは比較にならない程部員が増えたシャーレだが、それでも人手は足りていない。

あまりの先生の惨状に涙を流した多数の生徒が隙を見ては先生の手伝いに行き、メデイカルチェックをしたり家事のサポートをしたりしているが、はつきり言って焼け石

に水である。

なお、シャーレはやろうと思えばあらゆる学校からあらゆる生徒を引っ張ってくることも法的には可能であるが、先生は生徒を無理矢理シャーレに入れることを嫌っている。このためシャーレの部員は、基本的には自らの意思で応募している。単純にシャーレの仕事に興味を持った者もいれば、先に先生と知り合いになって先生個人の力になりたいと考えた者もいる。中には先生すら気付かずにいつの間にかシャーレの名簿に名前が書かれ、IDカードを持った生徒もいる。所属する学校の上層部からの命令でシャーレに入部した者もないわけではないのだが、彼女たちも完全にシャーレライフを満喫している。無理矢理シャーレで働かされている者は、現状では一人もない。

なお、先生が就任した直後に入部した所謂古参勢が、全員母校はおろか他校にまで名前が知られている実力者や、母校を代表する役職についている者だったお陰で、シャーレに応募するハードルが爆上がりしたことは、各学園の上層部だけが知る公然の秘密である。

兎に角、シャーレは常に人手不足。だから少しでも恩返しをするために、ちよつとした臨時のヘルプとかではなく新たにトリニティ生徒をシャーレに入部させよう。その意見は早々出た。そして、多くのトリニティ上層部が賛成した。しかし、ここからが大変だった。

では、誰が入部するのか？　そもそも候補が限られていたのである。まず、少しは落ち着いたとはいえ、それは従来のティーパーティー体制が爆発四散した直後と比べればという話。ナギサは多忙を極めているためとてもシャーレの部員として活動できる時間が取れない。仕事もあるうえに未だに体調が万全ではなく、元々身体が弱かったセイアも除外。

長年閉鎖的な、言い換えれば自己完結型の組織であり続けてきたシスターフッドのサクラコも当然忙しい。シスターフッドのリーダーの職務は、規模の小さい学校の生徒会長と同等クラスの多忙さである。こちらも除外。

政治に関わるようになってきたとはいえ、元々政治的要素が薄すぎた救護騎士団長ミネはシャーレで働く時間は取れるが、そもそもトリニティの一般生徒からすら狂人呼ばわりされているような人物である。ミネがシャーレで働けば、下手すれば先生の仕事が増えかねない。安易にシャーレに送りこめないなので、論外。

となると誰を送ればよいのか。どうせ恩返しのためにシャーレに入部させるのなら、有事の際にシャーレの戦力になる生徒が良い。書類仕事とか雑事とかもこなせるのであればさらに良い。

正義実現委員会？　すでに委員長の剣先ツルギ、副委員長の羽川ハスミ、さらには一般隊員の有望株である静山マシロと、ほぼシャーレに取り込まれつつある補習授業部の

部員も兼ねる下江コハルの4名がシャーレに所属している。そもそも委員長と副委員長のタッグがシャーレ部員として戦闘することすらあるというのに、今更一般隊員を送り込んで借りを返すも何もない。

シスターフッドからも伊落マリーと若葉ヒナタの2名がシャーレに入学している。そもそもシスターフッド部員は戦闘のプロでも事務のプロでもない、慈善事業が本業だ。ヘルプとしてシャーレを手伝わせるなら兎も角、入学させるとなるとなかなか候補がない。

救護騎士団も似たようなものだ。鷲見セリナと朝顔ハナエがすでにシャーレに入学しており、あの手この手で先生をサポートしている。1人の治療や健康管理に救護騎士団2名とか、ナギサも羨むレベルの体制である。ナギサだってトラウマ治療に専念したいのだ。

考え始めてみると、トリニティが誇る実力者や主要な部活・委員会の大半に、すでにシャーレに所属している生徒が複数人いることに多くの者が今更ながらに驚愕する。一部の生徒からは都市伝説扱いされることすらあるほど出不精として知られる図書委員長古関ウイすら、いつの間にかシャーレに入学していた。

シャーレに入学するためには希望者個人の申請と先生の許可さえあればよく、所属する学校及び生徒会の認可は不要である。一応入学後にシャーレから入学者の所属する

学校へ連絡がいくが、別に学校が変わるわけでもないので問題視されることは全くない。ナギサもその一人であったが故に、いつの間にやらこのようなことになっていたことに気付かなかつた。

そして誰もが呆然としている間に、気が付けばミネ団長がシャーレに入部申請を出していて議論はさらに荒れた。荒れたというよりも、トリニティ上層部の少なからずが慌てた。

「浦和ハナコさんに続いて蒼森ミネ団長もシャーレに入れるとか、はたから見ればシャーレに対する宣戦布告では？」

などと言った者もいた。実にひどい話である。なお、発言者を諫める者はいたが、内容を否定する者はいなかった。

ミネは救護騎士団の団長である以上当然救護の知識はあるし、戦闘能力も高い。行動や思考回路がアレとはいえ曲がりなりにも一組織の団長なので事務能力もあるため、シャーレを手伝う者としての条件は揃っている。そしてシャーレの手伝いをする時間的余裕はあるし、何よりトリニティ上層部の一員である自分がシャーレに入部すれば、対外的にもトリニティは先生へ借りを返そうとしているというアピールになるだろう。

ミネ本人はいつもの平然とした表情で、理路整然と自分の行動の正しさをナギサに語った。

正論である。ミネの性格と気質を除けば。とはいえ流石のナギサも、断言したミネに向かつて「貴女は性格とかがアウトです」とは言えない。力説するミネの足元の大理石が無残なことになっていくのを眺めながら、ナギサは遠い目をするしかなかった。せめて申請を出す前に言ってくれ。

そんな中、ミネに続いてとある人物がシャーレに入部したいと言いつ出した。
そう、聖園ミカである。

プロローグ②

「ナギちゃん、シャーレに入部する生徒を探しているって聞いたよ！ 私、シャーレに入りたい！」

入室後、挨拶もそこそこにそう言ったミカを一瞥し、ナギサは紅茶を一口飲んだ。正直こんなことになるのではないかと予想はしていた。突然の宣言ではあるが、シャーレへの入部が承認された後報告してきたミネ団長より遥かにマシである。

「ミカさん、貴女には確かにある程度の自由は与えられています。遊び歩く訳でも無く、シャーレで活動するならば認められるでしょう。

私にはシャーレへの入部を阻止することも、入部申請を撤回させることもできません」

ミカはすでに牢から出され、一生徒としての活動を許されている。他にも奉仕作業への参加が義務付けられていたり、日頃の査定が通常よりも厳しめだったり、校則違反をした場合のペナルティがより重かったりと、普通の一般生徒とするには無理があるかもしれないが、それでも一応はトリニティの生徒としての生活が認められている。

当然、トリニティ総合学園の外は勿論、自治区から出るのも自由だ。シャーレに所

属する分もなんの問題は無い。そもそも最初から、各学園の生徒会には生徒のシャーレへの入部を制限することはできないのだが。

「ですが……他の者がどう思うかは、予想がつかますよね？」

シャーレにミカが入部する。つまり、シャーレの先生の下でミカが働くことになる。

シャーレの先生がミカに投降するよう「説得」したことも、先生が牢から脱獄したミカにトリニティへ戻るよう「説得」したことも、ミカが少しでも早く牢から出られるよう奔走したことも、トリニティの上層部から政治に多少関心がある程度の一般生徒にまで知られた話だった。

シャーレの実績、言い換えれば先生の功績はそれ以上に有名だ。エデン条約に関することを除いても、先生は様々な学校の事件やトラブルの解決に貢献してきた。設立当初から注目を浴びてきたシャーレは、今やキヴォトスの大半の生徒が共通の話題としているほどに有名だ。シャーレ自身が活動を隠すことなくSNSに動画を投稿していたり、シャーレ部員の活躍を撮影した生徒が動画を投稿したりもしているため、話題の種が尽きないのだ。

直接先生と会って会話した生徒は然程多くないために、先生の性格を知る生徒は多くはない。しかし、その能力や実力を疑う者は今や圧倒的少数派だった。

故に、先生に悪感情を向ける生徒は殆どいない。勿論シャーレの活躍によつて痛い目

を見た不良やチンピラなどは除くが。

しかしそんな生徒たちも、先生がミカのために必死に動いている光景には複雑な感情を抱いていた。何せミカが仕出かしたことは、客観的に見て大罪だ。主だったものだけでセリアの殺人教唆、さらにナギサ襲撃未遂という事実上のクーデター未遂、そして外患誘致。加えて脱獄。極悪犯罪のオンパレードである。実際にミカが画策したのはセリアへの嫌がらせ程度だと認められたとしても、それ以外の罪で退学になることも十分あり得る。最悪連邦矯正局送りである。

そんなミカを先生が気にかけている。そのお陰で悪い噂がいくつも生まれた。先生がミカに騙されている程度ならば可愛いもので、中には報告を受けただけでナギサが憤激するような下品で下劣な噂もあった。

「……まあ、ね。でも正直言つてさ、これ以上墮ちようがなくなるか？」

あ、私じゃなくて先生の評判のこと？」

ミカは苦笑し、視線を目の前に置かれたティーカップへ落とした。

「私ね、先生にいつぱい迷惑をかけちゃつててさ……もうこれ以上どうしようもないくらいに。少しでも先生の力になりたいとは思うけど……私のせいで先生の評判が下がっちゃうのは、嫌だなあ……」

嗚咽が聞こえてきそうなほどの悲壮な声色。向かい合っている方まで心に曇り空が

広がりそうな姿だ。ナギサは思わずため息をつきそうになった。

最近のミカはずっとこんな調子だ。落ち着いているように見えて、普通に過ごしているように見えて、何か切つ掛けになればネガティブモードへ一直線。聴聞会に出席する前よりも遥かに酷い。何で自業自得とはいえトラウマを植え付けられた挙句に、ミサイルの爆風に吹き飛ばされた方よりも元気がないのだ。

「……いえ、失礼しました。先生にそこまで被害が及ぶことはないでしょう」

ナギサはそう言い直し、軽く頭を振った。

ナギサの主観であるが、そもそも現在の「ミカ叩き」は当初と比べると様相がかなり異なっている。

血みどろの弾圧や戦争など過去のものとなった現代において、突如発生した歴史に残る大事件。しかも犯人がトリニティ総合学園のティーパーティー。身内であったはずの者による凶悪犯罪に対して少なくともトリニティ生徒は激烈に反応し、ミカを糾弾した。

多くのトリニティ生徒たちの頭を貫くのは、なぜこんな馬鹿なことをやらかしたのかという疑問。身内に裏切られたという悲しみと恐怖、それが反転した怒り。歴史に残る汚濁に塗れた唾棄すべき重罪が、自分たちのすぐそばで起こったということへの恥辱。そしてミカの全てを否定しなくてはならないという使命感とすら言える正義感。それ

は集団ヒステリーと言えるのかも知れない。

ミカを糾弾した全生徒徒が感情に突き動かされた者というわけではない。敵対派閥を叩く絶好の機会を逃さないのは当然とばかりに、政治的な理由でミカを攻撃する者もいた。ある程度の地位と責任を持つ者の中には、他の者を煽ることに全力を出した者もいた。

しかし感情ではなく政治的思惑を持ってミカへの攻撃を煽った者たちは、ミカの私物が燃やされる頃には顔を青ざめさせていた。別に良心が痛んだわけではない。トリニティ総合学園としての正式な処罰が下されるよりも前に、事実上の私刑が行われたという「実績」が、自分たちの世代に誕生したことを恐れたのだ。

以降、扇動してきた者たちは「正義の軍団」の統制に力を入れていくことになる。軍団から距離を置いて冷静に俯瞰していた者たちからは、すでに疑問を通り越して侮蔑の視線が注がれていたが。

結果として軍団の中でも比較的理性が働いた者たちは一人、また一人と口を閉じ、振り上げていた拳を下ろしていった。

そして聴聞会が終わり、ある程度の情報開示が行われた現在では、ミカへの攻撃は正義の断罪から便乗した者による娯楽へと様変わりしていた。

すでに裁きは下されたのだ。納得できる内容なのかどうなのかは問題ではない。ト

リニティによる正式な聴聞会の末、正式な責任者による処分が下された以上、これ以上何もすることはない。外野がいくら騒いだところで、結論は変わらないのは分かり切った話である。

すでに「正義の軍団」の参加者は大きく数を減らしていたが、聴聞会の終了によってさらに一挙に離れていった。

そんな状況で未だに行われるデモや抗議は、最早騒ぐこととミカを攻撃することが目的と化した娯楽と言えるのかもしれない。そしてこのような「遊び」は、標的が無力であり、標的をなぶった側が損をしないことが前提で成り立つものだ。

トリニティにおける公共の敵へと成り果てたミカと異なり、シャーレの先生には確固たる立場がある。連邦生徒会の組織の顧問という役割に、これまで積み上げてきた実績。甚振る標的とするにはリスクが高すぎる存在だ。先生はキヴオトスの生徒のために、様々な問題を解決することを仕事としている。そんな先生を攻撃して得をするのは、シャーレというキヴオトスで暮らす善良な生徒の心強い味方を邪魔に思う者たちだけである。先生を攻撃することは、「私はシャーレがキヴオトスの平和のために戦っていることを好んでいません」と宣言するようなもの。周囲から不良やチンピラと同類と思われかねない行為だ。

黄金よりも貴重な青春をこんな遊びで消費するような「余裕のある」者たちでも、こ

の程度のこととは少し頭を使えばわかるだろう。わかれば先生を無意味に攻撃したりはしないと思いたい。そんなことを考えながら、ナギサは再び紅茶を飲んだ。飲まなければ口からティーパーティーに相応しくない言葉が出てきそうだった。唯でさえ先生には申し訳なさしかない状況だというのに、この期に及んでトリニティの生徒が公然と先生を貶めるようになればもう最悪である。

「……すみません、ミカさん。少しだけ待っていただけれますか？ サクラコさんやミネさんたちに、相談してみますので」

そう言って、ナギサはティーカップを静かにテーブルに置いた。ティーパーティーの権威は、今やそんなことすら独断で決められないくらいに低下していた。



「ミカさんのシャーレへの入部ですか……別に問題ないのでは？」

「あ、はい」

果たして、サクラコからは即答が返ってきた。まあ反対はされまいだろうけど多少は議論することになるのかな、と考えていたナギサは拍子抜けしたように目を見開いた。

「そうですね、私も反対いたしません」

「貴女には反対されまいだろうと思っております」

ミネには視線すら向けず、ナギサはサクラコを見つめたままだ。他の参加者も無言、

つまりは賛成である。

「……ミカ様は今や一生徒ですの、授業や生活は全て一般生徒の中に混じって行っております。ミカ様が問題を起こしているわけではないのですが……。ええと、率直に言つて、周りのメンタルが危険です」

おずおずと口に出したのは、ティーパーティーの行政官の一人である。

「色々と聴取をしてみました……例えば、ミカ様と廊下で出くわした生徒からは、『お腹をすかせたヴェロキラプトルが現れたと思つて目の前が真っ暗になった』という感想が出ました」

「流石に酷くないですか？」

一応ミカはミカなりの思想や意志を持つて行動したにも拘らず、獣どころか恐竜扱いである。

「素手での堅牢なトリニティの牢獄を破壊したお人ですからね……」

シスターフッドの幹部の呟きが耳に入り、ナギサは思わず頭を抱えた。

そういえばそうだった。トリニティの負の遺産ともいえる存在で、平和な現代にも残り続けている過剰なほどの要求性能に基づいて造られた牢獄を、ミカは拳の一撃で破壊している。しかも三食ロールケーキ生活と運動不足のダブルパンチで身体が鈍っていた時に。トリニティには罪人を収容するための牢獄が幾つかあるが、ミカが収容された

のはその中でももつとも頑丈で、定期点検も終えたばかりの牢であった。

状況が状況だったので（アリウス対策に人手がとられていた上に、主にセイア関連でトリニティ上層部が大混乱となっていた）隠蔽工作などできるわけもなく、そもそも大破した牢獄があるのだから隠し通せるはずもなかった。牢獄に入っていたミカが武器を保持しているわけがないことくらい誰でも予想できたし、事実そうであった。

ではどうやって牢獄を中から壊したのか？ 素手でしかない。

ミカの戦闘能力の高さは、トリニティでは知る人ぞ知る情報に過ぎなかった。そもそも戦う機会が殆どないし、戦いがあつたとしても銃撃戦が普通（キヴォトスでは素手の殴り合いよりも銃撃戦の方が遥かに多い）なので、ミカの身体能力など有名になるはずがなかった。それが脱獄のせいで一氣に広まってしまったのである。

ちなみにアリウスとの連戦に次ぐ連戦を終えてミカ本人は体の衰えを感じたらしく、気軽にふらふらできる立場になったのを良いことに、最近は自治区内のトレーニングセンターに通っているらしい。これ以上何処に向かおうというのか。

「シャーレにいてくれた方が、その……他の生徒たちが安心できるかもしれません」

「ミカ様であれば先生のお役に立てるでしょうし」

「ミカ様をヒステリックに攻撃する者たちが目立っていただけで、数の上では興味すら持っていない生徒やミカ様を怖がっている生徒の方が遥かに多いですからね」

「……結局、先生に押し付けているだけでは？」

様々な意見が飛び出すものの明確な反対意見は誰からも出ず。

結局、ミカはシャーレに入部申請をすることが許可されたのである。

プロローグ③

結局のところトリニティ上層部の誰もが、シャーレへ送る候補として聖園ミカを一度は思い浮かべたものの、口に出すことはなかったというだけの話であった。

一般生徒となったとはいえ戦闘能力は折り紙付き。ミカ本人は自分を指して頭が悪いと評しているが、実際成績が悪いわけではない。生徒会長権限をナギサが握っていたためにティーパーティーとして積極的に活動していたわけではなかったが、普通に雑務は行える。学業と奉仕活動に専念していればよいだけなので、シャーレで仕事をする時間も確保できる。

しかしトリニティ上層部として、いきなりミカに任務を与えるわけにはいかなかった。ミカの処分は温情ある判決と言えたが、無罪放免というわけではない。ティーパーティーより実質的に追放されたミカがその直後にシャーレに入部すれば、また邪推する者が出て来る可能性がある。トリニティ自治区内の噂はやろうと思えばどうとでもできるし、他の学園自治区内の噂など最初から無害なそよ風以下のようなものだと断じることが出来る。だが、シャーレのあるD・Uにまで噂が広まると、トリニティ上層部の手に余る。シャーレの先生の評判を無意味に下げるわけにはいかないのだ。

各学園自治区の中でもトリニティやゲヘナのような大規模な学園の上層部は、連邦生徒会を含め他の自治区への諜報活動を積極的に行っている。それは単なる情報収集に留まらず、例えば他の学園の評価を下げようと根も葉もない噂を流すなどの情報工作も頻繁に行われている。主だった学園の多くはそれを分かったうえで、他の学園を非難するのではなく、自分たちもやり返すことで密かな反撃を行っている。暗黙の了解というやつだ。

しかし今のトリニティ上層部に、連邦生徒会の足元で情報工作を行うだけの余裕はなかった。刷新されたトリニティ上層部は三頭政治といえる体制を整えており、つまり最初から一枚岩ではない。だからこそ、トリニティが一丸となつてD・U・に諜報部員を大量に送り込む余力はない。D・U・はシャーレオフェイスだけでなく、幾つもの空港や地下鉄、商業施設を抱える大規模なエリアだ。最近は存在感が薄まっているとはいえ、曲がりなりにも巨大組織である連邦生徒会が直轄するエリアでもある。安易に手を出せる場所ではない。

もう一つ重要なのは、ミカが生粋のゲヘナ嫌いであることだ。シャーレにはゲヘナの生徒も少なくない数が所属している。ゲヘナを代表する武力集団である風紀委員会の者もいれば、キヴオトスを代表するテロリストたちもシャーレに所属している。

ミカの仕出かしたクーデター未遂事件の根幹でもある、ミカのゲヘナ嫌い。ある意味

全ての元凶ともいえるこの感情が原因となり、ミカがシャーレに向いた時に、トラブルが発生しないかと多くの者が心配した。「地獄の現出」や「破壊神の降臨」と書いて「トラブルの発生」と読む。実際に懸念され得る惨劇に対してマイルドにもほどがある言い方である。

ミカほどではないにしても超の付くゲヘナ嫌いであるハスミは普通にシャーレで働いているが、同じように上手くミカがシャーレでやっていけるかどうかは不明瞭だ。ハスミは元々憎んでいる相手が目の前にいたとしても私情で殴りかかるような人物ではないし、先生のことを心から敬愛しているので先生の顔に泥を塗るようなことはしない。では、ミカはどうなのか。

しかもミカはトリニティでも最強クラスの実力者。そしてシャーレに入部しているゲヘナの生徒も、その大半が実力者且つ荒事に慣れている者たちばかりである。衝突したらどうなるか想像するまでもないが、互いが殺気を飛ばし合った余波だけでも先生が病院送りになりかねない。

この懸念を聞けば、当のミカはあっさりと声をあげて笑った。笑った後、ドスの利いた声でこう言った。

「……私とも、先生に迷惑かけるわけじゃないじゃん。嘗めないでよ」

少なくともミカに自重する気があることが分かれば十分である。ミカの一言を聞いて

てナギサやトリニティ上層部は即座に動き出した。ゲヘナが嫌いという理由だけでクーデターを起こそうとしたミカの「自重」を信じてよいかという疑問は、誰もが揃って無視した。まずは信じてあげなければ、ミカは何一つ始めることが出来ないのである。すでにミカを信じて牢獄から出している以上、今更とも言えたが。

とはいうもののやったことと言えば、ミカがシャーレに入部し、奉仕をすることで反省の意を示そうとしているという噂を予めトリニティ総合学園に広めるだけだ。

D・Uに広まるかもしれない悪い噂については、一応は予めシャーレの先生に予想として伝えておくことになった。あの先生が自分に関する悪い噂が立つかもしれないからという理由でミカの入部を拒否するとは、トリニティ上層部の誰もが思えなかった。それでも事前にリスクを言うておくことで、無力な自分たちが少しでも許される気がした。

「……情けない話ですね」

自分以外誰もいないティーパーティーの執務室で、ナギサは静かにひとりごちた。先生に少しでも借りを返す……できるだけ持ちつ持たれつの関係になりたいというのに、実際は生徒のことを全面的に信じ、生徒のためあらゆる努力を惜しまず、一切の代価を求めない先生の善意に縋ってしまっている。

ティーパーティーの一員として、ホストとして外交や組織間の調整に力をかけてきた

ことを振り返るたびに、無条件でこちらの力になってくれる先生の存在は新鮮で、羨望の的で、心地よく、求めてしまう……しかし求めているうちに、ひどく疲れてしまうようなものだった。

公式の場で土下座して謝罪できたのであれば、どれだけ楽だろうか。シャーレに入部して直接先生の力になることが出来るミカが羨ましい。

ナギサは目の前に積みあがった書類を眺め、その一枚を手にとった。

まあ、羨んでいても仕方がない。自分は自分で、先生の助けになれる「その時」が訪れてもよいようにするだけだ。

次に先生がトリニティへ訪れる日を心待ちにしつつ、ナギサは書類との格闘を再開した。



ミカが送ったシャーレへの入部申請は、ミカが思っていたよりも遥かにあっさりとは許された。喜びの声を上げてナギサやセイアに自慢する間もなく、ミカのもとにシャーレからの郵送物が届けられた。

中にはシャーレオフィスの地図とIDカード、そして手紙。現物のカードは兎も角として、地図と手紙はこのご時世に珍しい紙媒体のものである。流石に手書きではなかったが。

手紙を一通り読むと、シャーレからの案内であった。内容は書かれた日付にシャーレのオフィスマまで来ること、正式にシャーレで働き始める前に業務に関する説明をオフィスで行うこと、生憎予定日は先生が不在のため、代理の者が行うことが書かれていた。書き方から察するに、手紙は先生ではなく「代理の者」とやらが用意したのだと思われた。

「……いや、別に……。うん、別に先生からのお祝いの言葉が欲しかったわけじゃあないんだけどね……」

自分の予想よりも遥かに冷たい声色だった。ちよつと自分の声に慌てる。何を期待していたのだろうか、私は。

それにしても、初仕事の日とは別に事前説明を聞く日がとられるとは思っていなかった。その場に先生が居ないのもつと予想外であった。何か思っていたのと違う。

というか説明って何だ。シャーレの仕事って先生の書類のお手伝いをして先生の敵を薙ぎ倒していれば良いんじゃないの？ あとはちよつとした空き時間に先生とお喋りとかスキンシップとかショッピングとかお食事とかできれば文句はないんだけど。説明で一日使うって結構すごいな。一体何をどれだけ説明されるのやら。

そんなことを考えながら、腕を組んでうんうん唸ったミカであったが、すぐに結論は出た。

「まあ、いつか」

行けばわかるか。

ミカは考えることを放棄し、取り敢えずシャーレのIDカードをナギサに見せびらかしに行くことから始めることにするのだった。



そして手紙に書かれた日付に、ミカはシャーレオフィスを訪ねていたのである。

オフィス（名前が部活である以上「部室」と呼ぶのが正しいのであろうが、シャーレの部員は「オフィス」と呼称していることが多い）は結構広い。先生が仕事をするための執務室や仮眠室、幾つかの事務室、会議室、多目的ルーム、教室、応接室、体育館、その他備品管理室などの複数の部屋と施設、さらには併設されたカフェやコンビニもある。

ミカは手紙に書かれていた「第1事務室」というプレートが扉に張られている部屋の前に立ち、扉をノックして入っていった。

「おじゃまします」

先生が居ないという現実が今更ボディブローのようにジワジワと効いてきたのか、完全に素の口調となっている。

中に入ると、そこは小さな部屋だった。本棚と事務机以外はコーヒーマーカーが乗っ

たキャビネットと小さなソファが2つ、ソファの間にはこれまた小さなテーブル。

「あ、待っていたわ。聖園ミカさん」

ソファに座り、コーヒーを啜っていた少女が立ち上がってミカのもとに近付いてきた。

「先生よりも先にこれを言うのはどうかと思うけど……シャーレへようこそ、歓迎するわ」

ミカの目の前まで歩いてきた少女は、笑みを浮かべながらミカを頭からつま先まで見つめた。

「はじめまして。私はミレニアムサイエンススクールの2年生、セミナーの会計の早瀬ユウカ」

少女——早瀬ユウカの浮かべる笑みは、どことなしか冷たさを感じられた。

シャーレ部員になるために

シャーレ部員になるために①

ユウカはまず、ソファに座るようミカに促した。おとなしく座ったミカの前にコーヒーを用意すると、本棚から何冊かのファイルを取り出し、ファイルとコーヒーを持って反対側のソファに座った。

目の前に座ったユウカからはすでに笑顔は消えており、真剣な表情でミカを見つめている。あからさまな敵意を感じるわけではないが、どうプラスに考えても友好的な雰囲気ではない気がしたミカは、一先ず黙ってユウカが口を開くのを待った。ここは言葉を発するよりも、セミナリーの早瀬ユウカという人物の詳細を思い出すほうに専念した方が賢明なように感じられた。ミカは他人の顔や名前を覚えるのが苦手だが、それでもティーパーティーとして他の学園の重要人物、それもミレニアムサイエンススクールのセミナーのメンバー程ならば記憶している。

黙りこくったミカを再び顔から足元まで見つめたユウカは、軽く息を吐いた後に話し始めた。

「まず、ここに呼んだ理由だけど。シャーレの部員は先生を手伝い、先生を護るのが主な

仕事となるの。

そこで、『シャーレ互助会』（ごじょかい）について理解してもらう必要があるわ」

「シャーレ……互助会？」

初めて聞く言葉だ。ミカは小首を傾げた。ミカは初めてシャーレの先生をトリニティに招待した時、つまりまだティーパーティーの正式な一員だった頃、ナギサと共にシャーレに関する報告書を受け取ったことがある。その中にはティーパーティーが調べた先生のパーソナルデータや、シャーレの組織構造について事細かに記載されていた。しかしその中に、「シャーレ互助会」なる存在は書かれていなかったはずだ。

「最初に言っておくわ。互助会の一員として他の者と協力していく意思がないのなら、先生が貴女の入部を認めただ後でも、私たちは貴女をシャーレの部員（なかも）とは認めない。先生からの要請があれば一緒に仕事をするし、別に戦闘中に貴女を背後から撃つたりはしないわ。

ただ、貴女を信用するつもりも信頼するつもりもない」

ユウカはそう言うのと、ゆっくりとコーヒーを啜った。その瞳はどこまでも冷たく、射抜くようにミカを見つめている。

その視線を受け、ミカは後ろを振り返り、自分が入ってきたドアを見つめた。その横には木製のガンラック（銃を掛けるための棚のこと）が置かれ、ミカの愛銃であるサブ

マシンガン「Quis ut Deus」が飾られている。多くの生徒が銃火器を持ち歩くのが普通のキヴォトスでは、室内に入って相手と話をする際には、入室直後にドア横のガンラックに銃器を置くのが当然のマナーとして定着している。

目の前に座るユウカも銃器は持っていない。部屋を見渡すと、よく見ると事務机の後ろの壁に壁掛けタイプのガンラックが取り付けられており、そこにサブマシンガンが2丁飾られていた。これがユウカの武器らしい。

招かれた側が入室直後に銃を置くのがマナーであるのと同じように、招く側が予め銃を置いておくのもこれもまた当然のマナーである。どうやら少なくとも、最低限のマナーは守って迎えているというポーズは見せるつもりらしい。それを指して歓迎と呼ぶとは、なかなか良い性格をしている。

「わお、穏やかじゃあないね。えーと、早瀬ユウカちゃんって言ったっけ？」

ミカはゆっくりと腰を曲げ、素知らぬようにコーヒーをちびちび飲んでいるユウカの顔を下から覗き込むように顔を前に出した。

セミナーとは、ミレニアムサイエンススクールの生徒会である。トリニティ総合学園にとつてはゲヘナ学園ほどではないが、立派な警戒対象である。特にセミナーのトップである生徒会長の調月リオが表舞台での動きを殆ど見せていないため、トリニティを含む他校からはリオ以外のメンバーの動きが注目されていることが多い。

その中でも早瀬ユウカは、最近シャーレに関する事でかなり動き回っているようだ、という報告書をミカは読んだことがあった。というのもユウカはシャーレの先生が赴任した直後に先生と出会っており、しかもシャーレが正式に発足した後即座にシャーレに入部した、シャーレ部員の中でも古参中の古参である。

シャーレが良くも悪くも発足時から学園問わず多くの生徒の注目を集めたのは連邦生徒会が作り上げた超法規的機関ということもあるが、現役のセミナー所属生徒であるユウカが初期の部員にサラリと混じっていたという点も大きい。ちなみに「学校を代表する生徒やエリートの実力者じゃないとシャーレに応募してはいけない（または採用されない）」という根も葉もない噂がSNSで広まった原因は、大体ユウカが初期よりシャーレ部員として積極的に活動していたせいである（なお、2番目の原因は正義実現委員会副委員長のハスミがこれまたさりげなくシャーレの最古参メンバーに加わっていたことである）。

「一応知っているよ？」 セミナーの生徒会会長が半ば職務を放棄している今、実質的にセミナーを取りまとめているミレニアムを代表する生徒の一人。

先生とはシャーレ発足時からの付き合いで、かなりシャーレに入れ込んでるって話だよ。」

ミカの指摘を受けても、ユウカは何の反応も返さない。

ミカの指摘は事実だった。お陰で、一時期ミレニウムはシャーレを取り込もうとしているのではないかという噂も生まれ、ゲヘナとトリニティの上層部が無駄にピリついた。セミナーはかなり深くシャーレと協力体制を構築している。セミナーの生徒がバイトとして多数シャーレに通っているし、ユウカの他にもセミナーの書記である生塩ノアも頻繁にシャーレへ手伝いに行っている。

さらにシャーレのセキュリティ管理はミレニアムの非公認部活であるヴェリタスが担っており、端的に言ってシャーレはミレニアムに頼りきりの状況と言えた。にも拘らずミレニアムはそれを先生への各種支援と言ってはばかり、恩着せがましい真似は全くしていない。

実はシャーレには正式な部員の他に臨時のバイトとして多くの生徒が訪れる。その大半がシャーレ部員の部下（セミナーの生徒やゲヘナ風紀委員会、トリニティ正義実現委員会の委員など）であるが、中には諸事情で正式にシャーレの部員として登録できない者もいるという「噂」をミカは知っていた。

彼女たちはバイト代（という名目のお小遣い）を貰いながらシャーレの書類仕事の手伝いや、シャーレの仕事を支援するために各種サポートや情報収集などを行っている。ちなみに正式なシャーレ部員にも給与は発生しているが、部員の多くが正式な出勤日（つまり給与が発生する日）以外にも先生の手伝いに来たり、先生のもとへ遊びに来たり

カフェ・シャーレに休憩に来たという建前で先生のメンタルケアだとか健康管理、さらにはシャーレの設備や施設のメンテナンスやセキユリティエックなども行ったりするので、ロハでシャーレに手伝いに行くことが殆ど当然となりつつある。

「入れ込んでいる……ときたか。それはトリニティも同じでしょう？」

そんなことより、互助会のメンバーとしてシャーレで活動していくつもり、あるかしら？」

先ほどよりも数段平坦な声を出しながら、ユウカは僅かに口元を歪めた。

室内の空気が徐々に凍り付いていく。ユウカはまるで挑むかのようにミカを見つめていた。その目に得体の知れないバツの悪さを感じてしまい、ミカは誤魔化すようにテーブルに視線を下ろした。そして気付く。ユウカの目は事件の後に入った牢獄の鏡でよく見た目だ。自分の感情を思い切り発露したいのを抑え、胸の中に押し込んでいる時の目だった。

見慣れた目だからこそ、他人が同じような目をしていると心が軋む。ミカは静かに息を吐いた。

ユウカが本当に言いたいことは何となくわかった。でも、ユウカが聞きたいだろう言葉を言うつもりはない。ミカは笑顔を浮かべ、ユウカの瞳を見返した。

「あはっ☆。あるものにも、先生を助けるためにシャーレへ入部を申請したからね。そ

の互助会とか何とかに入ればより円滑に先生の負担を軽減できるってことだよな？

「だとしたら勿論、協力するつもりだよ。ほら、郷に入っては郷に従え的な？ 別にそんな好き勝手にやるつもりは、最初からないんだけどなあ」

ひとしきりクスクスと笑った後、ミカはコーヒーを啜った。空気は冷えているがコーヒーは熱い。飲めないほど熱くないのがいやらしく感じるのは、自分を見つめる視線のせいだろうか。せめてチョコか何かが良いが、生憎テーブルの上には数冊のファイルとコーヒーカップとソーサーしか置かれていない。シユガーとミルクすらない。ユウカはブラック派のようだった。

「ミカがコーヒーカップをソーサーの上に置くのと同時に、ユウカはふう、と息を吐いた。」

「……それで、互助会って何？」

「ミカの問いに小さく頷いたユウカは、ファイルの中から一番上に乗っていたファイルを取り出し、ミカに見せた。」

「詳細はこれに書いてあるから、帰ったら全部読んでおいてね。一先ず簡単に説明するから」

「えっ、これ持ち帰れって話？」

「思わずミカは目を見開いた。ミカからすればなんて事はない重量ではあるが、それで

も短編小説くらいの厚さはあるファイルだ。そしてユウカの近くには、まだミカに渡されてないファイルが数冊ある。

足元に置いた、肩から下げてここまで持ってきた鞆をまじまじと見る。全部入り切るかどうか、今一つ判断がつかなかった。

「というか、電子データじゃないんだね？」

「ええ。貴女程の人なら知っているかもしれないけど、現在シャーレの電子データや各情報端末は、全てヴェリタスが管理しているの。中身を管理しているというわけじゃなくてセキュリティ管理やウイルススチエックをしているという意味だけだ。

とはいえヴェリタス専用の管理や情報漏洩防止のためのプログラムとかアプリとかは入っているから、他校からの信頼度が低くてね……。何せ先生が電子データや電子的防御に関することは、ほぼほぼヴェリタスに丸投げしてしまっているから。

変に警戒されて折角用意した電子ファイル等の受け取りを拒否されるくらいなら、最初からペーパーで渡しちやいましょうってことになったの。ペーパーだと暗号化とかができないから第三者に見られるかもしれないという可能性は残るけど、新入部員へ渡す資料くらいなら漏洩しても何のダメージにもならないし、そもそも先生から公開を許可されているものよ。

一応言っておくけど、これを渡すのは別にミカさんだから、というわけではないわ。

最近シャーレに入部してきた人たちには全員配っているし、この資料が作られる前にシャーレに入ってた人たちも所持してはいるわよ。勿論、救護騎士団のミネさんにも渡ししてあるわ」

そこまで言つて、ユウカは何かに気付いたように口を閉じ、数秒後に再び話し出した。「あ、言い忘れていたけれど……。さっきの確認も同じで、別に貴女がああ聖園ミカだから確認をしたってわけではないわよ。勿論、これからする説明も同様ね」

「うん、おっけー」

成程、それで最初に送られてきた手紙や同封されてきた地図も紙媒体のものだったのか。

ミカは目の前に置かれたファイルを手にとった。ぺらぺらとめくってみるが、ところどころイラストや図も混じっている。思ったより読み切るのに時間はかからなそうだ。学校の成績が壊滅的に酷い者からミレニアムの全知まで、良くも悪くもバラエティに富んでいるシャーレの部員「全員」に配っているだけのことはある。

「シャーレ互助会というのは、簡単に言うとなシャーレの部員が設立した非公式の相互連絡のためのグループ。学年も学校も武器も何もかも違う、初対面やシャーレでしか顔を合わせない部員が一緒に仕事をすることも少なくない状況で、互いに交流していくことで、いざという時に戦闘での連携をよりやりやすくしたり、先生が不在の時に書類仕

事をやりやすくしたりしましょう……という趣旨のグループよ。表向きは、先生にそう説明しているの」

「……『表向き』?」

早速不穏なワードが飛び出した。ミカはファイルをめくっていた手を止め、改めてユウカに視線を向ける。

「そう、表向きというよりは役割の一つと言った方が良いかしら? 実際は、先生の負担を減らすために先生には言うまでもない些末なことを、生徒たち同士で自主的に解決していくためのグループ、というのが大きい。設立当初からの目的は寧ろそっちなよ。」

例えば新人部員への説明。一から全部一通り先生が教えていくのは大変でしょう? それだけで半日は潰れてしまう。新入部員が入ってくるたびに、先生が仕事を中断して生徒に仕事のやり方を教えていくのでは、ちよつと効率が悪いわ」

そう言うのと、ユウカは再びコーヒートを啜った。

「あとは、新人部員の情報を各部員に伝達したり、急遽予定が入って出勤できなくなった際に代理の者を探したり、増員が欲しい時に即座に動ける部員を探したり、プライベートで……つまり正式な出勤日ではない日にシャーレに来ているのは誰なのかを把握したり、不足した、或いは必要な備品はないかを話し合ったり、シャーレ部員が動員した

臨時バイトの情報共有したり……。まあ、つまり先生が決めるべきこと以外……。先生の最終的な判断が必要なことのひとつ前のことは、一通りやってしまおうってこと。

『互助会』って名前自体も、生徒同士が互いに助け合うっていう感じにした方が、先生に変に気を遣わせることもないだろうから、それっぽい名前を付けただけで……。実際はシャーレの生徒が協力し合って先生の仕事を減らしましょうってというのが目的なのよ。一応、この事は先生には内緒にしてる。

他の役目と言えば、そうね……。これはあんまり積極的に行っているというわけではないんだけど……」

ユウカはそこで言葉を切り、改めてミカを見つめた。

「……先生の敵になりそうな生徒の監視や、生徒同士のトラブルの防止も行っているの」
そう言ったユウカの顔は、ミカが初めて見る無表情だった。細められた瞳が、ミカの顔を捉えている。

「……あく、うん、やっぱり……。信用されていないって感じなのかなあ？」

意識的に明るい声を上げ、ミカは両手を上げてソファの背もたれに背中を預けた。

この話が終わるまでに、コーヒ―を何杯飲むことになるのやら。

そう思って、ミカは静かにため息をついた。

シャーレ部員になるために②

「……誰も、貴女が先生の敵だなんて言っていないわよ」

何かを諦めたような表情を浮かべるミカを見つめ、ユウカはコーヒーカーップを持ったまま音を立てずに立ち上がった。

「……ティーパーティーとして、先生を補習授業部の顧問にするよう桐藤ナギサさんに呼び掛けたのは、貴女だそうね……ミカさん」

一瞬だけ、その言葉を肯定しようとしたミカは、口を開いて閉じた。立ち上がったユウカが背中を向け、そのまま歩き出したからだ。ユウカはコーヒーマーカーの前で立ち止まり、カップにコーヒーを入れ始めた。カップに注がれていくコーヒーを眺めながら、ユウカは先ほどから変わらない平坦なままの声で話し続ける。

「貴女のクーデター未遂の情報を入手するのには、なかなか骨が折れたわ。互助会はあくまで先生のための組織に過ぎない。複数の学園の生徒たちが一致団結して先生のために動いているとはいえ、各学園の情報全てを曝け出しているわけじゃない。シャーレの部員で一番事情を把握していたのは正義実現委員会の人たち、あとはゲヘナの風紀委員所属の部員かしらね。正義実現委員会のメンバーも風紀委員会のメンバーも、あの頃

はエデン条約に関することで皆立て込んでいたから、シャーレのオフィスに顔を出すことも、連絡を取り合う機会も減っていたし……。

そして先生も、貴女の行いや貴女の態度を、シャーレの部員に言いふらすような人じゃない」

カップになみなみとコーヒーが注がれていく。コーヒーメーカーの稼働が止まっても、ユウカはカップに手を伸ばすことなく、ただカップを見下ろし続けていた。ソファに座ったままのミカからは、ユウカの表情がわからない。

「とはいえ、トリニティが補習授業部という突然生えてきたような部活の顧問に先生を就任させたところから、色々不審に思っていたから……平時より少しは、トリニティを注視していたの。トリニティはミレニアムと違って重要書類は悉く電子データ化していないし、必要な会議は通信を一切使用せずに密室でやるから、情報を集めるのには苦労したわよ。」

元々ミレニアムの『そういう職務を行う組織』は、情報収集よりも技術漏洩の防止やスパイ対策に特化していたから……私とノアが動かせる権限を可能な限り行使したけど、信頼できる情報が一定数集まったのは、結局エデン条約調印式の日よりも後だった。その後はミレニアムが総力を挙げて大規模テロを行ったアリウス分校のことも調べなくちゃならなくなって……お陰でまともに貴女の行動を評価できる程度の余裕が出て

きたのは、貴女の脱獄騒ぎが解決した後だったわ」

そこまで言って、漸くユウカはコーヒーカップを手を取った。ミカの方へ向き直り、ゆっくりと歩き出す。感情を意図的に隠した瞳が、ミカを見下ろしていた。

「そうして貴女の一連の動きを私なりに一通り分析してみたけれど。まあ、結局のところ貴女の本音や真意になんてあまり興味はなかったわ。結局、公式には貴女はゲヘナが嫌いだったから、クーデターを画策したということになったのなもの。

そして貴女はゲヘナを嫌うあまりにアリウスと手を組んでホストの座を強奪しようとして失敗し、アリウスは貴女を利用してトリニティとゲヘナを同時に潰そうとした。調印式のテロについては貴女は無関係で、ただ武器の調達や隠れ蓑などで利用されただけ。恐るべきは正気を疑うような攻撃を行い、多数の被害者を出したアリウスだと、メディアでは話題になったわね」

「……つまり、感情のままに動いた挙句に、テロ集団にいい様に利用された私を警戒しているってことかな？」

ひたすら夜の海のような昏い瞳でミカを見下ろし続けるユウカを見上げながら、ミカは自嘲するように大袈裟に笑った。

「警戒している……というわけではないのよ。私のような一部の者を除き、貴女の

稚拙なクーデター未遂なんて、トリニテイの生徒以外からすればどうでも良いもの。

ミカさんだって、どうせトリニテイの外の自治区なんて、自分の世界から切り離して考えているタイプの人でしょう？ ティーパーティーなんて特にそう。トップの者は周囲を自分の派閥の重要人物で囲い、派閥に属している者は自分にとつて都合の良い人を囲い込み、都合の良い人がいなければ都合の良い神輿を作つて祭り上げる。だからトリニテイでは、権力者の周りには権力者に興味がある者しか集まらない。一般的な、つまり政治に興味なんて持つていない大多数のトリニテイ生徒とは『世界』そのものに隔たりがある。

自分たちが暮らしている自治区の外のことなんて、殆どの生徒は聞いた瞬間に忘れてし、言った瞬間にどうでもよいものに変質する。シャーレの部員だつて例外じゃないわ」

ユウカはコーヒーを零さないように慎重にソファに座り、コーヒーカップをゆつくりと傾け、静かにコーヒーを啜つた。

「じゃあ、やっぱり……先生が傷付いたことで、私を受け入れがたいって思っている感じ？」

「……っ！」

言った。言つてしまった。

ミカは目を見開き、咄嗟に自分の口を両手で覆った。

ユウカから指摘されるのが怖くて言ってしまった。何という卑怯な真似を。後悔が大嵐となつて胸を襲う。

少しでも先生の力になりたいと思ひ、シャーレに応募した。先生には感謝しているし、もつと仲良くなりたいと思つている。その気持ちに嘘はないはずだ。決して先生への罪悪感を消すための逃避行動ではないはずだった。

シャーレのメンバーに、敵視されるかもしれないという予感があった。先生は多くの生徒に慕われているだろうなという確信もあった。どの面下げて先生の近くにいらんだと罵倒されるかもしれないと考えていたし、殺意の籠った目で見られる程度で済めば良い方かなと納得すらしていた。殴られたり銃で撃たれる可能性もあるかなと他人事のように推測していた。

しかし、いざシャーレの部員の前に座つて、感情を抑えている目で見つめられ、この期に及んで逃げ出してしまった。

やらかした。いくらなんでもこれはない。

なけなしの勇気を振り絞り、ミカはユウカを見つめた。

ユウカは変わらず、表情のない顔でミカを見つめていた。しかし彼女が持つカップは大きく震え、中身のコーヒーが波打った。

「…………ふう」

ユウカが息を吐くまでの時間が、まるで永遠のようにミカには感じられた。ユウカはカップをソーサーの上に置き、こめかみに親指を押し当てた。

「……先生がミサイルの爆発に巻き込まれて、銃で撃たれたことだって……貴女は切っ掛けでしかない。

少なくとも、私はミカさんを恨んでいないわ。……本音を言わせてもらうと、こういう風に言えるようになるまでには時間がかかったけれど」

「……………うん、そうだよね」

わかってている。全ての発端となったのも、先生をトリニティの事情に巻き込んだのも、結局は先生に縋りついて助けを求めることが出来なかったのも、先生の言葉を信じ切れずに勝手に暴走したのも全部自分だ。

ミカは俯き、中身が殆ど減っていない目の前のコーヒーカップを見下ろした。

「安心してちょうだい。私たちは、決してミカさんを信用していないというわけではないわ。貴女の能力は信用できる。特に戦闘能力についてはね」

怒鳴りつけられ、殴られた方がマシとすら思えてきた。自分の翼がプルプルと震えるのを自覚しながら、ミカは涙だけは流すまいと必死に堪えた。



早瀬ユウカは完全に後悔していた。

やはり自分には荷が重かったのだ。数学では他者の行動や心理を推測できても、自分の本性を計算することが出来ない。ミカを精神的に追い込むために、この場を設けたわけではないのに。

頭の中では何度もシミュレートした。聖園ミカが何時かはシャーレに応募してくることは何となく想像できていた。何せ先生が関わった事件に関係のある生徒で、シャーレに応募していない生徒はマイノリティを通り越して絶滅危惧種となっている。そのうちシャーレの部員名簿だけで本棚が埋まるかもしれない。

そして聖園ミカが入部申請を出してきた場合、事前の説明は自分がやろうとユウカは前から決めていた。仕方がないのだ、他に任せられる人がいない。

まさかゲヘナの生徒を説明役として付けるわけにはいかない。そもそも大半のゲヘナ生徒は嫌がるだろう。何せゲヘナを潰すためにクーデター未遂を仕出かした相手だ。トリニティの生徒も立場上やりたがらないだろう。一般人にクラスチェンジした、かつて自分より立場が上だった相手に先輩としてあれこれ教示するとか、もはや罰ゲームの領域である。

シャーレへ入部の際に事前説明役になるのは、シャーレ部員の中でも古参の者の役割となっていた。別にそのような規則がシャーレの内部で作られたわけではないが、いつ

の間にかそうなっていた。そしてこういう明確に規則化されたものではないほど、例外を設けて前提を崩し始めると、見るも無残に崩壊してしまうものなのだ。ここは自分がやるしかないか、とユウカは重い腰を上げざるを得なかった。

しかし、それでも自分の口からはミカを非難するような言葉しかでてこない。しかしユウカがミカに言った言葉に嘘はない。今は、ユウカはミカを恨んでいない。少なくとも、ユウカはそう思っている。

ユウカは先生がエデン条約調印式に来賓として招かれていたことを知っていた。だから燃え盛る会場の映像が目に飛び込んでからのユウカは恐慌状態だった。映像すら見れなくなるころには、胃の内容物を全て吐き切っていた。先生が負傷して救急車で運ばれたという情報が流れてきてから自分がどのように行動したのか、ユウカは思い出すこともできなかった。

あれから色々なことを考えた。情報を集め、考え、考え続けて結論を下した。そしてユウカは今、ミカの前に座ってコーヒーを飲んでいる。

すでにミカの入部申請は受理された。先生が決断した以上、ミカがシャーレに所属したという事実是不変ならない。ならば、彼女を仲間として迎え入れ、これからも先生を支えていく以外に選択肢などない。

その意味では、ミカの戦闘能力を信用しているのも本当だ。エデン条約調印式の件

で、ユウカは自分が油断していたことを認めていた。まさかトリニテイの正義実現委員会委員長と、ゲハナの風紀委員会委員長に同時に戦闘を仕掛けるような輩がいるとは。しかもファーストインパクトとしてミサイルを撃ち込んだ挙句に、ゾンビのような軍団で力押しをしてくるとは。どう予測しろというのだ、こんなもの。

だからこそ、ユウカは先生を無傷で脱出させることに失敗した正義実現委員会と風紀委員会を責めるつもりはなかった。あの場にいなかった自分が言えることではないだろうと、それくらいの分別はできるだけの冷静さが残っていた。しかし同時に、この事態を反省し、次に生かさなければならぬと奮起する程度の熱意もあった。

そう考えると、ミカの応募は渡りに船と言えた。単純に考えればシャーレの戦力が増える。ユウカは見たことがないが、ミカはトリニテイ最高クラスの武闘派らしい、との情報もあった。生徒会に武力を求めてどうするんだとユウカは呆れ果てたが、強いことに越したことはない、と思い直した。なお、ユウカ自身がシャーレに入ってからほとんど戦闘経験を積んでおり、自分もまたミレニアムきつての戦闘のプロとなっていることは完全に棚に上げている。

兎も角、事前説明を最後まで進めなくては。

ユウカはまだミカに渡していないファイルを見下ろし、半分以上減ったコーヒートを啜った。

シヤールレ部員になるために③

「いや、あの……その、ごめんなさい」

ユウカは大きく頭を下げた。

「本当に、本当にミカさんを責めるつもりじゃなかった。ほ、本当に……ごめんなさい」
「う、うん……」

頷いた後、ミカはコーヒーを口に入れた。誤魔化すようにカップを大きく傾け、飲み干していく。幸い、中身のコーヒーはそこそこ温くなっていた。

「大丈夫。うん、そう思われても仕方がないことをしたと思う。正直、今にしても自分は何をやっていただろうって思ってるよ。」

自分のことながら、考えなしだね。考えなしで、自分にとつて都合の良い展開ばかり期待して。先生が私を見捨ててくれていたか、裏切ってくれていたら……なんて、本当に最低なことまで考えてたこともあるよ」

カップの中身が空になるまでカップを傾け、ミカはどんよりとした色の瞳でユウカを見つめた。頭を上げたユウカは眉を下げ、気まずそうに視線を彷徨わせていた。初対面なので気が付かなかったが、改めてよく見てみると、ユウカの顔色はかなり悪い様に見

えた。

「あ、すぐ用意するわ」

ミカが置いたカップを手に取ると、ユウカは先ほどよりもかなり素早くコーヒーのおかわりを用意し、またソファに座った。

「後悔もたくさんしたけれど。でも、こうして外も出歩けるようになって、少しは先生のお手伝いができるかなって。あははは……」

涙が引つ込んだのを感じながら、ミカは大袈裟に声を出して笑った。それにつられるように、ユウカもクスクスと笑う。

「先生に見捨てられるなんて、期待するだけ無駄だったでしょう？ あの人は、そんな発想さえできない人だから。困っている生徒を見過ごすことも、放置することもできない。自分が危険な目に合うことなんて全く優先してくれない。どの学校の生徒も、あの人にとっては『生徒』だから」

ユウカは小首を傾げ、目を細めて思い出に浸るかのように虚空へ視線を向けた。

どうしよう、超分かる。分かるのだが、ここでユウカの手を取って「わっかる〜！」って言うのは違うだろうな。それは流星に空気を読めていないと思う。ミカはそんなことを考えながら、曖昧な感情を隠そうとしているように見えるような笑みを浮かべた。こういう演技はこなれているのだ。事件の時に先生に嘘をついた時も、黒幕ムーブした

時も、結構様になっていたと思う。……先生側が、そもそも生徒を疑っていないというのに、演技も何もあつたものではなかったのかもしれないが。あるいは、あの時騙していたのは先生ではなく自分だったのかもしれない。

「その、初めて来たミカさんにあんな態度を取ってしまった私が言うのもどうかと思うけど……。シャーレには、先生に救われた生徒がたくさんいるわ。別に命の危機を助けてもらったとか大仰でドラマチックなものばかりじゃない。ふとしたこと、ちよつとした言葉。それでたくさんの生徒が先生に感謝しているし、先生を尊敬しているの。」

だから、ミカさんがちゃんと先生の仕事を手伝いたいと考えていることが伝われば、部員の皆もそう貴女に悪い対応はとらないはずよ」

若干歯切れが悪そうにしつつも、ミカをしつかりと見据えながらユウカは言った。

きつとユウカは悪い性格をしているというわけではないのだろう。前々から気に食わなかったという理由で友達に嫌がらせをしようとして堕ちるところまで堕ちかけた自分よりは、よつぽど優しい人なのだろう。

そんなことを何となく考えながら、ミカはユウカの近くに置いてある数冊のファイルを指さした。

「それで、そつちのファイルは？」

「ああ、これね。まず1冊は互助会が使用しているグループチャットの詳細とか、現在の

シャーレ部員の名簿などよ。あとはシャーレの当番シフトの詳細とか、シフトの決め方とか、緊急時に自分の代行を求めるやり方とか、諸々も記載されているわ」

説明しながら、ユウカはファイルをミカの前に積み上げていく。

「次にこれがシャーレの施設についてのファイル。シャーレの施設の使い方とか、備品の使い方とか、マナーとか、後は生徒のものを持ち込むときの注意点とかが書かれたファイルよ」

「……うん？」

何か少し、おかしい部分があつた気がする。違和感を感じながらも、ミカは黙ってユウカの説明を聞いていた。

「そしてこれが、先生の仕事を手伝う時の効率的なやり方とか、先生が疲れている時の仕草とか、先生が好きな休憩方法とか、先生をリラククスさせる方法とか、先生の好きなコーヒーの淹れ方とか、先生の好きな食べ物とか趣味とか、先生の日用品を売っている場所とか、ああ、それと『クラブ』に関する情報とかの」

「え、ごめんちよつとまって」

黙れなかつた。ユウカの説明を遮ってしまった。咄嗟に言ったものの、具体的に何をどう聞きたいのかがいまいち頭に浮かばない。

そんなミカを見たユウカは口を閉じ、不思議そうな顔でミカを見た。言葉を口に出せ

ないミカが戸惑っているのを無言で見つめ、そして暫くした後合点がいったかのよう
に目を見開き、微笑みながら再び話し始めた。

「……ああ、これはあくまで互助会の部員が共有している情報よ。あくまで先生のサ
ポートをするためだけの情報だから、別に先生について知っている情報を全部共有しな
ければならない、なんてルールはないわ」

「ううん多分違うそっちゃじゃない」

ミカは早口で否定した。未だに自分が何を言いたいのかはよくわからないが、多分そ
んなことを目で訴えてはいなかったと思う。

「え……えっと、そのファイル、全部が先生のことなのかな？」

思考を久しぶりに高速回転させ、飛び出してきた質問がこれである。ミカは質問と共
に、未だにユウカの手にあったファイルを指さした。どう見ても、テーブルの上に乗っ
たファイルの中では一番分厚い。辞典くらいの分厚さがある。

「ええ、そうよ。シャーレの部員って大体先生を理由にシャーレに入っているから、先生
のことを知りたがる人が多いのよ。仕事中の先生に普通に質問するくらいならマシな
方で、好き勝手に盗聴したり盗撮したりハッキングしたり、先生の私室に忍び込んだり。
正直言ってシャーレに入部してから暫くはそんなのばかりだったのよ。もう逐一対処
するのも面倒だし、いつそのこと皆が持っている情報で他者に知らせても良いものは共

有して、最初に教えちゃいましょうってことになったの。

まあ、このファイルに纏める作業は本当に疲れたけどね。皆が皆、先生に教えてもらったことや自分が発見したことを自慢げに話すものだから、もう大変で……。どうせ何十回くらいかは喧嘩になるだろうと予めわかっていたから、アビドスの所有者不明の廃墟までわざわざ出かけてやったんだけど。全て出揃うまでに廃墟が幾つ崩れたことか

つまりはシャーレの非公式組織であるとはいえ、互助会の記録にしつかりと誰が何を発言したかを残されるマウント合戦である。ユウカは詳細を語っていないが、実際は喧嘩よりも不毛な泥仕合の時間の方が長かった。具体的に言くと、誰かが自分の知らない先生の一面を語る度に「嘘だっ！」と反論したりした生徒が続出したのである。勿論ユウカも普通に混じっていた。

「え？ ってことは、何？ 新しく入ってきた生徒が、先生の趣味嗜好とか把握してんの？ 先生に不審がられないの、それ」

もつと他に突っ込むところがあるだろうに、ミカはそんなことをユウカに聞いた。

「それは特に問題ないわ。互助会専用とはいえシャーレ部員のグループチャットのことには先生も知っているし、何なら管理しているヴェリタスに声をかければ先生も見られるしね。大体学園も学年も部活も何もかも異なるシャーレのメンバーが共通の会話で

盛り上がれることなんて、流行とかキヴォトス全体のこととかを除いたら、先生のことしかないんだもの。

だから新人の人が先生のことを矢鱈詳しく知っていても『他の部員に聞きました』つて言えば、先生も『へー、そっか』くらいにしか思わないわよ。

とうか先生つて、生徒に隠し事できるとあまり思っていないのよね。まあシャーレ内部の防犯カメラすらヴェリタスに一任しているような状態だし、拳句の果てには自分を盗撮している人すら見逃して放置しているのよねえ」

「ええええ……」

そんなんで良いのか。ミカは思わず脱力した。

「……ごめん、その、最初から質問していてもいい？　まず、シャーレに『生徒のものを持ち込むときの注意点』って何？」

何か頭が痛くなってきた。翼をパタパタ動かしながらそう言ったミカに対し、ユウカはそつと目を逸らした。

「……経緯は省くけど、その、一時期生徒たちが自分の私物をシャーレの、特に先生の私室に持ち込んで、そのまま置いて帰っていくことがシャーレで大流行になったことがあるのよ。

フウカ……ええと、ゲヘナの給食部の人が自分の調理用具を持ってきてたり、ミレニ

アムのゲーム開発部がゲームを持ち込んできたり、あとは、まあ、私が、予備の電卓とか筆記用具を持ってきてたりね。

それでももう私室どころかここみたいなオフィスも生徒たちの私物が溢れかえるようになったから、ある程度規制するようになったのよね。まあ、やりすぎは駄目ですつて程度のものだけね」

「わあ、地獄絵図だねー」

思わず乾いた声でミカは呟いた。確かに先生は多くの生徒に慕われているだろうとは何となく思っていたけれど、何か想定を突き抜けていた。先生の生活空間に普通に自分の私物があるのは確かに嬉しいとは思うが、勿論口には出さない。もう冷たい空気はお腹いっぱい吸い込んだのである。

「そういえば、『私室』って……先生って、この建物の中に住んでいるんだっけ？」

「ええ、そうよ」

シャーレオフィスの中はオフィスエリアと居住エリアに大別される。そして居住エリアは本来であれば先生のみならずシャーレで寝泊まりする生徒も普通に何日も暮らせる程度には広い。

そして先生は、居住エリアの内のいくつかの部屋を自分の「家」として専用スペースにしている。勿論事前に連邦生徒会の許可を取ったうえでである。

当初は連邦生徒会がマンションに先生の家を用意する予定であったし、実際に用意されたのであるが、先生が激務に追われていてあまりにも帰れなかったことや、シャーレオフィスと先生に用意されたマンション（徒歩15分圏内）を往復するだけで何度か先生が事件に巻き込まれそうになり、とうとう本気で激怒したユウカ率いる有志連合が連邦生徒会に殴り込んだのだ。ロクに先生に護衛も付かせずに家と職場を歩かせるとか正気か、というのがユウカたちの意見であった。

連邦生徒会の足元であるD・Uだが、別に他所の地域と比べて治安が良いわけではない。寧ろ万年予算不足に苦しめられつつも、ヴァルキューレ警察学校が汗と涙を流して血反吐を吐きながら、何とか「他所と同じくらい」の治安の悪さに抑えることに成功しているレベルである。

なのでユウカたちは割と本気で対策を練っていた。結果として、もうシャーレオフィスに先生を住まわせた方が早いという結論に至った。後はヴェリタスが電子的に防御し、トリニティ補習授業部の白洲アズサが有事に備えてトラップの用意を進め、迅速に何人かのシャーレメンバーを派遣できる体制さえ整えられれば、ちよつとした要塞の完成である。

「あ、あともう一つ。『クラブ』って何？」

「ああ、クラブというのは……」

続くミカの質問に答えようとするユウカ。しかし、ユウカの言葉は遮られた。

複数人の足音が、廊下を走る音が響いたからだ。しかも、かなりの駆け足である。耳をすませば、複数人が小声で話しながら走っているようだった。

「……ちよっと、待っていて」

ユウカは眉をひそめ、静かに立ち上がる。スタスタとドアへ向かい、そして外へ出て行くユウカの背中を、ミカは静かに眺めていた。

シヤールレ部員になるために④

ユウカが部屋の外に出ていき、ドアが閉じられると、ミカは両腕を伸ばして大きく息を吐いた。

何とかこれまでやってこれた。やらかしてしまつたし、色々な意味で動揺してしまつたが、まだそんな無様な姿は晒してはいないはずだ。多分。

新しくユウカが淹れてくれたコーヒーをゆつくりと飲み干した。さつきまでは味なんて全く気にする余裕がなかったが、こうして味わいながら飲んでみると、とてもおいしいコーヒーだ。豆とコーヒーメーカー、その両方が良いものなのだろう。トリニティでは圧倒的に紅茶派が多いが、ミカはコーヒーも嫌いではない。寧ろティーパーティーの会合では紅茶しか出されないことを不満に思っていたタイプだった。それでもブラックコーヒーよりかはシユガーやミルクを入れたコーヒーの方が好きだったのだが、三食ロールケーキ生活を終えた今となつては、ブラックコーヒーの過剰な苦さも心地よく感じるようになった。

これを機に、コーヒー派に転向するのも良いのかもしれない。ふと、ミカはそんなことを考えた。どうせもう、ナギサやセイアと頻繁にお茶会をするような立場ではなくな

るのだから。

ため息をつきながら耳をそばだててみると、廊下からはユウカらしき声と複数人の声
が聞こえる。どうやら廊下を走っていた生徒をユウカが呼び止め、何かを話しているよ
うだ。

ミカは立ち上がって自分でコーヒーのおかわりを用意しながら、改めて室内をぐるり
と見渡した。こうしてしてみると、本当にごぢんまりとした部屋だ。それでもティー
パーティーの無意味なまでに豪華絢爛で広々とした執務室よりはマシかもしれない、と
ミカは苦笑した。

事前に渡された地図によると、シャーレのオフィスには先生が仕事を行う執務室のほ
かに幾つかの事務室があるらしい。元はそれなりに広い教室（自習室）だったものを突
貫工事で分割し、小さな事務室を幾つか用意した様だった。連邦生徒会の施設であるが
故に複数あった教室だが、そのうちの1つを除いて今は改装工事を受けたりして別の部
屋に転用されたり、事実上の資材・書類置き場と成り果てているというメモが地図に
くつついていた。

そういえばあの地図、何故か無駄に細かい注釈や説明の書かれたメモがくつついてい
たな、とミカは思い出した。お陰で初出勤日前というのにシャーレの施設に関しての情
報はあらかた入手出来てしまっていた。補習授業部設立前にナギサが激務の合間に少

しずつシャーレに関する情報収集をしていたのを思い出すと、何だか複雑な感情が胸を満たしていく。

そうか、自分はシャーレにいるんだ。

今更過ぎる感想が浮かぶ自分の頭に若干呆れながら、ミカはコーヒークップを手を取つてソファへ戻つた。そして座ろうとした瞬間、ドアの方向から聞こえてきた大きな声が、ミカの耳を貫いた。

「ですから！　主殿の護衛役は、1人だけでなく最低2人は必要だと言つたのです！」

ピタリと、ミカは座ろうとしていたままの姿勢で固まつた。「主殿」という単語で何となく嫌な予感を覚え、「護衛役」という単語で不安が心に煙のように広がつた。

考える時間は必要なかった。ミカはカップをソーサーに置くとガンラックにかけてあつた愛銃を持ち、ドアを開けた。

勢いよくドアを開けた音に驚いたのか、廊下に出たミカへ一斉に複数の視線が注がれた。ミカも視線の先を見据える。そこにはユウカを含め4人の生徒がいた。全員が、口を止めてミカを見ている。

「あ、聖園ミカだ」

1人の生徒が小声で呟いた。しかし、誰もが無言の廊下にはその声はやけに響いた。それが引き金となつて、ミカを見つめる瞳に込められた感情の種類が変わつた気がし

た。

ああ、またやってしまったかな。他人事のように感じながら、ミカは取り敢えず微笑みを浮かべた。



ミカがこの時に出くわした生徒は、全員シャーレの当番としてシャーレオフィスを訪ねて来ていた生徒だった。取り敢えず軽く互いに自己紹介したミカも入れて5人の生徒は、その後の会話が続き、無言で見合っていた。正確に言えばミカが正面の少女を見つめ、残りの4人がミカを見つめていた。

ミレニアムサイエンススクール2年生の小鈎ハレ。ヴェリタス所属のハッカーで、先程小声で「あ、聖園ミカだ」と呟いたのは彼女である。小首を傾げ、まるでモニターを注視するような無機質な瞳でミカを見つめている。

ヴァルキューレ警察学校1年生の中務キリノ。生活安全局(ヴァルキューレの「局」)は他校でいう部活や委員会に相当する)の一員で、シャーレ古参組の一員でもある。努めて表情に出さないようにしているように見受けられるが、実際は青くなったり白くなったりと実に複雑そうな表情で、ミカと周囲の者へ頻りに視線を動かしている。

百鬼夜行連合学院1年生の久田イズナ。忍術研究部の部員であり、シャーレでも最高クラスのフィジカルを持つ生徒。先程ミカに聞こえるほどの大声を上げたのは彼女で

ある。口元を結び、憎悪の炎が溢れ出そうな鋭い瞳でミカを睨んでいる。

そして早瀬ユウカは困り切ったように眉を下げ、人差し指を額に押し当てながらミカに視線を向けている。

シャーレの「当番」とは、シャーレを訪れている生徒のうち、先生が事前に来訪を把握している生徒、つまりは既定の出勤日に既定通りに出勤している生徒を指す。人員が順調に増えている現在のシャーレでは、おおよそ毎日4〜6人の生徒が当番に就いている。あくまで当番以外の生徒は（緊急時に先生が呼ぶ場合を除き）自主的に訪ねてきている場合が殆どであるため、シャーレの日常業務は先生と数名の当番の生徒で回すことが前提となっている。

実際は、多くの生徒たちが当番制なんて知ったことかと暇を見つけては先生の手伝いにくることで、何とかパンクせずに業務が回っているような状態であるが。

「……その、先生に何かあったのかな？」

口を開いたミカに対し、真っ先に返事をしたのはユウカである。

「大事とはいえるけど、緊急事態というわけではないわ。今日先生は、D・Uにある市民ホールで行われた新交通システム建設の是非のための討論会に参加していたのだけれど、そこで過激な建設反対派団体の襲撃があったの」

「え、襲撃!? 凄く危険じゃん!」

声を荒らげて一歩前に出たミカの真正面に立っていたハレがすつと前に出た。相変わらず感情が読み取れない瞳で、ひたすらにミカの顔だけを見つめている。ミカとハレが互いに前に出てきたおかげで、ミカの目にはハレのライトグリーンの昏い光を溜め込んだような瞳がよく見えた。

「落ち着いて、聖園ミカさん。襲撃と言っても別に銃を持って実力行使に出てきたとか、爆弾を持ち込んできたとか、そういうのじゃない。ただプラカードとかメガホンとかをもつて無断で会場に押し入って、出入り口を封鎖しただけ。簡単に言えば抗議団体だけど、実際はろくに武装もなければ戦闘経験もない一般市民の集まりだから、過激派と言っても無断侵入と公道占拠くらいしかしないし、できない連中だよ。」

とはいえ先生が危険な目に合うかもしれないから、今動けるこの4人で助けに行こうかって話をしていったんだ。取り敢えず先生を連れて会場を脱出し、オフィスマで連れてこようかって話。

ちなみに会場には先生と、もう1人……当番の中でも今日の先生の護衛役をしている生徒、ミヤコさんがいる。ミヤコさんはSRT特殊学園の元生徒で、高い実力を持つ生徒。

この事態を私にメールで送ってくれたのもミヤコさん。乗り込んできた集団は本当にただの素人みたいだね。全ての出入り口を封鎖して数名が陣取って、誰も出入りでき

ないようにはしているみたいだけれど、先生たちの通信機器を取り上げる発想自体がな
いみたい。とつくに複数人がヴァルキューレに通報しているよ。だから今のところ不
安要素はほぼない。だけど……」

淡々と語っていたハレはチラリと横に立っているイズナに視線を向け、再びミカに視
線を戻した。

「……例の事件のこともあって、皆、先生に危害が及ぶ可能性に過敏になっている。
私も同じ」

プシュ、と間の抜けた音が響いた。ハレがポケットから取り出したエナジードリンク
の缶を開けた音だった。

ハレは「うくん」と小さく唸ると、缶の中身を喉を大きく鳴らしながら二口程飲んだ。
ミカは何も言えずに黙ったまま僅かに視線を下ろした。そんなミカに周囲の者は誰
も何も言わない。

唯一、キリノが小声で何かを言いかけては中断している。しかしとてもミカへの援護
射撃にはならず、意味のない言葉の羅列が雑音となって廊下に染み渡るのみとなってい
る。いや、そもそもキリノにミカを庇う気があるのかどうかもわからないが。

「……ぶあつ。えくと、つまりはね、別に聖園ミカさんが原因だなんて言うつもりはない
んだけど……うくん……現在、シャーレの空気は色々惨い」

「惨いって何よ、惨いって」

僅かに顔を顰めながらそう言うハレに対し、ユウカが唇を尖らせながら反論した。突っかかってきたユウカにジト目を送り、ハレはゆっくりと己の意見の正当性を言い始める。それはまるで、言いたいことを全て喉元で押さえつけて、言葉を脳内で再構築しているような緩慢な仕草だった。

「聖園ミカさんがトリニティの牢獄から出て行つて、そしてまた戻ってきた後、先生は漸くシャーレのオフィスで普段通り仕事ができるようになったのだけれど、流石に色々堪えたみたいで、暫く私室に籠って休息をとつてね。……その間、シャーレに乗り込んできたユウカたちが完全装備のうえ数十人で徒党を組んで先生の寝室の前で寝ずの番をしていたこと、私が知らないとも思う？」

「う……」

「先生の私室にある防犯カメラだって、ヴェリタスが管理しているんだよ」

一歩後ずさったユウカに向けて、ハレは天使のように穏やかな笑みを返した。

え、先生にプライベートはないの？ と思ったミカであるが、一応黙っていた。それ以上に先生の安全が気になっていたからだ。

なお、この時のミカは知らなかったが、先生の私室の防犯カメラと言つても結局は防犯のための代物であるため、設置されている場所は廊下等に限られている。

ユウカは誤魔化すように首を振って、小さく息を吐いた。そして、この場にいる全員を見渡した。

「……つと、こんなことを話している場合じゃないわね。兎に角私と当番3人は、これから先生のもとに向かうけど……」

そこまで言つて、ユウカはミカの方へ近付いてきた。

「ミカさんは、どうする？」

「一緒に行かせて」

ミカは即答した。自分に対して色々と思う生徒がたくさんいるだろうということなど分かり切っていた。しかし、逃げるつもりなんてない。私は先生を助けるためにシャーレに入ったのだから。

「わかったわ！　じゃあ、本日の当番全員！」

即答したミカに向けて真剣な表情で頷くと、ユウカはハレとキリノ、イズナに向けて声を上げた。3人は賛意を示すことも反対の声を上げることもなく、沈黙したままユウカに視線を向けた。

「そしてミカさんの5人で、先生のもとへ向かうわよ！」



キヴオトスの生徒の中では比較的運動が苦手な方のハレを同伴していたため、5人の

生徒たちは駆け足をしつつも、しかし常識的な速度で会場まで向かっていった。勿論イズナが壁やら建物の屋上やら車やらを飛んで移動などはしなかったし、ミカがあらゆる障害物をパンチで破壊しながら向かっていったわけではないし、ハレが適当な無人車をハッキングしてそれに飛び乗って会場まで殴り込んだりもしなかった。そういう移動手段は本当の緊急事態までとっておくのがシャーレの活動方針である。無駄に被害を大きくしては先生の評価が落ちるし、賠償など発生すればシャーレの財政が破綻する。

部員が増え、実績を積み重ねていくにしたがってシャーレの予算は増えていったのだが、それでも潤沢というには程遠い有様であるため、可能な限り浪費は抑えたいのがシャーレ運営の実態を知る者たちの共通認識である。このため、ユウカが部員たちの無駄な出費を本気の目で監視している。寧ろ特許や各種製品で儲けまくっているミレニアムサイエンススクールに比べ予算が限られていることと、シャーレの財政崩壊は先生の食生活の崩壊につながるため、ミレニアムの時よりも厳しい。彼女の辣腕から逃れる手はないのだ。シャーレに入部してもなおユウカの目から逃れられなかったミレニアム生徒一同（主にエンジニア部）の絶望は、周囲の誰もが同情を禁じ得ない程であった。例えばミレニアムのエンジニア部はシャーレの予算で先生のために便利グッズを作ろうとしたが、その少なからずがユウカによって開発そのものが中止に追い込まれた。もつとも、幾つかは実際に作られシャーレの先生に渡されている。

なお、先生が使うためかエンジンニア部がシャーレの予算で製造した各種道具は、ミレニアムでエンジンニア部が製造したそれらとは比較にならない程に厳格な安全基準が設けられている。エンジンニア部の発明品で空を飛ぶ羽目になったことのあるユウカは、それを知った日の夜にちよつと泣いた。

それは兎も角、そんな理由で、キヴオトスのD・U・を制服も年齢もバラバラの少女たちがジョギングするように走るといふ謎の光景が、多くの通行人に目撃されたのである。勿論交通ルールは守ったうえで、歩道を走っている。

件の市民ホールはシャーレのオフィスから徒歩で10分程度の距離であったため、走っていけばすぐに到着する。

「そういえば、当番の生徒たちが全員ここに来て良いの?」

到着した後、汗一つかいていないミカは僅かに額に汗をにじませているハレを見て、そう聞いた。

「あ、うん。問題ないよ。今はカフェに数人の生徒が屯してる時間だったから、その生徒たちにメールを送つといた」

「はい、おそらく間違いはないかと。ここを出てくる瞬間にカフェにいたフブキとすれ違いましたが、面倒くさそうにオフィスの方へ向かっていったので」

「ああ、そういえばフブキさんもいたね。またサボっているんだ」

「面目次第ありません。フブキは最近カフェの窓際の席で日向ぼっこをするのにハマっているようでして……」

ハレはミカに返答し、その会話に割り込んできたキリノに視線を向ける。呆れた目をハレに向けられたキリノは体を震わし、恐縮したかのように背筋を伸ばした。

「……それより、早く主殿のところに向かいましょう」

ミカへ簡易な自己紹介をした後は一言も喋っていなかったイズナが低い声で言い、市民ホールを睨みながら見上げた。誰の返事を待つわけでもなく市民ホールへ歩き出したイズナの背中を見つめ、ミカは小さくため息をついた。彼女の態度や一挙一動が、全力でミカと関わりたくないと言っていた。別にシャーレ全ての部員と仲良くなりたいなんて高望みなことはいわれないが、それでも少し悲しくなってくる。

ふとあることに気付いて、ミカは隣でエナジードリンクをゴキユゴキユ飲んでるハレの方へ向き直った。

「……そういえば、ハレちゃんってヴェリタスなんだよね？ デスクでの仕事の本業だろうに、現場に出て大丈夫なの？」

ミカの質問に、ハレはエナジードリンクの空き缶をポケットに突っ込みつつ、静かに答えた。

「別に外に出たところで死ぬわけでもないから大丈夫。私は主に浮遊型のドローンを操

作するのとハッキングで支援するのが得意だけど、別に銃だつて使えないわけじゃないし。それに……」

ドローンを操作するための端末を掲げながら、ハレはにこやかに笑った。

「……ドローンだつて、私だつて。いざという時に、先生に向かって飛んできた銃弾を受け止める盾役ぐらいになら……なれるからね」

それを聞いて、ミカは咄嗟に視線をそらした。その言葉を笑顔で言い放った時のハレの瞳の色を、ミカは直視することが出来なかった。

シャーレ部員になるために⑤

市民ホールに入ろうとしているシャーレの生徒5人の目的は先生を脱出させることであり、市民ホールに乗り込んだ抗議団体の鎮圧ではなかった。このため武器を装備しつつも引き金に指をかけることもせず、ただ普通にぞろぞろと市民ホールの玄関に向かっていた。

市民ホールの正面玄関は閉鎖され、ホールの内側、つまりユウカたちから見て反対側には長机やら椅子やらを組み立てたバリケードが設置され、入れないようになっていた。とはいえ、一般人より遥かに力持ちのキヴォトスの生徒数人がかりの前では、ひとたまりもないような簡易バリケードである。有り合わせのものを使用しただけのバリケードは、少女5人組からすれば、足止めになるのかどうかも怪しい存在価値が不明な代物にしか見えなかった。しかも、この場にはパンチ一発で牢獄の壁を破壊したミカもいるのでさらに余裕だった。ミカ以外の4名は、この時はミカの圧倒的なパワーを知らないのだが。

しかし大きな音を立ててバリケードを突破すれば、中にいるはずの過激派団体を興奮させる恐れがある。銃を持っていなくてもプラカードを振り回す程度のことではでき

し、直接殴ったり突き飛ばしたりすることだってできる。その被害に先生があつてはたまらない。先生には絶対に「無傷で」脱出してもらわなくてはならない。銃弾を受けなければよい、怪我をしなければよいというものではないのだ。

なお、ユウカたちからは全く見えないが、ユウカたちから見てバリケードのさらに奥には抗議団体のメンバーが何人か待機していた。それは予め予想できた事であつたが、ユウカたちはその者たちの安全性については全く考慮していない。今は先生の脱出が最優先であるし、キヴォトスでは犯罪者が前後不覚や骨折などの大怪我をしたり、精神が摩耗した状態で検挙されることなど珍しくもないのだ。悲しきかなキヴォトスにおいては、犯罪者をとめるために必要なものは説得や良心への訴えではなく、犯人を上回る火力と暴力なのである。

さて、どうすれば先生を安全にここから脱出させることが出来るのか。バリケードの前に5人が立っていると、後ろから大音響のサイレン音を周囲にまき散らしながら、ヴァルクキューレ警察学校の装甲車2台が市民ホールの駐車場に乗り込んできた。

「走ってきたイズナたちより車が遅いって、おかしいでしょうー！」

イズナの怒りと苛立ちが混じった声に、キリノが反射的に身を縮こませた。吐き捨てるように言ったイズナは市民ホールに顔を向けたまま、瞳をぎらつかせ装甲車の方向を睨んでいる。

それはヴァルキューレの警備局の車両だった。キリノとは局が違うが、同じ学校の仲間ではある。滑り込むように適当な場所に駐車した装甲車両の後部ドアから、一斉に警備局の生徒が飛び出してきた。合わせて運転席と助手席のドアが勢いよくに開かれ、生徒が下りてくる。このタイプの装甲車両は後部座席に6人が着席でき、運転席と助手席も合わせて8人が搭乗可能となっている。それが2台、つまり合計16人の警備局生徒が、ゲートル式安全靴の靴音を響かせながら市民ホールの玄関前まで走ってきた。

初動（つまり生徒の現場到着）が遅いことで悪い意味で名を轟かせているヴァルキューレ警察学校警備局であるが、勿論色々理由がある。例えば単純にヴァルキューレが管轄する地域の全域に十分な生徒を配置できるほど、人手が足りているわけではないことや、何事も組織としての行動が前提の警備局は常にチーム編成で現場に臨んでおり、言い換えればまとまった人数が集まることで漸く出動可能となることなどが主な理由である。

向かってきた警備局生徒に冷たい視線を向けながら、ユウカが無言でIDカードを突き出した。連邦捜査部「シャーレ」のIDカードである。

「あ、お疲れ様です！ あれ、警備局長はシャーレに協力要請をしたのですか？」

代表者らしき警備局生徒がヴァルキューレ式敬礼をしつつ戸惑ったように聞いてきた。それ以外の生徒は大型のタブレットを囲み、状況を小声で話し合っていた。

ヴァルキューレ警察学校に幾つかある局のうち、警備局は一般的な事件の捜査を担当する局である。この場合の一般的な事件とは、傷害事件や窃盗事件、爆破事件（キヴォトスでは建物が爆破されたりすることなど日常茶飯事である）、デモやストライキ、暴動、そして今回のような立てこもり事件などだ。その他指名手配犯の捜索や重要施設の警備なども、警備局の役割となっている。

一方、大規模なテロや組織的犯罪などの重大事件となると、ヴァルキューレのエリート部門である公安局の管轄となる。公安局はヴァルキューレの中でも最優秀の人材と最優秀の装備を集めた精鋭部隊だ。

ちなみにキリノが所属する生活安全局は防犯指導や巡回の他、雑踏警備や非行活動をする者の補導、迷子の保護などを担当する。

シャーレはヴァルキューレと協力関係を構築しているが、シャーレがヴァルキューレに手を貸さなければ（悪い言い方をすれば、ヴァルキューレの領分を侵さなければ）ならない状況は重大事件の場合がほとんどで、その場合はヴァルキューレも面子をかけてエリートของ公安局を出してくる場合が多い。つまりヴァルキューレとシャーレが合同で動く場合、基本的には公安局とシャーレが協力して事件に当たることが多い。

とはいえ、別にヴァルキューレ警備局が担当する事件にシャーレが関わってはならないという規則などないし、寧ろそういった規則や慣例を全て無視できるのがシャーレの

強みである。なので警備局の要請を受けてシャーレが動くことも少くない。警備局にとつて、公安局を呼ぶ必要があるかどうか判断が難しい状況でも、先生のGOサイン一つで現場に現れるシャーレは実にありがたい存在なのだ。

それはわかる。わかるのだが、他校の生徒にこういう態度をとられるのは、何時まで経つても違和感がある。

まるで上司に対応するかのような姿勢をとっている警備局生徒を見て、ユウカはため息をつくの何を何とか堪えた。セミナーの生徒、つまりユウカの本当の部下たちは、真面目ではあるがもつとフレンドリーだ。こんな風に無駄に洗練された敬礼なんてしない。とはいえ、目の前のヴァルキューレ警備局の生徒は何一つ間違ったことをしていないのも確かである。

「いえ、警備局長そっではなく、自発的じはつてきよ。あそこに先生せんせいがいるのよ」
「は……はあ!?!」

ぎよつとした表情を浮かべた警備局生徒は、慌てて後ろを振り向いて叫んだ。

「おい、至急警備局本部に伝える、最優先だ! 封鎖された市民ホールの中にシャーレの先生がいるぞ!」

「何ですと!?!」

「なんてことだ、最悪だ……公安局に連絡をしなくては……!」

悲鳴交じりの返事をした生徒のうち、1人が慌ててスマホを取り出して早口で喋りだした。

ヴアルキューレにとって、それは悪夢に他ならない。別にシャーレの先生に多大な恩があるからではない。立てこもり事件が起こっている内部に、銃弾1発で致命傷になりかねない命を落としやすい存在がいることが大きな問題なのだ。キヴォトスでは生徒に限らず、一般住民もたつた1発の銃弾を受けたり、ちよつとした爆発に巻き込まれた程度ではそう簡単に死なない。生徒と違って即座に起き上がることは難しいが、それでも気絶程度で済む。しかし、先生はそうはいかない。

仕方がないことだが、立てこもり等で人質が発生した場合の警備局の対応マニュアルは、人質が一般的なキヴォトス住民程度の生命力があることを前提に作られている。つまり市民ホールの中に先生がいることは、判明したその瞬間に通常の対応マニュアルが無価値となったことを意味する。

「その、申し訳ありません、早瀬さん。状況が変わりました。当初の予定では市民ホールに突入し、本官が占拠グループと話し合い、説得する予定だったのですが……。下手に占拠グループを興奮させる事態は避けねばならなくなりました。

通報によると、占拠グループは新交通システム推進派筆頭のD・U・3区区长との公式且つ公開された場での会談を所望しておりますが、その方以外にはあまり興味を持つ

ていないようですね。ここは不用意に交渉して相手を刺激するよりも、先生や一般参加者の方々を逃がすような作戦を立てた方が良さそうですね……。少し、本部と相談してみます」

そう言うと、代表の警備局生徒はユウカに背を向け、警備局員たちを呼びあれこれ話し合いを始めた。

ユウカは今度こそため息をついた。土壇場での前提条件の崩壊、方針転換。これでは暫くヴァルクューレは頼れそうにない。

ユウカはさつさと見切りをつけてシャーレの部員たちを見た。すると、いつの間にかハレが持参した大型タブレットを見るように4人が集まっている。ヴァルクューレの生徒たちとやっていることは全く同じだが、4人を包み込むオーラというか雰囲気の違いで、ある種異様な光景と成り果てている。

まるで機械のように淡々とタブレットを操作しながら小声で説明をしているハレ。

その説明を真剣な表情で聞きながら、時々ふん、ふんと相槌を打っているミカ。

ハレに時折確認や質問をしつつ、まるで威嚇する野犬のように隙あらばミカの方を睨みつけているイズナ。

ミカとイズナに挟まれて、説明を真剣に聞いてますという態度をとりつつ、何かから目を逸らすかのようにタブレットの画面のみを見つめ続けているキリノ。

シャーレの任務中に仲間を殺気とすら言える怒気を放つイズナは論外だが、その怒気に気付いているであろうに何も言わずに受けとめ、冷や汗一つ流していないミカもミカだ。本人は諦観と共に己への態度を受け入れているつもりかもしれないが、傍から見ると「なんだあ、そのおままごとの様な殺気はあ？」という感じで涼しい顔をしながらイズナの殺気をガン無視しているようにしか見えない。その証拠に、イズナの表情が段々ムキになってきている。あと数分放置しておけば、逆にイズナが涙目になりそうだ。

そんな光景を見て、ユウカは今日一番の大きなため息を吐いた。今から自分もあそこに加わらなくてはならないのは少し憂鬱であるが、仕方がない。先生の安全と生命は、あらゆるものよりも優先されるべきものなのだから。



超法規的機関である連邦捜査部「シャーレ」であるが、その絶大な権限は基本的に顧問である先生が専有している。シャーレの部員が自分たちとは何ら関りのない学園の自治区で好きに戦闘ができるのも、それが先生の命令もしくは許可という絶対条件があればこそである。

つまり、先生の命令が下されていない状態で、例えばシャーレの部員という理由だけで生徒たちが不法侵入やり放題、というわけではない。……やらかした後に先生があれこれ正式な書類を用意して「先生の正式な命令を受けて生徒がやった」ことにならでき

るであろうが。

では先生が意識を失ったりした場合、或いは敵に人質に取られるなどして部員の指揮を取る手段を喪失したなどの理由で、シャーレの部員に命令をすることが出来る状況ではなくなった場合はどうなるのか。実際のところ、これまでその問いに答えることが出来る者は、シャーレや連邦生徒会も含めて誰も居なかった。つまり、どうすればよいのか何一つ決まっていなかった。

エデン条約調印式の事件の際は、意識を失った先生が割と短時間で目を覚ましたことで事なきを得た。しかしその間シャーレは実質的に機能を停止し、シャーレの生徒でミネアムや百鬼夜行などの他校の生徒は、何も知らない一般人と同等の存在と化した。彼女たちは状況を満足に把握することもできず、ましてや他校の自治区まで独断で乗り込むことなどできなかった。仮にニュース映像を見た直後に、シャーレ部員がトリニティへ即座に向かったとして、事件の解決までに到着できたかどうか、という点はこの際置いておく。

ミカの聴聞会の準備が進められていたところ、ユウカを含むシャーレの一部（言い換えれば、先生襲撃の事実打ちのめされた後、早期に復帰できた者たち）はこの事実を重く受け止めた。何とかしなければ。

アビドスの対策委員会は阿慈谷ヒフミの嘆願一つで、ノリと勢いでトリニティ自治区

まで駆け付けたが、あれは例外中の例外である。極限とすら表現できるまでに身軽であり、今更他校との関係や連邦生徒会から睨まれる可能性など何も考慮する必要がないアビドスだからこそ可能だったことだ。

ユウカはその件について一度先生に相談をしてみたが、先生は珍しいくらいに真剣な表情をして「考えてみるよ」とだけ言った。その後、先生はシャーレの部員の誰にも何も知らせずに、私室に籠る時間が増えた。

ユウカたちは知っていた。先生はいつも隙だらけなように見える。しかし本気で先生が隠し事をする場合はシャーレの精鋭たち（と書いて「ストーリーカー連合」と読む）であつても先生の動向を把握するのは難しい。先生は隠し事が下手なのではない。生徒たちを信頼しているから、本気で隠す気があまりないだけなのだ。

それでもシャーレ部員が団結し、本気で総力をつぎ込めば先生の動きや意図を明らかにすることはできるだろうが、それを実施する前に、独断専行で先生の動きを調査していた生徒がいた。

「……憶測、ですけど……こつそり……い、遺書でも用意されているんじゃないでしょうか……。ご自身に何かあつた後の……引継ぎ用の……書類、だとか……」

生きているのが不思議なくらいに白い顔で、地獄の釜の底から響く様な低音でそう言ったのは、ヴェリタスの音瀬コタマだった。彼女は盗聴のプロであり、先生が「何か」

の準備をしていることを臆気ながら把握していた。

それを聞いたユウカたちは、即座に行動した。書類作成能力と交渉術に長けるシャーレの部員をかき集め、連邦生徒会に何度目かの殴り込みをかけたのである。そして、先生の許可がなくなるともシャーレの部員がある程度独自でシャーレの特権を利用できる権限をもぎ取った。

もつとも決着は早々に着いた。連邦生徒会も、先生が意識不明になっていた間にシャーレがまとめて機能停止に陥ったという事実を、スルーするという選択肢は選べなかつたのである。最初からシャーレ部員が有事の際に、先生のためという「錦の御旗」を掲げて好き勝手に行動する可能性があるのであれば、予め正式に認めておく方がまだましとも言えた。現在の連邦生徒会に、先生に代わってシャーレ部員たちを止める力はないのだ。

とはいえ連邦生徒会長が失踪した現在の連邦生徒会は、シャーレの権限を変更する能力を喪失しているため、実際は「先生に何らかの事態が生じた場合、シャーレ部員が先生の命令を待つことなくシャーレの権限を行使することを、連邦生徒会は見えて見ぬふりをする」ということになった。それはシャーレ部員（先生ではない）と連邦生徒会との間で交わされた取り決めであり、連邦生徒会の黙認という名の援護射撃であった。見て見ぬふりをする程度で先生の生存率が高まるのであれば安いもの、というのが連邦生徒

会の本音なのだろう。

これら一切の動きは先生に知らせることなく行われた。それは独走であり、或いは暴走とも言えた。しかし、多くのシャーレ部員が躊躇うことなく実行した。

シャーレの部員たちは、少なからずがあることを懸念していた。しかし、誰もが口に出すのを恐れていた。口に出した瞬間に、それが事実となる気がしたのだ。

彼女たちは心の底から恐れていた。

先生は、自分の身体や命にそんなに執着していないんじゃないか、と。

つまるところ、それがユウカたちが市民ホールの中にいる先生にろくに連絡を取ることも許可を得ることもなく、市民ホールの警備を任されていた警備会社のシステムをハッキングし、市民ホールの非常口の扉を蹴りで破壊した理由である。

シャーレ部員になるために⑥

「へー、けっこうやるねっ☆。イズナちゃん」

「……………あ、はい……………聖園……………ミカ殿」

扉の向こう、つまり非常口の扉の反対側に並べられていた複数の椅子ごと扉を吹き飛ばしたイズナの蹴りを見て、ミカは小さく両手を叩いた。

あれほど敵意を隠さずに向けていた相手から素直な賞賛を受け、イズナは戸惑った挙句に普通に返事をしてしまっていた。

なお、ミカが称賛したのはイズナの蹴りの威力ではなく、柱や壁を破壊して建物を振動させることにはない程度の威力に抑え、必要なだけの破壊に済ませた事だった。確かにイズナは本気で蹴りを放ったわけではなかったが、そこまで意図的に力を抜いたつもりもないことを、ミカは知らない。

別にミカは上から目線でイズナを褒めたわけではない。単騎での戦闘力が異常なほどに高いが故に、基本的に味方と共に戦った経験も、誰かを巻き込まないように力加減をした経験も殆どないミカにとって、ちようど良い塩梅に手加減できるといえるのは尊敬に値することなのだ。今までは尊敬はしても自分も真似をしたいとは思わなかったが、

シャーレの一員として働いていく以上はそうもいかないだろう。これからどんどん学んでいかなくては。ミカは自分の戦闘能力に誇りを持っており、自身が強者だと自認しているが（その分ナチュラルに相手を煽ることもあるが）、慢心は良くないとは思っている。何せ、少し前に先生に命を救われなければ危うかった程に追い詰められたのだから。

市民ホールのマップや構造、ホール内の防犯カメラの映像などを一通りチェックして、シャーレ5人組は一つの結論を出した。

要するに、

「——もう面倒くさい。とつと中に入ってさっさと先生を連れだそう」

である。

ミヤコからの定期的に来る状況伝達メールによると、抗議集団は出入り口を封鎖して以降は騒ぎまわり、自分たちの意見の正当性とそれ以外の意見の否定、あとは反対者の身体的特徴や服装や経歴などの否定しかしていない。最早討論をする気があるのかすら怪しい。それもホールに閉じ込められた参加者に片っ端から言っただけで回っているのだから性質が悪い。

いくら銃口を突き付けられたり暴行を振るわれたりはしないにしろ、こんな空間に強制的にとどまらせるのはもはや一種の攻撃である。そんな行為が横行している空間に

先生を長居させるわけにはいかない。既に事件発生から20分以上が経過している。何としても、早急に先生を助け出さねばならない。

中にいるミヤコが先生を連れて、自分たちだけ脱出するということが難しいのは確かなようだ。天下のSRT特殊学園の元生徒であるミヤコと言えども、無理なものは無理である。しかも民間が主催の討論会に参加する以上、護衛役とはいえども完全装備というわけにもいかない。今日のミヤコは愛銃くらいしか持つてきていない。いつも作戦時に使用しているドローンやサブバイバルナイフも置いてきていない。銃がアクセサリーかファッションの一部か何かのように扱われているキヴォトスであるが、銃丁ならまだしも、グレネードやドローン、防弾防刃ベストにサブバイバルナイフなどをフル装備の状態で歩ける場所やタイミングには限りがある。

装備が心許ないミヤコであっても、やろうと思えば非武装の素人などあつという間に叩きのめすことができるだろうが、そもそも先生を脱出させることが最大の任務であるというのに、相手を数人気絶させたところで意味などない。

それに隠れて脱出するためには、抗議団体のみではなく他の一般参加者たちの目も全てかくぐつて先生とともに消えなければならぬ。先生を護りながら先生とミヤコ以外の全員に気付かれないうちに脱出するのは極めて難事だ。自分たちだけ逃げ出そうとすれば、一般参加者たちも我先にミヤコたちについていこうとするだろう。下手

すればパニック発生の引き金となる。SRTの元生徒として、自分たちと共に閉じ込められた一般参加者たちのパニックを誘発するような行動を避けるという方針に思考が向いているのだろう。故に、ミヤコは状況の報告だけメールで行い、先生から離れずに静観という選択をしたのだとユウカたちは想像した。

「さあ、行きましょう！ 可及的速やかに、迅速に、先生を助けましょう！」

「ミヤコさんも新人だからね……。普段の仕事は兎も角、シャーレでの先生の護衛役は、先生の安全だけを考えなくちゃいけないのに。SRTでの教育が染みついちやっっているね。これは良くない」

キリノの大声に反応することもなく、ハレはぶつぶつ不満げに呟きながら、タブレットを睨みつつキリノの後ろを走っている。

現在、5人組は先頭からイズナ、ユウカ、ミカ、キリノ、ハレの順で市民ホールの廊下を走っていた。

扉を破壊した非常口近辺に誰も居なかったのは、すでにカメラ映像で確認済みだ。市民ホールで最も広い部屋、すなわち大ホールでは抗議団体がメガホンを使用して己の主義主張や他者の悪口をぶちまけているため、扉や壁を幾つも隔てた場所で、鉄製の扉と幾つかの椅子が床に叩きつけられた音がよく届いていないらしい。届いていたとしても、自分たちの世界に浸りながら喋りまくる人間には意外と周囲の音が聞こえていない

ものである。

この市民ホールは約2000席を誇る大ホールの他に、大ホールの半分程度の広さの中ホール、その他リハール室、大会議室、小会議室、展示室、事務室、複数の個室形式の楽屋、正面駐車場と地下駐車場等が備えられている。正式名称を「D・U・東部多目的市民文化会館」というが、長いので先生を含む近隣住民は「市民ホール」と呼ぶことが多い。そして当然のようにシャーレの部員も先生の呼び方に倣っている。敷地面積約37,000平方メートル、地下1階、地上4階建ての鉄骨鉄筋コンクリート構造の建物だ。築60年越えとなかなかに年季が入っているが、今回先生が参加しているものを含む各種シンポジウムやコンサート、セレモニー、ワークシヨップ等が毎年多く開催されている由緒ある施設である。

大ホールは1階に位置しており、シャーレ5人組が突入したのは非常階段を上った先にある4階の非常扉だ。もともと抗議団体の構成員は半分以上が大ホールにおり、残りもそれぞれの出入り口を封鎖した後は正面玄関に数人が待機している以外を除き、大ホールに集合するか、事務室を占拠するかをしているようだ。

「抗議団体の人数は43人。こんな人数では占拠して、くまなく全部屋を巡回することなどできないわね。乗り込んだ後に速やかに全出入り口を封鎖できたのは無駄に行ってきた訓練の賜物でしょうけど、そもそも主目的が大ホールでの乱痴気騒ぎだし……こ

れじゃあそこらの不良の方が良い動きをするわよ」

ユウカが走りながら小声を漏らすと、全員が首肯した。

「……そうですね、ユウカ殿。大ホールに突入して主殿のみを連れて建物から脱出。あとは警備局の皆様^{きやう}に任せるか、彼奴等^{やつら}を共に捕縛するか。それは主殿のご命令に従いましょう」

任務モードのイズナは声を抑え、静かに唸りながら言った。突入後も普通に大声を上げているキリノにも、少しは見習ってほしいものである。

「幸い、今日は先生が参加している討論会以外はイベントもなく、閉じ込められているのは討論会の参加者以外は事務室に押し込められたこの職員だけ。不幸中の幸いだね。」

そして市民ホールの警備システムやカメラは、ごく普通の民間警備会社が管理している一般的なシステムだから、簡単に必要十分な時間無力化しておくことができる。時間的余裕もたつぷりとある。先生に怪我だけはさせないように、慌てずに行こう」

タブレットを指先で叩きながら、ハレは視線をユウカに向けた。一応、5人組の中でユウカが指揮官役である。

「そうね、ミカさんも、異論はないかしら？」

「全然おつけー☆。大丈夫。私は皆の戦い方をよく知らないし、一般人が多数いる中で戦闘がこなせるくらい器用でもないから、皆の動きに合わせるよ。一応聞きたいんだけ

ど、発砲はしても良いんだよね？」

「シャーレの権限でそれはどうにでもなるわ。勿論一般参加者を片っ端から撃つていくとかとなると話は別だけど」

「流石にそんなことしないよつ。弾がもつたいないしねっ☆」

「も、もつたいなくなかったらやるんですかっ!？」

「キリノさん、うるさい。……ついでに言うのと、ここの警備システムは遠方の民間警備会社
社が全面的に管理していて、ここの事務室からはカメラ映像を見ることがくらいしかできない。それを無力化してしまえば、事務室を占拠している抗議団体の人たちは何もできないね」

しかも市民ホールに警備会社の警備員は常駐しておらず、日に何度か巡回しに来る程度だという。その民間警備会社はキヴォトスでは珍しくない「民間警備会社の看板を掲げたPMC（民間軍事会社）」ではなく、主に市民ホールや図書館、公民館のような市や区の施設の定期巡回、防犯設備の管理などを行っている、ある意味においては正しい形の民間警備会社である。所属する警備員も、警棒と防弾ベストくらいしか装備していない。

公園にやって来るケバブのキッチンカーすらミニガンを抱えた強盗集団スケバンに狙われるキヴォトス基準で考えると、貧弱極まりないと言わざるを得ない警備体制であるが、こ

のような公共施設は建物が大きくて立派なだけで、保管してある現金などたかが知れている。こんな場所を狙うくらいならば、駄菓子屋でも襲った方がまだ実入りがありそうだ。D・U・全ての公共施設に重装備のPMCを常時配置するなど、どう予算をやり繰りしても不可能な話である以上、襲われる可能性が極めて低い施設はこうなってしまうのも当然である。

淡々と言いながら、ハレはタブレットを睨み続けていた。ここの事務室からはカメラが見えないが、彼女のタブレットでは市民ホールの防犯カメラの映像は全て見る事が可能だった。カメラ映像はカメラが数世代前の代物ということもあって、あまり解像度が高くないが、そこは妥協する他ない。

「うーん……イズナさん、その目の前の扉が大ホールの2階席の正面出入口。取り敢えず、そこから中に入って大ホールの様子を見てみようか」

「は、わかりました」

大ホールは所謂「プロセニアム構造」と呼ばれる、観客席から見ると舞台が額縁のように区切られて見える構造となっている。つまり観客席から見て正面側に舞台が位置しており、さらに客席に段差があることで全客席から舞台を眺めることが出来るという構造である。そして大ホールは1階席と2階席に分かれており、1階席が約1600席、2階席が約400席となっている。当然、2階席からも正面に舞台が見える。

1階席には正面側に3か所、その他両脇に1か所の出入り口がある。そして2階席には正面側、両脇にそれぞれ1か所の出入り口がある。いずれの扉も車椅子での移動を考慮しているのか広めの両開き扉となっており、今は全て閉まっているようだ。

ハレが入るよう指示した扉は2階席の正面出入り口の扉である。つまりこの扉から入れば、高所から舞台を見下ろすことが出来るはずだ。大ホールの状況を直接目で見て判断するには、これ以上ない格好の場所である。

「カメラの映像によると、閉まっている扉のうちバリケードが設置されているのは、1階席の正面3か所と西側ののみ。つまり2階席側の扉全部と1階席の東側の扉は普通に出入りができるよ。」

討論会は大ホールを使用しているけど、参加者の数を考えれば2階席を使うまでもないから、全参加者は1階席にいて2階席は使っていないかったみたいだね。2階席には……カメラを見る限り誰もいないと思うけど、念には念を入れた方が良さそうだね」

「ハレのドローンを使っても良いけど、先生のために取っておきたいわね。万が一抗議団体に出くわしたとしても銃を持っていない素人だし。……イズナ、頼めるかしら」

「……」

ユウカの言葉に先頭にいるイズナはコクリと無言で頷くと、左腕を横に伸ばし、少し下へと向けた。「その場で待機してくれ」のハンドサインだ。そのまま音を立てずに扉

の右側の手前まで走り、ユウカたちの方を向き、ユウカを指差しした後には扉の左側を指差した。

それを確認したユウカは小さく頷き、イズナが指差した方、つまり扉の左側まで走っていた。位置に着いたユウカはミカたちの方を向くと、銃を持っていない方の手で握り拳を作りミカたちに見せた。「まだ動くな」のハンドサインである。

所属する学園がバラバラの部員で構成されているシャーレでは、戦闘時の連携を円滑に進めるためにシャーレ部員共通のハンドサインや暗号等を使用している。もつとも一から独自に産み出す時間も余裕もなかったため、ヴァルキューレ公安局が使用しているものをそのまま利用しているのだが。

なお、まだそれらが書かれたファイルを受け取っていないが故に、知る機会も与えられていないミカのため、ミカの後ろにいるキリノが小声でハンドサインの意味を逐一伝えていた。

第三者から見ればまるでコントか何かのような光景であるが、こういうものは誰が行していようが実践して、どんな時も忘れぬように脳と体に染みつかせた方が良いのである。

ちなみにミカに渡される予定の、こういったハンドサインやら無線で使う暗号やらシャーレの戦術やらが書かれたファイルは、シャーレの第1事務室のテーブルの上で、

先生について書かれた辞典のように分厚いファイルの下敷きになっている。

ハンドサインをした後、ユウカはイズナに視線を向け、ドアレバーを掴んだ。それを見たイズナは小さく頷くと、姿勢をインドアレイ（レイポジションの一つで「CQ Cローレイ」とも呼ぶ。待機姿勢は銃を構え即座に射撃できるようにするための姿勢のことで、インドアレイは銃口を自分の足元に向けた姿勢のこと）に保ったままそろそろ動き、さらに扉に近付いた。

ユウカがゆっくりと扉を開けると、イズナが素早く中を覗き込んで様子を伺う。ドアを開けた瞬間に拡声器を使用した野太い男のダミ声が廊下に届くが、イズナは眉一つ動かさない。イズナはユウカに向かって大きく頷いた後、ミカたちに向かって左腕を水平に突き出し、肘を上向きに曲げた。「来い」のハンドサインだ。

素早くミカたちが集まると、ユウカが一気に全開まで扉を開けた。すかさずイズナが飛び込み、次いでユウカ、ミカ、キリノ、ハレの順で中へ入っていく。

ドアの向こう側には、見るからに誰もいなかった。座席が並んでいるが座席の下は潜り込めるほどのスペースがないため、隠れる場所はない。座席の前後や脇の通路は人がすれ違うことが出来る程度には広く、安全確保は容易だった。

ニーリング（膝射。膝が床についた状態で銃を構えること）の姿勢で一番奥の方に向けたイズナが少し笑みを浮かべながら他の4人に向かって「OK」のサインを送る。

舞台の方からは拡声器を使った男の声が断続的に響いており、どうやら抗議団体の主要人物の多くが舞台の上に陣取っているようだ。

ユウカたちは姿勢を低くしたまま2階席の下側、つまり一番奥側まで移動した。2階席の下側には格子状の手すりがあった。そもそも座席から舞台を見るのが想定されているのだから当然なのだが、2階席からも舞台側からも丸見えの状態なので、5人とも匍匐前進のような姿勢でそろそろと下側まで移動する。

「あ、あそこに主殿がいらっしやい……ます……が……」

一番最初に座席に座る先生に気付いたのはイズナだった。しかし、イズナの声は最初こそ小声なりに喜びに満ちたものだったが、徐々に流水漂う海のように冷たくなっていった。

1階席の一番前、つまり舞台に一番近いところの席に討論会参加の来賓が集められており、その中に先生がいた。先生は腰を下ろし、ただ舞台の上で騒ぐ抗議団体を見つめていた。

そしてその右隣に座っている月雪ミヤコが、先生の右肩に頭を預け、完全に先生にもたれかかっていた。しかも先生の背中に左腕を伸ばし、これでもかという程に密着していた。

「……は？」

今日一番低い声が、イズナの口から漏れ出した。

シヤールレ部員になるために⑦

「……やっぱりS R Tは廃止して正解だったようね。連邦生徒会も偶には良い判断をするじゃない」

先生に密着するミヤコを見つけたユウカの第一声がこれである。恐ろしい程に冷徹な声で、ユウカは静かにミヤコの後頭部を見つめていた。

「スナイパーを連れてくるべきだったね。今からでもミユさんと呼ぶ？ 潜入任務をして拳句にあの光景をスコープ越しに見せつけられたら、ミユさんだってノータイムでミヤコさんの頭を撃つと思うよ」

平坦な声でそう言ったのはハレだ。目を細め、タブレットを苛立たし気に指先で弾いた。光を排除した冷たい瞳でシヤールレの仲間を見つめている。

ここにいる5人の装備では、この場で銃を構えたところでミヤコだけを狙うのは困難である。

「同じ学校同士の者の絆など、恋の前では儂いですからねえ……まあ、それを止めるためにあれこれしてたら、スモークグレネード投げるのに失敗する確率がちよつと減りましたけど……」

諦めたように呟くキリノも、苦笑はしているが目から光は失われている。シャーレでも古参の彼女は、これまで多くの光景をシャーレで目撃してきたが故の、しみじみとした言葉であった。

なお、キリノはスモークグレネードの信管を外している最中に落としてしまい、慌ててスモークグレネードを蹴り飛ばすということをよくやらかしている。

「え、何あれ見ててすごいムカつくんだけど。ねえ、この座席剥がしてあの子にぶつけていい？」

「聖園さん、やめてください！」

ミカは完全な真顔でミヤコが先生へ伸ばしている腕を睨みつけている。ミカが何気なく上げた右腕から、ゴキゴキゴキと乙女の細腕からとは思えない物騒な音が鳴るのを聞いたキリノが悲鳴を上げつつ止める。

そしてもう一人、イズナは歯をむき出しにしてただひたすらにミヤコの後頭部を見下ろしながら、愛銃を力強く握っている。彼女の奥歯からはガリゴリと、これまたすごい音が鳴っていた。

「ちよつと前から思っていたけど、R A B B I T小隊ももう完全に先生墮ちしているわよね……。おかしいわよね、あの公園占拠事件が始まってからそんなに月日も経っていないのに……。所詮、S R Tも先生の前では無力、か」

「自称精強のR A B B I T小隊がこんな調子じゃあ、ワカモさんを捕まえたとかいうあの連邦生徒会長の懐ふところがたな刀だとか何とかいわれているFOX小隊も、先生に堕ちないか怪しいものだよ。気が付いたら先生堕ちしてシャーレに来てそう」

「そうね、私の計算ではかなりの確率で堕ち得るわね。先生つて少数精鋭のチームとか部活の子一人に好かれ始めると、気が付いたら仲間の全員から好かれているんだもの。誰かが堕ちればあとは時間の問題よね」

「そ、そんなことはないのでは……？」

何故かS R T特殊学園で最も有名な最優秀チームであるFOX小隊にまで話が飛んだ。星の無い夜空のような瞳でミヤコをじっと見つめているユウカと、その横で光の無い瞳をチラリとユウカに向けつつぼそぼそ言うハレの言葉を聞き、キリノが何故か会ったこともないFOX小隊を庇う。そもそも3人ともFOX小隊に会ったことはないし、顔すらも知らないのだが。勿論肯定する根拠も否定する根拠もないため両陣営共に持ち札は同じはずであるが、ユウカとハレのタッグにキリノが対抗できるはずもなかった。

なお、現時点では先生もFOX小隊の面々と正式には会ったことがない。しかしシャーレの部員には、「先生がキヴォトスの有名人と知り合いにならないわけがない」という謎の確信があった。

「いいえ、間違いないわ。FOXって言うくらいだから、どうせ狐でしょ? 『私、狐なんだからお稲荷さんが好きなんです』とか言いながら、先生に手作り稲荷寿司でも食べさせようとしてくるに違いないわ」

「容易に想像できるね」

「いやいやいや、そんな馬鹿な……狐は油揚げが好物だなんて、大昔に狐の巣穴に鼠の油揚げを供えていた百鬼夜行自治区から広がったただの俗説ですよ……」

ユウカとハレとキリノが小声で話し合っていると、唇を尖らせてミヤコを睨んでいたミカが会話に割り込んだ。

「……あれ、でも、別に先生が会った生徒全員が、先生を好きになるとは限らないんじゃないの?」

私が言うのもなんだけど。その言葉を飲み込んで、ミカは頭に浮かんだ疑問を口にした。流石にそれを堂々と言うのは恥ずかしかった。

そんなミカの声にピクリと肩を動かしたユウカが、グルンという擬音が似合う具合に高速で首を曲げてミカを見つめた。限界まで見開かれたほろ暗い瞳がミカを捉え、固定される。ユウカの赤い虹彩が、ほんのりと光を帯びたようにミカには見えた。

「……ミカさん、私がこれまで、何度『流石にこの人は先生を好きにならないだろう』と思っただけ、何度その計算を外したか、知りたい? ノアの助けを借りるまでもなく、全部

思い出せるわよ」

「あ、ごめんなさい」

ミカは即座に謝罪した。真の強者は、プライドを捨てるべき時を見誤らないのである。

「……つて、こんなことしている場合じゃないわね。ミヤコさんの行動は後で吊るし上げるとして……どうしたものかしらね……。思ったより先生の周りに人が多いわ」

ユウカは舞台の方へ視線を戻し、小さく舌を打った。

大ホールには幾つか防犯カメラが設置されていたが、殆どが出入り口近辺に向いて設置されていたため、どの出入り口にバリケードが築かれていたかは一目でわかかったものの、肝心の中の様子はいま一つわからなかった。その穴を埋める為のミヤコからの状況報告メールのだが、その内実は可能な限り短文に纏められた文章に加えて、隠し撮りしたのであろう写真を添付したものだ。メールは短文にしては必要な情報が詰め込まれており、実際に現在進行形で役に立っているのであるが、それでもそのメールだけで全てを把握できるわけではない。

先生の周りには多数の来賓がいた。どうやら抗議団体は討論会の主催をしている新交通システムによる経済的効果の研究を行っている学術団体からの出席者と、システム建設を推進している民間団体からの出席者を主なターゲットにしているらしく、其方へ

の攻撃に熱中していた。

そして先生や建設予定地近辺の公共施設のリーダー、企業関係者などの来賓たちは、一か所に纏められて抗議団体の「勇姿」を無理矢理特等席で見せつけられているようだった。

ちなみに地元住民や新交通システムに興味を持つ生徒たちなどで構成された一般参加者たちは、抗議団体を刺激しないように舞台から離れたところで空気と同化しようとして試みているようである。

生徒たちは普通に武装しているが、自分たちを閉じ込めているだけで脅してくるわけでも暴行をしてくるわけでもない抗議団体へ向けて、一方的に発砲する度胸はないようだった。おまけにここには、流れ弾が一発でも当たれば死んでしまうかもしれない先生がいるのだ。気楽に撃てるわけもない。

「あー」

キリノが声を上げた。

抗議団体の中心部にいた拡声器を持った者が大声を上げて身を乗り出したのに合わせ、ミヤコが体を震わせながら先生の膝の上に覆いかぶさり、背中を丸めた。流石は潜入任務もこなすSRTの生徒らしい、堂々とした演技である。あれでは怒鳴り声に恐怖した臆病な生徒にしか見えないだろう。

そのままミヤコは先生の膝の上で小さく震え、両手を先生の膝の下へ動かした。そして両手をもぞもぞと動かしている。

「あ、メールだ」

ハレのもとにミヤコからの定期報告メールが届いた。どうやら事あるごとに先生に抱き着いて、その隙にばれないようにメールを送っていたらしい。

「キッチンとやれる仕事はやっていると、余計に腹立たしいですね」

イズナが低い声で実に率直な感想を漏らした。周りの4人もそれぞれ首肯する。メールが送信された後も普通に膝の上で丸くなっているのがさらに5人の怒りを増長させていた。

もはや5人とも舞台から発見されることを恐れることなく身を乗り出して、ミヤコのガタガタ震えている背中を睨みつけている。

「……抗議団体のメンバーのうち、一部が合流、事務室からカメラ映像が見えないと報告
……?」

今更かあ、随分と遅いね。やっぱりみんな危機感がないというか、もう騒げれば良いやという感じなのかもね」

ハレがメールの内容を読み上げつつ、怒気を含ませた瞳を抗議団体のリーダーらしき男へと向けた。まるで、「お前らのせいでミヤコがこんなことする口実を見つけてし

まったじやあないか」とでも言いたげな視線である。

「しかし、本当にどうしようかしら……」

ユウカが小さく唸った。

本来ならば、堂々と一階席の出入り口から入り、シャーレと名乗ったうえで先生を助けに来たことを告げ、妨害しようとして来る者だけを近接戦闘で叩きのめして、先生を連れてさつさとここから出るつもりだった。こちらは普通に銃を装備しているのだし、シャーレだと名乗れば邪魔をしてくる者などごく僅かだろう。シャーレを敵に回した集団や組織がどんな末路を迎えたかなど、キヴォトスでは常識レベルになりつつあるほどに有名な話だ。精々馬鹿な抗議団体の中でもとりわけ馬鹿な者数人程度が突っかかってくる程度であろう。

ミヤコを合わせてシャーレの部員が6人もいれば、邪魔しようとし立ち塞がってくるだけの数人程度の素人を瞬時に行動不能にさせることなど、銃を使わずとも造作もない。

他の来賓や一般参加者を完全に無視した一方的な脱出は相応に先生の評判を下げることになる可能性もあるが、そんなことはユウカたちは気にしていなかった。

先生さえここから脱出できればヴァルキューレの突入も容易になるし、先生の耐久値が一般のキヴォトス市民以下だというのは良く知られた話だ。誰だって先生が巻き込まれて大怪我するところは見たくないだろう。

それにシャーレの先生は地元住民からも評価が高い。雑用から地域の治安維持まで、幅広く協力してくれるシャーレの先生は、近隣住民からしてみても心強い味方である。そんな先生が喪われるリスクは低い方が良く、ましてや目の前で大怪我されるのはゴメンだ、と多くの人たちが納得してくれる可能性の方が高い、とユウカたちは考えていた。

しかし、流石にこうも民間人が近くにいると、近接戦闘も困難だ。抗議団体の者たちがシャーレのメンバーや先生に襲い掛かれば、民間人たちも好き勝手に動き始めるだろう。シャーレの6人全員が先生の盾となれば先生だけは護れるだろうが、先生を脱出させるまでにどれだけの民間人が「事故」で抗議団体から怪我をさせられるかわかったものではない。

ユウカたちにとってはもしそうなったとしても、先生さえ護れていればベストな結果だ。しかし、かといって露骨に他の一般市民を巻き込むのは宜しくないし、シャーレがそんな戦術を平然と実行するのだと思われるのも後々大きな問題となりかねない。

「うーん……」

ユウカの思案顔に視線を向け、ミカも取り敢えず考えてみた。視線をあちらこちらに動かし、ふと、顎に指を当てて考えているキリノが視界に入った。

「あつ、そうだ」

ミカはポンと両手を叩いた。

これならいけるかもしれない。周囲の民間人も、抗議団体も、誰も動かずに先生（とミヤコ）だけが動き、市民ホールから外に出ていくことが出来る。

ミカは今度は強めに両手を叩いて他4人の視線を自分に向けさせると、ニツコリと笑顔を浮かべてこう言った。

「ねえ、ちよつと思いい付いた作戦があるんだけど……」



ミカの案を聞いた後、ユウカも、イズナも、ハレも、キリノも、全員口を開けてミカを凝視した。誰もが沈黙した後、真つ先に声を上げたのはイズナだった。任務モードであることも放り捨てるくらいに声を荒げ、目は限界まで見開かれている。

「そ、それは……ミカ殿、それは、あまりにも……あまりにも！ 貴女がー！」

イズナが素早くミカに詰め寄ると、ミカの顔を凝視しながら悲痛そうに身体を震わせた。

「そうよ、ミカさん」

ユウカがミカに近付き、頭を下げた。

「ごめんなさい！ その、やっぱりさっきの事務室でのあの態度は……本当に、その、ごめんなさい。さっきのことを気にして、こんな案を……？ そんな、こんなのはあんま

りよ……!」

「まったく同意だよ」

今度はハレが眉をしかめ、怒気をぶつけるかのようにミカを睨んだ。

「ねえ、少し落ち着こうか……ミカさん。もつといい作戦がいくらでもあるはずだよ。そんなのは、作戦ですらないよ」

最後に、完全に血の気の引いた顔をミカに向けたキリノが言った。

「ほ、本官も、これは……流石に……し、してはいけないことだと思います! か、考え直してください、聖園さん……」

ミカに近付き、次々とミカを諫めようとする4人。そんな4人に向かって、ミカは笑顔を浮かべた。

「大丈夫。全然平気っ☆。だってほら、私……」

こてんと小首を傾げ、ミカはピースサインを作った。

「態度は気を付けてても、やっぱりね……先生とか大切なお友達とか、先生が大切なシャールレのメンバーの人たちとか……それ以外の人たちからの評価なんて、あんまり気にしていないんだよっ☆」

◆ そんなミカの言葉を聞いた4人はもう一度、口を大きく開けてミカを見つめた。

それから数分後。

大きな音を立てて、1階席の扉で唯一バリケードが設置されていない東側の扉が開かれた。そして数秒後、大ホールにざわめきが起こった。

「ん、な、誰だ？」

先程までメガホンでがなり立てていた抗議団体の一人が呆然と呟いた。そこには、彼が全く想定していなかった人物が立っていた。

その質問への回答は、天井に向けられたサブマシンガンの銃声だった。

鋭い音が数回。同時に悲鳴が上がる。

この場にいる全員の動きが止まり、視線が同じ場所へと注がれた。

「……………」に、シャーレの先生が居ることはわかっているんだよ」

全員の視線を一身に受けた人物はサブマシンガンの銃口を舞台に向けると、氷のような冷たさを帯びた声で言った。

「先生を、出して。出さなければ……………ここにいる全員、無事では済まさないから」

「……………あ」

一般参加者の中に混じっていた一人の生徒が呟いた。道理でどこかで見た顔だな、と思ったわけだ。少し前まで、ニュースで散々見た顔。そうだ、同じ顔だ。トリニティでクーデター未遂をやらかしたという少女。

「み、聖園……ミカ……」

震えた情けない声は、沈黙が支配した大ホール全体に波のように広がっていった。

シャーレ部員になるために⑧

大ホールの静寂は長くは続かなかった。「聖園ミカ」の名前に反応した抗議団体、来賓、一般参加者たちがそれぞれ声を上げたからだ。一人一人の声は小声であったが、総勢1000人を超える人数のうちの多くの者が一斉に呟き始めれば、なかなかの音量となる。

ミカは周囲を睥睨する振りをしつつ、可能な限り聞こえてくる声を拾っていった。

「み、聖園ミカって……あの？ トリニティでクーデターをやるうとした凶悪犯罪者……！」

「アリスだとか何だか知らないが、危険なテロリスト集団と手を組んでいたという女か！」

「確か、シャーレの先生が事件を解決したんだよね……？ じゃあ、これは先生への復讐!？」

「どうしよう、ヴァルキューレは何をしているのよ！ いつになっても助けにこないし……。シャ、シャーレに電話かけた方が……いや、トリニティの正義実現委員会……だっけ？」

「あれ？ トリニティは風紀委員会で、ゲヘナが正義実現委員会じゃなかったっけ？」
「どつちでもいいわよ！ それに先生がここにいていうのに、シャーレに電話して
どうするの！ ああもう、何で聖園ミカがこんなところに……」

「連邦矯正局送りになったんじゃないのか？」

「ふむ？ 私はシャーレの地下奥深くにある懲罰房に収監されたと聞きましたぞ？」

「……え、何か辺境のアビドスに追放になったって、どっかのブログに書いてあったよう
な……？」

怒涛のように耳を通して頭に流れ込んでいる老若男女の声が自分の脳に染み渡るの
を感じ、ミカは不敵な笑みを浮かべた。

やっぱり、思った通りだ。

まだ1時間程度しか経っていないので、事務室でユウカに言われたことはよく覚えて
いる。

「私のような一部の者を除き、貴女の稚拙なクーデター未遂なんて、トリニティの生徒以
外からすればどうでも良いもの」

「自分たちが暮らしている自治区の外のことなんて、殆どの生徒は聞いた瞬間に忘れる
し、言った瞬間にどうでもよいものに変質する」

ユウカの言葉は正しかった。聞いた瞬間はチクチク嫌味を言われているなど思った

ものだが、あれは嫌味でもなんでもなく、ミカに関する情報を集めて分析して考え、その過程において頭をよぎったことの一つを口から漏らしたのだろう。

先程ハレに（1分で）調べてもらったが、抗議団体も含めてこの場にはトリニティ自治区と関係がある者は誰一人としていない。抗議団体も参加者も来賓も基本的にはD・U・の住民ばかりだ。

参加者のうち、生徒たちはD・U・の住民ではないが、幸いなことに全員同じ学校の生徒だった。一応討論会に参加しているためか全員が学校の制服を着ており、すぐに調べることが出来た。彼女たちの学校はトリニティでもゲヘナでもミレニアムでもない、ミカは初めて名前を聞いた小さな田舎の学校だ。地元の交通インフラの老朽化と旧式化に悩まされており、彼女たちは地元で新しい公共交通機関を設立することを目的とした部活の生徒であるようだ。D・U・からもトリニティからも、高速鉄道で行くには片道半日以上かかるような遠くにある学校だ。

そんな学校の生徒たちにとって、トリニティの内紛などどうでも良いニュースでしかない。流石にシャーレのことはある程度知っているようだが、トリニティやゲヘナのこととは「なんか大きい学校」くらいしか知らないのだろう。

当然、ミカのこと、だ。顔や名前とある程度の罪状くらいは知っているだろうが、それだけだ。ミカにどのような処分が下され、どうなったのかはあまり知られていな

い。

勿論、ミカがクーデターを起こした背景やミカに下されたトリニティによる最終処分
のことは、ある程度ニュースにもなっているはずだ。しかし、
あまり興味を引いていないのだ。大半のニュースがそうであろうが、事件が解決した瞬
間よりも事件の内容そのものの方が派手で、色々記憶されやすい。この場にいる者
は、聖園ミカの末路になど興味がないのだ。

ミカの起こした事件が発覚し聴聞会が開かれ、ミカの処遇が決定するまで相応の時間
が経過した。日数でいえば然程長くはないのだが、それでも時間は確かに経過したので
ある。その間、毎日多くの人が多くのことを経験し、体験するだろう。より多くの新し
い情報が目から脳に飛び込み、耳から流れ込み、そして自分の口から放たれる。

生徒だったら毎日の授業の内容、部活中に起こった出来事、新しいニュース。社会人
でも仕事のことや趣味のこと。続々と入ってくる新しい情報の雪崩によつて、ミカに関
する情報は埋もれ、忘れ去られていく。

ミカの事件が生徒たちの会話の道具ツールとしての役目を果たせたのも、事件から数日間と
いう少ない期間だけだろう。ミカの処分が下されたというニュースも、生徒たちが無言
の時間を少しでも埋めたいがために1回使われた後は、もう捨てられる。誰にとつても
どうでも良い情報もとなる。

事件の中心地となったトリニティを除いて。

だからこの大ホールにいる者たちの大部分は、ミカがこの場にいることを異常事態だと認識する。ミカに下された処分の内容をよく知っていれば、この占拠された建物にいるのは兎も角、D・Uをただ歩いていても何の問題もないことくらいはすぐに分かるはずだ。

よつて自分たちを助けに来た救援者ではなく、先生を探してここまで来た良からぬことを企む悪者だと考えてしまう。そう、今のミカは悪役なのだ。

だから誰も動かない。ミカの背後の空いた扉に、我先にと殺到したりしない。ちなみにドアの前で大ホールの中の者を出さないよう見張っていた数人は、ここに入ってきた際にミカが轢いた。まさに轢いたとしか言えない光景であった。不幸にも轢かれた数人は、10メートルほど吹き飛ばされて頭から床に突き刺さっている。

「……うるさいなあ」

小声だがとてつもなくドスの利いた声を放ちながら、ミカは顎を少し上げて周囲を見渡した。

「私は先生を探しているんだよ？ 先生以外には用はないの。外野はつべこべ言っていないで黙ってて。……ほら、先生！ 早く出てきなよ！」

少し声を張る。何人かが小さく悲鳴を漏らした。見せつけるように、ミカは愛銃を構

えて右や左に銃口を向けていく。

ちなみにこの討論会は数カ月前から開催が決定していたちゃんとしたイベントなので、主催者側が開催前にポスターを幾つも用意しており、D・U・のコンビニや公立図書館などに貼られていた。さらに市民ホールの公式ホームページにも開催についての情報が掲載されていた。ポスターもホームページも来賓として先生が参加することはしつかり書かれていたので、ここに乗り込んできたミカが先生が市民ホールに知っていることも、誰も疑問に思わない。

「……」

「……あ」

そんなミカの前に、スツと出てきた男がいた。長身というわけではないが細身のお陰でスラリと見える体躯に、鴉の羽のように黒い髪と目。オーダーメイドの連邦生徒会の制服にデザインが似ているスーツを着込み、左胸にはシャーレのマークが彫られたバッジを付けている。

先生だ。

横には先生に縋りつつ、怯えたような表情で周囲をキョロキョロ見渡している月雪ミヤコもいる。ふと、ミカとミヤコの視線が交差した。ミヤコは表情こそ怯えているが、瞳に感情は浮かんでおらず、目の前の存在のことを何とも思っていないような目でミカ

を見つめている。常に半歩先生の先を歩いており、愛銃もしっかりと握られている。何時でも先生を庇うことが出来るポジションだった。

やっていることは護衛として正しいのだろうが、見ているミカとしては頭の血管がバーストしそうな光景である。いや、もしかしたら実際に何本か血管が飛んだのかもわからない。何かそんな感じの音が聞こえた気がする。

「……へえ、久しぶりだね……先生。会いたかったよ」

「ミカ……」

男性としてはやや高めな声が、ミカの耳を震わせた。先生は眉を下げ、少し驚いたような表情でミカを見ている。

ミカは目を細め、口を三日月形に曲げた。まるで復讐に取り憑かれた悪鬼のような表情を見て、数人の生徒が絶叫に近い悲鳴を上げた。大変だ、このままでは先生が危ない。流れ弾の心配なんてしている場合ではない。1階席の奥の方にいた生徒たちが慌てて銃を構えた。しかし、ミカは気にもせずに先生を見つめるのみだ。

「お、おいお前！ 何を勝手に歩いていて！」

「失礼します！」

抗議団体のメンバーが肩を怒らして先生のもとへ近付いた。それと同時に、開かれたままの扉からもう1人乱入者が現れる。抗議団体の者はキャパオーバーを迎えたのか、

肩を不自然に上げた間拔けな姿勢のまま扉の方を凝視して立ち止まった。

「ヴァルクューレの中務キリノです！ 危険人物である聖園ミカがシャーレの先生を狙っているという情報を聞きました！ すでに聖園ミカが館内に侵入し……むっ、見つけましたよ、聖園ミカさん！」

鋭い声で流れるように説明したのは、大ホールに飛び込んできたキリノである。ヴァルクューレ警察学校生活安全局の制服を着た新参者を見て、ホールの者たちはますます顔を青ざめさせる。ヴァルクューレの登場により、ますます聖園ミカが危険人物にしか見えなくなったのだ。ここに来てやったことと言えば、数人を撥ね飛ばしたとはいえただ普通にドアを開けて入ってきて、威嚇射撃をしただけなのだが。

「動かないでください、聖園ミカさん！」

キリノは素早くシヨルダーホルスターから回リホルバ転式拳銃「第3号ヴァルクューレ制式拳銃」を取り出した。その動きは教科書に載せたいほど綺麗なものだ。ちなみにキリノは2丁の拳銃を装備しているが、1丁は予備なので抜いたのは片方のみである。

ドロウ（拳銃をホルスターから抜くこと）は、拳銃の暴発事故が最も発生しやすいタイミングと言われている。地味だが非常に重要な動作なので、腕のいい拳銃使いはドロウの所作も完璧にこなすというのが常識だ。

一方、キリノはドロウやりホルスター（拳銃をホルスターに戻すこと）は完璧なのだ

が、拳銃の命中精度はからつきしという（しかも狙っていないものには命中する）ある意味珍しいスキルの持ち主である。しかし、キリノの銃の腕前を知らない者を怖気付させる効果はある。勿論ミカには効かないが、周囲の者たちには「コ、コイツ……出来るっ！」と確信させる謎のオーラがあった。

お陰で、この場にいる全ての者がキリノに視線を集中させた。

ちなみにキリノは、愛銃のメンテナンスやグリップ方法（握り方）まで完璧である。ここまで出来ていて射撃する際の姿勢も間違っていないのに、あそこまで当たらないのはもはや魔法、とキリノの腕前を評価したのは、キリノと同じ拳銃使いである便利屋68の鬼方カヨコである。

さらにキリノは外しまくるからか任務の度に連射しまくる傾向にあり、その為かアモマネージメント能力（携帯弾数や愛銃の装填状態を正確に把握する能力のこと）や装填速度まで優秀だった。本当に、命中精度だけが駄目なのである。

キリノは腰を若干前に傾け、両足を広げ、左足を少し前に出した後、両膝を軽く曲げた。それを見た複数の生徒が息を飲む。

キリノの姿勢は「モディファイド・ウィバースタンス」と呼ばれる拳銃を撃つ時の実戦的な射撃姿勢の一つだ。ボディアーマーの効果を最大限に発揮できる上（敵の真正面に胴体を向けているため）、いざとなったら他のアクションに繋げやすいなどの利点満

載の極めて実用性の高いスタンスとして、ヴァルクューレで積極的に採用している撃ち方である。

つまり、撃つ気満々の体勢だ。

「聖園ミカさん、貴女はシャーレの先生を誘拐しようとした容疑があります！ 銃を下ろし、こちらに来てください！ それと、シャーレの先生もこちらに！ シャーレの先生には他の者が対応しますので、あ、あつ……」

緊張を含んだ声でキリノは呼びかけつつ、一度姿勢を崩して無線機に呼び掛けようとしたところ、ポケットから何かが落ちた。金属音が響く。

「し、失礼しましたー！」

落ちたのは手錠だった。キリノは片手で拳銃を構えてミカに向けたまま、右膝を床に付けて落ちた手錠を拾った。

周囲の者たちは一瞬怪訝そうな表情を浮かべるが、すぐに緊迫した表情に戻る。あの聖園ミカを一人で相手しようとしているのだ、緊張して多少はミスすることもあるだろう。誰も口には出さなかったが、そんな言葉が出てきそうな空気だった。

「……ふうん、ヴァルクューレ……か。私は先生とお話したいんだけど？」

でもまあ、確かに外野がこんなにいる状態じゃ楽しくお喋りもできないかな？ しつかたないなあ、じゃあ、そっちに行つてあげる☆」

そう言って、ミカは先生に視線を向けた後にキリノの方へと向かっていった。

◆ 「……案外、何とかなるものね」

ミカとキリノが入っていった扉のすぐ側に待機していたユウカ、イズナ、ハレの3人は、ミカが入ったと同時にどきどきに紛れて侵入させた浮遊ドローンからの映像を見ながら話し合っていた。

「結局、止めきれずにミカさんが飛び出した時はどうなるかと思っただけ……これでもう一安心ね。キリノの合図が出たことだし」

額から垂れそうになる冷や汗をポケットから取り出したハンカチで拭いながら、ユウカは軽く息を吐いた。

「本当、ある意味今日一番の僥倖よ。さっきはミカさんが演技とはいえ、こんな犯罪そのものな行為をするということに反発したけれど……その部分を抜きにしても、こんな作戦が上手くいくとは思えなかったわ」

ユウカの言葉に、2人は同時に頷いた。全くもっておかしな作戦である。立てこもり事件の犯人により凶悪な事件を起こした犯人をぶつけ、その犯人から逃がすという名目で先生（とミヤコ）だけを逃がすなど。

「イズナも本当にこうなるとは思えませんでしたね……。ミカ殿が主殿がここにいると

知って乱入してきたのは、まあ……メチャクチャとはいえ納得できなくもないですが、まさかミカ殿を追ってきたキリノ殿が来たのに、抗議団体を鎮圧するためのヴァルキューレ警備局が全く来ないことに、誰も何も言わないなんて。すぐにおかしいと感じきそうなものだと思うのですが……」

「疲労と混乱のせい、だね。大ホールにいた人たちは、討論会に参加していた最中に突然やってきた抗議団体によって閉じ込められ、メガホンや肉声で彼らの抗議や罵倒を何十分も聞かされ続けていたんだよ。体も心も疲れて当然。みんな一般市民だからね。」

もちろん抗議団体の人たちも、ずっと怒鳴って騒ぎ続けているんだから同じことが言えるよね。彼らだって疲労は溜まっていく。

それに加えてあの聖園ミカの乱入。予想できるわけもない異常な事態。もう頭が思考を放棄しちやつているんじゃないかな？」

呆れたかのように言うイズナを横目で見ながら、ハレはオートコントロール状態にしたドローンからの映像をタブレットに映しつつ、別の小型タブレットで先生の周囲だけをひたすらに観察していた。ハレが投入したドローンは2体である。

有事の時にはハレのドローンもハレ自身も、先生の盾になることが出来る。ミカに言ったその言葉には嘘はないのだ。

「ちよつと考えればおかしなことだらけなのにね。そもそも今のミカさんは一般生徒に

過ぎないからヴァルキューレがミカさんを特別マークする理由はないし、ミカさんを追っているのが生活安全局の生徒というのもおかしいし、キリノだけに説得されてミカさんが大ホールから出ていくのだからっておかしいわよ。

第三者から見るとこうも変な点しかないことなのに、当事者の立場になると気付かないものなのね。……まあ、気付いていないのはミカさんも、か」

顎に手を当てながら皮肉気に言ったユウカに向かい、ハレは楽しそうに微笑んだ。

「まったく、ミカさんはまだまだ先生を分かっていないよね。あんな酷い劇を見せられた先生が座視しているなんてこと、あり得ないっていうのにな」

「それはそうよ。だって彼女、初出勤日前なもの」

ハレの笑顔につられるように、ユウカは柔らかい笑みを浮かべた。



ミカは先生に背を向け、スタスタと歩き出した。扉の付近には真面目な顔を作ったキリノが片手に拳銃、もう片手に手錠を持って待機している。既にキリノは拳銃の銃口を床に向けていた。

よし、これで先生（とミヤコ）は私を理由にここから連れ出せる。この後すぐに市民ホール前に待機しているヴァルキューレを呼べば、キリノの発言も嘘にはならない。私が先生を狙っているとわかった以上、ヴァルキューレが先生をここから連れ出して護る

うとするのは当然のことだから。

そんなことを考え、ミカはふう、と誰にもばれないように息を吐いた。明日には、また今日のことをがニュースになるのかもしれない。ナギちゃんたちはこれを聞いてどう思うだろう？ また犯罪者が犯罪を起こしたって、トリニティの人たちはそう思うのかな。

ミカは床を見つめた。どうしよう、やつぱり先生に謝らないとダメかな。こんなことしかできないから。そうだ、折角だし大ホールから出ていく直前に、天下の大犯罪者に会ったみんなの顔でも拝んでおくかな。

ミカはくるりと振り返った。その目の前に、先生がいた。

「……へっ？」

思考がフリーズした。全く気が付かなかった。思わず目を見開き、先生の瞳を見返した。吸い込まれそうな黒い瞳が、ミカを映していた。

先生はポンとミカの両肩に手を当てた。さらに動揺するミカを尻目に、先生は息を大きく吸い込んだ。

そして、叫んだ。

「ミカ！ 助けに来てくれたんだね!! ありがとう!!」

大ホール全体に響く様な大声だった。

瞬間、出入り口からユウカたち3人が飛び込んできた。3人は先生の背中の中のすぐ後ろにいたミヤコ、そしていつの間にか先生の隣にいたキリノと頷き合うと、呆然とするミカを残してぐるりと先生を護るかのように取り囲み、周囲に銃を向けた。

「え、ちよ、なにが……」

大ホールにいる誰かの眩きが響くとともに、先生に背中を向けて舞台側に銃口を向けていたユウカが一步前に出た。そして周囲を見渡し、大声で笑った。

「ははっ。ひっかかったわね！」

不自然なほどに口角を上げて笑うユウカを見て、ミカはますます目を見開いた。

シヤールレ部員になるために⑨

「私たちは連邦捜査部『シヤールレ』よ！ シヤールレ顧問の先生の救助に来たわ！ よくも、よくも先生を何十分もこんなところに閉じ込めてくれたわね……！」

ユウカはそう言うと、顔を少し俯かせた。ドロドロと蠢く黒い炎が宿ったような目で、上目遣いで舞台にいる抗議団体の者たちを睨みつけている。岩をも溶かせそうなほどの憎悪の視線だ。

実際は大分演技が入っているのだが、嘘は言っていない。先生を無意味に監禁した挙句、先生に全く関係のない罵倒を何十分と聞かせたのだ。ユウカは激怒していた。優先すべきものがなければ、抗議団体リーダーの顔面に拳でも叩き込んでやりたいほどに。

「ひ、ひい、い！」

抗議団体の一人が泡を吹いて失神した。他の者たちも指一本動かすことが出来ない。

無様を晒す者たちに対して鼻を鳴らすと、ユウカはゆっくりと歩き出す。歩きながら周囲をぐるりと見渡した後、何故か愛銃を腰のサブマシンガン用ホルスターに仕舞った。そしてスタスタとミカの隣にやって来ると、ミカの右手をむんずと掴んだ。

「……………え？」

思わずミカはユウカの顔を見た。すでにユウカの顔には憎悪はなく、真つすぐな瞳でミカを見つめていた。

「はい、ユウカさん」

「ありがとう、キリノ」

そんなユウカに、キリノが腰に装備していた拡声器を渡す。お礼を言つてそれを受け取るユウカ。彼女の左手はミカの手を掴んだままだ。

「……え？　え？」

まだ思考がうまく回らずに呆然としているミカを気にする素振りも見せず、ユウカはミカを引つ張り先生たちよりも数歩前に出た。そして、来賓や一般参加者たちがいる座席の方に向き直る。そして、ユウカは拡声器越しに高らかに言った。

「皆さん、安心してください！　これはシャーレの作戦です……ミカさんはシャーレの一員です！　先生を最優先で連れ出すため、ミカさんにはちよつと演技をしてもらつていただけです！」

ミカの後ろでは、ハレが首から下げていたシャーレのIDカードを掲げ、全員に見せつけるように爪先立ちで腕を精一杯伸ばしている。プルプルと震えるハレの隣では、ハレの指先と爪先を交互に見ながら、イズナが眉を下げて冷や汗を流している。

何とも締まらない背景の中で行われた、キヴオトスで初の聖園ミカがシャーレに入部

したことに ついての公式発表だった。

「私たちはこれから先生を市民ホールから避難させます！　そうすればすぐにヴァルキューレ警備局が来ます！　もう大丈夫です、市民ホールの封鎖は解除されます！」

一瞬、沈黙が下りる。そして、すぐに歓声が沸いた。

「シャーレだ！　シャーレが来てくれた！」

「もうこんなところにいるのも終わりだ！　助かったんだ！」

「よ、よかった……聖園さんを撃たなくて……」

「先生を助けに来てたんだね。すごかったなあ、迫真の演技だったよ……」

「ヴァルキューレの生徒もシャーレのメンバーだったのか……そういえば、シャーレ公式放送であの顔、見たことあったなあ……」

「あの聖園ミカがシャーレに入っていたんだ！」

「そうか、そうだよな……七囚人以降、連邦矯正局から脱走した者なんていないはずだ。ここにいるなら連邦矯正局送りになったわけがないよな。誰だよ、そんなデマを流したのは……」

「いやはや、然り、然り」

「なんだ、シャーレに入ったってことは……やっぱり、大した罪になったわけじゃなかったんだ」

「知らなかったけど、そうみたいだね。まあ、そうだろうとは思ってたんだ……。聖園ミカが重罪なら、アリウスなんて全員一生連邦矯正局暮らしだよ」

あちらこちらから沸き起こる歓声と交わされる会話。

それが耳から脳に入って来るのを感じつつ、ミカはまるで自分が世界から取り残されたような感覚を味わっていた。

まるで自分がシャーレに入ることが、普通に受け入れられているように感じたから。

言葉を発することが出来ない。事情を先に聞いていたシャーレの部員と違い、初めてそれを聞いた一般の人たちが、自分がシャーレに入ることにも何も反対や疑問の声を声を上げない。

別世界の赤の他人のことを話されているような感覚だった。

ミカには一つ、思い至らなかったことがある。目の前の来賓や一般参加者たちにとって、聖園ミカの情報などどうでも良いというのは間違っていない。ならば必然、ミカに正式な処分が下されたのならば、それは当然のこととして受け止める。ミカがシャーレに入部したとシャーレの部員から正式に聞かされた以上は、そうなのかと頷く。それで終わりだ。疑念を抱くはずがないし、ましてや反対することなどはあり得ない。どうでも良いのだから。

「……………な……………い、一体なんの真似だ!」

突如だみ声が割り込んでいた。抗議団体のリーダーと思われる男だ。

「なんの真似つて……なんてことはないよ。私の生徒が、私を……そしてここに居る人達を、助けに来てくれたんだ」

歓声が響くと同時にぺちぺちぺちと間の抜けた音の拍手をしていた先生が、にこやかにそう言った。

聞かされた時に心が落ち着く優しい声に、ミカは先生の方を振り向いた。先生は笑顔で、ミカを見つめ返してくれた。

「さあ、撤収よ！ あ、これ、ありがとうね。一先ず返すわ。あとでちゃんと洗うから」
「いえいえ、そんな。一応はヴァルキューレからの支給品ですので、本官の方で管理しませんと。貸したことは内緒でお願いしますね、ユウカさん」

「え、もう帰るのですか？ 目的があつてここに留まつていたのでは？」
やり切った表情でキリノにメガホンを渡すユウカに問いかけるため、ミヤコが銃を構えたまま振り返った。

「ええ、目的は果たしたわ。さあ、撤収、撤収！」

ユウカが言い終わると同時に、ハレが先生の手を引いて走り出す。キリノ、イズナ、ミヤコもそれに続く。

「さあ、ミカさんも」

「え、あ、うん……」

まだ頭が混乱中のミカは、未だにユウカに手を握られたままだということにも気が付かなかった。スツとユウカが手を離す。ユウカの手は、そのままミカの肩に置かれた。

「今日は多分ないと思うけど、初出勤日は覚悟しておいた方が良くないわよ？ 先生のお説教は、私も、誰にだって止められないから」

「う、え、っ」

変な声が出た。乙女にあるまじき奇声である。反射的にミカは床に顔を向けた。

少し頬を染めるミカを見て、ユウカは憐れむような苦笑するような微妙な顔を浮かべた。

大ホールから出て廊下を走っている最中、まだ頬の色が戻らず少し俯いていたミカが顔を上げると、視界の隅でヴァルキューレ警備局と公安局の合同チームとすれ違っている様が見えた。

事件発生から解決まで53分。キヴオトスにおいてはごくありふれた、ニュースキャスターが1分かけて伝える程度の事件に過ぎない市民ホールの立てこもり事件は、こうして解決したのである。

◆ 市民ホールに来た時と違い、ミカたちは歩いてシャーレオフィスに戻ってきていた。

その後、ミカはユウカよりまだ受け取っていない合計6冊のファイルを受け取り、それを無理矢理鞆に詰め込んだ。帰りに買い物でもしようかと、財布とスマホと愛銃しか持ってきていないのに、そこそこのサイズの鞆を持ってきておいて正解だった。

その後、ミカは鞆を肩から下げて、ユウカに連れられてシャーレのカフェへと移動した。そこで休憩をしていたハレ、イズナ、キリノ、ミヤコとも挨拶をする。シャーレで留守番をしていた合歓垣フブキたち数人の部員は、どうやら先生が入っていった執務室や他の事務室いるようだった。

「今日はありがとう、ミカさん。まだ初出勤日前だというのに、働かせてしまったわね」
「あはは、気にしなくていいよ。私が付いていくって決めたんだし」

ユウカに謝られ、ミカは軽く両手を振って苦笑した。そして、そういえばまだ初出勤日前だった、などと考える。

事実上の、シャーレでの初陣があれだったのか。そんなことに今更ながら思い至り、ミカはため息をつきそうになった。

自分は本当に、シャーレで上手くやっていけるのだろうか。オフィスに帰って来てから考えてみると、焦った挙句に独断専行をして、最後に先生とシャーレのメンバーにフォロワーされただけな気がする。

焦っていた。そう、焦っていたのだ。先生を1分1秒でもあんなところには居させた

くなかったのだ。メガホンを通じて暴力的な音量となった罵声や怒声。例え自分に向けられたものでなくても、聞いただけで心に汚泥が溜まるような声というものがある。

ミカはそれを知っていた。四方八方から罵声を受ける自分を他人事のように捉えていたとしても、両足の先を冷たい川の水の中に入れたかのように、少しづつ少しづつ、心の端から全てまで冷えていく。まるでもう一人の自分になって、徐々に凍えていく自分を見下ろしているような奇妙な感覚。

もう慣れた自分と違い、先生にとつては辛いことだろう。底抜けに優しく多くを生徒から慕われている先生にとつては、縁のない感覚だろうから。

「ごめんね、その……変に、先走っちゃった」

「……本当ですよ」

ミカに近付いてきたイズナが、低い声で言った。その瞳に敵意はない。やりきれないような、呆れきったような感情が浮かぶ目をミカに向け、イズナは息を吐きながら、ミカに大きめのマグカップが乗ったトレイを差し出した。

「イズナは、その……ミカ殿のやったことには怒っています。主殿が許したとしても、イズナは許しません。主殿は受けなくてもいい痛みを受けたんです。そしてすつごく苦しみました。」

先生はイズナに、イズナたちに縋りついてくださらない……。イズナたちに盾になつ

てくれて言うてくださらないんです。だから主殿が苦しまないようにするには……いえ、もうやめましょうか」

そこで口を止め、イズナは喉の奥で言葉を転がしているようにもごもごと口を動かすと、先程と比べいくらか柔らかい声で言った。

「……ええと、つまりですね……ミカ殿のしたことを、イズナは許しません。ですが、それとこれとは話は別です。本当に違いますよ、ミカ殿。罪を犯した人にだって、悪役を押し付けることはできませんよ。それは、主殿が許しませんから」

「……うん」

ミカはコクリと頷き、トレイの上のマグカップを両手で受け取った。湯気が昇っているマグカップの中には、白い液体が入っている。マグカップはほんのり温かかった。

一口飲む。ホットミルクだった。一度に大量に口に入れられない程熱く、しかも砂糖がたっぷり入っているようで、かなり甘めだ。コーヒーも紅茶も嫌いじゃないけれど、やっぱりひたすらに甘いものを飲みたくなる時もある。今のミカには、イズナが渡してくれたホットミルクがありがたかった。

少しずつ飲んでみると、先程ミカと挨拶したばかりのミヤコが微笑みながら得意気に語った。

「おや、気に入りましたか？ このホットミルク。これはカフェのドリンクサーバーで

飲むことが出来る先生が厳選したミルクなんですよ」

そう言うと、ミヤコは実用性一点張りのキャンプ用品のようなカップに入れられたホットミルクを美味しそうに啜った。

「先生は仕事中はコーヒーをよく飲みますが、休憩中とお風呂に入った後は、必ず砂糖がふんだんに入ったホットミルクを飲むんですよ」

「……へえ」

ちびちびと飲みながらミヤコに視線を向けるミカに対し、ミヤコはふふん、と自慢するように言った。そんなミヤコに、周囲のユウカとイズナとハレとキリノが絶対零度の視線を向けている。

「……そんな基礎知識でドヤ顔をかまさないでくださいよ。先生知識がにわかだと思われそうですよ。」

ミヤコの背中を湖の底にたまったへドロのような目で睨みつけながら、キリノがボソリと言った。

先生知識って何？　と思いながら、ミカはホットミルクをちびちび飲んだ。

「本当にそうだよ。そのくらい、先生ファイルにも載っている情報だからね。基礎知識程度で新人さんに得意そうに語るのちよつとカッコ悪いよ」

ハレが不満げに首を傾げながら言った。ちなみに彼女はここにいる全員がホットミ

ルクを飲む中、1人だけエナジードリンクを飲んでいた。任務中に断っていたツケが来たらしい。末期中毒である。

ファイルに書いてあるんだ。そう思いながら、ミカはホットミルクをちびちび飲んだ。自分が肩から下げている鞆に入っているファイルから、何かパッションとか情念じみたオーラが立ち上っている気がする。

「……あ、そうだったわ。ミヤコさん」

「なんでしようか、ユウカさん」

「貴女、今週はクラブ出禁ね。先生とベタバタくつついていた罰よ」

「へっ?」

「いやクラブって何!?!」

ミカはホットミルクを飲むのを止めた。流石に聞き流せなかった。というか、そういうばそんな謎の存在を市民ホールへ行く前に聞いていた。

見る見るうちに顔が青ざめていくミヤコを完全に無視し、ミカはユウカを恐る恐る見つけた。

「ああそうね、説明しなきゃね。ミカさん、クラブというのは、つまりシャーレ部員に与えられた特権の一つよ」

「と、特権……?」

にこやかな笑みを浮かべてミカに向き合ったユウカは、テーブルにホットミルクの入った青いカップを置いて話し始めた。「特権」という単語にもう嫌な予感しかしなくなったミカは、口に出したことを若干後悔しつつ翼を震わせた。

「そう。『シャーレ互助会』が先生のための組織だとすれば、『シャーレ・クラブ』は生徒たちのための組織。つまり皆で先生のことを語り合ったり、先生を通じて互いが仲良くなったりするための場よ。ちなみに互助会と違って、クラブは完全にシャーレとは無関係の組織ね。あくまで先生という象徴アイコンを誤魔化すために『シャーレ』の文字を入れていただけ。もう一つ言っておくと、クラブの会長は私よ」

「えええええ……」

ミカは思わずげんなりした。ホットミルクで甘ったるくなった口の中が一気に苦くなった。何でそんな組織の存在を嬉しそうに語っているのだろうか、目の前のセミナー生徒は。

「そしてクラブは基本的にグループチャットで活動をしているのですが……週に1度メンバーが集まって、交流会をします。ちょっとしたパーティみたいなものですね。ちなみに開催費用はメンバーの寄付金です」

ユウカの横で時々相槌を打ちながら聞いていたイズナが補足説明をした。

「聖園さんも実際に働いてみると分かると思うのですが、同じシャーレのメンバーでも、

どういうわけか異常なほどに接点ができない……と言いますか、偶にしか合わないメンバーというのが出てくるんですよ。特にメンバーが50人を超えたあたりから、初対面以降は全く顔も見かけていないシャーレのメンバーというのが誰も彼も出てきましてね……。これはそれを防ぐためのものでもあるんです」

苦笑しながらそう言ったのはキリノだ。そんなキリノに向けて頷いた後、ユウカはミカに向けて言った。

「そうよ。シャーレはいざとなれば、先生のためにどんな相手とも戦う組織。土壇場で同じチームになった相手が、挨拶以降会ったことも話したことありません、なんて笑うしかない状況は避けなくてはいけないわ。皆仲良く、とまでは言わないけど……せめて先生の指揮を無視して罵倒合戦やじゃれ合いをせず、最低限相手の戦い方くらいは知っている方が良いに越したことはないわ」

一理ある。不覚にもミカはそう思ってしまった。実際ミカは今日だけで、よく知らない相手との共同作戦というのがいかにやりにくいかわかった。今回はここにいるメンバーたちにフォローしてもらったが、毎度毎度フォローしてもらうのは流石に恥ずかしい。

「……まあ、最初は『先生のことを語り合おう』っていうのも口実に過ぎなかったんだけどね……。でも、何せ皆学校も趣味も何もかもがバラバラで初対面の人たちばかりだっ

たから、結局先生のことしか共通の話題が出来なかったんだよね。

流行だとかそういうのも話題としてはパンチが弱くてね……私が言うのもなんだけど、世間の流行に興味の欠片も持っていない人も多いし」

「ああ……」

皮肉気に小声で言うハレの言葉を聞いて、ミカは思わず納得した。そして臍気ながら理解した。

シャーレのメンバーはシャーレに所属しつつも、「先生のため」、「先生のことだから」など、先生が関わらなければ団結し合う必要性が低いのだ。つまりは先生がいる「シャーレ」だからこそ、彼女たちはシャーレで先生と共に働いている。シャーレはそのための箱であり、言わば口実なのだ。

「そ、そんな……今週は、シロコさんやセリカさんが地道に調べた先生の好きな動物ランキングが発表されるのに……。ウサギが、ウサギが勝つ瞬間を見届けなくてはいけないかったのに……」

隣でぶつぶつ言っているミヤコを無視しながら、ミカは軽く小首を傾けた。

「……結局、そういうのが今日の時に見たような連携に繋がっているんだね」

無理矢理良い方向に結論を持っていくことにした。

惚けたようにそう言いながら、ミカはちようど良い温度になってきたホットミルクを

噉つた。

シャーレ部員になるために⑩

ホットミルクを飲み終わった後、ミカはユウカより「今日はもう好きにしてい」と言われた。時間を確認すると、ちよつとだけまだ時間がある。

シャーレの部員はオフィスのあるD・U・と自分たちの学校のある自治区を行き来しているため、シャーレの権限でオフィスへの宿泊や門限を過ぎるの移動が認められているが、ミカの場合はトリニティより強く「自重」を求められているため、いきなり帰りが遅くなるのは避けたいところだった。

その他、ミカはシャーレ部員としての戦闘は除く他の戦闘や自衛行動さえも、強く自重を求められている。ミカ自身、ナギサが自分のために方々へ頭を下げていたことを知っているため、そのナギサの面目をさらに潰さないためにも、自重することに否やはない。

なので聴聞会以降、ミカは自衛戦闘を含むあらゆる戦闘を可能な限り避け、誰かに喧嘩を売ることもしなかった。ある程度の嫌がらせにも、反論や反撃をせずにひたすら耐えてきた。

戦闘を避けることは意外と簡単だ。街中で絡まれても逃げの一手でどうとでもなる。

逃げ切れなければ、その辺に落ちている廃材とかを四散するまで握り潰した後に「次は貴女の首がこうなるよ☆」とか言えば良い。廃材がなければ、絡んできた不良のヘルメットとかナイフとかを握り潰すなりへし折るなりすれば良いだけなので、これまたお手軽である。わざわざ自分でそれ用の道具を調達する必要もないのが良い。

今のところ、この言葉を笑顔で言い放った後に相手が逃げださなかったことはない。

ミカはアリウスでの戦闘の後に自分の身体が鈍っているのを自覚し、今はトリニティのトレーニングジムに通っている。さらに戦闘に出くわす度に逃げまくっているのも、最近ではフィジカルばかりが順調に鍛えられている気がする。この前は不良の軍団から逃げるために、買ったばかりの日用品を持ちながら片手で教会の側面を登る羽目になったし、登り切った後に隣の講堂の屋根までジャンプする羽目になった。流星にちよつと疲れた。

一応花の乙女なだけどなあ、とため息をついたら、目の前の百合園セイアに直球で「筋肉が異常発達したムササビだね君は」と言われて割とカチンときた。流星のミカもムササビのような滑空は無理である。そう反論したら盛大に呆れられた。壁登りどころか、マットの上で前転しただけで心肺停止を起こしそうなセイアにここまで言われるのは全くもって納得できない、とミカは唸ったものである。

確かにセイアの難解且つ迂遠な言い回しにはいつもムカついていたが、ナイフを突き

刺してくるような真つすぐすぎる罵倒をされるのはそれはそれでムカつく。むしろ最近のセイヤはミカに文句を言われたのを根に持っているのか、ミカ相手にだけ直球の言い回しをするようになった気がする。それは嬉しいが、悪口に限ってはストレートでいうのは良くないのではないか。セイヤの友達として由々しき事態だ。ならばこっちはどうしてくれるようか。

そんなことを考えながら、ミカは行き先を決めることなく、ぼけーつと床を見下ろしながらフラフラとシャーレのオフィスを彷徨っていた。

そういえば、オフィスを帰って来てからまだ先生と話をしていなかった。そう思い、ふと視線を床から上げると同時に、ドアが閉じる音がした。

「……………あ」

「あっ」

ドアから出てきたのは、ヴァルクキューレの制服を着た少女、ヴァルクキューレ警察学校1年生の合歓垣フブキだった。フブキはドアを閉めてミカと目が合った後、露骨に表情を消した。穏やかだった表情が瞬時に変わる。

フブキはスリング（小銃を肩にかけるために付けている紐のこと）によって銃口が下に向くように吊り下げられていた愛銃に両手を伸ばした。グリップ（握る部分）とハンドガード（銃口側についている銃を手で支える部分）を力強く握る。

握っているだけだ。銃口はミカに向けられていない。しかしグリップとハンドガードを握っているということは、直ちに銃口を標的に向けることが出来るということだ。街を歩けば銃撃戦に遭遇するのが普通のキヴォトスでは、わざわざ敵を前にマガジン（弾倉）を装備する者などいない。当たり前のように、フブキの愛銃「第14号ヴァルキューレ制式ライフル」にもマガジンはすでに装備され、ローディング（装填）も済んでいる。

「聖園ミカ」

フブキはぼそりと呟き、少し俯いた。細められた赤黒い濁った瞳だけがミカの顔を射抜いている。

ミカは咄嗟に右手を自分の首の前まで上げると、手の平を床に向けたまま軽く手を振った。キヴォトスではメジャーなジェスチャーの一つで、「ここでの銃撃戦はやめた方が良いよ」という意味のハンドサインだ。戦闘から逃げるのが普通になった今、すっかりやり慣れているサインと化している。

ちなみにもう片方の手で銃を持ちながらこのサインをすると、「おっと、悪いことは言わねえから私に手を出すのはやめときな」という意味になる。警告の皮を被った挑発である。以前間違えてそれをやってしまったせいで、何時もより長く追い掛け回されたこともあるミカは、このサインを密かに寮で練習していた。

「……ども。別に戦^やらないよ。普通、こうするでしょ」

そんなミカの堂に入ったハンドサインを見つつも、いかにも虫の居所が悪そうに低い声でそう言いながら、フブキはミカの顔を見つめたまま、自分が出てきたドアを指差した。

「入るの？ ここに」

そう言われ、ミカは戸惑った。そんなつもりは全くなかった。ただ当てもなく歩いていただけだ。

ふと、ドアに貼られたプレートが視界に入る。「執務室」と書かれていた。

ああ、そういうことか。ミカは合点がいった。執務室、つまり先生が仕事をしている部屋だ。先生の所に行こうとしていると思われたのだ。

「……別に、いいでしょ」

正直言つて先生に会えるのならば会いたいのだが、先生に会おうとしてここに来たわけではない。ただの偶然である。一瞬だけ返答に困ったミカは、つつけんどんな感じで言い返した。

「まあ、そうだね。貴女はもうシャーレの部員だものね。私たちの仲間だからね」

フブキは即座に言葉を返した。

「んじや、どうぞお好きに。まあ、ここで先生に手を出すなんてやめた方が良いでしょう。」

皆見ているからね」

そう言つて、フブキは両手を愛銃から離れた。そして両の手の平をミカに見せつけるようにふりふりと振りながら歩き、ミカに近付いてくる。

「さて、じゃあ私は仕事にでも行くのかな？」

すれ違いざま、ポツリと呟いたフブキは、目だけは全く笑っていない笑顔でミカを見上げていた。



フブキの気配がなくなるまで廊下で立ち続けていたミカは、迷った後に結局執務室に入ることにした。ドアをノックし、返事が返ってきた後、ミカはゆつくりとドアを開けた。

執務室は第1事務室と比べて数倍は広い部屋だったが、第1事務室よりも遥かに家具が多いため、コンパクトにまとまっていた第1事務室に比べてごちゃごちゃしている印象があった。本棚だけでなく、雑貨類が置かれた棚もある。来客時に使っているであろうソファやテーブルも第1事務室にあるものより大きく、重厚感があった。

しかし奥には大きな窓があり、解放感は確保できていた。インテリアもそれなりに整っており、見苦しいという程でもない。

そして奥側にある大きなデスクには先生が座っており、モニターを睨みつけていた。

市民ホールで会った時と違って上着を脱ぎ、ネクタイも緩めに締めている。

「やあ、ミカ。さつきぶりだね」

先生はミカに微笑みかけると立ち上がり、壁際に設置されているコーヒーマーカーに近付いていった。第1事務室に置いてあったものと同じものだった。

「あ、先生ごめんなさい、コーヒーマーカーはもういいかなーって」

今日だけでもう結構な量を飲んでいる。

「うん？ そっか。じゃあ麦茶でいいかな」

「うん」

先生はくるりと向きを変え、コーヒーマーカーから少し離れたところに置いてある小さい冷蔵庫を開けた。そこから麦茶を出した後に棚からコップを2つ取り出し、コップに注いだ後にテーブルの上に置いた。

「どうぞ」

「ありがとう☆」

ミカはふかふかのソファに腰を下ろし、先生に柔らかな笑みを向けた。

「今日は事前の説明に来ていたんだだね。こういうことはいつもユウカたちが進んでやってきているんだ。彼女の説明はわかりやすかっただろう？ 仕事のこととか、全部丁寧に説明してくれる良い子なんだよ。説明に使っているファイルも全部自分たち

で作ってくれているらしくてね」

「うん……」

まさか一番気合の入っていた説明が先生個人に関することとは言えないので、ミカは取り敢えず頷いておいた。これで自分も共犯者かあ、なんて他愛もないことが頭に浮かぶ。

「先生、さつきここを出て行った生徒に遭ったよ」

「うん」

「……あんまり、歓迎されていないよね、私」

「……」

先生は一口麦茶を飲んだ。

「ミカ、君がシャーレに入部申請を出してくれた時、私はとても嬉しかったんだ。聴聞会も終わって、色々と忙しいだろうに、シャーレに入りたいって言ってくれた。あんな危険な目に合わせてしまったのに、シャーレのために手を挙げてくれたんだ」

「そんなんっ」

ミカは少し大きな声を上げてしまった。確かに傍から見れば、アリウスのバシリカでの戦闘はミカが聖女バルバラとユステイナ聖徒会の足止め、言い換えれば壁代わりにされている間に先生とアリウススクワッドがベアトリーチェと対峙したという事態と

なった。

しかし、元々はミカ自身が足止め役を買って出たのだし、それまでには先生に迷惑しかかかってこなかった。しかも最後には無尽蔵に出てくるかのような軍勢相手に、とうとうダウンしかけた寸前のところを逆に先生に救われたのだ。贖罪代わりにもなっていない。ましてや、先生には何の咎もない。あつてたまるものか。

「そんなこと、ないよ……先生は、全然悪くないよ。シャーレの皆の私への態度も、当然だと思ってる。

こんなこというとね、同情を誘っているように聞こえるかもしれないけど……。シャーレの人たちには、罵倒されても、殴られても、銃で撃たれても仕方がないことをしたなって思っているんだ」

ミカは俯きながら小声で言った。

ああ、さつき廊下で会った子がこれを見たらどう思うのだろう。被害者面をしながら先生に助けを求めているように見えるんだろなあ。

こんなことをしている自分が本当に馬鹿に見えてくる。もし目の前でこんな子がいたら、以前の自分ならどうしていたのだろう？

頭の中がぐしゃぐしゃになり、何も考えられなくなってしまう。

まるでカウンセラーに相談に来た子供みたいだ。先生の手助けをしたくてシャーレ

に入ったのに。あまりの無様さにいつそ笑えてくる。

そんなミカを見つめ、先生は小声で、しかし力強い声で言った。

「それは違う。ミカにはすでに罰が下されているんだ。トリニティ生徒の私刑なんかじゃない、トリニティ総合学園の上層部が合同で開いた正式な聴聞会によって、正式に処罰が下されたんだ。

もう、誰にも覆すことはできない。一般生徒が結果が気に入らないと声を上げたところで、もう1度やり直すなんて常人の発想じゃない。もう聴聞会が開かれることはない。

反省するな、というわけじゃない。むしろミカはちゃんと反省しなきゃいけないと思う。でも、ミカは反省した。自分がやったことを理解し、その影響で何が起きたのかを理解した。ナギサにもセイアにもアズサにも、そして私にも頭を下げた。そして全員が許した。

これ以上、誰にもミカを罵倒して傷付けていい権利はない。例えば、シャーレの部員であつても」

「……ありがとう、先生」

正しい言葉だ、とミカは思う。そして同時に、当然の言葉だとも思った。多分、そんなことはシャーレの部員たちは皆わかっている。だからこそ、少し睨まれたり警戒され

たりした程度で済んでいるのだ、と何となく想像がついた。

そしてミカは心底ほっとした。「嫌なら辞めても良いんだよ?」と言われなくてよかった、と思った。自分がここにいる理由を、親切心であったとしても先生に否定されなくなかった。客観的に見ればそれは否定ではないのだろうが、今のミカにとっては否定だった。

やっぱり先生は、生徒ミカにかけてほしい言葉がどんなものかをすっかり理解している。安心のあまり、ミカは大きく息を吐いた。

先生に自分の心境を吐露したかった。でも、同情してほしかったわけでも共感してほしかったわけでもない。ましてや、シャーレを辞める口実が欲しかったわけでもないのだ。ミカは現在進行形で自分は面倒くさい女だな、と思いながら、コップの中身を一気に呷った。

そんなミカを見ながら、先生は背もたれに背中を預けた。

「……アリオスの生徒たちがエデン条約調印式の際に攻撃を行ったのは、ベアトリーチェという悪い大人がそうするように命令したからだ。そう、命令だ。あれがやっていたのは学校の教育なんて易しいものじゃない。犯罪者が子供たちを兵士、いや、駒へ育て上げるための洗脳と調教だ。……私は、アリオスにも救いの道があるべきだと思ってるよ」

「……うん」

アリウススクワッドの錠前サオリの心の叫びを聞いたことがあるミカは、思わず頷いた。

「前に、それをユウカに話してみたことがあるんだ。そしたら、ユウカは首を傾げながらこう言ったよ。——『だから、なんですか？』……と」

悪い大人に洗脳されていた。命令に従わなければ殺されていた。それ以外に生きていく術も、守りたい人たちを守る手段も知らなかった。

だから、先生を銃で撃つて……殺してよいとも言うのですか？

心の底から、不思議そうにユウカはそう言ったよ、と先生は天井を見つめながら呟いた。

ユウカの言いたいことは、ミカにはよくわかった。バシリカではサオリたちを許すとは言ったが、セイアを殺そうとしたサオリたちの行いを「仕方がなかった」の一言でまとめられるかどうかは話が別だ。

「自分がされたことで、相手を許すのはそんなに難しくもないのかもしれない。でも、自分が大切に思っている人にされたことで、相手を許すのは……とてつもなく、難しいのかもしれないね」

先生はそう言って立ち上がると、腕時計を見つめた。

「……もういい時間だね。ミカ、まだ初出勤日前だけど、本当にご苦労様。明々しあさつて後日、またよろしくね」

そう言った先生を見上げながら、ミカは思った。

自分の行いを許すのは、果たしてそれ以上なのかそれ以下なのか、どちらなのだろうか、と。

「うん、ありがとう、先生」

そんな頭に浮かんだ疑問を奥底に仕舞いながら、ミカは笑顔を浮かべた。

これからも先生と話す機会はたくさんある。その時に色々と考えていこう、とミカは思った。先生と話して大分気が楽になった。自分の心の中を大して整理もできずに言うだけで心が軽くなる。相手が先生だからという効果もあるのかもしれないけど、自分が面倒くさく見えて、結構単純なのかもしれない。

ミカは先生に向かって頭を下げると、トリニティへ帰るために執務室を後にした。

ある日のシャーレ①

「……ミカさん、帰ったようね」

シャーレオフィスの多目的ルーム。そこは主にシャーレメンバーが集まって、ちよつとした会議や交流会を行うための部屋となっている。流石に部員数70人以上を超えた今となつては部員全員が集まる事が出来るスペースは、オフィス内では会議室と教室、あとは併設のカフェくらいであるが、それでも多目的ルームは十数人は一度に集まることが出来るシャーレオフィスの中でも広めの部屋だ。

そんな多目的ルームの一角に置いてあるソファに座り、ユウカは壁に掛けられたモニターに視線を向けた。

オフィス内の何か所かに設置されているこれらのモニターはオフィスの入退室管理システムと連動しており、現在誰がオフィスにいて誰が帰ったかの情報がリアルタイムで表示されている。

「そうみたいだね。……良かったよ、事前説明が無事に終わつて」

「ええ、全くです」

一息ついたユウカにそう言ったのは、反対側のソファに腰かけているハレとキリノ

だ。現在、イズナとミヤコは第2、第3事務室で業務に勤しんでおり、この多目的ルームに居るのは3人だけである。

ミカが帰宅し、ユウカたちが市民ホールに出かけている間にオフィスで業務を行っていたフブキたちもすでに全員が帰宅した。カフェももう閉店しており、コンビニはいつもの如くシャーレ部員以外の客は来ない。

現在、オフィスにいるのは先生と当番の生徒たちだけだ。

ちなみにシャーレのカフェに店員はおらず、ドリンクサーバーと軽食調理用のロボットが置かれているだけなので、やろうと思えば24時間営業も可能ではある。但し仮にも「先生」が営業しているカフェが生徒が24時間使用できる、と言うのも体面的にあまりよくないので、夜間営業はしていない。先生が営業しているので営業時間はかなり融通が利くが、基本的には19時には閉店している。

また、シャーレ併設のコンビニもキヴォトス有数のコンビニチエーンである「エンジェル24」の店舗ではあるためにコンビニを名乗りつつも実際は売店に近く、20時には閉店するし、定休日もある。元々シャーレ併設のエンジェル24は連邦生徒会が先生へのちよつとしたサポート的な意味で強引に用意したもので、採算なんて全く考慮されていないからこそ謎営業である。

なお、シャーレオフィスから程近い場所にある別店舗のエンジェル24は普通に24

時間営業のコンビニである。

「しっかりと根回ししておいて良かったわ。あそこまで準備しておいて私があんな態度をとってしまったのは本当に申し訳が立たないけれど……」

「私が言うのも変だけど……気にしないで。ユウカはよくやったよ。事件直後のユウカを見てたら、誰も何も言えないよ。よくミカさんの首を絞めなかったって褒めたいくらい」

ユウカを慰めるように言いつつ、ハレは苦々しい表情をしてポケットからエナジードリンクを取り出し、缶を開けた。

「シミュレーション通りに動けないのが人間というものだよ。プログラムじゃないんだからさ」

「本当ですよ。いくら先生が事前に本官たち全員一人一人にミカさんや、あとアリウスのことを説明したとしても……抑えられない思いというものは出てきます。

むしろ先生がミカさんを庇ったことで、悪化した思いもあるでしょうね。その辺りはもう、本官たち生徒がフォローしていくか、時間が解決するか、本人の中で決着をつけるしかないのです……」

キリノは小さく息を吐き、ユウカとハレを労わる様に優しい気な口調で話し出した。

「実際、フブキさんは想定外のタイミングで会ってしまったせいで、思わず銃に手が伸び

てしまったって言うてたね。あの人もあ見えて真面目だよ。自分がユウカの苦労を台無しにしたこと、ユウカは知らないのにちゃんと丁寧に頭を下げててさ」

「フブキ……」

場の雰囲気明るくするようにハレが補足すると、キリノは両手で顔を覆った。出会っただけで銃のグリップを握る。あの「聖園ミカ」に遭遇した者としてある意味仕方がないと言えるのかもしれないが、ヴァルキューレの生徒としては落第と評するしかない対応だ。警察学校の生徒が先に銃に手を伸ばしてどうする。

キリノもヴァルキューレ生活安全局の生徒として失敗が多い方ではあるが、それでも同僚の失敗に普通に呆れて嘆くこともあるのだ。

「あの人、あ見えて先生のこと、かなり心配しているものね。カフェにサボりに来るのにハマっているなんて建前作らずに、素直に先生の側にいないと心配だつて言えば良いのに」

ユウカにも生暖かい目を向けられ、キリノはますます背中を丸めた。同僚の隠せていないデレデレ話なんて聞きたくない。気を取り直すようにキリノは背筋を伸ばした。

「フ、フブキも最近は落ち着いてきましたから……。その、先生被弾の情報が回ってきた時は、本官がフブキに情報を伝えたのですが……。ドーナッツを放り投げて、伝えに来た

本官の首を絞めてきましたからね……1週間くらい痣が残りましたよ」

「ユウカよりはマシだよ」

「ちよつと！ ハレ！」

ユウカが慌ててハレに抗議する。そんなユウカを見て、キリノは思い出すかのように目を細めた。

「あの時と比べれば、皆さん大分落ち着いてきましたね。アリウスの時なんて、もう最悪でした」

そこまで言うと、キリノは嫌なことを思い出した、とばかりに眉間の皺をほぐすようなポーズをとり、もう片方の手で乱暴に頭を搔いた。

「先生が銃撃を受けたという情報が漸くシャーレの部員全員に共有された頃だったよね。あの時点でもう事件も解決していたから、私たちももう何もできなくて……。だから、逃亡したアリウスの連中に怒りの矛先が向いて……。もう思い出したくもない」

ハレがげんなりするように言った。

事件が解決した後、一部の生徒が主張し始めたのだ。このままでよいのか、こちらは先生を喪うところだったんだ、と。アリウス分校の生徒はその多くがトリニティに降伏したが、それでも少なくとも人数の生徒が逃走を続けている。主犯格であるアリウス

クワツドも含めて、である。

ミカと違い、逃亡中の彼女たちは社会的な処罰さえ受けていない。惨めに逃げて隠れながら生活していることなど、逮捕から逃れるために逃亡したテロリストとして当然としか言えない。そんなものは報いでもなんでもない。

「シャーレが率先して動くべきじゃないか。皆で力を合わせて奴らをどこまでも探し、追い込み、追い詰め、そして——」

誰が最初に言い出したのか、今では思い出すこともできない。しかし、それでもその考えは伝染病のようにシャーレの部員に広まった。或いは、誰もが思っていたことなのかもしれない。

先生は生徒たちに芽生え始めてきた恐ろしい空想にすぐに気付いた。

検討する価値もない案だ。シャーレが大々的にそうすることは不可能ではないが、やるべきではない。もし本当に逃走中のアリウススクワツドを捕らえる作戦を行うとして、実際に捕らえるのは、ヴァルクキューレや各自自治区の治安維持機関に任せるべきだ。シャーレが動くにしても、それら治安維持からの協力要請があつた場合に限るべきだ。シャーレ単体で動き回り、しかも捕縛後にシャーレだけでアリウススクワツドへ報復するなど論外である。唯の私的制裁であり、私刑であり、犯罪だ。

そう考えた先生はシャーレ部員全員に話を聞き、時間をかけて説得した。

ユウカもハレもキリノも、その考えには同意できる。納得もできる。理解もする。したくはないが、そうしようと思う。だから、先生の説得に反発も否定もしなかった。質問は幾つかしたが。

「……本当に、ね」

ユウカは静かに息を吐き、鈍い光を放つ瞳で床を見つめた。

それは甘美な誘惑だった。もし、この一向に消える気配のない胸の黒い炎を消す機会が得られたら。先生を傷付けた連中に、思いつく限りの報復をする機会が得られたら。想像したこともないと言えば嘘になる。

愛銃が壊れるまで銃弾を浴びせることが出来たなら。両腕が動かせなくなるまで殴り続けることが出来たなら。声が枯れるまで罵倒し続けることが出来たなら。そうすれば、この感情は消えてなくなるのだろうか。できることなら生涯無縁でいたかった、この醜悪な感情は。

しかし、そんなことはできない。できないから、この身を焼き尽くさんばかりの炎は燃え盛るだけだ。

先生の説得だけでは駄目なのだ。本来ならば先生による生徒への真摯な説得など、生徒たちには効果抜群極まりないはずだが、愛しい被害者自身に加害者への報復を止められるからこそ、余計に拗れて捻くれて絡まることもある。多分、先生はそれを知ってい

たからこそ苦し気な表情を浮かべていたのだろう。

この心臓と頭に詰まった憎悪を消すという先生の願いを叶えてあげるのは難しい。ユウカにも無理だった。先生とは立場も考え方も違うのだから。ユウカにアリウス分校の事情を慮る義務などない。必要もないとすら言いたいくらいだった。

だから、せめてシャーレの部員たちが独断専行してアリウススクワッドへ報復をするという最悪の事態だけは避けねばならない。そんなことになれば、先生をより苦しませるだけだ。

そう考えたユウカや一部の部員たちは、先生を抜いて生徒たちだけでの話し合いの場を設けたのだ。連邦生徒会の施設を借りて、敢えてしつかりとした会議室で実施された。廃墟の中心でこんなことを話し合えば、必ず理性を投げ捨てる者が出てくる。

場所の選定、準備は念入りに行われた。電子ロック付きのガンラックに予め参加者全員の愛銃を預けさせ、8桁のパスワードはユウカを始め企画者たちがそれぞれ管理し、企画者たちも自分の管理する番号しか知らないという徹底ぶりだった。

愛銃も持たず、言葉だけの応酬。先生不在により、遠慮や乙女の体裁をシャーレオフィスに置いてきた者たちによる話し合い、というよりは隠していた本音の発露大会。話し合いという名目のそれは、結局4時間以上続いた。

最終的に、誰もがアリウスを許すことはできないまでも、狩りに行くことはしないと

いう結論に辿り着いた。否、その結論は最初から出ていたと言える。結局、誰もが先生の説得に依っていたのだ。ただ、胸の内をぶちまける機会を求めていただけで。

その過程でどんな言葉を誰が放ち、誰がそれに同意したのか。できれば覚えていたくない。

そう思いながら、ハレは背もたれに体を預けながら、天井に向けて息を吐いた。先生が疲れた時によくやる仕草だ。シャーレに長く所属している生徒は、先生の仕草を記憶して自分も無意識によくやる傾向があった。

「……まあ、あのお陰でシャーレの空気は……うん、マシになったよ。少なくとも、ここそこそ一部の部員がアリウスを追跡するのはやめた。先生の行動の追跡もね」

ハレは再びユウカに向き直り、エナジードリンクを一口飲んだ。

「漸くヴエリタスも、アリウスなんかを気にしないで済む。何でわざわざアリウスをシャーレ部員が襲わないように気を配らないといけないのやら」

「ごめんね、ハレ……いや、そのことについては、本当に……」

「や、やめてよユウカ。ユウカにしおらしく頭を下げられると……落ち着かない」

大きく頭を下げたユウカを見て、愚痴を吐くように低い声で呟いていたハレは、缶をテーブルに置いて慌てたように両手を振った。

「先生も、アリウスのことは気にかけているようだけど。それでも、今はこちらに集中し

てくれているから……大丈夫。先生にも、労わってもらっているよ」

ハレはそう言うのと、にっこりとユウカに微笑みかけた。

「ミカさんと今日会えてよかった。やつぱり、私はミカさんを恨んでいない。出会った瞬間に頭に血が上らないかと、正直冷や冷やしていたんだ。……んくっ」

エナジードリンク缶の中身を啣るように飲みながら、ハレはもう一度ソファの背もたれにもたれかかった。

「……つぶあ。……ふう、うん……再確認ができた。私の敵はアリウスと、先生が被弾する可能性、そのものだ。何とかしないとね……エンジンア部が作っている先生用のボディアーマーは、まだ時間がかかるみたいだし」

「やはり、そうですね。そもそもヴァルクキューレのもそうですが、キヴオトスのボディアーマーは、銃弾の痛みを無くすものですからね……」

キリノが腕を組んで唸った。キヴオトスにおいてボディアーマーとは、命を守るためではなく、被弾時の痛みで身体の動きが停止することを防ぐために着用するものだ。基本的に「これで痛みが減れば儲けもの」くらいの感覚で装備しているため、大量調達が可能で安価でもあることも重視される。しかも一般的なキヴオトス生徒基準で作られていることが多いため、先生が身に着けると普通に動きに支障が出るくらいに重い。

「そうね、そつちも何とかしなくちゃね。ほんとに、先は長いわね……」

小声で呟き、ユウカもハレと同じように天井に向けて息を吐いた。

シャーレ初出勤日

シャーレ初出勤日①

シャーレで事前説明を受けた日の夜、ファイルを読み進めていたら普通に寝不足になったミカは反省し、空いた時間に少しずつ読むことにした。結果、シャーレの初出勤日の朝には一通りは目を通すことが出来た。

寮の自室で着替え終わったミカは、勉強机の上に置かれたファイルの山に恨めし気な視線を送った。特に一番分厚い先生について書かれたファイルには、念入りにジト目の視線を送っておいた。

別に内容がつまらなかつたわけではないし、気に食わなかつたわけでもない。だが、大好きな人の趣味とかちよつとした嗜好とかは自分で実際に相手をよく見て発見して、心のノートに書き留めておくからこそ楽しいのだということ、ミカは知った。活字でまるで生き物の観察日記のように書かれると、実に複雑な気分になる。

先生に関する知識が増えるのは嬉しいのだが、なんかこう、違う気がする。読み終わってからこんな感想を抱くのもどうかと思わなくもないが、できれば別の方法で知りたかった。人生というのはままならないものである。

一通り山全体を一瞥した後、ミカはシャーレでの事務作業などのやり方が記載されたファイルを取り、鞆に放り込んだ。ちよつとした八つ当たりである。

「……はああ〜」

大きいため息をついて、ミカはスマホを手に取った。当然と言えば当然なのだが、ミカは普通にシャーレ専用のグループチャットに入ることが出来た。当然、互助会とクラブのチャットにもである。結構緊張して挨拶をしたら何事もなく多くの返事が返ってきた。

これはあれかな、皆、チャットでは普通でも実際に私と会ったら怒りが抑えきれない感じなのかな。そんなネガティブなことを考えてしまうのは、この前出くわした時に？き出しの敵意をぶつけられた合歓垣フブキも普通に挨拶を返してきたからだろうか。まるで業務連絡のような挨拶だった。

他の挨拶も、堅苦しいものが多いが普通に友達にやる感じの挨拶を返してきた人もいた。フレンドリーなのはそれはそれで「いや怖っ、顔見たこともないんですけど」とか思ってしまう自分は本当に天邪鬼あまのじやくなのかもしれない。そんなことを考えつつ、ミカはスマホを操作し続けた。

互助会のグループに入った後、ユウカから初出勤日のシフトについて送られてきた。基本的にシャーレの当番シフトは互助会のチャットに各々が出勤可能な日程を送り、そ

れをユウカなどの古参組が吟味したうえで其々の希望を取り入れてシフトを作成し、先生に提出して許可を得る、という形になっている。

一応は1日出勤か半日（午前のみ、午後のみ）を選べるという形式になってはいるが、実際は「どうせなら1日がつつり出たい」ということで半日出勤を選ぶ生徒はごく僅からしい。そんな半日出勤を選ぶ生徒も、「今忙しいからどうしても1日出勤は無理……でも、でもせめてちよつとでも先生のために……やむを得ない、ここは断腸の思いで半日……」という思考の結果として半日出勤を選ぶ生徒が大多数だという。

希望通りの日に当番に選ばれなくても、普通にシャーレに行く生徒も多いため、シフトで揉めることはあまりない、とミカはユウカから聞いていた。

事前に説明を受けた日から、ミカはちよくちよくユウカにモトトークを送って色々なことを聞いてみた。ユウカには事前に許可をもらっていた。ユウカ曰く、ファイルを見てもわからないことについて新人が説明役をした部員に色々と尋ねてくることはよくあることだという。そのためかユウカはミカが思っていたよりもあっさり、特に面倒くさがることもなく教えてくれた。

やっぱり彼女は、私なんかよりもずっと優しくして面倒見が良い人なのだろう。ユウカに感謝しながら、ミカはしっかりと事前準備を進めていた。

ここまで世話になった以上、気楽に先生の所へ遊びに行くかのような気概ではユウカ

に申し訳ないと感じたし、そう感じた程度に自分の心の底に真面目さが残っていたことに驚いた。

「私って、もつとちやらんぼらんな性格じゃなかったっけ？」

思わずそんな独り言が口から飛び出す。周囲をキョロキョロして、おかしくなつてくスクスと笑つた。

「……よし、行こう」

誰に向けているのかわからないガッツポーズをし、ミカは鞆を肩にかけ、愛銃も肩にかけた。窓を閉める時にチラリと天気を見る。天気予報によるとトリニティの空は少し雲がかかっていたが、降雨はなく雲量は4。つまり、晴れである。



季節は冬とはいえ、凍えるほど寒くもない。ミカは制服の上にPコートを着ていたが、やや暑いほどだった。その為暖房が利いた電車に揺られている間、ミカはコートを畳んで膝の上に乗せることとなつた。念のために革手袋も持ってきていたが、このままでは無駄な荷物になりそうである。

トリニティ最大の鉄道会社である「TGR（トリニティ・グレート・レールウェイ）」の持つ最新鋭の、荘厳なトリニティの街並みから姿を隠すような地味な濃緑色塗装の電車は、街中を歩くお嬢様方の機嫌を損ねるのを恐れているかのように、静かに走ってい

く。

歴史ある街並みに似合わない近代的な高速鉄道の車両は、しかし内装はトリニティらしく色々と凝っている。見慣れた豪華さではあるものの、見慣れたうえで過剰に感じるのは自分が我儘気質だからではないと思う。まるで高級車の後部座席のようなシートに寄りかかり、ミカはトリニティの街並みを眺めていた。

終点に到着し、電車から降りたミカはそのままエレベーターに乗り込み、地中深くへと降りていった。

D・Uの鉄道はその大半が地下鉄である。D・U唯一の鉄道会社「URPC（ウトナピシユティム・レールロード・パッセンジャー・コーポレーション）」の派手な紫色のラインが入った電車に乗り、ミカはスマホを見ながら地下鉄駅の自販機で買ったホットココアを堪能した。この電車も暖房が利いていたが、それでも冷たい飲み物を飲む気分にはならなかった。

地下鉄であるので当然のように車窓からの眺めは期待できない。その代わり、複数設置されているモニターからは字幕の付いたニュース映像が流れ続けている。電車に揺られながら眺めたところで頭に入ってくるとも思えないが、暇つぶしにはなるので十分だろう。

「……あ」

ココアを飲み終わると同時に、ミカは気付いた。鞆の中に筆記用具や電卓、仕事のやり方などが書いてあるファイルを入れてきていたが、ノートを入れ忘れていた。もしかしたら先生に言えばオフィスにあるものを貰えるかもしれないが、それはちよつとカッコ悪い。どうしようか……少し考えていたが、そういえば、シャーレオフィスのある建物にコンビニが併設されていたことを思い出した。

学園都市であるキヴオトスでは、コンビニでも文房具一式を取り扱っているのが普通だ。そこで買おう、と思い当たったミカは、駅に到着した電車から降りて早足でシャーレオフィスへと向かった。

シャーレ併設のエンジェル24はシャーレの正面玄関の隣にデンと出入り口を構えている。オフィスとコンビニは中で繋がっているのでオフィスロビーからもコンビニに入ることができるのだが、ミカは特に何も考えずにオフィスロビーを通らずにそのままエンジェル24の自動ドアをくぐった。

「いらつしやいませー……わあっ」

幼い少女の声が店内に響く。レジの方に目を向けると、レジカウンターに小柄な少女が立っていた。少女は目を見開き、口も少し開けてミカの全身を上から下まで見つめた。そして、小さく呟いた。

「あ、新しい人だ……。すつごく綺麗、お姫様みたい……」

「えっ」

「あ、あ、ごめんなさい!」

特徴的な店内BGMのお陰で少女の呟きを聞き取れなかったミカが小首を傾げながら少女を見つめると、少女は少し頬を染めて頭を下げた。

「ごめんなさい、その、ここのお店はいろんな学校の人たちが来て……それもすっごい綺麗な人たちばかりで。私、新しい人を見るたびに綺麗って言っちゃって。直さなきやなあつていつも思っているんですけど、ついやっちゃって……」

「あはは☆。いいよいいよ、気にしないでね」

ミカはパタパタと片手を振って、少女へ近付いていった。

「これからよくこのお店を利用すると思うから、よろしくね☆。聖園ミカだよ」

「あ、私ソラっていいいます……わあ、近付くと本当にごく綺麗……」

ますます両頬を染める少女に、ミカは思わず苦笑した。パテル分派のトップとして君臨していた昔では、綺麗だと煽られることなど珍しくもなかった。そうだったはずなのに、今になってこんな反応をされると何故か照れてしまう。

「その、やっぱり先生のお陰なんでしょうか? このお店、先生以外は綺麗な生徒さんしか来ないんですよ……。お陰で、生徒さん向けのものか先生向けのものしか売れないです」

「先生向けのものって?」

ミカが尋ねると、ソラはミカを見つめて顎に指先を当てた。

「1番はサンドイッチとかおにぎり、2番はスポーツ飲料とかですかね……。先生、事務用具とかは拘りがあるようで、このものって殆ど使ってくれないんですよ」

「へえ、スポーツ飲料……」

そういえば、先生は運動不足と体力の低下を地味に気にしているらしく、私室に運動用のマットとかがあるという情報が先生ファイルに書かれていたことを思い出す。早速ファイルの情報が正しいことが証明され、またしても複雑な気分になってきた。

その後少しソラと会話し、ミカはノートを買ってオフィスロビーへ続く自動ドアの方へ歩いていった。



自動ドアが開き、中に入った直後、ミカの鼓膜をそこそこ大きな声が震わせた。

「ようこそ、シャーレへ!」

「……えっ」

思わず口を開き、シャーレのオフィスロビーに一步を踏み出したまま固まった。そんなミカの前には、2人の少女がいた。片方が両手を広げて全身でミカを歓待するようなポーズを取り、もう片方の少女は唾然とした表情を、隣で両手を広げている少女に向け

ている。

「やあやあ、会えて嬉しいよ、聖園ミカさん」

両手を広げた少女はぱん、ぱん、ぱんとゆつくりと拍手をし、口元を緩めた。

「貴女は私のことなど知ってはいないだろうね？　でも、私は貴女を知っているよ。私もトリニティの生徒だからねー。貴女の話は、つい最近知ったよ」

そう言うと、少女は感慨深そうに腕を組んだ。

「……貴女はシャーレに入った。そして私もシャーレにいる。同じ学校なのに、友達でも知り合いでもない。もしかしたら街中ですれ違ったことすらないかもしれない、そんな関係。」

でも、シャーレに入ったことで、先生という共通の大切な友ができたことで、私と貴女は知り合っただ。

もしかしたら、シャーレが切っ掛けにならずとも、私と貴女は明日には知り合っているのかもしれない。いつかは、一緒に肩を並べて、2人でチョコレートパフェでも食べているような日が来たのかもしれない。

しかし、実際はそうなる日よりも早く……シャーレが、私と貴女を繋げた」

そう言うと、少女は眠そうな目をほのかに光らせた。その瞳に幾つもの星が瞬くのをミカは幻視した。

「まるで、フロランタンのようだと思わない？　クツキーの上にスライスしたアーモンドとたつぷりのキャラメルをかけたような。人の手が加わらなければ、果肉に護られていたアーモンドはキャラメルをかけられることはなかったし、鍋で煮られたキャラメルもアーモンドの上にかけられることはなかっただろーね。

しかし、クツキー生地の上でアーモンドとキャラメルは出会った。出会って、切つても切り離せない友となったんだよ。それはきつと、飛切素敵なことじゃないかなー。ね、ミカさん」

少女はぼかんと口を開けているミカに向けてキラキラと輝く目を向け、再び両手を広げた。

「そう、シャーレという小さな生地の上で、私と貴女は出会ったんだよ。広い広いトリニティでは貴女の視界に入ることもなかったかもしれない私が、こうして貴女を迎えている。まるで運命デステイネのように。

ありがとう、ミカさん。私はシャーレの生徒として、この出会いに感謝しよう。そして、先生にも心の底から感謝しよう。まるで、カントウチーニのような硬くて、しかし簡単にふやける不定で不確かなこの胸の奥底から、つまみ上げるような小さく輝く感謝を」

一歩ずつ、ゆつくりと少女はミカに近付いていく。そしてミカの目の前まで歩いてく

ると、役者のように頭を下げた。

「初めまして。私の名前は河和シズコだよ、よろしくね」

「それ私の名前でしょうがあああ！」

厳かに名乗った柚鳥ナツの右足に、走り寄ってきた河和シズコのローキックが炸裂した。

シヤールレ初出勤日②

ユウカから事前にシフト表を受け取っていたため、ミカは今日の当番表の名前を把握していた。しかし顔どころか名前も聞いたことがない生徒しかおらず、シフト表には名前と勤務時間しか書かれていないために所属する学校さえも知らなかった。

このため、到着早々大層な挨拶をしてきたトリニティ総合学園1年生の柚鳥ナツが、トリニティの生徒だということを知ったのは、ナツの挨拶の内容を理解したその瞬間であった。

ナツは放課後スイーツ部に所属しているという。聞き覚えがない部活だな、とミカは思った。

トリニティ総合学園では「パテル」、「ファイリウス」、「サンクトウス」の3つの分派が最大の派閥となっている。これら3大派閥の他にもシスターフッド、救護騎士団を含む「ヨハネ分派」などの大小様々な派閥が存在し、派閥ごとに規模やその在り方に至るまで大きく異なっているのがトリニティの特徴である。

但し全生徒が何らかの派閥に属しているというわけではなく、影響力を考慮しない純粋な人数という点で考えた場合、明確に派閥に属している者はむしろ少数派である。

ミカが所属していた（厳密に言えば書類上は未だに在籍しているのだが）パテル分派は「ティーパーティー」の構成派閥として主に首長であったミカを中心に集まっていた。しかし、何も全構成員が常にミカの周囲に侍っていたというわけではない。これはフィリウス分派やサンクトウス分派にも言えることだが、巨大な派閥であるパテル分派は以前の諜報部隊や防衛部隊などを揃えている。それらは名を変え看板を変え、一応表向きはティーパーティーとは何ら関わりのない組織として活動を行っていた。現時点で数十年、数百年単位の長い歴史を持つ「仮の姿」の始まりは、他の分派を出し抜くための偽装だったと思われる。

当然、これらの詳細は他の分派にはどうの昔から把握されているので、現在では偽装としては意味を成していない。しかし偽装のために掲げた偽の看板であろうとも、トリニティの長年の歴史、そして見栄或いは意地として、現在もそれらの配下組織は、表面きは独立した部活や委員会として残り続けている。例え虚勢の産物であっても、今では誇るべき伝統となっているのだ。歴代の生徒たちが汗を流し、歯を食いしばりながら現代まで護り抜いてきた偽物の看板は、今では歴史と伝統に保障された真正正銘の本物となっている。

ミカはパテル分派の首長であったため、当然のことながらパテル分派の配下組織を把握していた。合わせて「敵」であるフィリウス分派やサンクトウス分派、その他の派閥

の配下組織も概ね把握している。しかし彼女の知識の中に、放課後スイーツ部なる部活はなかった。つまり、これら派閥の配下組織ではない政治色から切り離された部活である。

別に珍しいわけではない。そもそも派閥の構成員である生徒よりも、派閥に属さない生徒の方が多数派なのだから。ある意味、放課後スイーツ部はごくありふれたトリニティの部活の一つであると言えるだろう。

しかし、それはトリニティ総合学園という世界全体を俯瞰して見た場合の話である。ティーパーティーの構成員としてトリニティの政治の世界にいたミカにとって、世間的には多数派と言える存在であっても、政治色の薄い部活は異質であり、異端であった。

知識としては存在を知っている。それがトリニティ全体から見れば、そして他の自治区から見ても至極普通で当たり前の存在であることも知っている。しかし実際にこれまでのミカの生活として全くといって良いほど関わってこなかった存在が唐突に目の中に飛び込んでくると、困惑してしまう自分の思考を制御することができなかった。

政治に関わっていない普通のトリニティ生徒は、今の自分の思考を指して傲慢と呼ぶのだろうか。そんなガラにもないことを考えながら、ミカはナツの全身をまじまじと見つめた。まるで動物園で珍獣を見た時のような反応をする自分に、心底嫌気を感じる余裕さえも、今のミカからは失われていた。

「……………成程。私という存在が珍しいのかい？ ミカさん」

そんなミカを暫く見つめ返していたナツは、両手を広げて踊る様に片足で爪先立ちをし、くるりと回った。

そんなナツのひどく落ち着いた声が入ると同時に我に返ったミカは、慌ててナツに頭を下げた。

「ご、ごめんね。えつと……………ナツちゃん」

「気にする必要はないよ、ミカさん。人という生き物は存外に視野が狭いんだ。それは怠惰ではないし、ましてや傲慢ではないよ。敢えて言葉で表現するならば、それは選択なんだよねー」

惚けるように数回頷き、ナツはミカに近付いて、無駄にスマートに彼女の両手を取った。

「例えば、貴女はトライフルをどこに存じだろうか？ ガラスの器の底にはフルーツとスポンジケーキ、上にはゼリーやカスタード、クリームにジャム、そしてまたフルーツ。上から見るとただフルーツがたくさん並べられているだけ。でも、下には色んなものが詰まっている。この世で最も美しい地層だ。横から見ても勿論美味しそうだけど、上から見るだけで食欲が溢れて止まらない。」

だから、私は上からしか見ない。横から見れば、スポンジケーキやクリームの厚さ、底

にあるフルーツの種類もわかるだろう。だけど、私はそれをしないんだ。横から見るという選択肢を頭の中で丸めて捨てるんだよ。

それは一つの選択じゃないかなー、ミカさん。中身なんて知らずに、上から少しずつ味わっていくんだよ。次は何が出てくるだろう？ そんなワクワクとドキドキがあまりいいスイーツと一緒に胸を浸して満たしていく。ああ、なんて幸福な時間だろう！ 他に何もいらぬね。あ、間違えた。さらに先生と一緒に至福だよ。これ以上ない、無敵の時間。つまり……ロマンだよ」

「長い、もっと短く」

「ずい、とミカに顔を近付けるナツの後ろ姿にジト目を向けていた百鬼夜行連合学院2年生河和シズコが低い声で言う、ナツは数秒黙った後にミカの両手を離し、両手でサムズアップのポーズをとった。

「貴女の態度に気分を害してなんかいないから、これから同じトリニティ生徒同士で仲良くしよーぜ、べいべ」

「そんな簡潔にまとめられるんなら最初っからそうしなさいよー」

口から火が噴き出そうなほどの怒り顔をしたシズコが瞬時にナツの前に出て、ナツの胸に水平チョップを叩きこんだ。が、すぐにシズコは両膝をついてチョップした方の手を掴み、顔を俯かせた。

「……かつつつつた！ いや、貴女の胸硬ったあ！ ちょっと、ナツ！ 貴女、胸板がチタン合金か何かでできてるの!？」

「失礼な。唯鍛えているだけだよ、友よ。私よりもミネ団長の鋼の腹筋の方が凄いよ。この前初めて一緒に任務に参加したけれど、あの人、至近距離で受けた携行無反動砲の砲弾、腹筋で弾き返してたよ。シールド使えばいいのにつて思ったものだよ」

「トリニティはお嬢様学校の看板を返上した方がいんじゃない!？」

声を上げて嘆くシズコから、ミカはスイツと視線を逸らした。それくらい楽勝だし、何なら手で砲弾掴んだ方が早くない？ と一瞬思ってしまった現実からも目を逸らした。当然、口には出さない。

「大体、胸の硬さなら君もどっこいどっこいじゃないかな」

「ううう……何、喧嘩なら買うわよ?……じゃなかった。ええと……はじめまして！ よろしくお願いします、ミカさん」

そう言つて、シズコはミカに丁寧に頭を下げた。

「彼女はシズコ。私の友で百夜堂という百鬼夜行連合学園では知らぬ者が居ない有名な喫茶店のオーナーを務める看板娘だよ。普段はキャラ作つて『にやんにやん』とか言っているけど、最近はシャーレでは投げ捨てて真面目に仕事をしているよ」

「投げ捨ててまーせーん！ もうシャーレのメンバーには知られちゃっているし、ここ

百夜堂じゃないし、あくまで仕事に來ているわけだし……そこはTPOをわきまえてくれるだけです！」

挨拶の最中に茶々を入れたナツを横目で睨みつけ、シズコは両手を腰に当てて唇を尖らせた。

「あ、うん。はじめまして☆。聖園ミカだよ☆」

何故か圧されている気がしたミカは、何故かこのままだと敗北しそうな予感がしたので割と本気で挨拶をした。動画投稿していた頃（今も偶にしているが）に培った渾身のポーズも決める。ウインクして小首を傾げることも忘れない。

「な、何という完成された姿……きよ、強敵……！」

「そうなんだ？」

恐れ戦いて後ずさるシズコの横で、ナツはこてんと首を傾げた。

そんな中、シャーレ部員3人による誰も止めない漫才を止めるかのように、ロビー出入り口の自動ドアが開いた。

「いけない……遅刻するところだった」

慌てて入ってきた少女は、ポーズを決めているミカと歯を噛みしめながらそれに相対しているシズコ、そして眠たげな表情で両者を観察しているナツを見つめ、小首を傾げた。

「……ああ、わが友。今日もクールビューティだね、シロコさん」

ナツに声をかけられ、アビドス高等学校2年生砂狼シロコは軽く会釈し、僅かに眉を顰めた。

「ん……やはりロードバイクで来るべきだった。まさかD・U・の電車でシステムトラブルが起こるなんて……お陰で折角2日間連続の1日当番なのに、初日から遅刻するところだった」

シロコは小さく息を吐くと、ぐるりと首を動かしてミカを見つめた。

「……貴女が、聖園ミカ？」

「え、あ、うん」

静かにミカを見つめる瞳。右と左で瞳孔の色が異なる水色の瞳にミカが映る。感情が感じられない宝石のような、冷たい瞳だった。

「……アビドス高校2年、砂狼シロコ。シャーレのベテラン組で、先生のパートナー。宜しく」

「……あ、はい。宜しくお願ひ致します。聖園ミカです」

先程の挨拶よりもはるかに低い声が、ミカの口から飛び出した。見つめ合ったシロコとミカはゆっくりと互いに歩き出し、固い握手を交わした。固すぎて何か嫌な音がした気がした。

「友よ、美しい光景じゃないかね。あれが1人の男を想い合う生徒おんなの牽制合戦だよ」
「いやああんなの、シャーレに来たら3時間で見飽きるわよ」

腕を組んで何度も頷くナツに、シズコが呆れたような半目を向けた。

◆ その後、オフィスロビーに集まっていた4人は、お喋りしながら執務室へと向かつていった。

今日のシャーレ当番はこの4名で全員である。

「そういえばシロコさん、何故今日は電車で来たんですか?」

「今日は泊りで明日も当番だけど、明日の当番が終わったら先生と一緒にアビドスへ行く予定だから。電車で先生と一緒に行くかと思った。でも考えてみれば電車で自転車も運送してもらえりし、自転車でも良かったかもしれない」

「えええっ! じゃあ3日以上連続で先生と一緒にじゃないですか! 羨ましいなあ……」

こともなげにそう言うシロコに向かい、シズコが頬を膨らませて上目遣いを向けた。実にあざとい仕草である。何だこの子あざといな、とミカは内心で顔を顰めた。桐藤ナギサが見れば「鏡を見てください、ミカさん」と道端に捨てられたペロ口様人形を見るような目を向けるであろう光景である。

「ん、私も嬉しい……と言いたところだけど。実際は明日は殆ど外回りだし、アビドスに帰った後は対策委員会の皆と市街地の巡回や治安維持。あんまり先生と楽しめない」
「ああ……」

ナツが同情するかのようについた。「外回り」とはシャーレの当番のメンバーがシャーレに届けられた依頼を遂行するため、オフィスから出て活動することを指す。偶に先生が同行する場合もあるが、基本的には指揮管制用のドローンでオフィスにいる先生からの指示を受け、あれこれ動き回ることが多い。先生の指示のもと任務を遂行できるとはいえ先生の側にいられるわけでもない仕事だ。勿論、だからと言って嫌がったり断ったりする部員はいないが。

「というか相変わらずですねえシロコさん。電車と自転車の2択って。バスはないんですか?」

「キヴオトスで時間を守りたい人は、バスには乗らない」

「まあそんなキツパリと。それは、そうかもしれないませんが……」

シロコの即答、それも齒に衣着せぬ言葉を聞き、シズコは眉を下げて大きくため息をついた。

キヴオトスの主要な交通機関と言えば電車である。バスもないわけではないのだが、如何せん人気がない。正確に言えば、信用度が低い。

決してバス自体の性能や運行会社が悪いわけではない。キヴォトスのバスは一般住民（ロボットとか獣人とか）が運転するものは少なく、大半が思考機械が操縦する無人車となっている。

しかしこれらの無人車両は銃撃戦と爆発が毎日そこかしこで発生するキヴォトスで客の安全を守るために、兎に角安全性が徹底されているおかげで、付近で銃撃戦や爆発が発生すると、すぐさま停止したり安全性の高い別ルートへ変更をする。そのため、到着予定時間を大幅に遅れるなど当たり前となっている。

なお、安全性が徹底されているとはいえ、別にバスの防弾性能が特段優れているなどと言うことはない。そもそもキヴォトスでは現金輸送車両やヴァルキューレなどの治安維持機関の装甲車、PMCの戦闘車両等を除き、大半の車両はロクな防弾性能を有していない。バスやタクシーも同様である。

理由は極めて単純で、防弾性能を強化したところであまり意味がないからだ。コストをかけて防弾性能を強化したところで、襲われる時は襲われる。苦勞して防弾性が高い車両を用意したとしても、撃ち込まれるものが小口径ライフル弾から大口徑ライフル弾や擲弾^{グレネード}、そして砲弾に変わるだけである。

これに対し電車の場合、勿論流れ弾が線路に命中するなどして運航停止することもあがるが、直接襲撃を受けることは稀だ。

最高速度で突っ走っている電車や目の前の線路に砲弾等が撃ち込まれて脱線事故を起こしたら、如何に頑丈なキヴォトスの住民でも多数の乗客が重傷を負う。当然と言えれば当然であるが、余程の田舎でもない限り、バスの乗客より電車の方が数倍多い。勿論、脱線事故現場の周辺にも被害は生じる。電車を攻撃して大量の怪我人を出せば、待っているのは連邦矯正局送りという暗い未来だけだ。

このためキヴォトスでは、バスや輸送車両が襲われることは多々あれど、輸送電車が襲われることはまずない。そう言った理由で、キヴォトスではバスよりも電車が好まれる傾向にある。

「ん、ついた」

そんな風に喋っていると、すぐに執務室の前までたどり着いた。

代表してシロコが残りの3人の顔を確認すると、静かにノックした。

「先生、来たよ」

「ああ、待っていたよ」

先生の声が廊下まで届いた。

今日も、シャーレの一日が始まろうとしていた。

シヤールレ初出勤日③

「おはよう、皆」

「ん、おはよう、先生」

「おはようございます！ 先生」

「おはよー、先生」

「おはよ☆！先生」

執務室でデスクから立って4人を出迎えた先生は、一昨昨日さきおとといにミカと会った時と同じように、ネクタイを緩めに締めた姿だった。

柔らかな笑みを浮かべた先生はドアの前に横一列に並んだシロコ、シズコ、ナツ、ミカ全員に挨拶をすると、「今日もよろしくね」と声をかけた。

「さて、それでは今日の仕事について。今日は本日が初めてのシヤールレの仕事となるミカがいるので、特別体制とするよ。と言つても、新人の子が入るたびにやっていることだから、然程特別つて言うほどでもないかもしれないけれど……」

先生は片手で持っているタブレットを時折見ながら、4人に向かって説明を続ける。

「まず午前中は外回りは無し。4人全員がオフィス内で業務を行うものとするよ。シロ

コは第1事務室、ナツとシズコとミカが第4事務室でいつもの業務をお願いするね。電話番は私が担当。

今は9時ちょうどだから……12時になったら一度執務室に集まって報告、そして昼食としようか。取り敢えず午前中はその流れでお願いします。

最近はずかしくなってきたから、皆体調に気を付けてね。執務室と事務室を含めてオフィスのエアコンの温度は一定としているけど、寒いようなら暖かくしても良いからね。体調に異常を感じたら、無理せず私に報告して休んでほしい」

にこやかにそういう先生に対し、ミカ以外の三人が目を細めた。「どの口が言うんだ」
とでも言いたげな表情であるが、先生は笑顔で呆れと心配と不安が混ざった視線を躲す。

「特別体制だからちよつと皆と話せる時間が減ってしまいかもしれないけれど、午後は皆で外回りをする予定だから、少し我慢してほしい」

おお、とナツとシズコが小さく声を上げた。先生はシャーレの当番に仕事を任せるだけでなく、当番とコミュニケーションを行うことも大事にしている。業務効率の都合により離れた事務室で当番がそれぞれ仕事を行うことも多いが、それでも当番の生徒たちと話をしたりする時間は必ず作る。だからこそ、当番制は基本的にシャーレ部員からの評判が良い制度となっている。

当番たちは少しでも先生と一緒にいる時間を作るために仕事と格闘し、そしてナチュラルに遊びに来て先生の執務室に入る当番ではない部員を蹴り出すために、日夜格闘しているのだ。

「では、今日もよろしくお願いします」

先生の言葉に全員が返事をし、そして部屋を出て行った。



「通常、当番の生徒のうち1人は執務室で先生と一緒に仕事をする人が多いのですが、今日みたいに初めて仕事をする人が来たときは、第4事務室に数人集まって新人さんに生徒が教えるのが通例となつていゝんです。先生が手取足取り教えてしまうとその分だけ先生の負担が増えますし、その都度先生の仕事が中断されますし」

シズコの説明を聞きながら第4事務室に入ったミカは、感心したように一度頷いた。「それでこの事務室なんだ。広いね」

予め受け取つていたオフィスの地図で見つていたので知つていたが、第4事務室は以前ミカとユウカが話をした第1事務室と比べてかなり広かつた。流石に執務室ほどではなかつたが、それでも第1事務室の倍は広い。

シャーレオフィスには嘗て複数の教室（キヴォトスではBDを使った自習が普通なので、教室は自習室と同義語である）があつたが、工事が行われた結果、今は1つしか教

室がない。それ以外の教室のうち、例えばそのうちの1つは半分に分けられ、今は第4事務室と図書室となっている。実際は1つの教室をしっかりと2分割にしたというわけでもないのだ、厳密に言えば第4事務室が教室の半分の面積を持つというわけではないのだが、それでも概ね「一般的な教室の半分くらい」と表現してもおかしくない広さの事務室となっていた。つまり、3人が一緒に仕事をするのが十分可能な広さだった。

第4事務室には4つの事務机が向かい合うように中央に置かれ、さらに背の高い本棚や雑貨類が置かれた戸棚が設置されていた。部屋の隅には観葉植物などのインテリアも置かれており、壁にも幾つかポスターが張られ、額縁に入った絵も飾られていたり、第1事務室よりかは遊び心が感じられる部屋となっている。

室内をぐるりと見渡したミカを見て満足げに微笑んだナツが、ミカに事務机に向かうように促した。

「さて、ミカさん。業務について書かれたファイルはある程度読んできているのかな？」

「うん、一通りは」

「グッド。それじゃあ、取り敢えずルーティーンのことから説明していくよ。あ、わからないことがあれば遠慮なく尋ねてね。私もシズコも、話の最中に質問されたくらいで怒るほどに心は狭くないから。ハートには常に余裕あれ。シャーレでは大事なことだよ。」

仕事中に突然トラブルとかで予定が狂っちゃうとか、よくあることだからね。

ちやーんと私たちは給料をもらい、先生の信頼を得てここで仕事をするのだからね。私のような一般生徒が元ティーパーティーの貴女に説教臭いことを言うなんてナンセンスだけでも、シャーレの部員になったからには働いてもらうよ？ そこは大事にしてくれると嬉しいなー」

ナツはそう言うと、じつとミカを見つめた。挨拶の時よりも低く、真面目そうな声になつてゐる。キラキラと輝いていた瞳からは、刃物のような鋭い光が放たれていた。

ミカは無言でナツに首肯する。今更元ティーパーティーとしてのプライドなんてないし、最初から先生の役に立ちたくてここに来てゐるのだ。

そんなミカを見つめて頷いたナツ、そしてそれを横から見えていたシズコは、丁寧にミカに業務の方法を教えていった。

シャーレ部員が担当している書類仕事、特にルーティンワークの書類仕事は大まかに分けて3つある。シャーレに運び込まれた依頼の選別と、依頼完了後の書類作成、あとは備品購入等の依頼に関係ない書類の作成だ。

シャーレには昼夜問わず多くの依頼が舞い込んでくる。ちよつとしたお手伝いや雑務程度の依頼もあれば、緻密な事前調査に準備と数回にわたる戦闘等が必要な依頼もある。ナギサが先生に補習授業部の顧問を任せたとような長期にわたる依頼もあれば、公園

の落ち葉拾いなどの1時間で済む程度のももある。このため、基本的に依頼はほとんど溜まっていく。

先生は、それらの依頼全てに目を通してている。手紙、メール、電話、直接の訪問など、シャーレへの依頼は様々な方法で持ち込まれるが、どんな些細なものでも一度は先生の目に触れる。

ではシャーレ部員が何をするのかといえば、先生に見せる前の依頼の選別、依頼の遂行や解決、そして依頼完了後の報告である。

大量の依頼の中にはすぐに取り掛からないと生徒や住民の生活や安全に関わるような緊急なものもあれば、依頼側すら「あ、出来ればで良いんで」というニュアンスを込めて送ってくるものもある。すぐにでも解決に向けて動き出せるものもあれば、そもそも時期を待たなければ遂行できないような依頼もある。

このため、先生が目を通すまでに優先順位を付けていくという作業が重要になる。これが案外時間と人手がいる作業なのである。

例えば、生徒の将来や生命に影響を及ぼすような依頼が、「あ、その、本当に申し訳ないんですけど。お時間がある時で結構ですので……」という出だしの手紙で送られてきていたりするような、誰も意図していないトラップが仕掛けられている場合もあるので、選別には細心の注意と相応以上の手間をかける必要がある。「そんなに重要な案件

なら、四の五の言わずに泣き叫びながら先生に縋りつけや！」と事務室でキレかけた部員は、1人や2人ではない。

この他、どの依頼を遂行してどの依頼を遂行しないかを決める作業も重要だ。

別に依頼の解決を諦めたり、依頼そのものを黙殺するわけではない。実際のところ、シャーレに来る依頼全てをシャーレがこなす必要はないのだ。

シャーレはゲヘナの風紀委員会やトリニティの正義実現委員会、ミレニアムのセミナーなどの多くの組織と事実上の同盟関係とすら言える協力体制を構築している。依頼の中には、例えば先生がゲヘナ風紀委員会に電話すれば、それだけで風紀委員会が解決してくれるものもある。

敢えて悪い言い方をすれば「たらい回し」ということだが、そもそも依頼をしてくる方も「誰が」解決してくれるかではなく「何時」解決してくれるかを重要視していることが多いので、効率良く依頼をこなすためには、協力体制にある別組織に任せるということも重要だ。寧ろ「ゲヘナ風紀委員会に依頼したいけど、ヒナ様怖いから先生を頼ろう……」みたいな依頼だと、シャーレがゲヘナ風紀委員会を差し置いて解決した方が問題になる。いくらシャーレが全ての自治区で好きに動けるとはいえ、自治区独自の治安維持組織にも体面というものがあるのだ。

彼女たち治安維持組織も、シャーレ発足時なら兎も角今はシャーレの有用性や必要性

には何の疑念も抱いていないし、必要ならば全面的に協力することすら考えているが、だからと言って自分たちの存在意義までシャーレに譲り渡すつもりはないのである。

このように、シャーレ部員たちは先生に依頼を見せる前に優先度を決め、シャーレが解決すべきか否かを判断し、それも合わせて先生に伝えることがルーティーンとなっている。何を「優先」すべきかは生徒たちの価値観によつて異なるため、先生の要請を受けてユウカたち古参メンバーが作成したマニュアルなどを参考にしつつ行つていくのだ。

このほか、依頼を完了した後に依頼主に報告したりするための報告書の作成も部員たちが行っている。先生はサインをするだけだ。

それら以外にもシャーレの備品購入の記録、予算関係の書類なども、シャーレ部員が作成しているものが多い。連邦生徒会に提出するような書類は先生が一から十まで全て作成する必要があるが（これのお陰でシャーレ部員たちの連邦生徒会への心証は頗る悪く、地の底に潜り込んでいる）それ以外の書類は部員たちが代理で作成しても良いものが大半なので、出来る限り先生に負担をかけないようにしているのだ。

事前にファイルで予習してきたのである程度は把握しているミカは、一通りやり方を聞けばすぐに単独でこれらの仕事を行えるようになった。

「私なんかを持ち上げられても嬉しくないかもしれないですけど、本当に凄いですねえ、

ミカさん」

驚嘆したように瞠目したシズコが、テキパキと書類を纏めていくミカを見た。

「全くだよ。これが一般生徒とティーパーティーの差かあ」

「まあ、仮にも生徒会長だったんだし、それなりにはね？」

トリニティの生徒会長権限こと「ホスト」はティーパーティーの3大派閥首長がそれぞれ交代で担っている。ミカが首長になった頃には基本的にナギサかセイアが担当していたため、ミカはホストを握ったことはない。しかし、ホストと言っても他のティーパーティーのメンバーに好き勝手に命令できるわけでもなく、あくまでティーパーティーの代表的なポジションに過ぎない。無論ホストの持つ権限自体は絶大なのだが、それを独自に自在に行使できるというわけではないのだ。

だからこそ、ミカにも生徒会長の仕事はしつかりとあった。パテル分派の首長としても働いていた。最低限度の書類作成は毎日やってきたし、派閥の者の意見を纏める能力もある。見た目麗しく天真爛漫（に見える）なミカが派閥の代表として祭り上げられてきた側面があったのは事実だが、決してミカは傀儡になつていたわけではない。傀儡と象徴は別物なのだ。

「私もお祭り運営委員会の委員長として書類業務はお手の物ですけど、ミカさんもとても凄いですよ。これじゃあ私がサポートすることもあまりないですね」

ニツコリと微笑み、シズコはミカが処理した書類の束を見つめた。シズコはお祭り運営委員会の委員長であると同時に、喫茶店百夜堂のオーナー、すなわち経営者でもある。実はシャーレでも書類作成能力が上位に入る生徒だ。シャーレ特設部隊である「連邦生徒会へ殴り込み隊（命名：十六夜ノノミ）」の常連でもある。

「……あく、ひよつとして、私の指南役だったり？ その、なんかごめん……」

「いえいえ！ 謝ることなんてないですよ。いつもの業務で先生に頼ってもらっているので、それで十分なんですから」

「そうだよミカさん。シズコは夜遅くまでシャーレで先生のお手伝いをして、その途中に先生へ夜食を出すのにハマっているんだから、今でも十分幸せなんだよ」

「さーらつと人の楽しみ暴露しないでくれる？」

ギリリと光る眼でナツを睨み、シズコは小さく唸った。そんなシズコを見て、ミカは苦笑した。一応これでも、シャーレに入る前から「私、強いし書類作成もできるし、絶対先生の役に立てるよ！」と意気込んでいたのだ。それを堂々と公言する気はないが、それでもシズコが自分をサポートしてくれるつもりだったことは嬉しく思う。

「ふーむ、私たちがミカさんに教えることももうなさそうだね。12時までは……あと30分か」

ナツが壁掛けのデジタル時計に視線を向けると同時に、時刻は11時30分となっ

た。

「12時5分前に一度切り上げて先生の所に行くとして。一先ずは午前中に終わらせた書類を纏めて、先生の所に持っていきようか」

ナツはそう言うと、スマホを取り出して操作した。

「今、『S5』を呼んだよ」

「OK。じゃあミカさん、分別が終わった書類をこっちに持ってきてください」

「はい」

シズコが頷き、ミカに顔を向けてドア近くの誰も使用していない事務机を指差した。その机にミカが書類の束を置くと同時に、ゆっくりとドアが開いた。音も立てず、何か部屋の中に入ってくる。

それを見て、ミカが感嘆の声を上げた。

「おお〜」

それは高さが1メートルくらいの台車だった。4つの車輪がついており、二段式となっている。手すりはなく、代わりにロボットアームが1本ついていた。このアームでドアを開けたようだ。自動走行する台車はドアから入ってきてすぐに停止した。

その台車に視線を向けたシズコは部屋の隅に置いてあった書類用のコンテナに分別した書類を纏めると、上の段と下の段に1つずつコンテナを入れた。

「これがシャーレの自動走行式台車？ ファイルに書かれていたから知ってはいたけど、実物を見たのは初めてだよ」

興味深そうに台車を見つめるミカを横目に、ナツが胸を張った。

「そうだよ、ミカさん。我らがシャーレ驚異の技術！ 流石は各学園の優秀なメンバーが集った、綺羅星の如き精鋭集団であるシャーレの産物！ って言いたいところだけど、実際はミレニアムのエンジンニア部がちよいちよいと造った代物。最新のものでもなんでもなく、キヴォトスの工場とかでは普通に使用されているロボット台車に、ちよつと安全性を高めたエンジンニア部謹製の人工知能を搭載しただけのものってウタハさんは言っていたね。指定の位置まで動いて、ドアを開閉して、衝突防止と荷物の落下阻止をするためだけに生み出された機械の頭脳を乗つけた台車。

名前は『S5』。Sは召使いの^{サブヴァント}Sで、5は文字通り5番目のシリーズって意味。一応、一番新しい奴だよ。まあ、最後に造られたというだけの意味で、枯れた技術の産物ってところは変わらないけどね」

『枯れた技術』って言い方は好きじゃないわね」

シズコが顔を顰めてナツを見た。

「枯れた技術というのは世に流通し、高い信頼性を獲得した技術のことだから、決して古臭いわけでも劣っているという意味でもないわ。最新であればよいというものじゃない

いのよ、技術っていうのは。

言い方を変えれば不具合が生じる原因も解決方法も全て知られた、堅実で安全な技術なのだから」

そんなシズコを見返し、ナツは同意するかのように腕を組んだ。

「伝統墨守を重視する百鬼夜行らしい、というのかな。トリニテイも他所よそのことは言えないか。

最新鋭、最先端を標榜するミレニアムの技術者せいとが聞けば、その言葉に同意はすれども自分たちが造りたいのはそれじゃないって言いそうだね、友よ。

ちなみにシャーレには他にも色々なロボットがあるよ。予算が乏しい中エンジニアの人たちが数時間で造ったものばかりだから、とても最先端っていうわけじゃないけどね。それでも役目を果たすことはできるのは、シズコが言った通りだよ。

私も別にこの子が嫌いってわけじゃないよ。不思議なものでね、最先端の汎用ロボットよりも単純なことしかできないロボットの方が愛着がわくものなんだ。いつもの通り道に置いてある、チープな味のお菓子の自動販売機みたいな感じでね」

ナツはS5に慈しむかのような視線を送ると、再びスマホを操作した。S5はゆっくりと進んでいき、部屋から出て行った。

「操作作用のアプリはシャーレの部員ならすぐにダウンロードできるから、あとで教える

ね。

ああ、ちなみにシャーレ内のロボットだけど、シャーレオフィスを管制しているコンピュータとはまた別のエンジニア部が造った独立式のコンピュータが管制しているらしいよ。それはヴェリタスの管理する防犯システムも同じ。オフィス管制とロボット管制、防犯システム管制を行ってるシステムはそれぞれ独立した別々のシステムなんだった。

シャーレオフィスを管制しているのは先生が持っている『システムの箱』とかいうなんかすごいシステムのOSだって聞いたことがあるね」

「へえ……」

「OSの名前はアロナって言ってたっけ。なかなか洒落た名前だよ。アロナはシャーレオフィスの管制以外にも……まあ、この話はいつか」

ナツはスツと目を細めると、少し顔を俯かせて低い声を出した。

「うん？」

小首を傾げるミカを尻目に、ナツはミカに一瞬だけ視線を向けた後、デスクに戻った。「さて、じゃあ5分前までお仕事しよっか」

そう言つて、ナツはミカに微笑みかけた。それを見て、シズコも一瞬だけ複雑そうな表情を浮かべていた。

シヤールレ初出勤日④

「皆、午前中はお疲れ様。シロコからも第4事務室の3人からも、書類は受け取ったよ」

12時ちようどに再び執務室に集まった4人を見て、先生は笑顔を浮かべた。

この人って基本笑顔だな、私は物凄い怖い顔で睨まれたことあるけど。そんなことをふと考えたミカは、その思考が自分の表情に影響を与えるのを何とか堪えた。全く全然これっぽっちも自慢できることではないのに、何故か優越感みたいなものが胸に宿ってしまった。もう私はダメかもしれない。

ミカがそんな自爆ですらない間抜けな衝撃に動揺を隠そうとしていることなど思いもしていない先生は、4人それぞれに労わりの声をかけ、そしてタブレットを見ながら話し始めた。

「さて、これからの予定だけど。午後は昼食後、皆で外回りをします。折角だから昼食は全員で外食しようと思う。さつきシロコに頼んで、午後から全員出かけることをシヤールレの皆に伝えて貰ったよ」

「ん、もうグループチャットに流してある。留守番は近くにいた山海経せんがいきょうのシユンさんたちがやってくれるって」

「ありがとう、シロコ。無人にしようかと思っていたけれど、シユンとココナにはお礼を言っておかないといけないね。」

「そして外回りの内容は……今話してしまおうかな。今日遂行する依頼は喫茶店の警備だよ」

「警備？ それも高級店などではなく、喫茶店？……きな臭いね」

「ナツが目を光らせた。」

「そう、その喫茶店は『マニオライ』に先月オープンしたばかりでね。どうやら頻繁に嫌がらせの類を受けているようで。落ち着くまで警備してほしいって依頼なんだ」

「マニオライ……？」

聞き覚えのある単語に、思考がお花畑から帰ってきたミカが小さく呟いた。どこかで聞いた名前だが、しかし思い出せない。そんなミカに隣に立つシズコが一瞬だけ怪訝そうな表情を浮かべたが、すぐに微笑んだ。

「そっか、ミカさんはあまりD・U・に来たことないですよね。『マニオライ』はD・U・東部商業区駅の駅ビルの名前ですよ。正式名は『マニオライ・イースト』ですが、皆『マニオライ』って呼んでいます」

「ああー！」

シズコの説明を聞いて、ミカは軽く両手を叩いた。そうだ、思い出した。「D・U・東

部商業区駅」はミカがシャールレに行くために利用した駅の一つで、最後に降りた駅だ。つまりはシャールレの最寄り駅である。そしてD・U・有数の大規模なターミナル駅でもあるこの駅には駅ビルもあつた。その駅ビルの名がマニオライだ。

ミカはシャールレに行くことしか頭になかったので、3日前も今日もマニオライには寄っていない。しかし駅構内を歩いていたので、嫌でも看板は目に入る。それでうつつらと覚えていたらしい。

D・U・には「駅ビル」というビルが複数存在する。駅の機能に加えて各種店舗やホテル、病院、行政サービス機構、企業のオフィスなどを盛り合わせた巨大な駅だ。駅に直結し、駅からそのまま歩いていけるのが特徴である。D・U・には10を超える数の駅ビルがあるが、トリニティにはほとんど存在しない珍しい施設である。

「ごめんね、ミカ。説明しなくちやいけないね。D・U・東部商業区駅は長期間改装工事を行っていて、今年リニューアルしたばかりの最新の駅舎なんだ。合わせて駅ビルであるマニオライも新規改装オープンしたばかり。これまでの『URPC』のノウハウをつぎ込んだ最新のビルとして注目を集めているよ。もつとも解体工事をしてゼロからビルを造ったわけではないから、最新、と言つてもソフト方面……つまり管理システムとか防災機能とか、インテリア、或いはテナントの方だけだね」

先生が眉を下げてミカに軽く頭を下げ、補足の説明をする。

「URPC（ウトナピシユティム・レールロード・パッセンジャー・コーポレーション）」はD・U・唯一の鉄道会社であり、旅客輸送事業の他駅ビルの営業も行っている系列企業を有する巨大企業連合である。鉄道会社としては旅客輸送がメインなのだが、貨物輸送や鉄道管理を行う企業もURPCと実質的な同盟を構成しており、D・U・の鉄道はほぼURPCの影響下にあると言っても良い。

カイザーコーポレーションのように様々な自治区に展開をしていないが、D・U・に限ってはカイザーを超えるとも言える企業である。

「そのマニオライだけど、まだまだ空きテナントが結構あつてね。最近そこにオープンしたのが喫茶店『ムエツト』。ところがオープンしたのはいいものの、謎のロボット集団に目を付けられているようだね」

「ロボット集団？ ヘルメット団や強盗団スケバンじゃなく？」

シロコが僅かに瞠目した。

ロボットということは、つまりは生徒ではないということだ。生徒による悪質なおふざけというわけではなさそうである。キヴオトスの住民には自律型の思考ロボットもいる。彼らは生徒や獣人の住民と変わらない感情と知能を持ち、キヴオトスで暮らしている。

「その通り。よって、状況は深刻だと判断した。これが悪ふざけや度を越えた悪戯でな

いのなら、そのロボット集団には狙いがある。狙いがあるとすれば、それを達成するまで連中は犯行を続けるだろう。

何せ駅ビルのテナントの喫茶店だ。周辺には別の店もあるし、利用客も通行人も多い。シャールにまで相談が来るということは、とつくにヴァルキューレにも通報はされているだろう。ヴァルキューレの巡回も功を奏していないということだ。

ロボット集団がその喫茶店に拘っている何かも気になる。杞憂だといいいんだけど……」

そう言うと、先生は真剣な表情で顎に手を当てながら、タブレットを睨みつけて口を閉じた。

その姿に胸が高鳴ったミカは、再び自分の思考がお花畑に向かって歩くのを止めるために労力を費やすこととなったが、それもすぐに吹き飛んだ。先生が真剣な表情のまま、ミカの前まで歩いてきたからだ。

「ど、どうしたの？ 先生」

動揺するミカに対し、先生は悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「そうそう、外回りをするからには、ミカにもアレを渡さないかね。あとで、備品管理室に来てくれるかな？」

笑みを浮かべた先生を前に、ミカはコクリと頷いた。

◆ 駅ビル「マニオライ・イースト」は地下1階、地上7階建てのビルで、1階に駅舎と繋がるコンコース（駅内の大通路のこと）が通っている。地下鉄なので当然プラットホームは地下にあるのだが、駅自体が地域のランドマークとして整備されている故に、駅舎の大部分が地上に造られているため、商業設備の大半は地上にある。D・U・東部商業区駅の南口と繋がっている駅ビルで、URPCの子会社である「ウトナピシユティム・ターミナル開発社」が管理・運営をしている。

マニオライは最大140店が入ることが可能な大型ショッピングセンターであり、この手の駅ビルに良くある話だが、各フロアごとに同じジャンルの専門店が集まっている。例えばダイニングキッチンフロアだとかファッション・コスメフロアだとかである。

シャーレに依頼してきた喫茶店「ムエット」は、5階の生活雑貨フロアの隅、非常階段近くにあった。比較的小さい店で、カウンター席4つと4人掛けのテーブル席が3つある。

「依頼を受けてくださって、ありがとうございます……」

店主は物静かそうな頭身の低いロボットで、弱り切ったように悲しげな表情を浮かべた。

駅ビルの別フロアのレストランで手早く昼食を済ませた5人は、そのままムエツトへと直行していた。シャールレの外回りで先生と共に夕食をするのは久々だったとのこと、浮かれていたシロコとシズコとナツも、今は真剣な表情で先生を囲むように座っている。勿論、ミカもとつくにお花畑から思考が戻っていた。

店主の説明によると、嫌がらせは先月より週に2回ほど行われているらしい。店の前にゴミを捨てられたり、小さな爆竹を置かれたりしたことだった。駅ビルのセキュリティ部門やヴァルキュールにも相談をしたのだが、あまり効果が出ていないという。駅ビルに導入されているセキュリティは防犯カメラと重武装の警備ドローンを併用した最新のもののだが、防犯カメラで犯行を確認後に警備ドローンを向かわせても、現場に到着するより先に犯人たちには逃げられてしまう。ヴァルキュールの巡回も同様だ。かといって、警備ドローンやヴァルキュール生徒が闊歩している前で犯行に及ぶわけもなく、常時警備ドローンやヴァルキュール生徒を店の前で立たせておくこともできず、困り切っているのだという。

「そんなに役に立たないの？ カメラに犯人が映っているのなら、怪しい人をリストアップして駅ビルに出入り禁止にするとか、犯人の動線を追うとか、色々方法があるはず」

片眉を上げて店主に疑問を述べるシロコに向かい、店主はさらに顔を俯かせた。

「それが……私も直接カメラをチェックしたわけではないのですが……セキュリティ部門の方からの説明によると、犯人は……同一集団ではないのだそうです」

「ほう？ ロボット集団とは聞いていたけど？」

身を乗り出したナツに向かい、店主は苦々しい表情を浮かべた。

「確かに、そうなのですが。犯人たちは皆ロボットという意味でして……つまり、連続で嫌がらせをしてきているロボットはいないんです。全て、別のロボットで行われているようにして」

ロボットの形をした住民は外見こそ似通っていても、搭載されている思考機械や細かなパーツが微妙に異なっている。また、ロボットも人間同様にこれまでの生活において身につけてきた癖が、歩幅の違いや走り方の違い、細かな動作の違いに影響を与える。防犯カメラの映像を分析すれば、それを調べることは容易だ。

「先月からの犯行で週に2回の嫌がらせ、その全てが違うロボットの犯行だとすれば……最低でも、10体は関わっているとみていいでしょうね」

先生が腕を組んで唸った。なお、先生は外回り時には戦闘に備えての指揮管制ドローンなどを詰め込んだ特別製の鞆を背負っているのだが、それは今、先生の足元に置かれている。

「ええ、私もそう思います。それにほとんど困り果ててまして……ただでさえ、売り上げ

が下がっているのに」

「……と、言いますと？」

眉間に皺を寄せたまま、先生が店主を見つめた。店主はそんな先生を見返し、より肩を落とした。

「実は、この駅ビルに1週間ほど前に、新しい大型喫茶店がオープンしましてね……。『アゲラタム』というお店です。それもあって、ますます客足が遠のいている有様でして……」

「それはまあ……」

シズコが思わずため息をついた。まさに踏んだり蹴ったりである。

「……なんかさ、タイミングが怪しくない？ その新しくオープンした喫茶店がロボット集団を雇っていて、このお店を潰そうとしているとか！ 同業者への攻撃だよ！」

唸るように言ったミカに、ナツが呆れたように言った。

「それは流石に無いんじゃないかなー、ミカさん。大体、テナントのお店はこの駅ビルと契約しているんだから似たようなお店が近くにいくつもあることは最初から分かり切っているし、このままでは契約している駅ビルそのものにも被害が及ぶよ。それにこのムエット以外にもマニオライにはカフェとかがたくさんあるからね。」

そもそもD・U・東部商業区駅はD・U・郊外のターミナル駅で、マニオライも住宅

街の真ん中にある巨大なショッピングセンターだから、放っておいても客は来るわけだし……犯罪を犯してまで他店を潰すメリットがあるとも思えないよ」

「むう……うん、その通りだね。ナツちゃんが正しいよ」

しかめっ面をして顎に指を当てているミカに、先生が微笑んだ。

「まあ、ミカの考えも全くあり得ないとは言いつれぬよね。どの道、同じビル内にあるわけだし……せつかくだから、そのアゲラタムつてお店も見に行つてみるかい？」

その言葉に、生徒4人は頷いた。



「先生……これは、喫茶店とは言わないと思う」

喫茶店ムエツトを一旦離れて噂の喫茶店アゲラタムの様子を見に行つた先生と4人の生徒であるが、実際に店舗を見たシロコの第一声がこれであった。

「……だね。これは予想していなかったなあ……」

先生も呆然としたように呟いた。

5人の目の前には、喫茶店の看板を掲げた、どう見てもレストランにしか見えない店があった。

「いやあ、今日シャーレに来る時には気付かなかつたねー。私たちが駅に着いたのはこのお店がオープンする前の時間だから、仕方のないことだけど……しかし、うくん、い

い匂いだ。流石だねえ」

「あはは……そりゃ、お客さんがたくさん来るわけよね。こんな良い場所に、良いスタッフに、良さそうな食材に設備」

何かを諦めたかのように言い合うナツとシズコの声をBGMに、ミカはこの場から逃げ出したい衝動にかられた。

「……ナギちゃん、あとで殴る」

両頬を染めて俯くミカに4つの視線が向けられた。同情と憐憫に満ちた優しい視線だった。

喫茶店アゲラタムは1階にあった。それは良いとして、問題は場所であった。あろうことかアゲラタムは1階のコンコースに面していた。つまり、最も多くの人を通る場所の真横に造られていた。正確に言えばコンコースの両脇に自動ドアが設置されており、東側の自動ドアを抜けてすぐ右手に店舗を構えていたのだが、店舗とコンコースを隔てているものは透明なガラスなので、コンコースからは店の様子が丸見えである。

しかも店舗自体がかなり広い。どう見ても、他のテナント店より広い。複数のテーブルが置かれている喫茶店なのだから、他のテナントよりもスペースが必要なのは当然なのだが、それにしても広い。しかし、広い割にはテーブル数が少ないように見えた。そして、テーブル数に対し異常なほどに、歩き回っているウェイトレスが多かった。

そのウエイトレスが、さらに問題だった。

「……どう見てもあれ、トリニティの生徒」

シロコの眩きに、ミカはがっくりと肩を下げた。

ウエイトレスは濃いブラウンのベレー帽に同色のスカーフタイ、ソムリエエプロン、そして黒いシャツにズボンと比較的地味なカラーの制服のようなものを着込んでいるのだが、明らかに生徒であつた。しかも所作が洗練されすぎているというか、客というより上位の者を持って成す雰囲気溢れ出ている。トリニティの政治的中枢では珍しくない光景なのだが、D・U. のど真ん中、それも駅ビルにある大して高級店でもない店でスタツフとしてやるには浮きすぎている。仕草一つ一つが、トリニティらしさを隠しきれていない。というより、正しく典型的な「トリニティのお嬢様」だった。トリニティの制服から着替えただけである。

とはいえステレオタイプなトリニティのお嬢様というものの、そもそもトリニティでありふれた光景というわけでもない。お嬢様学校と揶揄されるトリニティではあるが、何も全生徒が上流階級の所作を身に付けてなどいないし、それを毎日毎秒実施しているわけでもない。

そんな無駄にスマートなスタイルを、しかもチェーン店の制服と言つても違和感がない普通の制服でやっているの、逆に浮いている。

なお、彼女たちは当たり前のように愛銃を背中や腰から吊り下げているが、これについてはキヴォトスでは珍しくないので誰も気にしていない。

「あれがトリニティ流の接客術なのね……凄いわね。本物のお嬢様がやっているからか不自然さがなく、嫌味っぽさもないわ。……外から見れば、場違い感が凄いけど」

「いや、あれを一般的なトリニティ生徒と思われるのは流石に心外なのだけど……」

顎に指を当てて真剣な表情で唸るシズコに向かい、ナツが真顔で呟いた。柚鳥ナツ渾身の真顔である。

それはそうだろう。服装は違うが、遠目に見てもわかる。ミカは他人の顔と名前を覚えるのが苦手だが、それでも週に1度は顔を合わせていた相手達だった。顔くらいは知っている。

彼女たちは、到底「一般的なトリニティ生徒」とは言えない存在だ。もつとも、ミカのような立場からすれば、普通のトリニティ生徒よりも遥かに見慣れた相手だとも言えたのだが。

「……ん、ただのトリニティ生徒じゃない……ティーパーティーの生徒に間違いない」

隣に立つシロコの無情な追撃に胸を貫かれたミカは、先生の前で両手と両膝を床にくくことだけは何とか堪えた。

取り敢えず、後でナギちゃんを殴ろう。極限まで手加減すれば、1時間気絶する程度

で済むと思うから、取り敢えずお腹を殴ろう。

そう決意し、ミカはせっかくということであらつきながら、先生の胸板に後頭部を預けた。

シロコの愛銃のバットストック（銃床とも言う。発砲時に肩に当てる部分）がミカの脇腹に突き刺さった。ミカは普通に足に力を入れて耐えた。

シロコの攻撃をガン無視し、ミカは先生の胸板とほのかに感じた先生の匂いを楽しみながら呟いた。

「何でこんなところに、^{ナギちゃん}ファイリス分派の生徒たちがいるのお……ナギちゃああん……」

詰まるところ、現実逃避であった。

シヤールレ初出勤日⑤

昼食の時間帯が終わりに差し掛かり、最後の客が出て行った直後、喫茶店アゲラタムに一人の客が入ってきた。

「いらっしやいませ、何名——」

「やあやあ、初めて来たけど、ここはいいお店だね。素敵な匂いに溢れてる。素敵な出会いもありそうだ」

挨拶をしたウエイトレスの発言に被せるように、いきなり喋り出した客。対応しようとしたウエイトレスのみならず、に近くにいたウエイトレスたちの視線が店入ってきた少女へと集まる。

「あ、あの……」

「つくづく幸いなことに、ちょうど小腹も空いてきた頃合いでねー。ほら、大好きな人の前でがつつり食べるのは恥ずかしいし……。ええと、ここのお勧めは……違う、ランチメニューじゃなくて程良い量のスイーツを……」

話しかけた店員を完全に無視し、客は入り口近くにあるメニューが書かれた黒板を上から下まで見つめた。

「おお、カップケーキだけじゃなくてファッジの種類も豊富じゃないか。とても良さそうだ、なかなか素敵な予感がするよ。今私たちが抱えている問題も、ほろほろと溶けてなくなるファッジのように、簡単に解決すれば助かるのよね。」

私はキャラメルよりもファッジの方が好きなんだ。噛み応えのあるキャラメルも嫌いじゃないけど、一瞬で口の中で崩れてしまうファッジを食べて、それを名残惜しく思う瞬間が好きなんだ。大好きなものを喪失して感動を覚える、実に不思議な感情じゃないか。しかし、それは矛盾ではないんじゃないかな。心は水面のように空の色をそのまま映し出すものじゃないし、鏡のようにそうあれと作られているものでもない。カンノー口に包まれたクリームのように、包む生地こそ決まっていますが、中身は色々な風味のある……おっと、長い話はわが友に嫌われる。私も長話は寝ながら聞きたいタイプだね。

それはそれとして、へい、お嬢さん。今から私たちとお茶しない？」

「へっ？……あ」

唐突に話しかけられ、ウエイトレスは漸く気付いた。いつの間にか、客の後ろにもう1人、誰かが立っている。片膝をつけてウエイトレスの手を取るようなポーズを決めた客の後ろに、別の少女が無言で微笑みながら立っている。物凄く、見覚えのある顔だった。

「……ミ、ミカさ……」

「はい、連邦捜査部『シャーレ』です☆」

花の咲く様な笑顔を浮かべてナツの後ろに立っていたミカは、ゆつくりとシャーレのIDカードを取り出した。

「全員逃げないでね？　まあ、逃げ出したところで逃がさないけど☆」

それは生粋のお嬢様である彼女たちが初めて聞いた、地獄の底から響く様なドスの利いた声だった。

強盗が押し入ってきたかと誤解されかねないような悲鳴が、店内を満たした。



阿鼻叫喚となった店内に入った先生たち5人の前に現れた、というよりは他のウェイトレスたちによって引つ張り出されてきたのはこの喫茶店の店長、もといティーパーティーの行政官の1人であった。ナギサの直属の部下の1人でもある。補習授業部の件で先生とは顔見知りであるし、当然ミカとも面識がある。

「あれまあ、バレてしまいましたか。……本当は、もうちよつと準備がしたかったです
が」

行政官はそう言うと、クッククックと低い声で笑った。随分と特徴的な笑い声の生徒である。彼女もまた他のウェイトレスと同じ制服を着ているので、やはりティーパー

ティー行政官としての洗練された動作が色々と浮いていた。悪いことを考えてそんな特徴的な笑いも、さらにミスマツチ具合を加速させている。

行政官は先生が尋ねる前に答えを言った。

「結論から言いますと、このお店は先生へのプレゼントなんですよ」

「……えっ」

先生が目を丸くし、行政官の顔を見つめた。他の4人は半目で行政官を睨んでいる。その様子を見て、行政官はさらに笑った。

先生たちは店の奥にあった個室へ案内された。その部屋はスタッフ用の待機室となっているらしく、不自然なほどに豪華な装飾付き丸テーブルと椅子が並べられている。

行政官は5人に座るよう促すと、自身も下座に座り、集まっていたウエイトレスたちを全員部屋の外に追い出し、再び話し出した。

「これまで、トリニティのシャーレへの支援や協力は正義実現委員会が行ってきました。しかし、正義実現委員会はティーパーティーの監督下に置かれてはいますが、ティーパーティーの戦力ではありません。ナギサ様のフィリウス分派保有の戦力は他にありません。つまり、我々です」

桐藤ナギサはフィリウス分派の首長である。パテル分派がミカのやらかしのせいだ

機能不全に陥り、百合園セイアのサンクトウス分派が病弱なセイアの護衛に集中していることもあって、フィリウス分派の防衛部隊は現状のティーパーティーで唯一積極的に活動できる部隊だ。

「シャーレに正義実現委員会が全面的に協力しているのは良く知られている話です。何せ委員長と副委員長がシャーレに所属しておりまして」

そこまで言つて、行政官は優雅に紅茶を一口飲んだ。なお、先生たちの前にも紅茶が出されているが、先生以外は誰も手を付けていない。

「——とはいえ、だからと言つてフィリウス分派が全く何も動かないのは対外的にも良くありません。補習授業部の件はナギサ様の完全な独断で、先生にご迷惑をおかけいたしましたので。」

いや、あの件は本当に酷かったですよね。先生がお許しになられていなければ、パテル分派と共にフィリウス分派も崩壊していたかもしれないですね……。全く、ナギサ様は本当に……大義名分があれば何をしても良いわけではないでしょうに。しかもそれで裏切り者を見つけ出すことが出来たのならまだしも……。

おっと、コホン！ 失礼、お恥ずかしい真似を」

途中から愚痴を言うような口調となっていた行政官は、シロコが苛立たし気にティーカップにスプーンを当てる音にハツとなつて咳払いをした。

「それに、ゲヘナバンデモニウム・ソサエティ万魔殿の生徒がシャーレに所属していると聞きます。その他、風紀委員長を始め風紀委員も多数シャーレに所属しているという事実もあります。

一方で現状、トリニティからは正義実現委員会がシャーレに所属していますが、ティーパーティーとしてはまだシャーレにあまり協力できていません。

ミカ様が最近シャーレに入部しましたが、今のミカ様をティーパーティーの一員と表明するのは、色々難しいところがあります。つまり、我々はゲヘナ共に一步遅れていると言えるのかもしれませんが。

ミカ様だって、トリニティのシャーレへの貢献度が、ゲヘナ風情に負けるのはお嫌でしょう?」

行政官は首をわざとらしく傾け、視線の先をミカに固定し、口を三日月形に曲げた。まるでミカが怒るのを期待しているかのようである。

ミカは心中で溜息をついた。今までの自分の言動からして仕方がないとは思うが、ゲヘナの単語が出ただけで冷静さを捨てるような女だと思われるのは、些か以上に心外だった。確かに自分は浅慮などところがあるが、先生がすぐ近くにいての暴れまわる女だと認識されているのは腹立たしい。例え、ミカにとつては置物に等しい他人の評価だとしても、である。

「……あはは☆。確かにゲヘナのごことは私も聞いていたよ。バンデモニウム・ソサエティ万魔殿の子が、

シャーレにいらんだってね。

でもさ、そんなことはいいんだよ。要するに、先生へ恩返ししたいって思った結果がこれってこと？ そんなこと、信じられると思う？」

ミカはそう言つて静かに笑つた。そして即座に笑みを消して、無表情のまま行政官に顔を近付ける。そのまま冷徹な瞳でティーパーティーの行政官を見つめた。先生に向けるものとは違ふ、無機質な昏い黄金色の瞳だった。

同時にナツ、シロコ、シズコが立ち上がる。そして即座に愛銃を取つた。止めようとする先生をシロコが無言で制し、立ち上がった3人は行政官を囲んだ。

「あのさあ、私もそこまで馬鹿じゃないつもりなんだけど？」

低い声で呟き、ミカは喫茶店の床に向けて人差し指を向けた。乱暴にイスに深く腰掛かけ、はしたなく見えない程度にもう片方の手で頬杖を付く。

「シャーレの目と鼻の先で、何をする気？ 実は先生を利用して何かする気、なんて言わないよね？」

床を指差した手を行政官の前に持つていく。

トン、と音を立て、ミカの人差し指がテーブルを叩いた。整えられた綺麗な爪がテーブルと当たる音が響く。トン、トンと音が連続して響く。

「……ねえ、質問しているんだけど？」

ミカの口から放たれる、低い声。それを聞いて、ミカの一挙一動に目を奪われていた行政官は慌てたように首を振った。

「あつ……いや、すみませんふざけすぎました、そんな貫禄出しながら言わないでください。……ミカ様、ナギサ様と違ってエレガントじゃなくてテラー的な方のオーラがあるんですから、怖いんですよ」

両手の平を目の前で合わせて、行政官は愛想笑いを浮かべた。行政官はミカ、そして愛銃を構えているシロコとシズコに視線を向け、腰から吊り下げていた拳銃をホルスターごと抜いてテーブルの上に乗せた。

なお、先生は銃と盾を構えたナツの後ろに座り、困ったような表情を浮かべながら、シャーレの部員たちと行政官を見つめている。

大きく息を吐いた行政官が、顔を上げて先生へ視線を向けた。

「これは誓っても良いですよ。本当に、他意はありません。このお店、そして我々が先生への誠意そのものなのです。……本当は、もっと準備を進めてからシャーレへ通達するつもりでしたよ」

「どうどうハハハ」

苛立っている内心を隠そうともせず、低い声でシロコが言った。

「すでにシャーレには正義実現委員会やゲヘナの風紀委員会、ミレニアムのセミナーの

者がバイトとして多数出入りしています。ここに我々ファイリウス分派の生徒が混ざるのも……まあ難しくはないでしょうが、ちよつと芸がない。そこで、先生に秘密基地と戦力のプレゼント、です」

そう言つて、行政官は指を鳴らした。

ウエイトレスが何人か入つてきて、先生の腰かけている椅子の側に木箱を置いた。

顔を僅かに顰めたナツが静かに木箱の蓋を開ける。

「……たつぷりの銃火器だね。連邦生徒会と戦争が出来そうだよ」

「おお……」

ナツはさらに顔を顰め、昏い色の瞳を行政官へ向けた。一方でナツを見ていた先生は、頭を片手で抑えて強めに息を吐いた。

そんなナツや先生を一向に気にすることなく、行政官は笑みを深くした。

「こんな具合です。この他にも食糧とか消耗品とか。あとは戦闘員ウエイトレスも、まあ先生の好きに使つてくださいな。ナギサ様からのプレゼントですから、バイト代なんていりませんよ。

ああ、わざわざお店を経営しているのは物資を運びこんでも不自然にならないからと
いうのと、トリニティ生徒が多数出入りしても違和感がないようにするためです。表向き、このお店はトリニティのお嬢様による道楽つてことにしています。実際、結構皆ノ

リノリでやっているんですよ？ 他の地域でバイトができる機会なんて、なかなかないですからね。

ウエイトレスたちはフィリウス分派の誇る優秀な戦闘員たちです。……この際ですし、先生には正直に内実を伝えてしましましょうか。ナギサ様とフィリウス分派がシャーレに恩を返すために行動をした、という事実を作る必要があります。正義実現委員会に指示を出す、では駄目なのです。エデン条約の件より前に、ツルギ様もハスミ様もシャーレに所属しておりましたからね。クッククックツツ」

「つまりは身内へのアピールも兼ねている、と。大した恩返しですね、先生への助けになるとかかこつけて……寧ろ其方が本当の目的なのではないですか？」

ジト目のまま店内をぐるりと見渡すシズコに、行政官は微笑みかけた。

「刺々しい物言いですねえ、看板娘さん。まあ、否定はしませんが。」

しかし、我々は本当に先生のお役に立てると自負しておりますよ。出番がないことに越したことはありませんが、備えとはそういうものではないでしょうか？」

行政官は肩をすくめ、パチリとウインクをした。

「そしていざとなったらシャーレのためにすぐに駆け付け、恩を売ることでもできる、と。成程、シャーレオフィスに被害が出た時はここに先生を匿うことだってできるし、悪くはないね。流石はお嬢様方、知恵が回るね」

変わらず低い声で、シロコが小首を傾げて言う。まるで見下すかのように立ったままのシロコに視線を向けられた行政官は、気分を害したかのように大袈裟にため息をついた。

「恩を売るとは、悪意ある言い方ですね。寧ろ恩返しがしたいというのに。これくらいで恩が返しきれれるとは思っておりませんが、こういうのは早めに誠意だけでも見せるべきでしょう。」

ナギサ様も激務に追われている中、片手間ではこの程度しかできないって嘆いておられましたよ。実際、ここに常駐している戦力は私を含めて20人に満たないので、最低限度のものですが」

「これでこの程度って……流石はトリニテイ」

シロコは呆れたように首を数回降ると、諦めたかのように腰を下ろした。それを合図に、ナツとシズコも椅子に座りなおす。

その様子を見て、行政官はニッコリと微笑んだ。

「これからも、先生をサポートする仲間として宜しくお願いしますね？ シャーレの皆様」

◆ その言葉に、先生以外の4人は無言で肯定することしかしなかった。

その後も話を聞いてみたが、喫茶店アゲラタムはやはりとすべきかわかっていたというべきか、喫茶店ムエットへの嫌がらせとは何の関係もなかった。アゲラタム、というよりフィリウス分派は単純にシャーレオフィスに近くて広く使えるテナントが開いていた、という理由だけでこの場所に店舗を構えていた。コンコースに面したスペースを確保したのも、有事の際にすぐにシャーレに駆け付けられるように、階段を下りる手間が少ない場所を選んだ結果に過ぎなかったようである。

アゲラタムを出た5人は、取り敢えずムエットに一度戻ることとした。エレベーターを待っている間、シズコがおずおずとミカに話しかけた。

「……あ、あの、ミカさん……その、聞いても良いですか？」

「ん？ 良いよ。なあに、シズコちゃん？」

振り返ったミカを見つめ、シズコは両方の眉を下げて意を決したようにミカに聞いた。

「さっきの人、フィリウス分派の行政官で、桐藤ナギサさんの仲間なんですよね……？」

それで、ミカさんはクーデターを起こして、桐藤さんを失脚させようとしたんですよね？
？
なのに、普通にミカさんと会話してましたけど……それ、何かおかしいんじゃないですか？」

「ああ……そっか、そうだよね……。当然気になるよね」

合点がいったミカは、苦笑したように言うと、他の4人に視線を向けた。ミカ以外の全員がミカを見つめる。ミカは口を結んで腕を組んでいる先生に向けて微笑みかけると、優しい口調でシズコに話しかけた。

「気にしないでね、シズコちゃん。ええと、多分あの子は気にしていないんだよ。だってあの子、別にナギちゃんと仲良くないから」

「えっ」

低い声を上げて表情が固まったシズコを見つめて、ミカはますます苦笑した。

「まとまっているとはいえ、派閥の皆が仲良しこよしってわけじゃないんだよ。特に行政官は、首長補佐であると同時に次期首長候補でもあるんだよね。仮に私がナギちゃんを失脚に追い込んだところで、フィリウス分派はそのまま私の傘下になっただろうから、あの子の立場は維持されていだろうからね。だからあの子にとって、私は寧ろ恩人なんじゃないかな？ だってナギちゃんが私を庇えば庇う程、フィリウス分派じゃなくてナギちゃんの立場が弱っていくんだもの。フィリウス分派は特にダメージもない。ただ、政治よりも幼馴染との友情を取ったナギちゃんの株が下がるだけ。」

まあ、ナギちゃんは私の件で頭をたくさん下げて、ついでに他の派閥の代表たちにもまとめて頭を下げたから、有事の際はプライドを捨てることも厭わない生徒会長つてことで、ナギちゃんは自分の評価を維持したけどね」

「うわあ……」

聞かないきやよかった。流石にそれには出さなかったが、シズコの顔は無言でそう言っていた。

そんなシズコに微笑みかけ、ミカは両手をパタパタと振った。

「ああ、放置してもあの子はナギちゃん的首を取ろうなんてしないと思うよ。だって今の生徒会長なんて、ただの貧乏くじだもん。取り敢えずナギちゃんがティーパーティーの新体制を創り終わるまで待って、一息ついたら報奨を用意して、ナギちゃんに勇退でも迫るんじゃないかな？」

「……トリニティ、怖い……」

もはや涙目になってしているシズコを見て、その場にいる全員が息を吐いた。

ちようどそのタイミングでエレベーターが到着する。無言で乗り込んだ5人を乗せて、エレベーターは5階へ上がった。

「……何か疲れたね。折角だし、ムエットでおやつでも食べようか」

「良いね、先生。こんな時はあまくいスイーツで、嫌な雰囲気忘却の彼方に追いやるのが一番だよ。嫌なことを忘れるコツは、思い出を記憶に変えてしまうことだ。思い出は何時でも思い出せるけど、記憶は必ず思い出せるものじゃないからね」

「……うん、賛成……」

「ん、そうしようか、先生」

「ごめんね、なんかごめんね……」

先生の一言で淀んだ空気が若干元に戻った。そろそろと5人はムエットへ向かっていく。

まずはミカ、そしてシロコがムエットの店内に入っていった。それに続こうとしたシズコが立ち止まる。シズコの後ろを歩いていた先生とナツも、同じように立ち止まった。

「どうかした？ シズコ」

「……？ あ、すみません先生……ねえナツ、何か音がしない？」

「音？」

スピーカーから流れる店内BGMに加え、断続的に音が聞こえている気がした。何か断続的に固いものに当たるとような音だった。

首を傾げるナツを尻目に、シズコは音が聞こえたような気がした方向、喫茶店ムエット横の非常階段の方へ歩いていった。喫茶店の角を曲がり、非常階段の前に立とうとしたシズコの足が止まる。

そこには、喫茶店の壁に寄りかかる様に立っている長身のロボットがいた。焦点のあつてないような目で、突然目の前に現れたシズコを認識していないかように、ただ前

を見つめている。よく見ると若干震えており、その足元にはクーラーボックスのような箱が置かれていた。

そのロボットは両手に何かを持っていた。それを互いに打ち合わせてカン、カンと音を鳴らしていた。

片手で持っているものは金属製のライター。そしてもう片方の手で持っているものは、透明な瓶だった。瓶の口には白い布が巻かれている。

それを見たシズコは目を見開いた。そして全身の血が凍ったような感覚を脳が認識するよりも先に、叫んでいた。

「――火炎瓶！」

その声が響くと同時に、ナツが先生の腕をつかむとロケットのように駆け出した。

シヤールレ初出勤日⑥

シズコが叫んだ瞬間、何人かの人物がそれぞれ動きを見せた。

まず、当のシズコ自身が動いていた。目の前のロボットは焦点のあつていない目で前だけを見ており、手に持った火炎瓶は投擲とうてきしておらず、そもそも着火もしていなかった。

しかし、その時点でシズコは銃を構え警告する、という手段を即座に放棄していた。これから店に入ろうとしていたため、シズコは愛銃のショットガン「桜ポンポン」のリングを片方の肩にかけており、愛銃は背中側に銃口が上を向いた状態でかけられていた。この状態から愛銃を正面のロボットに向けて構えるまでに、目の前のロボットは火炎瓶に火を点けることが出来るだろう。

シズコの愛銃はショットガンなので、近距離戦に有利な銃である。しかもポンプ・アクション式の連射性能に優れた銃である。ポンプ・アクション式は銃身の下にチューブを付けてチューブラー・マガジン（筒型弾倉）とし、そこに可動式ハンドガードを取り付け、それを押し下り引いたりすることで発射するショットガンのことである。押し下り引いたりすれば使用済み弾薬が排出され、新しい弾薬がチェンバー（薬室。弾丸を発射する爆薬が装填されている部分）に装填される仕組みである。つまりひたすらハンド

ガードを押ししたり引いたりすれば、連射も可能なのだ。

チューブラー・マガジンの中には銃弾が横一列に並んで入っている。ショットガンの弾丸は「ショットシェル（装弾）」と呼ばれ、他の銃の銃弾と違って先が尖っておらず、まるで口紅の容器みたいな形をしている。このお陰で横に並べても、弾丸の先端が前の弾丸のプライマー（雷管。銃弾の底にある点火装置のこと）を突いて暴発、という危険な事態にはならない。

ポンプ・アクション式の欠点はローディングに手間がかかることであるが、当然のように「桜ポンポン」には、すでに弾倉いっぱいまで装填済みである。連射すれば、目の前のロボットはひとたまりもない。銃を撃つことさえできれば、シズコの勝利は揺るがない。

しかしそうだとしても、例えば目の前のロボットを倒すことが出来たとしても、その前に火炎瓶を着火されてしまえば意味がない。着火した瓶が落ちて割れば、火は燃え広がる。その火が万が一、燃え広がって先生に被害を与える可能性は？ 何らかの原因でビルの消火装置が動かなければ？ 火事で発生した煙を先生が吸い込んでしまったら？ 全ては仮定の話である。万が一どこるか刹那以下の可能性なのかもしれない。しかし決して容認できない。可能性があるだけでも、決して容認できないのだ。先生が負傷する可能性は、1パーセントたりとも存在させてはならないのだ。

故にシズコは銃を構えず、着火される可能性を排除するため、逡巡する素振りもなくロボットに飛び掛かり、ロボットの持つライターを奪おうとした。例えば自分がロボットに飛び掛かる直前にロボットが火炎瓶に着火し、自分が火達磨になる可能性が僅かにあったとしても、シズコの頭には最初から躊躇いなどなかった。



同時に動いたナツは、先生の腕を掴みシズコを気にすることもなくその場を離れることだけを優先した。予想だにしていなかった奇襲攻撃を受けて且つ先生がその場にいる場合、先生が一番近い生徒がまずは先生を安全地帯まで退避させる。例えば誰が攻撃を受け、誰が危険にされされていようと、先生が戦場にいることだけは避けなければならぬ。1秒でも早く先生を逃がす。それが、シャーレ部員全員に徹底されている鉄則であった。

ロケットのように飛び出したナツは、先生が何かにつづからないように細心の注意を払いながら跳躍した。まるで水面を跳ねて飛んでいく石のように、先生に気を遣いつつ走り、跳ぶ。

何事かと足を止める他の客を全て無視し、ナツは喫茶店ムエットと真逆のフロアの端まで滑り込み、宙に浮いていた先生の身体を優しく受け止めた。そして先生の前に移動し、盾と銃を構えた。

そんなナツをあつけにとられて見ていた客たちは、ナツがムエットの方に向けた愛銃の銃身を見て漸く危険を察知したようで、我先に逃げ出した。

「先生、使うかい？」

「そ、そうだね」

息を吐いて気を落ち着かせた先生は、ナツに向けて頷くと背負っていた巨大なバックパックを下ろした。先生も、最早突然の戦闘など慣れていた。

「戦術指揮をするから、ナツも準備を。多分、相手は一體じやなさそうだな」
「だろうね」

ナツは後ろを振り返り、先生に向けて微笑みかけた。その笑みに、先生は力強く頷いた。

「多分、全員そのつもりだよ」

「よし、やろうか」

バックパックの中身を取り出していく先生を眺めながら、ナツは先生にも聞き取れないような小声で呟いた。

「さあ、仕事の時間だ。先生の盾役を皆で果たそう、わが友たち」



ナツが先生の腕を取って飛び出した直後、すでに喫茶店ムエットの店内に入っていた

シロコが、衝動に突き動かされたかのように店の外に出る。この時点で店の扉は閉められ、ムエツトの店内にはジャズが流れていたためにシズコの声はシロコの耳には届かなかった。しかし、野生の獣のようなシロコの危機察知能力が、シロコの身体を店の外へと向かわせた。愛銃を構えながら飛び出していくシロコを見て顔色を変えたミカもまた、出迎えの姿勢のまま目を丸くしていたムエツト店主を置き去りにしてシロコの後に続いた。

シロコが店の外へ飛び出した直後、シズコがロボットを押し倒した。シズコは力づくでまずライターを奪い、適当な場所へ放り投げた。そして火炎瓶も奪い、また別の場所へ割れないように転がした。ロボットは対して抵抗もせず、うわごとのように言葉として意味を成していない声を放ちながら体を時折震わせている。どう見ても健常とは呼べない姿だ。

「よしっ、これで——」

一先ず拘束しようとポケットから適当な紐を取り出そうとした直後、目の前の非常階段の上の階から何か落ちてきた。

球状の物体。カン、カンと音を立て、シズコの目の前まで転がった。手榴弾だった。シズコの顔が瞬時に青ざめた。

「……………っあー！」

マズい、先生はどこまで逃げた？ あり得ないとは思いますが、実はまだすぐ近くにいます可能性は？ この手榴弾が見た目は普通なだけで、実はこのフロア全体に被害を与えるようなものだったら？ そんな思考がシズコの脳を電光石火で支配した。

シズコは咄嗟に身体を動かした。前方に向かってダイブし、手榴弾の上にその身を被せた。手榴弾を抱きしめるように背中を丸め、目を瞑る。

直後、手榴弾が爆発した。



「シズコ！」

愛銃を構えながら、シロコが爆発が起こった場所へ駆け付けた。仰向けで倒れているシズコ。その近くには、ロボットが時折身体を跳ねさせ、しかし起き上がりはせずに倒れていた。

シロコは一先ずロボットは無視することとし、シズコの腕を取ると、片手で銃を構えたままシズコを引きずって後退した。

「シロコちゃん」

「ミカ、私は一度店内へ」

「うん」

その言葉だけでミカは状況を察した。銃を構え、非常階段に向け走っていく。

「な、何が……」

「店主、申し訳ないけど、逃げて」

店内に入り、シロコは店主にそう告げると、店主を見ることなくシズコの容態を手早くチェックした。服が若干すす焦げているが、凡そ問題はない。キヴォトスで一般流通している服はそう簡単には燃えないし、破けもしない。

シズコに出血は見られない。吐息も普通で、見た目は不自然ではない。少し苦しそうに呻いているだけだ。

「う、うう……嫌がらせ^{ハラスメント}つてもものじゃないでしょ、こんなのお……」

「シズコ、大丈夫？ 吐く？」

「せ、先生に自分の吐瀉物まみれの姿を見せるくらいなら、死んだほうがマシです……」

シズコは呻くと、しっかりとシロコを見た。

「私も吐瀉物がかけられた姿で先生の前に立ちたくない。だから、聞いた」
「酷い……」

若干涙目になりながら、シズコは自身の腹と胸板を両手でさする。

「あとで、ナツにやっぱり私よりも貴女の方が胸が固いと伝えないと……」

「？——良し、大丈夫そうだね」

華麗に無視した挙句にシロコはシズコから視線をずらし、店の外を見つめた。同時

に、シロコの耳がドアが開く音を捉えた。どうやら店主が裏口から逃げたらしい。

そして、ビルの天井に設置されていたスピーカーから警報と自動音声の避難指示が流れ出した。全くもって遅すぎる。シロコは小さく舌を打った。

「シズコ、アレを付けて回復に専念して。動けるようになったら非常階段の方に。でも私に任せても大丈夫」

シロコはそう言いながら、シズコの手を軽く握った。そして、立ち上がる。

「う、うう……ほんとにカッコいいですよね、シロコさん……。先生に惚れる前に貴女に会ってたなら、貴女に惚れていたかもお……」

口元を引き攣らせて笑うシズコを一瞬だけ見て、シロコは店の外へ歩き出した。

「ごめん、私は今世も来世もその次も、ずっと先生のパートナーだから」



非常階段に向けて走り出したミカの目の前に、もう一つ手榴弾が転がってきた。ミカはすぐにそれを引つ掴み、投げ返す。

非常階段の上の階で、手榴弾が起爆した。

しかし、素人だな。ミカはそう思っつて小首を傾げた。奇襲なら兎も角、戦闘態勢の相手の目の前に何も用意することもなく手榴弾を投げ込むとは。

愛銃の「Quis ut Deus」をくるくると回しながら、ミカはそんなことを

考えた。相手は本当に素人の集団かもしれない。

「まあ、気にしてもしょうがないかな」

独り言を呟きながら銃を構え、発砲。断続的に響く発砲音と煌めく閃光。ドサリ、と何かが階段から転がり落ちるような音。まずは一体。遮蔽物に身を隠す程度の頭はあるようだが、殺気が隠しきれていない。いや、殺気というよりは熱意に近い。相手を倒すことじゃなく、別の何かの感情に支配されているような気配を感じた。

しかし、ここには先生もいる。恐らくこの場にはいないナツが先生を退避させたのだろう。ならば、自分がやることは一つだけだ。

先生に迫る危険は取り除く。例え何があつたとしても、だ。

ミカは肩から掛けている鞆に詰め込んであるマガジン数を思い出していた。ミカの愛銃は銃の左側にマガジン挿入口があり、横向きに長方形型のボックス・マガジン（箱型弾倉）を差し込む。片側に、しかも横向きに何十発もの銃弾が入ったマガジンを差し込んでいるわけである。このため一見物凄くバランスが悪そうに見える、そして実際にバランスが悪いのであるが、ミカの腕力の前ではそんなものは何の障害にもならない。

ミカの愛銃はオープン・ボルト式のサブマシンガンである。オープン・ボルトの「ボルト（遊底ゆうていとも言ふ）」とはチェンバーに蓋をする金属の塊のことを指す。このボルトの中央には弾丸の底のプライマーを打つための部分（これを撃針げきしんと呼ぶ）が入っており、撃

針で弾丸の底を打つとプライマーが撃発し、薬莖の中の火薬に点火して弾丸が発射される、という仕組みとなっている。

そしてこのボルトがチェンバーに蓋をしないで開いている（オープンしている）銃のことをオープン・ボルト式と呼ぶ。ではどうやって発射するのかというと、マガジンをセットした状態で引き金を引くとボルトが「前進」して（バネで飛び出るようなイメージ）弾丸をチェンバーに押し込み、それと同時に撃針がプライマーを打つことで弾丸が発射される。

つまり一般的な銃と異なり、オープン・ボルト式の場合はボルトそのものが動く。文字通り針のような撃針と違い金属の塊であるボルトが動きまくるため、オープン・ボルト式の銃は振動が伝わりやすい。簡単に言うと、発射時に物凄く銃がブレる。これは大半のサブマシンガンに言える話だが、精密射撃にはとても向かない。サブマシンガンとは、基本的に広範囲に銃弾をバラ撒くものだ。ミカの愛銃も例外ではない。つまり、基本的に消費弾数が多いのである。制圧力の高い武器であるサブマシンガンは、まずは消費弾薬数と戦わなくてはならない武器なのだ。

なお、もう一つの敵は過熱による銃身の変形であるが、これについては銃身に被せられた穴の開いた金属筒による放熱（空気の対流による強制冷却）でも気休めにしかならないので、「頻繁に銃身を交換する」という最早諦めとすら言える解決策に頼らざるを得

なくなった銃が多い。ミカの愛銃もその一つである。

なお、ミカは高すぎる身体能力によって力づくで愛銃の振動を抑えることが出来るので、やろうと思えばサブマシンガンで精密射撃も可能であるが、そんなことをするくらいなら相手に銃弾を浴びせつつ近付いて殴り倒した方が早いので、この戦術はあまり使わない。

その代わり、この振動が凄まじいサブマシンガンを片手で撃つ戦術はよくやっていく。実際に、先程も片手で撃っていた。

今日はそんなにマガジンを持つてきていなかったかも。ミカはふとそんなことに思い至り、思わず顔を顰めた。相手はあと何人なのか。

考えていたミカの頭上から銃声。ミカは咄嗟に身体を横に向け、片手で愛銃を上に掲げて撃った。ミカの足元に銃弾が当たる。そして悲鳴、何かが倒れる音が続く。

「あつと、やったかな？」

そこで漸く、ミカは上を見上げた。階段の上の方では何かが動き回っているのが見えるが、手すりが邪魔でよくわからない。人数も、そもそも敵かどうか不明だ。ミカは上の気配を探りつつ、足元に埋まりこんだ銃弾を一瞥した。弾痕からして、おそらくは9ミリ拳銃弾。

「ライフル持ちはいないのかな？」

「ミカ」

後ろから話しかけられ、ミカは後ろを振り向いた。すぐ後ろに銃を構え、片膝立ちの状態のシロコがいた。

シロコは僅かに眉を顰め、無言で自分の目を指差している。数秒それを見つめ、ミカは気付いた。

「あつ、そうだ」

シャーレの先生が指揮する戦闘に欠かせないものを忘れていた。ミカはすぐにシロコの側まで戻ると、鞆をあさり、中から黒い小さな箱を取り出した。外回りに行く前に、先生からもらった箱だ。まるで指輪のケースのようだ、とそんな間の抜けた考えが一瞬だけ頭を過つた。誤魔化すように箱を開けると、中には薄いコンタクトレンズのようなものが2つ入っていた。

「OK、つけるよ?」

「ん、問題ないよ」

ゴクリと息を飲むと、ミカはそのコンタクトレンズのようなものを目に付けた。

シヤールレ初出勤日⑦

それを装着したミカの目に、瞬時に様々な情報が映し出された。例えるならばFPSゲームのプレイヤー視点のように、自身の携帯マガジン数や愛銃の残弾数、視界の隅には簡略化された立体式の駅ビルのマップ。マップには1つの青い光点と白い光点、そして幾つかの赤い光点と緑の光点が浮かんでいる。

「おおく☆、昔やったVRゲームみたいだねえ」

呑気にそんなことを呟くミカに、シロコは軽く首を傾げた。

「そうなんだ。ゲームは開発部の子たちとレトロゲームとかいうのしかやったことがないから、私はよくわからない」

「うん、そうそう、こんな感じなの。私も中等部以降はさっぱり触れていないんだけど……」

そう言いながら、ミカは目の前の光景を見つめた。視界の下部には、見やすい字体で字幕が流れている。先生からの指示だ。

「敵は6階にあと4体、ね。倒れているのが3体……」

「そう。シズコが押し倒したロボットと、貴女が倒したロボット2体」

「つまり判明している限りだと、敵は合計7体。思ったより少ないね」

小さく呟き、ミカは上階を睨みつけた。

「便利だね、これ。『ウエアラブル・デバイス』って言うんだっけ？」

「そんな感じだったと思う」

「ウエアラブル・デバイス」。スマホのように持ち歩くタイプではなく、体に装着したり着用したりするタイプのデバイスのことを指す。キヴォトスでは主に腕時計型と衣類型、そしてコンタクトレンズ型の3つが主流となっており、これはコンタクトレンズ型の一つである。但し、その性能は一般的なものとは段違いであるが。

正式名称は特になく、先生が名付けた「レンズ」という何の捻りも遊び心もない呼称でシャーレ部員が呼んでいるこのデバイスは角膜に張り付けるタイプで、つまりコンタクトレンズと同じではあるが、通常のコンタクトレンズよりもズレにくく、衝撃に強い。そもそもキヴォトスではコンタクトレンズやメガネなどの大抵の着用品が衝撃や爆発に強く造られているのだが、このレンズはそんな一般消耗品の中でもさらにズレにくい。

ミレニアムのエンジニア部とヴェリタスの合作で、先生が持つオーパーツ的なタブレット「シツテムの箱」と接続されている他、先生が運用するエンジニア部謹製の指揮管制用ドローンとも繋がったシステムとなっており、先生が操作するドローンが入手し

た情報をリアルタイムで更新し続ける。

つまりドローン、システムの箱、レンズの3つがシャーレの戦術指揮システムの根幹となっている。

ミカはシステムの箱というものが先生だけが使えるタブレットのようなデバイスだという話を、駅ビルに来る途中で先生からも詳しく聞いていた。

「先生のドローンはきつと、もう上の階に移動している。光学迷彩機能付きの静音で飛ぶドローンだから、屋内であつても戦場で気付かれることはほぼ無い。それに頑丈な機体だから流れ弾がかすったくらいでは傷付かない。エンジニア部渾身の逸品。……一品じゃない。予備も含めて3台ある」

正確に言えば、先生に頭を下げられたエンジニア部が必要以上にハッスルした結果であり、高性能且つ必要な性能だけを獲得し、徹底した無駄を排除することでコストも（比較的）安価に抑えられたドローンである。その性能と経緯を知った早瀬ユウカが「やればできるじゃないのよ!」と割と本気でキレたほど、しっかりとオーダー通りに出来上がっている代物である。エンジニア部に依頼するたびにオーダー（と事前の予想）を斜め上に突き抜けた製品ばかり納品されているセミナーを代表し、ユウカはちよつと泣いた。

「成程ね……」

「事前に一通り把握しているとは思うけど、一応伝えるね。……マップに表示されている光点は、青が貴女。白が先生。赤が敵。緑がシャーレ部員。あとは他者の中で突然味方になった人たちとかが黄色で表示される。民間人は水色だけど、このように多くの一般人がいる場所での戦闘中は非表示にされる」

「突然味方……ああ、私か」

何それどんな状況かと思つたら、アリウスでの自分だった。笑えない笑い話である。「ん、先生と任務をしていると、割とよくある」

あるんだあ、と思いながら、ミカは視線を動かした。赤い光点は上階に纏まっており、ほとんど動いていない。先制攻撃を仕掛けてきた割には動きに積極性が欠けていた。やはり素人っぽいというか、行き当たりばったりな印象を受ける。

「あと、先生が凄く離れている場合や先生がオフィスで指揮をとる時はレンズを付けて話すと、先生に私たちの声が届く。アロナというシステムの箱のメインシステムが、私たちの声をこのレンズを通じて神秘の力で先生の所へ送っているみたい。同じように先生の声も私たちに聞こえる」

「ああ、神秘の力ね。とうとうOSまで神秘の力が使えるようになったか。まあ、珍しくもないかもね」

「うん。先生の声が頭の中に響く感じ。これが慣れると結構心地良くて癖になる」

「あ、そうですか」

何故か聞いてもないことまで説明するシロコに向かい、ミカは真顔を向けた。

生徒の中にはシールドを張ったり、祈りを捧げたりすると他者の傷を治癒できたり、物体を召喚したり、通常の弾丸に毒などの付与効果を与える力を持つ者がいる。特に正式な名称もないため「神秘の力」という実に適当な名前で呼ばれている。

キヴォトスではありふれ過ぎている上に個人個人で力の内容が大きく異なり、本人のやる気や状況によつて効果のほどもしよつちゅう変わり、自分の能力を説明する手段が主観的で感覚的なものしかないということから、誰も真面目に研究や開発をしてこなかった結果、正式名称がつけられることも系統の分類も行われることがなかったという。このためキヴォトスでは普通に、「そういうものがある」程度の認識となっている。「アロナの姿は先生にしか見えないし、アロナの声も先生にしか聞こえない。システムの箱の操作も先生しかできない。つまり、先生がいなければそもそも使うことすらできない戦術管制システム」

「道理で新人に渡されるようなファイルに、詳細が事細かく書いてあったわけだね。知られたところで模倣も対策もしようがないもの、こんなの」

「ん、先生からシステムの箱を奪うか、ドローンを破壊するかくらいしか対策方法がない。ドローンは予備もあるし、そもそもドローン自体はあくまで先生が戦況を見やすく

するためのものだから、ドローンがなくてもこのシステムは使用できる。情報が多少制限されるだけ。

シツテムの箱は常に先生が持ち歩いているから、先生が戦場にいなければ奪いようがないし、先生が戦場にいる時は私たちが奪わせない」

「そして先生の戦術指揮能力は先生自前のもものだから、先生を拘束したりしなければ止められないってわけだね」

「そうだね。レンズとドローンのお陰でやりやすくなったって先生は喜んでたけど、元々それらの道具なしで先生は指揮をとっていたから。私は先生がそれらの道具に頼っていない頃から先生のパートナーだったからよくわかる。

それに最近は先生が不在の時や、先生が指揮をとれない時のシャーレ部員のみでの戦術研究も——」

説明の中でさりげなくマウントを取られ、口をへの字に曲げたミカがジト目をシロコに向けた直後、銃声がかから響いた。銃弾が2人から少し離れた場所に突き刺さる。

「……また9ミリ拳銃弾だ」

「単発だね」

2人は顔を見合わせた。別に睨み合ってはいない。

「シロコちゃんのそれ、アサルトライフルだね。私が先に行っても良い？」

「勿論。アサルトライフルの射手は中距離戦が専門」

「あはは、だよね☆。それじゃあ、手早く済ませようか。先生からの突入許可も出たし」
目の前に浮かんだ字幕を眺めながら、ミカは不敵な笑みを浮かべた。そういえば、久しぶりに銃を撃った。そして、先生の指揮下で戦っている。前者については何とも思わなかったが、後者は自覚すると確かに興奮した。



ドローンをタブレットで操作する先生に時折視線を向けながら、柚鳥ナツは考えていた。この位置からは肉眼でミカたちは見えないが、レンズを通してミカとシロコの動きを把握することはできる。

ナツから見て、2人の動きは満足できるものだった。特にミカの動きが素晴らしい。誰よりも前に出て、誰よりも積極的に先生の敵を仕留めている。

やはり、ミカさんは先生の盾役として最適だ。

圧倒的に強いうえに先生からの指示には従うくらいには素直で、先生からの信頼を得ており、先生に好意を抱き、適度に先生への罪悪感も抱えている。

見込んだ通り。それでこそわが友だ。

ナツは自分の考えが間違っていないなかつたことを確信した。シャーレ部員の中にはミカの入部に難色を示した者がいた。浅慮で先生を危険な目に合わせた愚か者だ、と言っ

た者もいた。しかし、ナツからすればとんでもない話だ。彼女は使える。今のシャーレに必要なものを、聖園ミカは保有している。

私^{シャーレ}たちは先生の手足となり、先生を護り、先生のために戦う存在だ。先生から貰う^{スライツ}ご褒美は大好きだが、別にそれが目当てでもない。ただ、先生が好きだから先生のために働いているのだ。

同志が増えることは良いことだ、とナツは思っている。手足と盾は多い方が良い。聖園ミカはまさに逸材と言えた。これからも、彼女とは仲良くやっていけそうだ、とナツは僅かに微笑んだ。

おっと、そんなことをしている場合ではなかった。ここには銃弾一つ飛んでこないが、やることがある。

ナツは盾を持ったまま銃を下ろし、銃の代わりにスマホを取り出した。シャーレ互助会のグループチャットアプリを起動し、特定のコマンドを打ち込む。

互助会のグループチャットアプリはヴェリタスが用意した専用のものだ。業務連絡は勿論、特定の操作をすると緊急の情報を発信することが出来る。ナツは片手で手早く打ち込み、そして発信した。

「襲撃を受ける」

「先生が同伴中。先生は無傷だが、現在も戦闘中」

それを発信し、現在地点や状況も続けて発信する。すぐに続々と互助会メンバーの既読通知が付く。

さて、これで犯人たちは終わりだ。背後にどんな組織がいても、ここにどれだけの敵がいようとも、もう犯人たちは終わりなのだ。最早、キヴォトスのどこにいても奴らに安全な場所はない。

シャーレが敵に回った。奴らは先生を巻き込むという、禁忌の中の禁忌に触れた。先生が負傷しなかったというのは結果に過ぎない。先生を巻き込む攻撃を行ったという事実だけで十分だ。

シャーレが動く。先生の本気の静止でも行われない限り、シャーレは最早止まらない。過剰な私的制裁など行うつもりは一応ないが、既に「依頼」を受けているのだ。少なくとも、襲撃犯の捕縛と背後関係の捜査くらいはしなくては。

「あとはもう簡単だ。クリム・ティーのスコーンをおかわりするくらいの気軽さで、奴らを狩りだすだけだ……おおっと」

この例えは良くないな。ナツは誰にも聞こえないほどの小声で呟いた後、ポケットにスマホを入れた手で口を覆った。以前同じ例えを口に出したところ、正義実現委員会副委員長の羽川ハスミに「そのどこが気軽なのですか？」と笑顔で怒られたことがあったのだ。随分と理不尽に怒られた気がする。あの人も存外に変わり者だな、とナツは低

く唸った。

あの袖鳥ナツに変わり者扱いされたと知れば、ハスミも流石にへこみそうである。この時のナツは、ハスミがダイエツトに挑戦しては失敗していることを知らない。

ナツはタブレットを睨んでいる先生に聞こえないように、静かな声で呟いた。

「大丈夫だよ、先生。また少し、先生の敵が減るんだよ」

もう、あんな感情を抱くのはうんざりだった。あんな思いも、もう二度としたくなかった。心の底から好きな人が、気が付かないうちに喪われようとしていたなんて、もう二度と嫌だった。



シロコの愛銃「WHITE FANG 465」はアサルトライフルである。アサルトライフルとは、フルオート全自動とセミオート半自動の切り替えが可能なライフルのことを指す。

銃は引き金を引いて弾丸が発射された後、空薬莖を外に排出してから次弾をチェンバーに送り込む。この2つの動作を自動で行う仕組みがある銃を「自動銃」と呼ぶ。「全自動（フル・オートマチック）」とは、引き金を引き続けていれば弾丸が無くなるまで撃てることであり、「半自動（セミ・オートマチック）」とは1発撃つごとに引き金を1回引かなければならないということである。中には全自動の代わりに1度引き金を引くと2（または3）発発射される「バースト（点射）」が可能なものもある。

実際のところ、アサルトライフルのフルオート射撃はキヴオトスにおいてあまり使われることはない。アサルトライフルの発射速度は銃にもよるが、凡そ毎分600発前後。例えば30発入りのマガジンを挿入していた場合、フルオートでは約3秒で残弾ゼロになる。そんな射撃を続けていけばマガジンを幾つ持ち歩いていても足りないし、マガジンの交換中に狙われるリスクも増える。

それ以前に頑丈なキヴオトス人といえども、1人を打ち倒すのにライフル弾を1マガジンまるまる使い切る必要はなく（ミカのように超が付くタフさを持つ生徒を除く）、弾丸の無駄遣いになるだけだ。アサルトライフルの弾丸はサブマシンガンの拳銃弾よりも威力が高いので、サブマシンガンのように連射せずとも敵を倒すことが出来る。銃撃戦が毎秒何処かしらで発生しているキヴオトスだが、それでも倒れた相手への過剰な追撃は倫理的に忌避される傾向にある。

消費弾薬量の問題を無視したとしても、フルオート射撃をすれば銃身は熱くなり、銃身が変形する危険がある。サブマシンガンは銃身の交換を前提として設計しているが、アサルトライフルは構造上銃身の交換が難しい。アサルトライフルでサブマシンガンのように弾幕を張るなど、はつきり言って非効率である。

つまりいくら連射が可能であっても、アサルトライフルはサブマシンガンのように弾幕を張るようなものではなく、あくまで「しっかりと敵を狙わずとも当てられるため遭

「遇戦でも安心」程度であり、サブマシンガンのような制圧力はない。アサルトライフルの本質は「至近距離の敵はサブマシンガンのように連射で薙ぎ倒し、かつ中距離の相手を狙撃することが可能。攻撃にも防御にも使える銃」であり、つまりサブマシンガンより射程が長いことが特徴である。

このため、まずはミカが前に出て、ゆっくりと階段を上がっていった。シロコはその後ろで愛銃を構え、ミカを援護する。

シロコはスコープではなくドット・サイト（照準器の一つで、レンズの表面に浮かぶドット）を標的に合わせる照準器）を装備していた。ドット・サイトはスコープ（望遠照準器）と異なり等倍のため長距離には向かないが、今日は最初から駅ビルに用があることが分かり切っていたので、長距離の相手を狙う必要はない。このためシロコはドット・サイトを装備してきていた。

ミカはゆっくり階段を上がっていく。敵は未だ6階の非常階段出入口付近で待機しているようだ。そう思った直後、赤い光点の内1つが僅かに動いた。

「……つと」

引き金を引く。ミカが発砲した瞬間に壁際からずんぐりむっくりとしたロボットが飛び出した。弾幕がロボットを襲い、ロボットは悲鳴を上げることなく倒れた。

「うーん、便利☆」

マガジンを交換しながら満足そうに呟いたミカは、シロコに対し突入の合図を送ろうと手を挙げ、そしてその姿勢のまま手と足を止めた。ほぼ同時にシロコの足も止まった。

レンズに表示される字幕を見て、ミカは啞然とした。

「……さらに上の7階で、武装したPMC所属らしきロボットが5体出現？」

思わず復唱したミカは、後ろを振り返って困惑した顔を浮かべるシロコを凝視した。

頭の隅に迫いやられていた、敵に対して感じていた違和感が一気に膨張し、まるで霧のように脳を満たしていく光景をミカは幻視した。

シャーレ初出勤日⑧

「ミカさん、シロコさん!」

立ち止まったミカたちの後ろから、シズコが追いかけてきた。顔色や呼吸は特に問題なさそうに見える。

「ん、回復したようでよかった」

「よし、これでナツちゃん以外全員来たね。ナツちゃんは先生から離せないし、この3人で行く感じ?」

「それは、先生の指示を待ちましょう……」

レンズを通して、追加の情報が続々と流れてくる。

駅ビルの武装ドローンたちは何をしているのかと思っていたが、どうやら爆発による警報が鳴った時点で犯人の捕縛よりも民間人の避難を優先していた様である。各フロアに連絡を送り、民間人の誘導を行っているようだが、如何せん駅ビル全体の避難誘導なのでかなりてこずっているようだった。

また、先生は喫茶店アゲラタムの行政官に支援要請を出したようだ。要請を受け、アゲラタムのウェイトレスたちが避難誘導に協力するようだった。頻繁にシャーレでバ

イトしている正義実現委員会の委員たちと違い、ウエイトレスたちは先生の指揮下で戦闘をした経験がないし、相手が数十体というわけでもないなら無理に先生の指揮下で戦闘をする必要もないだろう。

ティーパーティーはアゲラタムに機関銃や無反動砲、対戦車擲弾、拳銃の果てには地雷やC4爆弾まで持ち込んでいるらしいが、流石に屋内、それも民間の商業施設内では不用意に使えない。行政官もアゲラタムをシャーレの臨時拠点とすることは考えていても、マニオライ自体で戦闘が起ることはあまり想定していなかったようである。

一方、ナツがシャーレに連絡を送ったことで、シャーレオフィスに待機していたメンバーや、シャーレに遊びに来ていたメンバーの一部がマニオライに全力で向かってきていたが、彼女たちはミカたち3人とは別行動をとるようである。7階にいる敵ロボットたちのように敵の増援がマニオライに侵入するのを防ぐため、マニオライの周囲に散開して警戒態勢をとるようだ。もう少しすれば、その中にヴァルクューレ警察学校の生徒たちも加わるだろう。

つまり、7階と6階の敵ロボットを相手取るのは、ミカたち3人のみということである。

「7階に出現したPMCらしきロボット、そして6階の敵ロボットの撃退、可能ならば捕縛、ね……」

流れてきた指示にミカは目を光らせ、笑みを浮かべた。こちらは3人で相手は8体。6階に3体と7階に5体である。数の上では向こうが上。それでも先生は即座に戦闘命令を下した。ミカだけじゃなく、シズコもシロコもミカと同じかそれ以上に信頼しているのだろう。それでも先生が自分も少しは信頼してくれていると想像するだけで、胸の奥から湧き出てくる喜びを抑えられそうになかった。

「追加情報が来たよ」

レンズの情報が更新された。

この駅ビルマニオライには今ミカたちがいる屋内非常階段の他に、屋上から1階まで繋がっている屋外非常階段が2つある。ロボット5体はどうやらその内の1つを使い、屋上まで上がった後に7階で待機していたようだ。

マニオライの7階は会議室フロアとなっており複数のレンタル用の会議室、そして小さいながらもコワーキング用スペースがある。レンタル用会議室は、今日の予約は入っておらず、コワーキング用スペースも同様であった。

一方で6階は行政サービスフロアとなっており、行政に関する各種手続きを行える無人カウンターが設置されている他、ちよつとした休憩エリアになっている。幸い事件が発生した時には、無人カウンターにも休憩エリアにも客はいなかったようだ。

つまり、7階と6階には民間人は最初からいなかったようである。

「そういえば、避難警報が出ているのに上の階から降りてきた人がいなかったねえ」
今更のようにミカが呟いた。

次いで、敵の詳細なデータが送られてくる。

「……6階の敵は、拳銃もしくは火焰瓶や手榴弾を装備、ただほとんど動いていない状態。ほぼ無視して良いと思う」

「一方で7階の敵はサブマシンガンが1人、残り4人がアサルトライフル。装備は雲泥の差で、動きも完全に訓練を積んだ兵士だね。……なんていうか、本当におかしな組み合わせの敵だよ」

極めて奇妙な状況だ。ミカは胸の内にコールタールのように沈む嫌な感情を抑えていた。装備は貧弱で動きが素人そのものの敵が先制攻撃を仕掛けてきて、こちらの逆襲を食らうと後から装備が万全な兵士の登場。実に嫌な配置である。

まるで、ドッグランで遊ぶ犬とそれを見守る保護者のようだ。

そんなチープで全く笑えない例えが過る自分の頭に嫌気を感じつつ、ミカはシズコとシロコの動きを観察していた。せめて先生を護りながらシャーレの戦闘を見て勉強できるとでも思わなければ、顔色が悪くなりそうな気がしたのだ。

レンズを通して見てみると、7階の兵士たちはサブマシンガンを持つロボットが斥候役として先頭に立ち、残りが縦隊でゆっくりと進んでいるようである。

ミカたちも歩き出せば、6階でかち合うだろう。6階のロボットたちを置き去りにして。

「ですね。まあ敵の正体を探るのは後にして……取り敢えず先生の指示通り、私が先行しますね」

ミカに向かって頷いたシズコが、愛銃を持ってそろそろと歩き出した。

近距離での戦闘に強いという点では、サブマシンガンとショットガンは同じである。では双方が同時に気付いて交戦した場合、どちらが接近戦で強いのかというと、距離によつて異なる。例えば彼我の距離が5〜10メートルの至近距離の場合、ショットガンが有利である。

通常、銃弾の大きさは「7.62（口径。ミリ）×51（薬莖の長さ。ミリ）」など、ミリやインチ単位を使用し口径の大きさ等で表記するが、ショットガンの弾である散弾は「12番（ゲージやボアとも言う）」や「20番」などと独特の単位で表記する。「12番」は「12分の1ポンドの鉛のボールが銃口にはまる口径」（簡単に言うと、約18ミリ）という意味である。何故にこんな死ぬほどわかりにくい表記をしているのかと言えば、ショットガンは拳銃やライフルのように「銃身の内径＝銃の口径」ではないからだ。

ショットガンの銃口付近は内径が少しすぼめてあり、つまり先端の内側が少し細く

なっている。この絞りを「チヨーク」と呼び、このチヨークがあることによつて発射直後に散弾がバラけるのではなく、ある程度散弾がまとまつて飛び、標的付近でバラけるようにしている。こうしないと銃口付近で一気に散弾が飛び散つてしまい、所謂「ゼロ距離射撃」でもしなければ当たらないほど射程が短くなるためだ。

拳銃などには銃口に「ライフリング（旋条）」と呼ばれる溝があり、発射した弾丸を空中で回転させることで弾道や威力を安定させる。しかしショットガンの銃口にライフリングはなく、その代わりとなるのがチヨークである。

ちなみにこのチヨークを交換することでショットガンの射程を変えることが出来る。チヨークがきついと散弾の射程は伸び、チヨークがゆるいと射程は短くなる。水道の蛇口に取り付けたホースの先をつまみ、水の勢いや飛距離を調整するような感じである。

その他、散弾の粒の大きさも色々と種類があり、「バックショット（鹿撃ち用）」と「バードショット（鳥撃ち用）」の2種類がある。バックショットの方が粒が大きい、粒の数は少ない。そしてバックショットとバードショットでそれぞれサイズがあり、例えば「00」とか「000」とかがある。ダブルオー勿論、対人戦ではバックショットが主流である。

シズコの愛銃は12番のショットシェルを使用するのだが、例えば「12番ダブルオー・バックショット弾」には直径9ミリほどの散弾が8粒入っている。

もし5〜10メートルほどの至近距離にいる敵にこの散弾を適切に撃てば、8粒全て

が命中する。しかもシズコの愛銃は連射も可能。連射して全ての散弾が命中すれば、まさに圧倒的な破壊力となる。

一方サブマシンガンは「弾をバラ撒く」銃なので、たとえ至近距離にいる相手に連射しても、当たる弾と当たらない弾が出てくる。バラ撒く以上、1人に全弾命中などあり得ない。つまり至近距離で交戦した場合、うまく撃てば全散弾が命中するショットガンが有利となる。

しかしショットガンの散弾は、少し距離が離れると急に威力が低下するし、粒も広範囲に飛び散るので全粒命中させるのは困難となる。このため近距離戦でも彼我の距離が20〜30メートルほどになると、途端にサブマシンガンが有利となる。サブマシンガンの発射速度は毎分500〜800発程度であり、手数での勝負となればサブマシンガンが圧倒的だ。

要するに、ショットガンとサブマシンガンで出合い頭に戦闘をする場合、ショットガンを持つシズコは一気に相手の懐に飛び込んで散弾を浴びせる必要がある。

敵はどうかわからないが、こちらは彼我の戦力と凡その配置、フロアの構造も把握している。レンズを通して送られてくる情報を見て、3人はゆつくりと身をかがめて歩いていった。

6階はミカたちに近い方が休憩エリア、7階のロボットたちが下りてくる階段側が無

人カウンターとなっていた。休憩エリアと無人カウンターの間には壁がなく、代わりに床から3Dホログラム映像が浮かび上がっており壁の代わりになっているようだ。浮かび上がっている映像は熱帯魚が泳ぐ水槽をイメージしているようで、幾つか立ち上る泡でできた柱の合間を縫うように、カラフルな魚の群れが空中を泳ぎ回っている。ホログラムでできた水はかなり濃い青色で、魚と泡、そして海藻によつて向こう側が殆ど見えないようになっていよう。とはいえ完全に反対側が見えないわけでもなく、目を凝らせば何者かが動き回っているのが分かるくらいだと字幕が流れていた。

遮蔽物として役に立ちそうにない。壁ではないので普通に通り抜けられるし、勿論防音性など皆無である。

「まったく、設置代もランニングコストも馬鹿にならないでしょうに、無駄にお金をかけて。普通にパーテーションか何かで仕切っていればまだよかったのに……」

小声で文句を言うシズコに返事をしようとしたがそれを止め、ミカは耳をそばだてた。金属音が聞こえた。

一瞬動きを止めたシズコが、ミカとシロコに留まるようハンドサインを送る。シズコは6階への階段を上がりきるもそのままゆっくりと前に進み、休憩スペースを覗き込んだ。

「……」

そしてミカたちに向き直り、指で「OK」のサインを作る。直後、再び金属音。3人が休憩エリアに入っていくと同時に、より大きな音が響く。

シズコたちの目に飛び込んだできたのは、仰向けに倒れたロボットだった。先程のロボットたちとはこれまた体形が異なり、のっぽで細身だが、左腕だけがやけに太いロボットだ。ロボットは僅かに身じろぎしているが、起き上がる様子はない。外傷は無し。

その近くには、休憩エリアの端の椅子に座り込んで俯いている小柄なロボットと、さらにその奥で壁に寄りかかる様に床に座り、両手足を伸ばして顔を天井に向けている少し太ったロボット。こちらは眠っているように動かない。同じように、外傷はなし。彼らの足元には、火のついていない火炎瓶や安全ピンを付けたままの手榴弾、そして拳銃が転がっている。

シズコは音をたてないようにそれらの武器を少し遠くに転がし、ロボットたちに顔を近付けてそれぞれを数秒見つめた後に、ミカとシロコに顔を向けてロボットを指差したあと、ミカたちに向けて手首を回した。「敵に反応なし」のハンドサインだ。

火炎瓶や手榴弾を投げる、飛び出して拳銃を撃つなどの単調な行動しかできず、被弾もせず勝手に意識を失ったロボットたち。ますます嫌な感じがして、ミカは小さくため息を吐いた。

これで6階にいたロボットは全員。残るは現在、7階から降りてきて6階の奥までやってきた5体のPMC風ロボットだ。

ミカたちは足音を立てないようにそろそろとロボットたちの横を通り過ぎていく。目の前には壁の端から端まで広がる巨大なホログラムが浮かび上がっていた。

キヴォトスで一般的に使用されているホログラムは、ロボット型住人にも普通に見える。ホログラムが広告やパフォーマンスのために使用されているのだから当然である。

敵もまた、6階にいるロボットたちのことは把握しているはずだ。PMC風ロボットたちの目的が6階のロボットたちの回収かどうかはわからないが、いきなり6階に閃光弾や手榴弾を投げ込んだりしてきていない以上、彼らもあまり無差別に攻撃するつもりはないらしい。それはこちらと同じだ。ホイホイと手榴弾やミサイル（シロコの持つドローンに搭載されたミサイル）を使うつもりはない。

ゆっくりと、彼我の距離が縮まっていく。シズコとミカが歩く中、シロコはその場面に立ち止まり、スタンディングポジション（立射姿勢。立ち止まって撃つ姿勢のこと）を整えていく。シロコのアサルトライフルはショットガンやサブマシンガンより遥かに射程が長いので、ここで中距離射撃をするつもりのようなのだ。

まずは足を少し開き、左足を半歩前に出す。そして銃床ストックを肩の高いところに当てる。次にコム（ストックの上の部分）に頬骨を乗せた。アサルトライフルは銃を構えた時に

コムに頬骨を乗せるため、コムの高さで目の高さが決まる。つまり正確に狙撃するためには、頬骨から目の中心までの高さ、コムから照準までの高さを同じにしなければならない。この高さのことを「コム・ドロップ」と呼ぶ。

キヴオトスで愛銃を持ち、その銃にストックがある場合は、ストックをオーダーメイドにするのが常識だ。人それぞれ背丈や腕の長さに首の長さ、顔の大きさに至るまで異なるので、理想的なコム・ドロップを確保するには丁寧な調整が必要だからである。このため一度愛銃に慣れてしまうと、レンタルや未調整の一般用の銃が扱いにくくなってしまう。当然、シロコの愛銃のストックはシロコの体格にすっかり合っている。

そのままシロコはストックのチークピース（側面の頬を押し付ける部分）に頬を寄せ、ドット・サイトを覗き込んだ。勿論チークピースの厚さも目の位置に大きく関わっているため、チークピースもシロコに合わせて作られている。

立ち止まったシロコに向けてシズコとミカは頷き、静かに、しかし一步一步前へ進む。ホログラムの魚たちへ向かい、少しずつ近づいていく。

ホログラム越しでも、相手側の先頭がうっすらと見えてきた。敵ロボットのカメラアイもシズコたちを捉えたらしい。こちらに素早く銃口を向ける。

「――前方に標的 B！」

敵の声が響くと同時に、サブマシンガンの連射。シズコ、ミカもまた、同時に動いた。

身をかがめて走り出したシズコは敵の射線から逃れるように大回りして敵へ投入し、先頭のロボットの懐に飛び込む。発砲。そしてハンドガードを動かす。再度の発砲。まともにショットガン連射を浴びたサブマシンガンを持ったロボットは、大きくのけ反り、倒れた。

一方、シズコと違い一直線に突撃したのがミカだ。ホログラムでできた壁から飛び出し、姿勢を低くして向かってくるミカに対し、4体のロボットがアサルトライフルを構え、一斉に撃ち始めた。

弾丸がミカの頬や身体に当たるが、ミカは止まることなく接近し、敵ロボットの顔面近くに愛銃の銃口を向ける。ぎよつとしたように正面の敵ロボットの動きが止まり、それが命取りとなった。撃つ。

「ぎがっ」

倒れていく敵に目もくれず、さらに姿勢を低くしてロボットの横を通り過ぎ、次にミカの前に現れたロボットに向かい足を薙ぎ払うように振るう。豪快な音を立て、その奥にいたロボットの足が曲がり、体が宙に浮いた。ミカは愛銃の銃口を少し下げ、横向きになったロボットの胴体に発砲した。ロクに反撃も声を上げることすらできず、ロボットは倒れこんだ。

その時点で漸く体の反応が追いついたのか、さらに奥にいたロボットが悲鳴を上げ

た。が、その悲鳴はシロコがロボットの頭に撃ち込んだ銃弾によって強制的に黙らされた。

そして一番奥にいたロボットには、既にシズコが向かっていた。呆然としていたロボットは横から走ってくるシズコへの対応が遅れた。シズコに銃口を向けるよりも先に、シズコが引き金を引いた。再びショットガンの連射。シズコは冷徹な目で倒れ伏したロボットを見下ろす。ロボットが完全に動かなくなったことを確認し、銃口を下げた。そして周囲を見渡し、小さく呟いた。

「……はい、先生。終了です」

双方が戦闘を開始してから終了するまで、1分程度しか経過していなかった。

「うわあ、痛いなあ……何発か食らっちゃった。うくん、先生指揮下でのシャーレ初陣がこれか〜」

ミカはマガジンを交換しつつ、低い声で唸った。敵戦力は大したことはない。時間もかかっていない。しかし、本当に気味が悪い敵だった。

「まあ、少しは私も役に立ってこと、証明できたかな☆？」

そう言って微笑むミカに向かい、ホログラムの水槽を抜けて近付いてきたシロコが、ゆっくりと頷いた。

シヤールレ初出勤日⑨

この日、早瀬ユウカの機嫌は久方ぶりに最低値に届くほど悪かった。正確に言えば、とある通知のお陰で急降下した。

今日は聖園ミカの初出勤日である。ユウカは先生と共に他の当番を厳選し、そして希望者から3人のメンバーを選んだ。ミカに対して敵意を抱いておらず、オフィスでの書類仕事と外回りを教えることが可能で、有事の際に戦闘のサポートもこなせる人物。結果、ナツ、シロコ、シズコの3人を選んだ。

先生と一緒にじっくりと選出したメンバーだ。3人とも先生と知り合ってから長く、特にシロコはシヤールレメンバーの中でもユウカに次ぐ古参である。ユウカは3人を信頼しているし、3人からの信頼も得られていると自負している。何より、先生が太鼓判を押している。おもちゃを購入する時のチョイスだとか、先生のセンスには時折呆れているが、それでも戦術指揮と人材を配置するときの先生の目は確かだ。何よりも信頼している。3人とも、ミカと問題など起こさないだろう。

しかし、それでも心配だった。どうも落ち着かない。確率的に成功するとは思うのだが、それでも心配なのだ。

そしてそわそわしながらミレニアムサイエンススクールのセミナー執務室でいつも通りの仕事をしていた時にシャーレ互助会のグループチャットの通知音が響く。それも緊急通知だ。急いでスマホを手に取ったユウカは、画面に浮かんだ文字の羅列に目を通すと歯を食いしばった。奥歯が軋む音が室内に響く。

「……………やつてくれたわね……………」

先生がいるすぐ近くで火炎瓶を投げようとしたなど、断じて許してはおけない愚挙だ。誰がどんな思惑でこのような行為を仕出かしたのか、突き止める必要がある。頭が一瞬だけ沸騰しそうになり、急速に冷えていく。様々な考えが頭の中で閃光のように生まれては消えていく。

セミナーの執務室ではなく自室だったら、怒声の一つや二つくらいは口から漏れ出たのかもしれない。自分の胸の奥におどろおどろしい逆巻く炎が生まれるのを自覚し、ユウカは天井に向けてはしたなく強めの息を吐いた。若干叫び声も入っていたかもしれない。先生に見られていなければセーフである。

数十分後、ユウカのスマホが鳴った。画面に表示された名前を見て、ユウカはすぐにスマホを耳に近付ける。

「もしもし、シロコ……………ええ、挨拶はいいわ。状況は理解している。……………そう……………安心して、ヴァルクキュレとは話を付けるわ。不特定多数の市民が集まる駅ビル内での暴挙

よ、シャーレが出る理由としては十分よ」

スマホを持ちつつ立ち上がったユウカは、執務室の隅に置いてある先生が愛用しているものと同じコーヒーマシンへ近付き、スイッチを押した。作動音とカップにコーヒーが注がれる音が、ユウカ以外誰もいない執務室に響く。

「ええ、データをヴェリタスに送るわ。セミナーこっちでも調べてみる。……当然よ、誰一人として逃がす気はないわ。そっちの方も進めておいて」

コーヒーマシンの作動が止まると同時に、ユウカはカップを手に取って席へ戻った。湯気が昇るカップに軽く触れる。そのぬくもりが、心を落ち着かせてくれる気がした。

「貴女が気になるのは……そう、それよね。大丈夫、独占したりはしないから。権利は皆にあるもの」

ゆつくりとコーヒーを啜り、ユウカは激情を抑え込んだ深海のような色の瞳で、前を見つめた。

「……そうね、その通りよ……。一刻も早く……ええ、わかってる。では、また。明日の10時に一度、先生と互助会に報告を上げるわ。知っているでしょう？ 私は狩りは好きではないけれど、他人を待たせるのは大嫌いなものよ。特に、先生に関することではね。……ありがとう、またね」

そこまで言って、ユウカは電話を切った。深呼吸を一つ。もう一口コーヒーを啜り、

ユウカはそのまま別の相手に電話をかけた。

「こんにちは、チヒロ先輩。……ええ、その件です。お時間、宜しいでしょうか？……ありがとうございます。では、10分後にノアと一緒に伺いますね」

◆ 「貴女は本当に強い人だよ、ミカさん。私のように、フワフワの綿菓子のようなモノよりもね」

「えっ」

目の前に座っているナツの言葉に、ミカは思わず顔を上げた。目の前のナツはそんなミカを気にすることもなく、瞳を輝かせながら美味しそうにホットミルクを啜っている。

現在、ミカたちはシャーレオフィスのカフェで休んでいる。ロボットたちを全員捕縛したシャーレのメンバーは、彼らをヴァルクユールに引き渡した後、喫茶店『ムエット』の店主と少し話をしてオフィスへと戻ってきた。シャーレオフィスで留守番をしていた部員たちは駅ビルにいた市民たちの避難誘導を終えた後は帰宅しており、現在、このカフェにいるのはミカ、ナツ、シロコ、シズコの4人だけである。

前にオフィスに来た時もカフェでホットミルクを振舞われたミカは今回初めて知ったが、仕事が一段落した後や外回りからの帰還後にカフェでホットミルクを飲むのは、

シャーレ当番のルーティーンと化しているらしい。先生の真似をしているうちに、いつの間にやらこれが恒例になっていたようだ。

「ミカさんのお陰で、シャーレの戦力はますます上がったと言っていていいだろうね。ありがとう、ミカさん。これでまた、先生の盾は進化したと言えるよ」

じつとミカを見ながら、ナツはちびちびとホットミルクを啜っていた。星の様な瞬きでありながらも、どことなく怪しい光を放つ目に、ミカは小さく息を飲んだ。

「ミカさん、私たちは一致団結し、先生を護り続けなくてはいけないんだ。だからこそ、今日の貴女を見て確信したよ」

「あ〜……」

ナツの瞳を見返し、ミカは苦笑しながらホットミルクを一口飲んだ。喉の奥に温かくて甘いミルクが流し込まれていくのを感じて、脳内に浮かんだことを言葉にするか一瞬だけ悩んだ。そして、ミカは話し出した。

「合格点はもらえたってこと？」

「役に立つことを証明できたかと聞いてきたのは、ミカ」

「ん、まあね……」

問いかけるも自分の隣に座っているシロコに間髪入れずに指摘され、ミカはますます苦笑した。

「……ミカさんも、大体は気が付いているかもしれないかもしれませんが……今日の当番のメンバーは先生が組んだんです。正確に言えば、先生とユウカさんが、ですけど」

そう言つて、ナツの横に座っているシズコがニツコリと微笑んだ。

「あんまり出番はなかったですけど……私とナツがミカさんの書類仕事の指導役、シロコさんが万一外回りの際に戦闘が起こった場合の支援役、です。シロコさんが支援役なのは、ミカさんの戦闘能力はとても高いから戦闘の指導は必要ないと思うけど、シャーレの指揮管制システムを使用した戦闘の際に勝手が違つて戸惑うだろうから、ということですよ。実際は、すぐに慣れてしまいましたね」

シズコの言葉に、ミカは小さく頷いた。実際のところ、何となくそうだろうなとは思っていた。ナツ、シズコ、シロコの3名ともミカに露骨な敵意は向けてくることはなく、そしてナツは自分と同じトリニティの生徒。どうも、偶然とは思えなかった。

「別に騙したいわけではないから最初に言っておくけれど。私たち3人は事前に話し合つて、ミカのことをどう思っているかを互いに共有している。勿論、先生にも話している。……共有とはいつても、私たちは全員凡そ同じ考え」

そう言つて、シロコは感情を悟らせないような色の無い瞳をミカに向けた。

「はつきりと言つてしまうと……私たちは、ミカさんには特に怒りを抱いていない。いや、ミカさんにそういった感情を向けるほど余裕がないというべきかな」

何時もより数段低い声で、ナツはゆっくりとホットミルクを啜りながら言った。その瞳が黒く濁っていくのを、ミカは見た気がした。

「余裕がない……………」

「私はトリニティの生徒だよ。先生が殺されそうになったのはトリニティの古聖堂。私に通っている校舎からは離れているけど、同じ自治区の話。シズコのような百鬼夜行とかの他校の生徒に比べれば、遥かに現場に近かった。……近かったはずなんだ」

「それは……………」

ミカが何かを言い、口を閉じた。ナツが首を横に振ったからだ。その仕草を見た時、ミカは自分が何を言おうとしていたかを忘れてしまった。或いは、最初から何も考えずに口を開いたのかもしれない。それすらも、わからなかった。

「ナツ……………」

シズコがナツの肩に手を置こうとしたが、ナツはそれを手で制して再度首を横に振った。

「……………」でも、結果はどうだい？ 私は先生が殺されかけていることも知らずに、ただニュースを見ていたよ。街を散策しながら、トリニティ中心街の特設モニタースタターでね。……先生の安否がわからない、襲撃されたという未確認情報がニユースキャスターによって読み上げられた時、私が何をして、何を思ったか、知りたいかい？……………馬鹿み

「ただよ、本当に」

何時もと全く違う、感情が籠められていない声。まるで小説を朗読しているかのような声だった。それが恐ろしく不気味に感じ、ミカは僅かに羽を震わせた。

「いや、先生がエデン条約の調印式に参加するということは、事前に互助会によって共有されていたんだ。でも、私はその情報を意図的に忘却していた……気がする。多分、認めることを脳が拒否したんだろうね。ニュース映像に映った爆発が起こったところ……あそこに、先生がいるということ。今なら思う。叶うなら過去に戻って、その時の自分を張り倒したい、とね」

ナツはそう言つて、椅子の背もたれに体を預け、天井に向けて息を吐いた。

「……ミカさんにきつく当たるなんて、とてもできない。私は先生を護れなかった……護ろうと行動することすらもできなかったんだ」

絞り切る様にナツは言った。再びナツの目がミカを見た時、その目は深い血の色のような赤い光を放っていた。

「だから、私は……ミカさんに頼りたい。私は稀代の大馬鹿で、一人で先生の盾になるという責務を果たすことはできない。でも、それでも先生を護りたいんだ。愚者な私でも、先生を喪いたくないんだ。ミカさんと一緒に、シャーレをもつと強くしていきたい」

ナツは眉を下げ、ミカに頭を下げた。

「……ミカさん、私は——」

ナツが口を開いた瞬間、ミカは大きく頭を下げた。

「ごめんなさい、私が悪いのに……」

もう聞いていられなかった。ナツの言葉を遮って先手を打つように頭を下げてしまったことに、ミカは酷い自己嫌悪に囚われた。胸が灼けるように熱くなり、腑が痛むような不快感が心の奥底に溜まっていく。ユウカの時と同じだ。自分はまた、逃げたのだ。自分を罵る気力すらも沸かなかった。

「ミカ、頭を下げないで。今は、ナツの話を聞いて」

隣から鋭い声が飛び、ミカの耳を貫いた。本当にその通りだ、シロコの言葉が正しい。叱責が心の底からありがたかった。ミカはのろのろと顔を上げた。ナツはまだ頭を下げてたままだった。

「……いや、シロコさん。これ以上はいいよ。前にユウカさんが言っていたな……『どんな天才でも、自分の本性こゝろは分からない』と。……ああ、そうだよね……まったく、そうだ。」

私は何を言いたいのか……そうだ、私がミカさんに怒りを抱いていないというのは本当だよ。心の底から、そう言える。だって、先生が許しているからね。憎む憎まないという問題じゃない、当事者の先生が許せば……これは、終わった問題なんだ。勿論、ミ

カさんについてはただどね。アリウス共はまた話が別だ」

ナツはそう言って、顔を上げてミカを見た。

「だから、私はミカさんに何もしない。寧ろ、ミカさんと一緒にシャーレ部員として頑張っていきたい。共に……先生の盾で在り続けたい」

「……私も、ナツと同じです」

シズコがミカを見つめた。真つすぐな瞳だった。

「私はシャーレの部員です。自分の意思で入部して、自分の意思で先生の指示の下、働いているんです。先生の意向を私情で無視しませんし、正直、そんな気もありません」

そう言って、シズコは目を逸らして床を見た。

「ナツと違い、私は自分を責めることもできませんでした。……ただただ、衝撃で。呆然として。震えてて。……結構、泣きました。」

そして、吹っ切れました。悔やんでもしょうがないし、今度は先生を絶対護ろうって思っていますよ」

そう言って、シズコは笑顔を浮かべてウインクをした。そしてふう、ふう、とホットミルクに息をかけ、啜った。どうやら猫舌らしい。

「……ヒフミの要請で現場に行つた私がここで話し出すのはどうかと思うけど。……ミカに思うところがないというのは、私も同じ」

今度はシロコがくいつとホットミルクを飲んだ。そして暫く黙りこくった後、微妙な表情を浮かべながらミルクを飲み込んだ。まだ熱かったらしい。

「……ん、先生がミカを許した以上、言うことなんてない。パートナーは相手の意を汲んで、尽くす者」

「え、何その言い方、ズルくないですか？」

「ズルくない」

急に低い声を出して昏い瞳を向けるシズコに対して、シロコは涼しい顔で即否定した。

「ズルいけどカッコいい……この人ホント反則だわ。男装させて紳士役でウェイターとかやらせたら凄いな客たらしになりそう……」

「……わが友よ、それは駄目だ。シロコさんがウェイターなんてしたら、すれ違う客全員の首に手刀を叩き込んでしまうよ」

「ナツ！ 貴女、シロコさんを何だと思ってるのよ！」

「アビドスの制服着たギャングかな。燭台が置いてある白いテーブルで、黒スーツを着てクリームブリュレ食べている方が似合うよ。食器の横にドラム・マガジン（円形弾倉）のサブマシンガンか、短めの中折れ水平2連式ショットガンでも無造作に置いてあれば最高」

「くっ、否定できない！」

「……」

突如始まったシズコとナツの漫才を尻目に、シロコはマイペースにホットミルクを啜る。もう自分の言いたいことは言い終えた、という雰囲気である。

ミカはシロコの顔をチラリと見た。視線に気付いるのか気付いていないのか、シロコは無表情でひたすらホットミルクを飲んでいった。

でも、それで良いのだろう。もう、シロコの出番はないのだとミカは気付いた。

ミカは意を決して、声を上げた。

「その、ナツちゃん。そしてみんなも……私を責めないでいてくれて、ありがとう。私もシャーレで皆と一緒に、先生のために戦いたいと思っっているよ」

「……お礼を言われるようなことでは……あ、いや、そう……だね。どういたしてまして……なのかな？」

眉を下げたナツはシズコを見て、再びミカに視線を戻した。それを3回繰り返して、複雑そうな表情を浮かべて頷いた。

「そうですね……あ、ミカさん、私たちには謝らないでくださいね。いや、本当に。謝られる資格なんて、無いのです」

ナツに視線を向けられてナツ以上に困った表情を浮かべたシズコもまた、頷きながら

言った。そして困ったようなおかしいような、これまた複雑そうな表情を浮かべた。

それを見て、ミカも同じような表情を浮かべた。そして唯一全く表情を変えていないシロコにも、軽く頭を下げた。

「シロコちゃんも、ありがとう」

「ん」

シロコはミカの方を向き、ただ一言だけそう言った。

相変わらず感情が読み取れない冷たい瞳だが、ミカにはそれが心地よいとすら感じられた。

シャーレ初出勤日⑩

カフェでナツたちと話を終えたミカは、先生に呼ばれて執務室へとやってきた。ノックして返事が聞こえたので何も考えずに執務室に入ったミカはギョツとした。

先生は奥の方にあるデスクに向かっていたが、目の前に広げている書類には目もくれず、手に持っているものを見つめていた。拳銃だった。

「せ、先生、何しているの!?! 危ないよー!」

「あつ、またやってしまった。ごめんね、大丈夫だよ」

焦って声を上げたミカに向かって、先生はにこやかな笑みを浮かべて持っていた銃をミカに掲げるようにして見せた。

「チェンバーは空。マガジンすら入っていないよ」

「それが危険なの!」

ミカは眉を吊り上げ、先生の持つ銃を指差した。

全く、心臓に悪い。拳銃が暴発すれば、それだけで先生の命が危険にさらされるのだ。そもそも銃の事故の大半は、その銃が安全（装弾されていない、または故障していない）と信じ込んだ事が原因で発生する。装填されていないという思い込みは非常に危険だ。

「全ての銃器は装填状態にあることを疑え」というのは、銃器を扱う上での初歩の初歩である。

「ほんつとに、もう！ 先生……危なっかしいにも程があるよ！」

「ごめん、ごめん」

先生はデスクの上に拳銃を置くと、眉を下げて両手を振った。先生へ見せつけるように大きなため息をついたミカは、先生の側に近付いてデスクに置かれた拳銃を見下ろした。キヴォトスではレンタル品や練習品、中古品、そしてブラックマーケット等で売買されている粗悪品くらいでしか見ない、「遊び」のない黒色塗装の銃だった。グリッパネルに連邦捜査部「シャーレ」の刻印がされている。標準的な見た目の自動拳銃だった。

「これは？」

「連邦生徒会からの支給品。正確に言えばシャーレの備品だけど、まあ、私の銃かな」

「へえ……触って良いかな？」

「どうぞ」

戯れで言ってみたもののあつさりと許可され、ミカは内心ドキリとした。キヴォトスの生徒にとつて、愛銃とは常日頃からメンテナンスとカスタムを欠かさない携行品であり、相棒である。余程心を許していなければ「愛銃」を他者に触れさせることなどない。

頭の中の冷静な部分は、「先生なら誰だって即答で許可するだろうし、そもそも支給品

なんだからそこまで愛着もないだろう。使う機会なんてないだろうし」と呟く。しかし、盛大に弾ける乙女心の前では塵に等しかった。哀れにも冷静な指摘をした理性は、乙女心によつてサンドバッグのように殴られて撃沈しそうである。

内心のドキドキを必死に隠しつつ、ミカは宝石を扱うように慎重に先生の銃を手を取った。

「本当にごめんね。生徒の前では弄らないよう注意していたんだけど。……見られるたびに皆血相を変えるんだよね。」

最近は特に激烈な反応が返ってくるから……普段は私室でやっているんだけど、この前ヴェリタスに見つかつてね……。また執務室に逆戻りさ。

確かに使う機会なんて無いし、私は射撃が下手なんだけどね……一応は支給品だし、錆びさせてリンちゃんに返すわけにもいかないから、最低限のメンテナンスとチェックはしているよ。経験も知識もそんなにないから、細かいところはガンズミスに丸投げしているけど」

「ふうん……」

それはそうだろうなあ、と内思いながら、ミカは流れるようにプレス・チェックを行つた。「プレス・チェック」とは、銃弾がチェンバーに装填されているかどうかのチェックのことだ。自動拳銃の場合、銃身を覆っているスライドを少し引けば、弾薬の

底が銃身後部に見えるかどうかで判別できる。これできちんと装弾されているかどうかを確認できるのだ。チェンバーが空であることを確認し、ミカは安堵の息を吐いた。

自分なら先生が拳銃のローディングをしているところを見たら、口から心臓が飛び出すかもしれない。今までよくも、心臓麻痺を起こした者が出なかったものだと感心したいくらいである。

ふと先生のデスクに視線を落とすと、マガジンと幾つかの9ミリ拳銃弾が転がっていた。先生のデスクの上にあるというだけで、この小さな弾丸が死神の鎌に見えてくる。今すぐ弾丸をぺちちゃんこになるまで握り潰したい衝動を堪えつつ、ミカは拳銃をデスクの上に置いた。

そういえば前に聞いたことがあったが、先生がいた「外」の世界では銃が厳しく規制されていて、特殊な職業についているか、特別な資格の保持者でなければ銃の所有や発砲は認められていないという。そして先生は特殊な職業についていたわけでもなく、資格も持っていないかつたらしい。だから先生には射撃の経験も殆ど無く、銃についての知識も乏しいようだった。

「でも、急にどうしたの?」

「これと見比べていたんだ」

こてんと小首を傾げたミカに向かい、先生はそう言って、デスクの上に置いてあった

写真をミカに渡した。ミカはそれを受け取り、僅かに眉を顰めた。写真に写っていたのは、雑に塗装されたリボルバー拳銃だった。

喫茶店ムエツト襲撃犯のうち、6階で倒れていたロボットたちが持っていた銃だ。

それは9ミリ拳銃弾を使用するリボルバーだった。拳銃は主に「自動拳銃」と「リボルバー拳銃」に分かれる。自動拳銃は文字通り自動銃の拳銃で、リボルバー（回転式拳銃）は、「シリンダー」と呼ばれるブロックが備わっている拳銃である。シリンダーはまるで蓮根のような形をしており、チェンバーを兼ねたマガジンで造られたブロックである。つまりリボルバーには複数のチェンバーが備えられている。

ちなみにキヴオトスでは「拳銃」もしくは「ハンドガン」という呼び名が一般的である。「ピストル」とはあまり呼ばない。「ピストル」とはキヴオトスの基準では「1つの銃身に1つのチェンバーを持つ拳銃」のことを指す。つまりリボルバーはピストルではないため、ピストルとは自動拳銃のみを指す言葉なのである。そんな事情で自動拳銃とリボルバーをひっくりかえした言い方である拳銃或いはハンドガンという呼称が一般的となっている。

写真に写っていたのは、リボルバーの中でも「ダブル・アクション」と呼ばれるものだった。拳銃の撃発機構は主に「シングル・アクション」と「ダブル・アクション」に分かれる。ここでいう「アクション」は「機械の動作」を意味する言葉であり、「人間（射

手)の動作」という意味ではない。銃の種類などの名称は前者のアクションと後者のアクションを使い分けており、そのお陰で名前だけ聞いてもイメージしにくいのである。

リボルバーの場合、銃を撃つときに撃鉄(げつこ)(発射時に銃弾の底のプライマーを叩いて点火させる部品のこと)を起こす必要がある。この撃鉄は発射前は倒れており、撃鉄が倒れている状態では引き金を引いても発射されない。そこで「シングル・アクション」の場合、まずは指で撃鉄を起こす。こうするとシングル・アクションが弾丸1発分だけ回転し、引き金を引くと撃てる状態になる。つまりシングル・アクションの銃は、「1発撃つごとに1回指で撃鉄を起こす」必要がある。

対して「ダブル・アクション」の場合は、引き金を軽く引くと自動的に撃鉄が起き、シングル・アクションが1発分回転する。そして最後まで引き金を引き切ると撃鉄が倒れ、弾丸が発射される。つまり「ただ引き金を引けば弾丸が発射される」のがダブル・アクションである。

引き金を1回引くと「撃鉄が倒れる」というシングル(1回)のアクションがおこるのが「シングル・アクション」、引き金を1回引くと「撃鉄が起きあがつて、次に倒れる」というダブル(2回)のアクションがおこるのが「ダブル・アクション」というわけだ。人間が動作するアクションではないというのは、そういう意味である。

つまりダブル・アクションのリボルバーは、「弾を込めて引き金を引けば」撃てる。極

めて簡単である。リボルバーは弾丸を込める方法も簡単だ。例えばこのタイプのリボルバーはシリンドラーをずらし、弾丸を込めてはシリンドラーを手で回す動作を繰り返すだけだ。時間はかかるが、素人でもぶっつけ本番で行える。

素人でも簡単にローディングと発射ができ、自動拳銃と違って排莖しないので排莖不良や装弾不良（「ジャム」とも言う）がほぼ起こらず、動作不良が発生しにくいのがダブル・アクションのリボルバーのメリットである。

「ミカはこのリボルバー、どう思う？ 素人でも簡単に扱える銃だ」
先生が真剣な表情で、ミカを見つめた。それに応えようと、ミカも真面目な表情になる。

「しかも、中古品だね」

ミカは写真をデスクの上に置き、写真に写っているリボルバーを指差した。そのリボルバーのグリップには、黒い金属を盛り足したような妙な膨らみがあった。恐らくこのリボルバーはどこかのPMCや警備会社などの企業が使用していた練習品か何かだろう。そしてその刻印が消され、どこかに売り払われたのだ。

「ブラックマーケットにでも流れた代物かな」

「多分、そうだろうね。あそこが絡むと……はあ、ややこしくなる」

先生はため息をつき、難しそうな表情を浮かべて写真を睨みつけた。

ブラックマーケットは連邦生徒会の管轄から外れた無法エリアである。極めて広大なエリアで、キヴォトスのあらゆる自治区から停学・休学・退学した生徒が集まり、さらに犯罪集団の多くが拠点としている危険地帯だ。キヴォトスで違法、不法とされている製品はその多くがブラックマーケットで取引されている。

「これまでシャーレは、依頼のために何度もブラックマーケットに押し入っては、不良や犯罪集団と戦ってきた。私たちは、完全にブラックマーケットと敵対している立場というわけだ。これ以上は流石に……と言いたいところだが、依頼を受けていて表の世界に実害も生じている以上は、動かないわけにはいかないな……」

思案に耽る先生を見て、ミカは顎先に指を当てて笑顔を浮かべた。

「なんだ、そんなこと気にしているの？　先生が望むなら、私が皆叩きのめしてあげるよ

☆☆」

笑顔でそう言ったミカに、先生は苦笑を返した。ミカからすれば、その辺の有象無象の犯罪者や不良をぶちのめすだけで先生への返しきれない恩が少しでも返せるのであれば至極簡単な話なのであるが、先生からすればそうでもなかった。

「ブラックマーケットはね、決して強大だから連邦生徒会が手を出せないというわけではないんだよ。確かにブラックマーケットの戦力は無視できないし、様々な大企業とも関係があるから安易に消滅させることも出来ない。でも、連邦生徒会には連邦生徒会の

理由がある」

「……ブラックマーケットが『監獄』の代わりってこと?」

「やっぱり知っていたんだね。そう、その通り。頭が痛い問題だ」

そう言つて、先生は眉間の皺をほぐす様に指先を眉間に押し当てた。

キヴォトスでは重大犯罪を犯した停学・退学した生徒は連邦矯正局に収監されるか、各自治区の収容施設に収監される。住民の犯罪者もまた同様に、連邦生徒会や各学校管理下の矯正施設などに収監される。しかし、これらの施設とて規模は限られ、収容人数にも限界はある。運営していくためにはコストがかかるし、設備の維持や罪人の監視、警備などにも人員が必要だ。

このため、「ちよつとした問題児」程度の不良やチンピラまで執拗に捕らえて一人残らず矯正施設送りすることも難しい。かといって、放置していれば被害は発生するし、無関係な市民や生徒たちにも迷惑がかかる。

ブラックマーケットは、言わば「捕らえる程コストをかける価値はないが、出来れば自分たちの足元から離れた所に行つてほしい」という重大犯罪者でもなければ木っ端のワルでもない「そこそこ迷惑な連中」を押し込めておくための、連邦生徒会と各自治区が合図で築き上げたエリアなのである。不良やチンピラを捕まえずにブラックマーケットに追い立てて、其処から出てこないように意図的に「犯罪者やドロップアウトし

た社会不適合者の楽園」であるブラックマーケットを作り上げ、「表の世界」から切り取り、切り捨て、そして放置する。

連邦生徒会も各自治区の治安維持機関も、余程のことがなければブラックマーケットにまで手を出さない。ブラックマーケットにさえいければ、中途半端な不良である彼女たちや犯罪者たちは、裏の世界で普通に暮らしていけるのだ。こうして、綺麗な表の世界から切り離された監獄であるブラックマーケットが生み出され、広がっていったのである。

行政を担う者たちから、自分たちの傍には居てほしくないが、労力と金をかけてまで捕らえる価値もないと思われた者たちが集まる場所。いや、掃き捨てられる場所。それが、ブラックマーケットである。

企業がそこに付け込んで膨大な金を注ぎ込むのも、連邦生徒会からすれば織り込み済みだったのかもしれない。犯罪者たちがブラックマーケットというエリアに纏まり、そして勝手に潰し合ってくれていけば文句はない、というのもあるのかもしれない。

「そんなブラックマーケットを全て破壊しつくせば、札付きのレベルが違う不良軍団と、ブラックマーケットという蟲毒のような世界を生き延びた一流犯罪者が、他の自治区に流れ出ていくだけだ」

「あはは、世知辛いね☆。まあ、これがキヴォトスの現実つてものだよ☆」

ため息をつく先生に向けて、ミカは敢えておどけたように振舞った。本音を言えば、これまで連邦生徒会とキヴォトスが造り上げてきた社会構造の歪みそのものであるブラックマーケットの問題に、外の世界から最近来たばかりの先生が頭を痛める必要なんてない、と言いたいところだったが、ミカは黙っていた。

自分も、先生の底なしの優しさとお節介に救われた生徒なのだから。それはそれとして、先生が救いたいと思っていたとしても、先生の敵になる相手ならば容赦する気は全くないが。

多分、それは他のシャーレ部員も同じだろう。

相手がブラックマーケットだから。そんな理由で止まるなど、最早あり得ないのだ。先生が傷付く可能性があったのだから。

互助会のグループチャットを観察していたミカは、既にそのように結論付けていた。

「……まったく、ままならないね。後のことはまた今度考えよう……」

先生は少し乱暴に頭を掻き、大きく息を吐いた。



「ああ、そうだ。初出勤はどうだったかな？」

唐突に先生に聞かれ、ミカは少しきよとした後に笑顔を浮かべた。

「うーん、まあまあかな？ ナツちゃんたちとは仲良くなれそうだよ☆」

ミカはそう言うと、先生のデスクの上に両肘を乗せ、手の平の上に顎を乗せる。

先程の会話を思い出す。ナツもシズコもシロコも、皆正直に内心を明らかにしてくれた。それに衝撃を受けたり身が引き裂かれるような思いを味わったりしたが、今にして思うと、先程の様にぶつかってくれた方が寧ろ楽なのかもしれない。

自分は人の心の中を悟れるほど賢くないし、相手の気持ちを考慮できる程優しくもない。でも、彼女たちの言葉に嘘はないと思えた。本当に、話し合いというのは大事なんだなとミカは苦笑を浮かべそうになった。もう少し前からそれを知っていれば、自分は現実より、ほんの少しは賢かったのかもしれない。

或いは、ナツは自分より度胸があったのだろう、とミカはふと考えた。心の内を曝け出して本音を相手にぶつけるのは、とても勇気がいることだ。それを、今になって実感できた。

バシリカでは錠前サオリの告白を聞いて自分も感情のままに言いたいことを言いきったが、あれもサオリの言葉がなければ決して言えなかつただろう。

「そっか……それは良かった。うん、とても嬉しいよ」

それを聞いた先生は腕を組み、笑顔を見せてくれた。具体的なことも、理由も聞かないでいてくれる。相変わらず、他人の心をよくわかっている人だな、とミカは思った。もし聞かれても、自分は説明に困っていただろう。

先生からすれば、それだけ聞くことが出来れば十分なのだろう。先生は写真と拳銃をデスクの隅に追いやると、ゆっくりと立ち上がった。そして、小さく声を上げて改めてミカを見つめてきた。

「しまった。……ごめんね、立たせっぱなしで」

「ううん、気にしないでいーよ☆」

目を見開いて今気付いた、といった感じで慌て始める先生を見て、ミカは軽く体を動かした。勿論このくらい立ち続けた程度で疲労を覚えることなどない。それでも、先生からの気遣いは心の底から嬉しいものだ。

「ええと、まずはコーヒーでも……。あつ、思い出した。それと」

「うん？」

「この前の、いきなり市民ホールに襲撃に来たような演技について、話を聞かせてくれるかい？」

「……えっ」

コーヒーメーカーの前まで歩いていった先生は、スイッチを押しながらミカに背中を向けたままそう言った。固まるミカ。コーヒーが注がれる音だけが、室内を満たす。

「さあ、座つてくれるかな？ ミカ」

コーヒーメーカーの作動音が止まる。カップを持って、先生がぐるりとミカの方を向

いた。細められた瞳が、ミカを見つめていた。

その動きは、ミカが以前見た自分を責めた時のユウカの動きにそっくりだった。いや、先生がユウカに似ているのではなく、ユウカが先生に似ているのだ。

そのことに気付いたミカは、ただ頷いてソファへ座った。これは逃げられそうになり。逃げるという選択肢なんて、最初から持っていなかった気がしないこともないが、取り敢えずそう思うことにした。

コツ、コツと鳴り響く先生の足音を聞いているうちに、ミカは今更ながら、自分が執務室に呼び出された理由に思い至った。最早手遅れであるが。

こうしてミカのシャーレでの初出勤日の残り時間は、先生とのお話に使われることが確定したのである。

ある日のティーパーティー①

「ま、待つてくださいい！ ミカさん、違うんです、何か、誤解が……は、話せばわかります！」

「問答無用だよ、ナギちゃん。今、私はこの拳を振るわなくちゃいけないの。せめてもの情けだよ……紅茶を飲む前にしてあげる。安心してね、後遺症が残らない程度にするから」

「何一つ安心できません！ その、シャーレオフィス近くの駅ビルに店を開いたのは色々理由が……」

ミカがシャーレに初出勤した日の翌日。トリニティ総合学園のティーパーティー専用テラス。ティーパーティーと招待された者しか入れない特別な空間で、2人の少女が互いを見て不思議な踊りを踊っていた。具体的に言うと、小さなリフレクトリーテーブルを挟み、1人がファインディングポーズを取りつつじりじりと相手に接近しようとし、もう1人が両手を突き出して相手から逃げるようにカニ歩きとバックステップを繰り返していた。

「さあ、ナギちゃん。辞世の句はそのカン高い命乞いで良いんだね？」

「いや、ほんつとに待つてください！ 全然良くありません！」

播らめく陽炎のようなオーラをまといながら聖園ミカが低い声でゴキゴキと指を鳴らして笑顔で言うと、桐藤ナギサは両手を円を描くように大袈裟に動かしながら、ミカを見つめつつ後退した。山中で熊に出会った時の動きである。

そしてそれを眺めながら、この中にいるメンバーで唯一普通に座っている百合園セイアは静かに紅茶を飲んでいた。セイアの目の前のソーサーの横には、彼女の相棒であるシマエナガがひよこひよここと動き回っていた。

全くもってシュール且つ優雅さの欠片もない光景である。微かに聞こえる小鳥の囀りが実に空しい。ティーパーティーに憧れを抱く一般トリニティ生徒が見れば、卒倒して1週間は夢に見てうなされそうな光景である。

いくら気心知れた3人しかないプライベートな空間とはいえ、ここまで互いに酷い光景を晒すことが出来るのも、事件後の3人全員の歩み寄りと努力、そして先生のお陰だというのがある意味悲惨である。

流石に喧騒に耐えきれなくなつたのか、或いは友の無様っぷりをこれ以上見ていたくなかつたのか、ティーカップを置いたセイアが静かに言った。

「ミカ、そしてナギサ。戯れるのも結構だが、そろそろ建設的な話をしていこうじゃないか。ミカ、君は安易に身構えるのは良くない。互いに胸襟を開いた結果が暴力を見せつ

けるパフォーマンスなど、三流の小唄以下だ。

ナギサ、久方ぶりに児童のように戯れ合いに勤しむのを邪魔したくはないのだが、君とて時間は有限だろう。君は時折、ちよつとした悪ふざけで時間を浪費したがる悪癖がある」

「……まあ、そうだね」

「……セイアさん。時間とは、有意義に消費していれば良いというものではありませんよ？」

「その通りだね。だからこそ、少しでも良い結果を紡ぎ出せるように、私たちは進まなくてはならない」

セイアの一言に唸り、ミカとナギサは互いに見合つて揃つて微笑んだ。一先ずプロレスと憂さ晴らしも終わったので、ミカとナギサは同時に席に着いた。

分派の首長として公私をはつきり分ける必要がなくなり、三大派閥の行政官を伴わない私的なお茶会で済ませている方が3人ともにリラックスして会えるというのは、実に皮肉である。

テラスの中央に設置された、ティーパーティーの正式な会合で使用されているはずの不必要なまでに長すぎるリフレクトリーテーブルには目もくれず、3人はテラスの隅に置かれた古い別の小さなリフレクトリーテーブルに腰を下ろしていた。

現在、このテラスには3人しかいない。扉の向こう側には重武装の正義実現委員会が数人待機しているが、それだけだ。

会合ではなく、友人同士のお茶会。3人がそれを求め、そして実現したささやかな行事になることもない、桐藤ナギサと百合園セイアの権力の私的行使。聖園ミカの「管理」のため、ティーパーティー体制が完全に崩壊しているわけではないというアピールのため。様々な理由を無理矢理捻り出して行われる、トリニティ上層部の黙認下にあるちよつとした息抜き。

ナギサとセイアは、数日に一度このようなお茶会を開き、ミカを招待していた。勿論、今日もちやんとした理由が作られている。

「——さあ、それでは話してくださいな、ミカさん。シャーレのことを」

例えば、シャーレ部員になったミカから色々なことを聞きだすためだとか。

ナギサは微笑を浮かべると、何時ものようにティーカップに口を付けた。



「——というわけで、先生について書いてあったファイルを読んでいたら寝不足になっちゃった☆」

「初等部の幼子達さえその重要性和本質を理解できるであろう『真面目に学業に取り組むべし』という言葉の意味すら理解できないのかい？ 君は一度、園児に配られる道徳

について書かれた絵本から読み直してくるべきだね」

ノータイムで何という暴言か。実際に自分のせいで殺されるところだった相手に「道徳を学び直せ」とか言われると反論に困る。

結局、何も言えずにミカはセイアをジト目で睨むことにした。

「……そんな綺麗な目で睨みつけても、怖くないと思いますよ?」

「ここに私の味方はいないの?」

すまし顔でそんなことを言うナギサにもジト目を送り、ミカは目の前に置かれたロールケーキにフォークを突き刺した。

事実上ティーパーティーをクビになったというのに週に数回はお茶会に誘ってくれるのは嬉しいけれど、毎度ロールケーキばかりなのは嫌がらせなのだろうか。偶にはマカロンとかが食べたい。

「なに、最近、動き回るようになった君が順調に痩せていっていると聞いてね。ここは肥えさせねばと」

「セイアちゃん、予知夢の次は読心能力でも身に着けたの? 流石にちよつとキモいよ。あと、まずは自分が肥えたら?」

ミカは思わず真顔でセイアを見つめた。どう見ても不健康にしか見えない程痩せすぎなセイアの健康の方が心配だろうし、大体そんな情報何処から持ってきたのか。

「私だつて予知夢に頼り切つていたわけではないんだ。自前の諜報手段くらいは用意しているんだよ。君がナギサに知られずにアリウスと手を組めたようにね」

地味に反論しづらい痛いところを突いてくる。ミカは小さく唸りながら、はしたなくロールケーキを噛み千切つた。

「冗談さ。君、目に見えて痩せていつているよ。だが心配は不要だろう。原因は心労と思いきや、何ということはない。あれだけ動き回つて、痩せない方がおかしいだろう」
「全くです。誰が中央教会の壁でパルクールしろと言つたのですか。しかもその後隣りの講堂の屋根までジャンプするなんて。何メートル離れていたか知っていますか、ミカさん」

「いや、ほかに逃走手段が無くて……」

やはりここには味方がいないようである。ミカは両手をひらひらさせて降伏のポーズをとつた。降伏したミカに視線を向けると、セイアは紅茶を一口飲んだ。伝わり辛いが、これでもセイアとしてはかなりミカを労わっている方である。

「それにしても、シャーレ部員の先生に對する執着は予想以上だね。先生……あの人は本当に多くの生徒に慕われているようだ。まさかそんなファイルなんてものがあつたとは。この前、ミネ団長が謎のファイルを立ち読みしていたけど、それだったのかな」
「流石に違ふでしよ。そうだったらあの人無敵過ぎない？」

先生についてのプライベート情報満載のファイルをトリニティの校舎で立ち読みとか、さしものミカもそんな度胸はない。シャーレから持ち帰ってきたファイルは複数ある。きっと先生についてのことが書かれたファイルではなく、別のファイルだろう。そうだと思う。

ミカは食べ飽きたロールケーキを紅茶で喉の奥に流し込みながら、呆れたような視線をセシアに向けた。

「……本当にそんな情報、私たちに伝えて良いのでしょうか？ ミカさん」

「うん、問題ないって。一応ユウカちゃんに『もうお茶会で披露する一発ネタ尽きたから、先生ファイルのことお茶会の話のネタにしてもいい？』ってチャット送ったら、『良いですよ』って返ってきたよ☆」

「君も大概、無敵だと思うけどね」

今度はセシアが呆れたような視線をミカに向ける番だった。

「確かにこれは会合ではなく私的で堅苦しさを意図的に捨てたお茶会ということにしてはなかつたと記憶しているよ。もう少し他に確認の仕方があったのではないかな？」

セミナー会計の……そう、早瀬ユウカに誤解されてしまうじゃないか」

「そうですよ。私もセシアさんも、芸やお笑いのこと詳しくないですし。一発芸なん

て持ち合わせておりませんよ」

セイヤに続いてナギサもミカに呆れたような視線を向けた。しかし、ミカはジト目でナギサを見つめ返した。

「まあそんな無意味な謙遜なんかして。椅子に座って紅茶飲んでいるだけで笑いが生まれるナギちゃんがそれを言っても、ただの嫌味だよ?」

「貴女私を何だと思っているんですか?」

あまりにも酷い幼馴染からの一言に、ナギサはカップを震わせて額に青筋を浮かべた。

「確かに、アリウス修復本部で紅茶を飲んでいたナギサは見ていて面白かったな。思わず文字通り抱腹絶倒するところだった。ミカの言葉には同意しよう。ナギサと違って、ミカは行動こそ奇天烈だが思考基準は常人寄りだからね」

「セイヤさん!? 貴女、あの時そんなことを思っていたのですか!? 病室で私が『ミカさんと先生を助けに行きます、例え全ての立場を喪ったとしても』と言った時に、力強く頷いてくれたではないですか!」

「確かに私は頷いて、『ならば私もお供させてくれないか、ミカには謝らなくてはいけない』ことがある』と言ったよ。誓って本音だとも、嘘は言わない。その数十分後に君が正義実現委員会にテーブルと椅子とティーセットを運ばせているのを見た時には、前言撤

回したくなつたが」

「酷いですー!」

ポケットから金色の糸も使われている白いハンカチを取り出して、目に当てるナギサ。それを見て、「そういうのいいから」と言いたげに無表情を浮かべているセイア。口火を切ったミカは、もう飽きたと言いたげに綺麗に整えられた自身の指先を眺めている。

部下を伴わない私的な空間でのお茶会など、3人ともこんなものである。そんなことをつい最近になって思い出したということが、ある意味幸いと呼べるのかもしれない。

「……あ、そろそろ話を戻しても?」

ポケットにハンカチを戻し、何てこともない様に微笑むナギサ。実にいつも通りである。

「うん」

「ああ」

「では、……私が調査していた時よりも、その……シャーレ部員の皆様の先生へ抱える想いの強さは、遥かに大きくなっているようですね。正直、予想以上です」

「まあ、気にすることでもないんじゃないかな? あの人が慕われる理由、ナギちゃんも

分かるでしょう☆?」

すましたようにナギサを見つめるミカ。パートナーを自慢する恋人のような態度と口調である。ナギサは複雑そうな表情を浮かべると、ふう、と息を吐いた。

「確かに……本当に心強くて、頼りがいがあつて……はあーっ」

乱暴に息を吐いて、ナギサは紅茶を一気に飲んだ。遠慮も余裕もない仕草である。

「これでは私が入部する時も、風当たりは強いでしょうか……?」

ピクリ、と肩を動かしたミカは、じつとりとした目をナギサへ向けた。ナギサが疑問に思うよりも先に、ミカは口を開く。その瞬間、セイアが軽く目を見開いてティーカップを乱暴にソーサーの上に置いた。ガチャンと音が鳴り、紅茶がテーブルクロスを汚す。

「どうかな? ナギちゃんをやったことつて、先生へ貸しを作ったことをいいことにシャーレの権限利用して、補習授業部の皆を退学させようとして、それを止めようとした先生にあらゆる妨害工作を仕掛けて、あとは肝心な時にミサイルの爆風で気持ちよくお寝んねしていただくらいでしょ☆?」

低い声色なのに、何故か楽しそうな表情で言うミカ。ミカの言葉のこん棒にタコ殴りされるように少しのけ反ったナギサがプルプル震えていくのを尻目に、ミカは急に表情を消し、俯いた。

「……あ」

「ナギサ——」

ナギサが目を見開き、セイアが立ち上がった時にはもう手遅れだった。ミカは光の消えた瞳でティーカップを見つめ、羽を微かに震わせた。

「私なんかさ、先生を騙して、その癖引き返せないところまで行く前に止めてもらって、なのに不満をぶつけて、終いには先生の頑張りも全部無駄にして、勝手に脱獄なんかしてさ……」

「ミカ、深呼吸だ」

「むっっ」

いつもの動きを知る者ならば想像もつかない程に素早く動いたセイアの小さな手に口をふさがれ、ミカは目を白黒させて目の前まで来たセイアの瞳を見つめた。いつもと同じで眠たそうな、超然としたような穢れの一つない黄金色の瞳。しかしその額には、若干汗がにじんでいる。

「うぐむ……つぶはっ」

数十秒後にセイアが手を離すと同時に、ミカは大きく息を吐いた。その光景を眺めながら顔を青ざめさせていたナギサがふらふらと立ち上がり、ミカに近付いた。そして慎重に、そして丁寧にミカの背中をさすった。

「す、すみません……ミカさん、セイアさん」

「あ、うん……ごめんね……」

「……全く」

ゆつくりと顔を上げて弱弱しく微笑むミカを見て、セイアはどつかりと椅子に腰を下ろした。いつもの彼女とはかけ離れた、荒々しい態度だった。

シャーレ部員として先生に受け入れられるようになって、まだまだ傷は塞がらないらしい。事件に巻き込まれてから1年近く経った自分と違い、ミカの傷はまだ生々しいのだ。そんなことを一瞬でも忘れてしまった自分は、相当に馬鹿になっているのかもしれない。セイアはため息をついて、相変わらず目の前をひよこひよこ動くシマエナガを見下ろした。

互いが互いに歩み寄りを始めたとしても、それでも傷は塞がらず、傷跡が残ってしまいうのかもしれない。それでも、塞がらずにさらに広がり、引き裂かれるよりかはずつといいと思う。

たとえそれが希望的観測だとしても、セイアはそう思わずにはいられなかった。



その後も、ミカの報告は続いていった。シャーレに入部して初めて任務をした時のこと、駅ビルでの戦闘のこと、そして、ナツたちや先生との話。すらすらと楽し気に語っていくミカに、ナギサとセイアも徐々に笑顔が戻ってきた。

本当に、彼女のスイツチはどこにあるのかわからない。長年幼馴染をやっている自分もこの様である。ナギサはため息をつくの何を何とか堪え、代わりに紅茶を一口飲んだ。心なしか、どうも苦く感じる気がした。

「……それで、ナツちゃんたちと話をしている思ったんだ。やっぱり話し合うって大事なだって」

「ええ、そうですね……」

全くもって、その通りだ。自分も思い知った。話し合おうとせず、信じようとして、心を許そうとしなかった結果がこの様だ。

「だから、これからもいっぱいシャーレの人たちと話していこうと思うんだ。やっぱり先生のためにも、シャーレの人たちと仲良くしていきたいからね☆。だから、機会があればもつとシャーレの活動に参加していこうかなーって思うんだよね☆」

「成程、その志は極めて立派だと思うよ、ミカ」

「でしよでしょ☆。ナギちゃんもそう思うよね?」

「ええ、そうですね——」

ロールケーキにフォークを入れようとしたナギサの手が止まった。特徴的な通知音とそれに合わせたバイブ音が、ミカのポケットから聞こえたからだ。同時にミカの口も止まった。

「……あれ、緊急通知？」

「緊急？」

「うん。シャール専用のグループチャットアプリでね、色々な種類の緊急通知があるの。この音は、シャール部員が別の部員に助けを求める時のメッセージ通知音なんだけど……」

説明しながら、ミカはポケットからスマホを取り出して操作をしていく。どうやらシャールからの緊急通知はマナーモードの状態でも通知音が鳴るシステムとなっていて、るらしい。

緊急と聞いて顔を引き締めるナギサとセイアだったが、それに対してミカは怪訝そうな表情を浮かべてスマホをタップしている。

「うーん、なんだろこれ？ セイアちゃんたち、分かる？」

そう言つて、ミカはスマホを2人に見せた。そしてミカのスマホ画面を覗き込んだナギサとセイアも、同じように怪訝そうな表情を浮かべた。

それはシャールのグループ全体に贈られたメッセージの様だった。送信者を示すアイコンの横に、メッセージが表示されている。そこには

「【急募】カッコよく戦える強い人」

と表示されていた。

「これ、なんだろうね？」

聞かれても困る。もう一度尋ねたミカに向かって、表情で語るナギサとセイアを無視し、ミカはスマホを操作していく。下の方に記載されていたメッセージも見て、ミカはにんまりと笑った。

「うーん、何かよくわからないけど……部員の人と、仲良くなれる機会かも☆」
そう言って、ミカはおいしそうにロールケーキを口に入れた。

ある日のシャール②

シャールレの部員が作戦行動を行う際は、基本的に先生の指揮管制の下にある場合が多かった。しかし最近は部員数が増えたこともあり、先生から依頼を受けてバイトだけでなく部員が単独で作戦行動を行うことも増えた。

それと同時に先生の許可をもらい、先生の指示なしでシャールレ部員たちが独自に依頼の遂行を行うことも増えていた。シャールレの信用度や知名度が上昇するに従い、依頼や相談も増えてきたためである。

先生は当初、部員たちだけで戦闘が発生する可能性がある任務をさせることに難色を示していたが、部員たちの説得に押し負け、許可を出すに至った。そうでもしなければ依頼が溜まる一方で、先生の心労も溜まる一方だったからだ。そもそも街中を散歩すれば戦闘に巻き込まれることが当たり前前のキヴォトスである。今更先生による指揮がない戦闘を恐れる部員など殆どいない。

シャールレが誇る任務部隊の強さが先生の指揮能力にあることは事実であるが、別に先生の指揮がなくとも必要十分なほどに戦える実力者も多い。というよりも大半の部員は、入部前の時点でかなりの実力者である。そして入部後様々な任務を遂行して部員同

士の連携を強化していった。部員同士が合同で訓練や鍛錬を行うことも多いし、戦術や作戦の研究も欠かしていない。今では先生の指揮なくとも圧倒的な戦闘能力を誇る集団となっている。シャーレ入部前と比べ遥かに戦闘能力が向上した部員も数多い。

「シャーレの人たちに先生の指揮があれば、まさに鬼に金棒。というか過剰戦力だね。普通の生徒じゃ束になったところで、素手で戦う鬼にだって勝てないよ」

シャーレの強さについてインタビューをするクロノススクールの生徒に向かつてそう言ったのは、シャーレ部員の戦いを間近で見たことがある、百鬼夜行の某生徒である。

シャーレに恨みつらみを持つ者たちはシャーレを指差し、「先生がいなければシャーレは要石を失ったように崩壊する」と負け惜しみのように言うことがある。それは間違っていない。先生を喪えば、シャーレは「キヴォトス中の問題を解決するための組織」という先生がゼロから築き上げてきた存在レソニデール意義を放棄することになるだろう。その代わり、シャーレは先生の敵を排除することのみを目的とした、復讐と破壊のための組織となる。その変質を「シャーレの崩壊」と呼ぶならば、先生を喪えばシャーレは崩壊するという推論（或いは願望）は決して間違っていない。

しかし、先生の指揮がなければ部員は戦えないということとは断じてない。先生の指揮があれば無類の強さを発揮するが、先生の指揮がなくともそう簡単には敗北しない、それがシャーレである。特に「先生のために」という部員たちにとって絶対にして唯一無

二の目的がある場合は、全ての部員が団結し、無双と言えるほどの実力を発揮する。故に、時と場合によってはこういうことも起こるのだ。

「……何か言い訳があるなら言ってみなさい」

トントンと苛立たしげに片手で持つ愛銃の銃身を、もう片方の手の指先で叩きながら、早瀬ユウカは低い声で呟いた。ソファに座りながら足を組み、ジト目で目の前に座る3人を見つめている。

シャーレオフィスの多目的ルームはひどく静かである。ユウカが愛銃を指先で叩く音以外は、何の音も声も聞こえない。つまり、ユウカの言葉に応える者はいない。沈黙するのみである。

数十秒後、ソファに座ってユウカを見つめていた3人のうちの1人が小声で呟いた。

「……言い訳も何も、当然のこと。彼らは——」

「当然だなんて、冗談じゃないわよ！」

「……」

その声を遮って鋭い声を上げるユウカ。遮られた方は口を閉じ、恨めしそうにユウカに冷たい視線を向けた。しかしそんな目の前の少女を気にする素振りも見せず、ユウカはさらに大きな声を上げた。

「私は情報収集を頼んだのよ！ それは何で……ブラックマーケットの犯罪集団、密輸

グループの一つを潰しているわけ!？」

ユウカの声に、3人は揃って目を背けた。

「ヒビキ！ 貴女、自分から立候補しておいてなんて様なの！」

ユウカの指摘を受け、先程反論を完封されて不満気に口を閉じていたミレニアムサイエンススクール1年生猫塚ヒビキは眉根を寄せた。

「ユウカ先輩、それは当然のことだよ。ブラックマーケットは先生と敵対状態にあるから、何時か彼らと全面的に戦わなくてはいけない日が来るかもしれない。ブラックマーケット内は彼らのホームグラウンドで、ミレニアムや他の自治区とも異なる……特殊で異質で異常で奇怪なエリア。確実に勝利を得るためには、事前のデータ収集と装備の開発が必要になると思う。だから、今日当番のウタハ先輩に代わって偵察に参加したんだよ。」

ここは前向きに捉えようよ。お陰で彼らの装備、環境、行動パターン、思考^{マインド}パターン、^{セット}。貴重なサンプルが入手できた。今回は突発的に不幸な衝突が起こってしまったけれど、それでも次に生かすことが出来るよ。

今回は市街区域での戦闘、こちらが3人に対し相手が14体の状態で戦闘終結までの時間は2分26秒だったけれど、次は——」

「戦闘が起こったことが問題なのよ！ 迅速に畳めば良いというものではなくて！」

ヒビキの説明は、またしてもユウカの怒声によって阻まれた。うんざりしたのか、ヒビキは表情や態度に出すことすらせずにとだ黙る。

「あー……ユウカさん？ その、確かに軽率だった部分もあるけど……これは、その、不可抗力でやつで……」

「密輸組織をまるまる消滅させる不可抗力なんてあるわけないでしょう！ カズサ！ 貴女も立候補組よね、というか、ここにいる全員立候補よね……だったら、ブラックマーケットの性質タテの悪さも知っているでしょう！」

「うっ……ごめんなさい」

ヒビキの援護をしようとしたトリニティ総合学園1年生香山カズサは、ユウカに睨みつけられ即座に撃沈した。放課後スイーツ部の仲間に対してはキツめのツツコミを入れることも多いカズサだが、シャーレの仲間、特に他校の先輩に対しては基本的に物静かで礼儀正しい。頭の中にいくつもの反論は浮かんでいるようだが、それを口にするとはなかった。基本的に正論を言う先輩には逆らわないスタイルであることに加え、早瀬ユウカにロジックのぶつけ合いで勝てる道理がないと早々に諦めたようである。

「まあまあ、そうかつかしないでよ、ユウカ。物事っていうのはね、想定通りにいかないものだよ？ 実際、こうなる予感があったでしょ？」

「だからと言って反省する態度くらいは見せたらどうなの、シグレ！」

唯一にこやかな笑みを浮かべているのはレッドウィインター連邦学園2年生の間宵シグレだ。目を細めて悠然とホットミルクを啜っている。

「まあ、いいじゃない。彼らが今までやってきたこと、そしてこれからやったであろうこと。それを考えた場合、早めに消えてくれた方が良いと思うよ。彼らがやっていたのは密輸だよ、それも武器。それはキヴォトスの端からD・U・まで、何処でも売れて何時でも需要が絶えないものだよ。それはやがて混乱を生む。」

混乱なんて些細なことだけど、先生の心労になるのはいただけないよね。ならば、消えた方が良くないかな？」

飄々とした態度をとりつつ、シグレはウインクしながらユウカを見つめた。リラックスしているように見えるが、何時も持ち歩いているカンポットを飲んでいない時は任務モードだ。透明感のある宝石のように輝く瞳が、ユウカを見つめる。怯えや申し訳なきが欠片も籠っていない瞳で見据えられ、ユウカは声にならない呻きを上げた。

「そして、なにより——」

シグレはもう一口、ホットミルクを飲んだ。先生が大好きな砂糖たっぷりホットミルクは、甘いカンポットが好物のシグレも十分満足できる飲み物である。しかし、シグレの瞳に大好きな飲み物を楽しむ喜びは浮かんでいない。宝石のように美しく、無機質な瞳だった。

「彼らは、先生を侮辱したんだよ。だから、消したんだ」
「……」

その言葉で、多目的ルームの空気が凍った。何の感情も浮かんでいない真顔でユウカを見つめるヒビキ。不機嫌そうに頬杖をつけて足元を見つめるカズサ。表情だけは楽しそうに笑っているシグレ。

「……そうね、仕方がないわね」

ユウカはふう、とため息をついて、ホットミルクを啜った。

「でも、先生に何て言ったら……渋る先生を説得したというのにこれじゃあ……。先生は、この事を私たちに任せてくれたのに」

「ああ、先生は今日、アビドスだったね。この前先生に渡した防災傘、役に立つかな」
目を輝かせながら呑気にそんなことを言うヒビキを見て、ユウカはより大きく息を吐いた。

喫茶店ムエツト前での先生襲撃未遂事件から2日後、ユウカたちはヴァルキューレから得られた情報や逮捕されたロボットたちから収集した情報を元に、ブラックマーケツトの端にあるエリアにヒビキたち3人を送り込んで偵察任務を行っていた。無論、先生に事前に許可を貰ったの行動である。

得られた情報によると、駅ビルの6階で倒れていたロボットたちは全員ブラックマー

ケットと隣接自治区の境界線付近で、双方の物資や人々の越境を支援する「橋渡し」をしていた者たちだった。

そして7階から侵入してきたP M C風のロボットたちは、どうやら数年前に倒産したとあるP M Cの兵士たちで、現在はブラックマーケットで傭兵、というよりは何でも屋のような仕事をしていたらしい。

しかし、6階にいたロボットたちは皆記憶が曖昧で、何故あんなことをしたかは覚えていないようだった。そしてP M C風のロボットたちはブラックマーケットの仲介業者者に仕事を紹介されただけで、雇い主のことはよく知らないらしい。

ならば、調べなくてはならない。6階のロボットたちが記憶が曖昧な理由、あのようなことをした理由、させた理由。全てを明らかにし、適切な報復を与える。その気があつたにしろなかったにしろ、そんなことは最早関係ない。先生を傷付けた、傷付けようとした者たちには罰を。愚挙に相応しい報いを。そのため、立候補者の中から選ばれた3人がブラックマーケット端のとある地区で聞き込みや情報収集を行った結果、シャーレを快く思っていないかつた密輸グループのロボットたち14体と揉めてしまった。

はつきり言ってしまうと、昼間から遊び歩いていた密輸グループのメンバーたちが大声で最近仕事がいりづらくなつたという主旨の愚痴を言い合っており、その中に先生へ

の侮辱が含まれていた。最悪なことに、たまたまその中でも飛び切り酷い侮辱が彼らの口から飛び出た瞬間に、ヒビキたち3人とロボットたちがすれ違った。

そして、ブラックマーケットでは珍しくもない戦闘が発生し、約2分後に終わった。なお、喧嘩つ早い者たちや巻き添えを食らった者たちがさらに戦闘に加わろうとした結果、全員ヒビキの迫撃砲の餌食になった。このため、3人が実際に倒した「敵」は14体どころかその倍は超えている。

そして終了後、3人は即座に撤退してきたのである。ブラックマーケットの治安維持、というよりは秩序維持のための組織であるマーケットガードが来る前に遁走しようとし、結果としてブラックマーケットに侵入してから1時間足らずで、脱出してきたというわけである。

「これといった成果も得られていないし、あんまり良い結果とは言えないわね……」

ユウカは腕を組み、眉間に皺を寄せて床へ視線を落とした。

ブラックマーケットに侵入して、一集団だけ速やかに殲滅して即離脱する。合計所要時間は1時間以内。実に手際が良い。

優秀且つ適切な判断力と、3人それぞれの高い戦闘能力と、団結力。それらが揃った結果だった。恐らく大抵のシャーレ部員が、作戦行動1時間前に即席チームを組まされたとしても、同じことが出来る。これまでの経験と日頃の訓練と交流、そして個々の高

い戦闘能力、何より「先生のために」という団結力の賜物。先生が指揮しなくても、この程度のことは容易く、そして安全にこなすことが出来る。これこそがシャーレの強さだった。70人以上の部員が、土壇場や緊急で誰と組んでも高い実力を発揮し、団結する。

だからこそ、今回は良くない。あまりにも手際が良すぎたのだ。予めそういう作戦だった、と思われかねないほどに。いや、3人の行動を見れば、そう思うのが普通だろう。つまり、今回のシャーレの行動は、言わばブラックマーケットへの挑発であり、ハラスメントと見なされるのではないか。いきなりブラックマーケットへ少人数へ押入って、特定の組織を殲滅して、さっさと脱出してあとは何もしない。客観的に見れば、3人がやったことはそれだけだ。

喧嘩を売っていると思われたのではないか。ユウカはそう思い、ますます顔を顰めた。

密輸グループを1体残らず殲滅したのは良い。先生への侮辱など、シャーレの部員なら激昂して当然だ。倒した後に追撃を仕掛けなかったことを評価したいくらいだ。キヴォトスに、そんな輩は存在してはならない。

とはいえ、どうしても文句は言いたくなる。もっと他にあっただろうに、と思ってしまう。せめて先生を侮辱した患者だけをどうにか呼び出して、誰も見ていない路地裏に

連れ込んで、訂正してもらおうまで対話をしたり、訂正を促したりするとか。

「ごめんなさい……つい、頭がカツと」

「ふふ、仕方がないよ、カズサ。先生をああ言われて、怒らない部員なんていないって」
「うん、そうだよ」

今更考えたところで栓の無いことを只管考えながら、3人の言い合いをBGMに腕組をしたままのユウカに向け、ヒビキがなんてこともないかのように言つてのけた。

「あ、ユウカ先輩。少しだけれど、成果はあるよ」

「何ですって？」

ユウカは思わず身を乗り出した。そんなユウカに対してうつすらと微笑んだヒビキは、隣で肩を落としているカズサに視線を向けた。それに気付いたカズサは、座つていたソファの後ろに置いてあった樽のような形の旅行鞆から、何かを取り出した。

「……私たちが倒した密輸グループは……例の、記憶が曖昧になっていたとかいう口ポットたちが働いていた『境界』を通ろうとしていたみたいなんです。該当の境界付近にセーフハウスを用意しているって教えてくれました。脱出する前に立ち寄って、見つけたものを少しだけ持ち帰ってきたんです。武器専用の密輸グループなのに、武器じゃないので目について、拝借してきました……」

「なんだ、最低限の話は聞けていたのね……って、これは……」

ユウカは目を見開いた。カズサが取り出したものは、一見銃弾のように見える、何かであつた。

「……いや、大収穫じゃないの……」

最初から出してくれ。そう言いたげに口をへの字に曲げたユウカに対し、3人は揃つて目を逸らした。

いきなりユウカが怒り顔で仁王立ちして出迎えたからだ、と言える勇気のある者は、この場にはいなかった。

シャーレ部員と一緒に

シャーレ部員と一緒に①

ミカがシャーレに初めて出勤した日から4日後。ミカはシャーレオフィスから徒歩20分ほどの距離がある公園に来ていた。

3日前にティーパーティーのメンバーとお茶会をしている最中に届いた緊急通知を送ってきた部員と話し合い、ここで待ち合わせをしていたのだ。

冬の昼前。天気は快晴だが、少し冷たい風が吹いている。

ミカが訪れた公園はD・U・東部地域の中でもそれなりに広くて有名な公園だった。自然の地形を生かし、この辺りの地域一帯を望むことが出来る高台にあり、百鬼夜行自治区から購入した立派な桜の木が100本以上植えられたD・U・でも上位に入るお花見スポットでもある。勿論、現在は冬なので桜の花は見る事が出来ないが。

そんな公園の入り口近くにあるベンチに座り、ミカは足を組んでスマホを見ていた。最近お気に入りのPコートを着込み、自販機で購入したホットココアを持ち、もう片方の手でスマホを持っている。最近D・U・で発売された自販機用のホットココアもまた、ミカのお気に入りだった。

待ち合わせの時間まで、あと10分。電車の到着時間の都合上少々早めに来てしまったが、これくらいがちょうど良いのかもしれない。コートを着ていれば、何てもことはない程度の寒さなのだから。そんなことを考えていると、遠くから近付いてくる足音が聞こえてきた。

顔を上げて音が聞こえる方を見るミカの目に、チャットで送られてきた待ち合わせ予定のシャーレ部員と同じ見た目の少女が2人、こちらに向かってくるのが見えた。

「あ、いたいた！ 聖園ミカサーン！」

声をかけられ、ミカはスマホをポケットに入れて軽く手を挙げながら立ち上がった。

「ご、ごめん、ミカさん！ こっちから呼びかけて集合場所も決めておいて、あとから来るなんて……。アリス、早く！」

先頭を走ってきた少女が慌てて近寄って来て、後ろを振り向いて声を上げる。少女の少し後ろをととと追いかけてきていた少女が笑顔で言った。

「はい！ アリスは、クエスト開始場所に到着しました！ 久しぶりのD・U・です！」

その少女は真剣な表情をミカに一瞬だけ向けると、空へ向かって大声を上げた。

「今度こそ、アリスはクエストクリアをして……シャーレの部員となるのです！」

両腕でガッツポーズを作り両膝を地面につけて、可愛い声に反してスポコン漫画の主人公のような大袈裟な咆哮を天に向かってかます少女。人があまりいない場所で良

かった。

ミカは目を丸くした。その声にも驚いたし、実際に目の前までやってきた少女2人が思った以上に小さかったのにも驚いた。そして、それ以上に。

「え？ シャーレの部員となる……って、何？」

少女の言葉に驚いていた。



ミカと待ち合わせてしていたのは、ミレニアムサイエンススクール1年生の才羽モモイと同じく1年生の天童アリスだった。

モモイがシャーレ互助会専用チャットグループの緊急通知で送ったメッセージの「【急募】カツコよく戦える強い人」は、実際のところ、然程緊急という内容ではなかった。そもそもシャーレ部員が他の部員に助けを求める緊急メッセージ機能は、実際のところはほとんど使われていないらしい。基本的に緊急事態が発生した場合は、互助会のメッセージ機能で助けを求めるよりも先に先生に助けを求めた方が早いし、逆に緊急性が低いのならば、わざわざ互助会専用アプリの機能を使って他校の生徒にまで助けを求める必要がない。自分たちの学校の仲間や先輩に助けを求めればよい話である。

このため、シャーレ部員が他の部員に助けを求める緊急通知はほとんど使われたことがなかった。ではなぜ今回、モモイがそれを使ったのかと言えば。

「緊急ではないけれど、喫緊の問題なんだよ!」

モモイはそう言つて、ふんす、と息を吐いた。ミカがモモイから事前に聞いた話によると、アリスに銃の戦いを指導してほしい、とのことだった。

「うん、それは全然構わないんだけどね、時間あつたし。……それで、来ておいて何なんだけど、一体どういうこと?」

「ええつとね……」から話すと、ちよーつと長くなるんだけど……」

ずつとミカのことをキラキラした瞳で見上げているアリスからの視線に若干居心地の悪さを感じつつ、ミカはモモイに尋ねた。このため、ミカはアリスの視線攻撃に耐えながらモモイの長い説明に耳を傾けることとなった。

モモイの話によると、アリスは色々と訳アリの少女で、つい最近まで学校での授業や武器の扱いの指導を全く受けてこなかったという。

これにもミカは驚いた。学園都市であるキヴオトスではアリュスのような例外中の例外を除き、大半の生徒がしつかりとした教育を受けることが出来る。というより、受けるのが義務だ。不良やスケバンのように自分たちから授業を受ける権利と義務を放棄する者たちも少なくないが、全く受ける機会がなかった、というのは尋常ではない。

とはいえ、事情についてはモモイが言い淀んでいたし、きつと言いくい内容なのだろう。それを察したミカは、あまり深く聞かないようにした。何よりアリスは首からミ

レニアムの学生証と共にシャーレのIDカードを下げていた。彼女はシャーレの部員、つまり先生が信頼する生徒である。ならば、自分が不自信を抱く必要なんてないだろう。そう思い、ミカはモモイの説明に集中することにした。

経緯はよくわからなかったが、アリスはミレニアムの生徒となってシャーレに入部した頃、漸くまともに勉強する機会を得られたらしい。同時にゲーム開発部に入部し、一般的なキヴォトス生徒のように勉強と部活動と戦闘をするようになったのだが。

「アリスは、まだまだ経験値が足りないのです……魔王軍と96回に及ぶ戦闘を乗り越えたというのに……」

そう言つて、がっくり肩を落とすアリス。魔王軍つて何？　と思いつつ、ミカは取り敢えず黙つて話を聞くことにした。ツッコミを入れていたら日が暮れる予感がしたからだ。

どうやらアリスは呑み込みというか学習速度がかなり高いらしく、勉強については恐ろしい速度で授業の遅れを取り戻していったのだが、戦闘についてはそもいかなかつた。キヴォトスの生徒は大抵の銃器の扱い方や戦術についてもBDや実践で学ぶのだが、アリスはまずは進学やテスト対策のため、一般的な内容の自習を集中的に取り組んできたのである。その成果は確かに挙がつており、現段階でアリスの成績は必要十分な域に達していたが、しかし、反対に銃器の取り扱いや戦い方の学習は殆ど進まなかった。

それでも全く実戦をこなしたことがないというわけではないのだが、今までアリスが戦ってきた相手は、その辺の不良以下の連中かミレニアム最強クラスの武闘派集団であるC&Cという。両極端にもほどがある戦績だった。

蹴散らしたところで何の自慢にもならない不良か、多くの仲間と先生の支援があつて初めて食らいつくことが出来たミレニアム最強クラスの相手としか戦つたことがないアリスは、シャーレで正式に任務をこなすようになってから、自分の戦闘経験と知識不足をはつきりと悟るようになったらしい。

その悩みに拍車をかけたのが、アリスの武器であつた。

「へえ、ミレニアムってすごいんだねえ……」

全く羨ましくはないけど。そう口にすることはなかったが、ミカは困つた表情でアリスが背負っている巨大な武器を見つめた。

アリスの愛銃(?)「光の剣：スーパードヴァ」はエンジンア部が造り上げた巨大レールガンである。基本重量140キロ以上、発射時の反動は200キロを軽く超えるという到底常人には扱えない銃器である。そもそも最早銃ではなく砲である。しかも貫通力も極めて高く、最大までチャージすれば、理論上は防災シエルターの破壊すら可能らしい。それは凄いとミカは拍手しそうになった。シエルターを破壊するなど、自分のパンチ(中パンチ)並みである。

基本重量140キロ以上と聞いた時は流石のミカも驚いた。何だこの子見た目に反して凄い力持ちだな、と感心した。ナギサが見れば「鏡を見てください、今すぐ見てください。見ないと私が見せますよ、ミカさん」と道端で朽ちつつあるペロ口様人形を見るような目を向けたに違いない。

それにしても、140キロの武器を背負って走ることもできるとは大したフィジカルである。ミカだって、そんなものを背負っていればジャンプ力やダッシュ力が多少低下するかもしれない。

それは兎も角、携行式巨大レールガン（流石のミカも元は携行式どころか宇宙戦艦搭載向けに開発された代物であることなど予想できるはずもなかった。しかし、これを自然と携行式だと思うくらい感性ではあった）という前人未到の尖りすぎている銃器をメイン武器としているため、参考できる資料もなく、独自で訓練をするほかなかったという。おまけにこのレールガン、火力が高すぎて「試射」で訓練施設の天井に穴をあける始末であった。しかも射程もかなり長いので、屋外で空に向かって撃てば飛行中のドローンや飛行船等に当たりかねないという。駄目押しとばかりに、ミレニアム自治区の上空は絶えず無数の各種ドローンや無人輸送機が飛び交うキヴォトスの空でも最上位の過密エリアである。これでは、そもそも訓練でさえなかなかできない。

訓練ですらこれなのだから、実際の任務での使い勝手は推して知るべしである。街中

でチャージして砲撃するなど論外。チャージしなければまだ使用できる破壊力に収まるが、連射力は低い。砲撃そのものが曳光弾がマシンに見えるレベルで目立つため、夜間で使用すれば射手の居場所を全力で知らせるようなもの。そして何よりもあまりにゴツイ見た目をしているため、敵から真っ先に狙われる。敵からすれば、こんな目立つことこの上ない武器を担いで普通に走ってくる少女を、警戒するなという方が無茶だ。レールガンの破壊力は想像できなくとも、「あれを撃たせちやだめだ」と誰もが思う。かといって街中では射程を生かした長距離砲撃は出来ないし、やったとしても味方を巻き込みかねない。

このため、現在のアリスの戦い方は、巨大且つ頑丈な「光の剣：スーパーノヴァ」の砲身を盾代わりにして敵の射撃を防ぎつつ接近し、「光の剣：スーパーノヴァ」を振り回して殴りつけるか、接近してチャージしていない砲撃を行うというスタイルが基本となっている。攻防一体の悪くはない戦い方だが、レールガンの圧倒的破壊力と自慢の長射程という強みを月の彼方へぶん投げている。

これでは開発者も泣くだろう、いや、開発コンセプト自体が崩壊している気がする。そう考え、ミカは唸った。なお、実際には開発したエンジニア部の面々は、「光の剣：スーパーノヴァ」が埃を被ることなく、使われているだけで大満足していることを、ミカは知らない。

何故にそんな、日頃の訓練すらまともにできないような代物を愛銃に選んだのかと言いたいところだが、ミカは寸でのところを堪えた。キヴォトスの生徒の世界において、相手の「愛銃」をけなしたり否定したりする行為は最大級のマナー違反である。多くの生徒が心を籠め、毎日整備を繰り返す。勿論、ミカも例外ではない。そんな愛銃を馬鹿にするような発言は、この世界では最低最悪の宣戦布告と扱われる。無論、発言者のモラルが周囲から徹底的に疑われるという意味で、である。メイクや髪形を侮辱するより遥かに酷い。

「しかし、アリスは負けません。勇者は戦場を選ぶことが出来ないのが世の常です。アリスは、どんなフィールドでもデバフに負けず、シャーレや仲間の皆と一緒に戦えなくてはならないのです。そこで、アリスは考えたのです！」

握り拳で胸を叩き、アリスはキリつとした表情で胸を張った。

「レベルアップの方法は複数あります。強化先はツリー形式です！アリスの可能性は無限大で、様々な選択肢があります。まずは、戦い方を学ぶことです！」

レベルガンという武器で戦う者は、キヴォトス広しといえども天童アリスくらいであろう。しかし、他の武器を使う者の戦い方が全く参考にならないわけではない、とアリスは主張する。

「シャーレには先生のとつてもすごい人脈のお陰で、最高レベルのガチ勢が揃っている

と聞きました！ アリスは師匠の選択に困りません！」

そしてもう一つの方法が、他の銃器の使い方や特性を改めて知ることだ。はつきり言ってキヴォトスの一般的な生徒からすれば今更か、と言いたくなるほどの基礎レベルの話である。

「そこで、実際に銃器を使えるプロの人たちから、アリスは学びたいのです！ 今回は、サブの武器も用意してきました！」

「……と、こんなことを前々から考えていたんだけど、色々忙しかったんだ。大変な出来事が重なって、今まで引き延ばしになって……テスト前の勉強とか、あとは……ちよつとね、アリスが色々大変で、訓練どころじゃないことがあって……それももう落ち着いてきたし、漸く取り掛かれるようになったってわけなんだ。それに……」

「先日、先生が危険な目に遭ったと聞いたのです！」

モモイの補足説明を遮るように、アリスは一際大声を上げた。眉を吊り上げ、両手の拳を力強く握っている。

「状況は逼迫しています、アリスはすぐにでもレベルアップして、先生のお役に立ちたいのです！ 先生のために満足に戦えなければ……アリスは、真のシャーレ部員にはなれません！」

真剣な眼差しが、ミカを射抜く。成程、実に立派で素敵な理由だ、とミカは感心した。

「うん、私にできることなら、協力するよ☆」

アリスが強くなるのなら、先生のためにもなる。ここまで聞いて乗らない手はないだろう。ミカがにつこりと2人へ微笑みかけると、モモイとアリスは飛び上がって喜んだ。

「ホント!? やったね、アリス！ ありがとう、ミカさん」

「はい！ パンパカパーン、アリスはミカのクエスト発生条件をクリアしました！」

両手を挙げて喜ぶアリスを見て、ミカは笑みを苦笑に変えた。随分と個性的な子だなあ、と思った。ナギサがミカの心を読んだなら、「今すぐ鏡を見ないと、口にロールケーキを3本ぶち込みますよ、ミカさん」と麗しい笑顔を向けたに違いない。

ミカはふと、アリスに視線を向けた。見たところ、アリスは背負っているとしてもなく目立つ巨大レールガン以外の武器を持っているようには見えない。

「……あ、そういえば、サブの武器って？」

「あ、はい。これです！」

アリスは真剣そうな表情に戻すと、着込んでいた上着の奥に手をつ込み、腰のあたりをまさぐり始めた。どうやら、上着の下にヒップホルスター（腰に付けているホルスターは何故かヒップホルスターと呼ぶ）を付けているらしい。

そして、アリスは標準的なサイズの自動拳銃を取り出してミカに見せた。

「この、Bluetooth機能付きの拳銃です！」

「え、何で？」

ミカは普通にツツコミを入れた。もう我慢できる気がしなかった。

シヤールレ部員と一緒に②

キヴオトスの生徒の中には、複数の銃器を使う者もそれなりにいる。早瀬ユウカのように同じ銃器を2丁装備している者、小鳥遊ホシノのようにメインの愛銃としてではなく、バックアップのための小型銃器をお守り程度の意味で持ち歩いている者など、そのスタイルは様々であるが、決して異常という程少くはない。

銃器にあまり詳しくない一般住民の中には、資金さえ出せば拳銃より遥かに大口径の銃器やフルオート射撃も可能な銃器がいくらでも買えるキヴオトスにおいては、拳銃は安価なことしか取り柄がない銃器や、素人向きの銃器だと思える者も少なくないのだが、そんなことはない。拳銃はメイン銃器としてもサブ銃器としても極めて優秀である。アサルトライフルに射程や威力で劣るとしても、サブマシンガンのように連射が出来るいにしても、拳銃の真価はそこではない。拳銃の特筆すべき価値は、その携帯性にある。キヴオトスの生徒は高い身体能力を持ち、大型の銃器も楽々運ぶことが出来る。しかし、例えば大型銃器を背負っていても負担にならずに空気のように感じていようが、実際に消滅しているわけではない。大型の銃は長く、運ぶ際にもスペースが必要となる。銃身が長いと取り回しも苦勞する。大型の銃そのものが視界の邪魔をしてしまうことも

ある。

しかし、拳銃はホルスターに仕舞ってあれば体の動きが制限されることはほぼ無い。狭い室内でも取り回しが容易だし、構えていても視界が広く確保できる。片手でも簡単に撃てる（そもそも「拳銃」とは片手で撃てる銃の総称なので、片手で撃てない銃は普通は拳銃に類別されない）ので、ものを掴んだりして片手が塞がっている状態でも難なく扱える。右手で持つ銃を左手で持ち替えるようなことも、拳銃だと比較的簡単だ。

勿論、初心者でも扱いやすい、というのも大きな利点である。大型の銃はメンテナンスにも対応の時間と手間がかかるし、大半が拳銃より高価である。

キヴオトスの生徒は一通りの銃器の扱い方を学ぶのが普通だが、やはり最初は拳銃から学ぶことが多い。ある意味、アリスが初めてレールガン以外でまともに扱う銃器として、拳銃を選ぶのは定石通りと言えるが。

「でも何でBlue tooth機能付けているの……？」

「多機能拳銃はロマンなのです！ ヒビキが言っていました！」

「えええ……？」

そういうもののなの？ とミカは首を捻った。

ちなみにこのBlue tooth機能付き拳銃は、音楽鑑賞や保存のみならず、NFC機能が付いているのでコンビニペイやスモモ（キヴオトスの一般的な交通IC電子マ

ネー)の使用も可能だという。スマホで良いじゃないか、と思う自分はミレニアムには向いていないのだろうか、とミカは曇りのない瞳で自分を見上げているアリスから視線を逸らした。

拳銃本来の機能に悪影響を与えていないにしても、そんな機能など無駄でしかないように思えるが、そういったマルチに使える銃器がミレニアムのトレンドなのかもしれない。

ミカはくるくると回している自分の愛銃を見つめた。ミカの愛銃は基本的にトリニティで一般販売されているサブマシンガンとほぼ同一である。ただミカが丹念に心を込めて塗装し、整備しているだけである。これといった特別な改造も施していない。

アリスの横で微妙な表情を浮かべているモモイもアクセサリーが付いた派手な色のアサルトライフルを抱えているので、ミレニアムの気風なのかもしれないなあ、とミカは考えることにした。もうBlue tooth機能付き拳銃にはツツコまないようにしましょう。ミカはそう思い、興味の対象を別に移していく。諦めたわけではない。気分屋なだけである。

「ところで、引き受けた後にこんなこと言うのもあれだけど……何で互助会の緊急通知で募集をかけたの？ ミレニアムの人に教えてもらえばいいんじゃない？」

「あ……………」

モモイは僅かに視線を泳がせると、眉を下げてミカを見上げた。

「まず私たち……ゲーム開発部なんだけど。全員基本的に戦闘が苦手なんだよね……。シャーレの活動じゃないと戦ったりしないし。素人に毛が生えた程度の知識と能力しかないし、私はアサルトライフルで妹のミドリはスナイパーライフル、部長のユズはグレネードランチャー使いで……そりゃ、拳銃の使い方くらいは知っているけど、正直記憶が曖昧で……」

から笑いをしつつ、気まずそうに後頭部を搔くモモイ。なお、実際のところアリスを除くゲーム開発部の3人は、シャーレでは最強とはいかないまでも平均程度の実力は持っている。そして各学校の最強クラスや天才、実力者が数多く属しているシャーレで「平均程度」ということは、ミレニアム自治区ではかなり実力が高い部類に入る、ということでもある。ところがモモイにしろ妹の才羽ミドリにしろ、そして部長の花岡ユズにしろ、自分たちがミレニアムサイエンススクール上位の戦闘能力を持っているという自覚が全くない。

彼女たちは確かにシャーレでも何度か訓練を行っているが、如何せん周囲が強すぎて訓練での成績もぱつとせず（シャーレ基準で）、あまり自分たちが強くなっているという感覚がない。先生の指揮下でC&Cに立ち向かったり多くの敵を倒しているも、先生の指揮やシャーレの仲間のサポートがあつてこそ、と思つている。

「それで、まずはミカさんの言う通りミレニアムのお友達や先輩たち……ヴェリタスやエンジニア部の人たちにお願いをしてみただけど。正直言って、みんないつもすつごく忙しそうだからダメ元だったんだよね。案の定ダメだった。……最近は特に色々立って込んでいるみたいで……皆戦闘が本職じゃないってのもあって、ヴェリタスにもエンジニア部にも断わられちゃった。

セミナーのユウカにも声をかけたんだけど、同じく忙しくてダメだった。……ユウカ、すつごい苦しそうな顔してアリスのお願い断ってたんだけど。私の時と態度全然違
うじゃん……」

モモイは若干俯いて拗ねたように説明した。が、すぐに顔を上げてもう一度ミカを見上げる。

「それが1週間くらい前のお話なんだけどね、それで皆でどうしようかと考えていたんだけど……。結局、もういつそのこと、シャーレの他の人たちに頼んじやおつかって思っただよね。そしてちょうどそのことに思い当たった日、例の先生襲撃未遂事件が起こったんだよ」

「ああ……そういうこと」

ミカは頬を掻き、小さく頷いた。

「うん、アリスが一層焦っちゃってね。唯でさえ、アリスは先生に色々とお世話になって

いるから……うん、まあ、それは私たちゲーム開発部にも言える話なんだけど。それで最後の手段つてことでの緊急通知なんだけど……」

モモイは太陽のような笑顔を浮かべ、小さく飛び跳ねた。それに釣られるように、黙ってモモイの説明を聞いていたアリスも満面の笑みを浮かべ、モモイに負けじとダイナミックにジャンプした。そして、ぎゅつとミカの胴体に抱き着いた。

「まさか、即答で返事が来るなんて思ってたよ〜！ ありがとう！ ミカさん！」

「はい、アリスはとても嬉しいです！ 本当にありがとうございませす！ ミカ！」

「え、あ、うん……」

突然のことでアリスを引き剥がす気も起らず、ミカは抱き着いているアリスとニコニコ笑うモモイを交互に見つめた。

「あー……その……私でいいの？」

思わずミカはそんなことを言ってしまった。本当に今更過ぎる、と言った直後に内心自分に呆れてしまう。

「はい！ 先生は言っていました、ミカはとっても強い生徒だと。アリスは……」

そんなミカに即答し、アリスは少し物憂げな表情を浮かべた。

「アリスは、先生に……強いつて頼られたことはありませんから。だから、ミカのこと、とっても凄いいと思います！」

アリスは物憂げな表情を消し、邪気の無い笑顔をミカに向けた。そんなアリスの横で腕組をしたモモイは、可愛らしく唸りながら小首を傾げた。

「私も先生から、ミカさんのことは聞いていますよ。先生から話も聞いたし、ゲーム開発部の皆で話し合ったりもしたんだ。そんなことをしている間に私たちの方でも色々あつて、もつとぐちやぐちやになつちやったりもしたけれど。……たくさんたくさん話し合つて……ミカさんについては、まあ、いつか！　つて感じで落ち着いちゃつたかな」

あまりにも適当な、正直すぎる総括であつた。聞いているだけで色々端折られているのがわかる。とはいえ、それが自分とアリュウスの行動の結果なのだろう、とミカは聞きながら苦笑した。自分は色んな人たちを、色々と考えさせるような行動をとつたのだ。

とはいえ少なくともこの2人は、表面上はフレンドリーに接することが出来るくらいには、ミカに気を許しているように見えた。或いは、割り切つているだけなのかもしれないが。

「そつか、ありがとう。それじゃあ……」

ミカはそう言つて、公園の奥の方を指差した。

「アリスちゃんがやりたいことからしてみよつか。あつちの方だね」



アリスの当面の目標は他の銃器を使った戦い方を間近で見ることと銃器や戦術の知

識を獲得すること、サブの武器として拳銃もある程度使えるようになることの3つである。そして願望としては、今の戦い方からレベルアップ（？）した新しい戦い方も身に着けたらいい。要は強くなりたいということである。実にシンプルな願望だ。

今日1日で全てを終わらせるのは無理だが、取り敢えずアリスは拳銃の使い方と拳銃での（或いは拳銃との）戦い方、そしてミカのようなサブマシンガン使いとの戦い方を知りたい様だった。

ここは重要な方からやっつけていこう、と考えたミカは、アリスとモモイと一緒に公園の奥の射撃場へと向かった。

どうしてこの公園が集合場所になっているのかというと、ここには射撃場があるからだ。超が1個では到底足りないほどの超銃社会であるキヴォトスでは、公共施設には射撃場や射撃訓練施設が整えられていることが多い。この公園にも立派で広大な射撃場が造られている。しかも大多数の生徒は自分たちが所属する学校の訓練施設を使用するので、他の自治区に比べD・U・の射撃場はなかなかの穴場なのだ。しかもヴァルキューレ警察学校のようなD・U・を監督する治安維持組織もわざわざ公共の射撃場など利用しないため、それこそD・U・に遊びに来た生徒くらいしか使用しない。そのような状況下でも、惰性というべきかもしもの時の備えというべきか、D・U・のあちらこちらには立派な射撃場が造られている。

こういった射撃場は事前予約も可能で、他の申請がなければ広大な射撃施設を贅沢に活用できる。今回はこの公園の射撃場をモモイが事前予約しているのだ。シャーレではこの公園のような余りまくっている射撃場や訓練施設を活用した合同訓練や練習なども頻繁に行われているらしい。

ちなみにシャーレオフィスにも一応小さな屋内訓練施設があったのだが、先生が試しに撃つてみたいなあ、と呟いたおかげで施設ごと封印された。後日、連邦生徒会に対するシャーレ部員連合による「先生が射撃に興味を持って危ない目に遭ったらどうしてくれる」という内容の抗議ラッシュが行われた。完全に幼い我が子を持つ母親の行動である。

この射撃場は公園の中央にある池の横に造られており、定期的にメンテナンス用ロボットによる整備や清掃が行われている。常駐スタッフはおらず、手前の無人カウナーでお金を払って、カウナーに設置されたコンソールを操作すれば、的や障害物を出したり動かしたり、自動制御で動く仮想敵を管制したり、レンタル用の銃器が仕舞われているガンラックのロックを解除したりすることが出来る。

「今日は、ミドリとユズがシャーレの任務があるって理由で来れないから私たちだけに来ただけけど、お金は2人も出してくれたんだ」

そう言ってモモイはカードで料金を支払うと、手慣れた様子でコンソールを操作し始

めた。ちなみにコンソールの横には人工知能搭載型のオペレーションシステムも備え付けられており、コンソールの操作が苦手な人は音声でシステムに指示をすることも出来る。それに目もくれずにコンソールを楽々操作するあたり、流石はミレニウムの学生だな、とミカは素直に感心した。

モモイが操作をすると、射撃場の手前側の地面から、木製の簡易的なが伸びてきた。

「さて、アリスちゃんに拳銃について教えていく前に……アリスちゃん、ちよつとその『光の剣：スーパードヴァ』……ごめん、長いから『光の剣』で良いかな？」

ミカはそう言つて、アリスを見つめた。相手の「愛銃」の名前を勝手に略したり、固有名が与えられた銃を「そのレールガン」だとかそういう呼び方をするのは、生徒間のトラブルの原因になりやすいのだ。空気が読めないタイプだと自認しているミカすら、仲良くなりたい相手に対しては気を付けている点である。

案の定、アリスはミカが『光の剣』と呼んだことに目を輝かせた。そして、力強く頷く。

「はい！」

「ありがとう☆。で、その『光の剣』を、撃つてみてくれる？ チャージなしで、あの的に向かつて」

「わかりました！」

アリスはそう言つて、素早く「光の剣：スーパーノヴァ」を背中から降ろし、構えた。背負つた状態で普通に飛び跳ねていることからわかつてはいたが、本当に楽々と扱っている。構えていても体幹にブレがなく、脚もしっかりと地面についており、射撃姿勢も悪くはない。

音を立てて銃口が開き、レーザービームのような青白い光が発射された。光は木の板を易々と貫き、その遙か彼方まで飛んでいく。

「おお☆。なるほどね」

アリスから少し離れて射撃を見守るように、マスターアイ利目の反対の目を瞑つた状態で、ミカは微笑みながらアリスの撃つた弾をじつと見つめていた。

「レールガンの弾道なんて初めて見たけど、すつごく真つすぐに飛ぶんだねえ。重力加速度や偏流の影響を受けにくいのかな？　これはレールガンの高初速の賜物だとかレールガンそのものの構造もあるけれど、アリスちゃんの神秘の力も加わっているのかもね」

「え、あんなに速く飛んでいるのに、カメラも使わずに分かるの!？」

淡々と呟くミカの横で怪訝そうに小首を傾げていたモモイが、驚いた表情を浮かべてミカを見上げた。

「うん？　まあね。私、視力良いから☆」

ミカはそう言うと、顎に指先を当ててモモイを見下ろした。

弾丸が銃口から飛び出してからの動きは「砲外弾道」と呼ばれる。どれだけ高速で射出された銃弾でも、重力加速度で落下していく。このため目標に当てるためには、銃身に上向きの角度を付けて撃つ。勿論上に向けて撃つわけだからその分弾丸が空中にある時間は長くなり、必然的に空気抵抗を受ける時間も伸びる。つまり、命中まで時間がかかる。

弾丸はすさまじい速度で飛んでいくと思われがちだが、遠距離の敵を狙っていると弾が遅く感じるのは良くある話である。

飛んでいる弾丸は、重力に引かれて徐々に落下していく。物体が飛びながら落ちていくのだから、弾丸の下に風圧が発生する。さらに通常のライフル弾は空中で回転している。回転体に力が加えられた場合、その力は90度ズレて働く。つまり弾丸の横向きに風圧の力がかかるのである。よって、空中を飛ぶ弾丸は自然に横へ横へ押されていく。この動きを「偏流へんりゅう」と呼ぶ。例えば標準重量の7・62ミリ弾の場合、1000メートル飛ぶと60センチほど横にズれる。

遠距離の相手を狙撃する場合、風速だけではなく放物線を描く弾丸が何秒後に目標に到達するか、放物線の高さはどれくらいか、偏流でどれくらい横に流れるかなどの諸条件を把握し、計算に加えた上で撃たなければ命中は見込めない。

「弾丸が真つすぐ飛ぶ」というのは、ただの比喩表現なのだ。実際の弾丸は風や重力、偏流の影響を著しく受けるため、大体砲外弾道はズレる。たとえ僅かな誤差であろうとも、その誤差のせいで命中しなければ到底「僅か」とは呼べないだろう。

しかし、アリスの放つた銃弾はほほほ真つすぐ飛んでいったように、ミカには見えた。あの武器の原理はよくわからないが、ライフルとは構造が異なることが理由かもしれない。加えて長射程と高い貫通力を持っている。ちよつとやそつとの遮蔽物は容易く貫き、弾丸の運動エネルギーが下がることもなさそうだ。成程、大重量とサイズという欠点を補つて余りある優秀な武器だ。余り過ぎて安易に最大エネルギーで放てないのが問題なのだが。

「あはは☆、結構面白いね、色んなことに使えそう☆」

、楽しそうに笑いながら、ミカはポンと両手を合わせた。

それを見て、モモイとアリスは不思議そうに小首を傾げた。

シャーレ部員と一緒に③

「ん、あとは威力を知りたいかなー。……ねえ、アリスちゃん。ちよつと私に撃つてみ
てくれるかな?」

「はい……………はい!」

「何言っているの!」

何の脈絡もなくとんでもない発言をするミカに向かい、アリスとモモイが驚愕の表情
を向けた。特にアリスは華麗な二度見でミカを見ている。地面につくほどの長すぎる
黒髪がばつさばつさと激しく揺れた。

「あ、気にしないでいーよ☆。見たところ、当たつてもちよつと痛いくらいだと思っし」

「あれが!?! 不良くらいなら一撃で昏倒させられるんだけど!?!」

「大丈夫だよ、私、頑丈だから☆」

「限度つてあるでしょ!」

アリスの愛銃の威力は相当なものだ。チャージせずとも、そこらの相手は一撃で沈め
ることが可能である。それを軽いノリで受けようとするミカに、モモイは本気で恐ろし
いものを見たような表情を浮かべた。他校の先輩（しかも初対面）でなければ、「馬鹿だ

！』と絶叫したいほどである。

「む、む、無理です！ アリスの『光の剣』は、仲間を傷付けるものではありません！」
「え、駄目？」

首を振り、さらに両手も大きく振って全身で拒否の意を示すアリス。それを見て、ミカは何かを考えるように虚空を見上げ、再びアリスに視線を戻してにこやかに笑った。
「あ、じゃあアリスちゃんが私の足元に撃って、私が弾丸を明後日の方向に蹴り飛ばすって言うのは？ これなら何となく威力が分かるし私も痛くないし、万一失敗しても地面に当たるか私の足が被弾するだけだから、被害は少ないよ☆」

「いいわけないよ馬鹿なの!？」

名家だとも言うようにパチリとウインクしたミカに、とうとうモモイは本気でツツコミを入れた。そして馬鹿というド直球な罵倒ワードが飛び出した。慌ててモモイは口元を抑えるが、ミカは腕を組んで無駄に綺麗な声で唸るのみだ。実際のところ、最近のミカはトリニティで一部生徒から罵声を浴びせられまくっているため、今更ツツコミで馬鹿と言われたくらいでは何とも思わないのだが、そんなことはモモイもわからない。あわあわと両手を振って誤魔化そうとするモモイを見て頭の上にクエスチョンマークを浮かべつつ、ミカはそれなら、と人差し指を立てた。

「仕方ないなあ……でも、一応言っておくけれど私の戦い方って被弾するの前提だよ？

全部避けるの大変だし面倒だし、避けるのに成功しても姿勢によつては反撃しにくくなるし。銃弾躲すと姿勢が大きく崩れるかもしれないけど、受けちゃえばちよつと痛いだけで姿勢崩れないし。避けるよりも受けてた方が反撃しやすくない？」

「いやいやいや、おかしいって！」

ニコニコと笑いながらそんなことを言うミカ。眩しい笑顔に戦慄を覚えたモモイは、手をパタパタと振った。勿論、横にである。

「うーん、そんなに駄目かな……？」

心底不思議そうに唸るミカを見て、モモイは頭を抱えそうになった。ツツコミは妹の役目だった気がするのに、さつきからツツコミしかしていない。

確かに生徒たちは銃弾を撃ち込まれても痛がるか気絶程度で済むが、それにしたつて開き直りにも程がある戦法である。戦術に関してはあまり知識がないモモイでも、それが戦法という名のフィジカルゴリ押しだということは分かった。

「そ、それに、蹴り返すなんてできません。……貫通しますので」

再び愛銃を背負ったアリスが、てくてくとミカに近付いてきながらおずおずと言った。

「えつ、貫通？ 体に穴空くの？」

ミカは目を見開いた。流石の自分もお腹に風穴が開けば死ぬ。多分。

「流石にそこまでじゃないよ！ あ、そういう言い忘れてた。んー、原理はよくわからないんだけど……アリスの銃の弾丸って、実弾とビームのミックスっていうか、なんて言えばいいのか……電気をまとった弾丸？ を飛ばすんだけど、それが例えば身体に当たった場合、弾丸は身体に当たってそれで終わるんだけど、電気のエネルギーが体を貫いてさらに直進するの。だから、その後ろの人にも当たるんだ。この電気のエネルギーも結構な威力で、やっぱりそこらの相手なら一撃必殺だよ。

ちなみにチャージすると放出するエネルギー量が増えるから、攻撃範囲も広がるの。だから、すぐく広範囲の破壊も可能なんだ。フルチャージした場合、壁とか天井に大穴が開くよ。フルチャージした砲撃は砲撃というよりまんまビームだね」

「えええ？」

何それ、それはレールガンとは呼ばないんじゃないかな？ ミカは思わず変な声を上げてしまった。ミカが驚くのも無理はない。ミカはこの「光の剣：スーパードヴァ」が「大気圏外での戦闘を目的として開発された実弾兵器」というとんでもないコンセプトで研究されたものだということを知らないのだから。言わばこの武器は、レールガンの名乗りつつも実際はビーム砲と実弾兵器の合いの子のような代物なのである。

そんなミカを見て、アリスがコクリと頷く。

「はい、ですからこの『光の剣：スーパードヴァ』は、弾丸しか装填しません。発射に火

薬を用いらないので、アモ（アミニシヨンの略。実包のこと。実包とは弾薬カートリッジの別名）もありません。通常の銃弾とは、そもそも根本から異なるのだと……コトリから聞きました」

一般的に「弾薬カートリッジ」とは弾丸（弾頭）、発射薬、雷管パウダーの3つを「薬莖プライマー」という金属製のケースの中に組み込んだものである。そして「実包アモ」は意味としては弾薬とほぼ同じである。キヴォトスではこれらの呼び方や表記が混在しており、弾薬や実包、カートリッジやアモなど皆好きに呼んでいるのが実情である。

薬莖はものにもよるが、大体真鍮しんちゆう（銅と亜鉛の合金。基本的に銅が70パーセント、亜鉛が30パーセント）製か鉄製が多い。マイナーだがアルミニウム製やプラスチック製もある。一番多いのは真鍮で、このため薬莖は「ケース」或いは「プラス（真鍮）」とも呼ばれる。

ちなみに散弾銃用の薬莖は紙製やプラスチック製が多い。

現代の一般的な弾薬の造りは、簡単に言えば底を塞いだ金属製の円筒（薬莖）に適量の火薬を入れ、先端に弾丸を嵌め込み、底の中央に点火装置であるプライマー（形状としてはボタン電池に近い）を埋め込んだものとなる。装填して引き金を引けば、先端の弾丸が飛んでいくというわけだ。

つまり現代の銃器は、「弾丸を込める」ことではない。「弾薬」を込めて引き金を引けば、

「弾丸」が発射されるわけである。

しかしアリスの愛銃はレールガンなので、弾薬を装填することはなく、ただ金属の弾丸を込めて電気エネルギーと共に射出するだけの様である。弾丸ブレットというよりは「矢じり」と言った方が良いのかもしれない。

道理で弾道が一般的な銃と異なるわけである。そして、アリスがキヴォトスの生徒ならだれもが知っているであろう銃の構造やら戦術やらにあまり詳しくないわけである。この「光の剣：スーパードヴァ」は、キヴォトスの一般的な銃器とは完全な別物だ。何かを射出する点くらいしか共通点がない。愛銃と呼ぶのすら、便宜的なものでしかないと言つてもよいだろう。

最初に触れた武器がこれでは、銃に関する基礎知識すら身につかないのも無理はない。

「なるほどね……じゃあ、今のはナシで。ごめんねー」

困つたように微笑むミカを見て、アリスとモモイは同時にホツと安堵の息を吐いた。「でも、この武器がすごいってことに変わりはないよね。弾道はブレずに真つすぐ飛んでいくってことは、つまり敵が目の前に一列で縦隊になつていたら、真正面に向かつて遠距離から狙撃すれば全員倒せるってことでしょ、しかもまとめて。狙う必要がなく、ただ構えて撃てば正面の敵はどれだけ離れていても倒せる。なかなか悪くはないね。

問題は、ビームっぽいから弾道が丸見えってところかな☆」

ミカが称賛するかのようによく手を叩きながら言うと、モモイが眉を下げながら小さな声で同意した。

「そうなんだよね。だから真正面にいると躲されちゃう。フルチャージだと広範囲だから避けるのも大変だけど、周囲の被害も凄いから多用は出来ないし、チャージ時間もかかっちゃう」

「だから接近して近くで構えて撃ち込むわけかー」

「はい……ですが、それではこの勇者の証は、最大の魔法を發揮できません……」

再びしよんぼりするアリス。そんなアリスに微笑みかけ、ミカは膝を曲げてアリスに視線を合わせた。

「えっと、つまり長射程を生かしたいわけだよね？ それじゃ、考えていこっか☆」

黄金色のミカの瞳を見て、アリスは目をぱちくりさせると、青い瞳をキラキラと輝かせた。



「まず、今のアリスちゃんの基本戦法……つまり、『光の剣』を盾代わりにして敵に接近しつつ『光の剣』で殴るか、チャージせずに撃つ戦法は残しておこっか。それは別に悪くは無いしね」

人差し指を立てて小首を傾げながらそう言うミカに、アリスは戸惑ったように眉を下げた。

「で、ですが、それではこの『光の剣』の長所を生かすことが……」

「あー、そういう考えはやめた方が良いよ。はつきり言っちゃうとナンセンスだね」

ミカはアリスの言葉を遮り、両手の指でバツを作るジェスチャーをした。

「PMCのように統一された装備と部隊で戦うようなら兎も角、アリスちゃん個人やわたしたちシャーレで戦うなら、銃器の使い方に絶対的なセオリーなんてものはないんだよ。武器の長所とか持ち味を出す戦い方をするのもそれはそれで全然良いんだけど、そのことや効率的な戦い方に拘る意味なんてあんまりないの。

銃器の特性を生かしていなくても強い子なんて、キヴォトスには幾らでもいるんだよ？　そもそも神秘の力を使って銃器のセオリーをまるっと無視している子とかも普通にいるしね」

例えばシャーレに限っても、シヨットガン2丁持ちの剣先ツルギなど、通常の使い方と異なる戦法を主流としているにも関わらず強い者は意外と多い。

ミカは愛銃こそ普通のサブマシンガンであるが、格闘術を織り交ぜたり相手の動きを先読みしたりしてセオリーとは外れた超至近距離での戦闘を得意としている。何より異常なまでのタフさを存分に使い、必ず相手を仕留められる距離まで自ら飛び込み、し

かし敵の射撃を受けても倒れないという敵から見れば理不尽の極みのような戦法で、これまで多くの敵を倒してきているのだ。

このように武器の使い方や戦い方が独特な生徒は、キヴォトスではさほど珍しくはない。

「そして私たちは先生の指揮下で、時には先生の指揮下でない時もシャーレの仲間と戦うわけでしょ？　なら、先生とシャーレ部員がアリスちゃんに出来ることを知っていれば、別にアリスちゃんが『光の剣』の長所を生かしたマニユアル通りの戦い方に拘る必要なんて、無いんだよ。いくらでもフォローができるからね。」

どんな戦い方を採用したところで、要は敵を倒せば良いんだから」

あつけらかんと言うミカに、アリスとモモイは哑然とした表情を向けた。

「な、成程……。必ずこちらの属性にあった魔法を使わずとも、相手の弱点属性を突かなくとも、確かに倒すこともできますね！」

「そ、そうだね。言われてみれば……」

「うん、そう。だから今アリスちゃんがあまりやる機会がない、そしてやりたいことをできるようにしつつ、今できることも伸ばしていった方が良いと思うんだ」

両手でガッツポーズをして目を光らせるアリス。隣のモモイも敬意の籠った目でミカを見ている。この子さつきから独特な例えするな、と今更ながらそんなことを思いつ

つ、ミカは説明を続けた。

「だから今回の場合、肝要なのはアリスちゃんが今までやれてこなかった中距離から長距離にかけての狙撃の訓練。そして近距離での戦闘をよりスムーズに行えるようにする訓練。そして、最後にアリスちゃんがある程度の銃の知識を身に着けることと、拳銃とかいろんな銃器も最低限度使えるようにする訓練。これから時間をかけて、ちよつとずつやっていこっか」

「はい！ え、時間をかけてって……」

大きな声で返事して片手をシュバツとあげたあと、アリスは目を見開いて片手をあげた姿勢のまま固まった。

それを見て、ミカはもう一度笑顔を浮かべた。

「うん、乗り掛かった船だしね。今日だけじゃ身に付いたりしないでしょ？ アリスちゃんが自分で満足できるまで、付き合うよ☆。ちよつとずつ前に進んでいこうね」

「……はい！ ありがとうございます！ ミカ！」

ミカの微笑みを見て、アリスは今日一番の笑顔を見せた。花が咲く様な、綺麗な笑顔だった。

「わあ、ありがとう！ ミカさん！」

そんなアリスを見て、我が事のように喜ぶモモイ。いい子たちだな、とミカは眩しい

ものを見るかのように、うつすらと目を細めた。

こういうのも悪くないなあ、と順調に絆ほだされていっている自分に内心苦笑しながら、ミカは相変わらず晴れ渡っている空を見上げた。そして大きく息を吸い、真剣な表情を作ってアリスを見下ろした。

「それじゃあ、まずは簡単などころから……その拳銃、使ってみようか。その使い方をマスターしたら、今度は私の戦い方も見せてあげるよ☆」



その日も変わることなく、シャーレは忙しかった。まずはオフィスにいる先生の指揮の下、本日の当番6人が、D・U・で今日の任務を複数こなしていた。次にバイトでシャーレに来たトリニティ正義実現委員会のメンバー4人が、喫茶店ムエツトの事件の調査で駅ビルマニオライ近辺での情報収集や、ヴァルキューレとの合同捜査を行っていた。そして、さらに当番とは別にシャーレ部員が、早瀬ユウカの指揮の下、事件の捜査のために動いていた。

事件捜査を行う3人の中に、才羽ミドリがいた。ミドリはD・U・の街中で街路樹横のベンチに腰掛けつつ、スマホを見ていた。他の2人と互助会から続々と送られてくる情報に目を通し、小さくため息をつく。

「……やっぱり、ブラックマーケットかあ」

あそこは苦手なだけだなあ、と思わずひとりごちると、ミドリは憎らしいほどに快晴の空を見上げてベンチの背もたれに背中を預けた。

ブラックマーケットは嫌いだ。何せ、あそこには。

「……あの女がいるって話だったよね」

あの女。先生を傷付け、殺そうとしておきながら、のうのうと今でも暮らしている女だ。今のシャーレでは連邦生徒会以上に敵意を集めている存在。あの女がブラックマーケットに出入りしているという情報が共有されたおかげで、少し前は色々と大変だった。今日一緒に捜査している彼女が、もう一度暴走しないといけないけれど。

そんなことを考え、無意識にあの女のことを心配していた自分に吐き気を覚えたミドリは、街の喧騒で隠れる程度の舌打ちをした。全く、先生があの子を気にかけているから、こんなことに。

あの女もあの女だ。テロリストならテロリストらしく、闇の奥底で誰にも知られずに蠢いていけばよかったのに。シャーレの一部の部員がちよつと独走したくらいで簡単に尻尾を捕まえられて、お陰で忘れることも出来ない。先生によってあの女への報復も口クに出来なくなっている以上、もうあの女のこと頭を使うことなんてしたくないのに。

ミドリは飲み終わったジュースの紙パックを握り潰すと、立ち上がって近くにあった

ゴミ箱に放り込んだ。ゴミがゴミ箱に入る音を聞いた後、ベンチにかけておいてあった自らの愛銃を背負い直し、スタスタと歩き出す。

そろそろ正午だ。高く昇った日が、街中に紛れていくミドリを見下ろしていた。

シヤールレ部員と一緒に④

「それじゃあ、一先ず拳銃を撃ってみよっか」

「はい！ アリスはすでに、撃ち方を取得しています！」

ミカはアリスの返事を聞くと、モモイに向かって頷いた。それを見たモモイはコンソール向かって走っていき、手早く操作する。

すぐにアリスの前方20メートルほどの場所に、的がせり上がってきた。

拳銃の有効射程は25〜50メートルが精々だ。腕が良くとも60メートル以上離れた目標に当てるのは難しい。確実に当てるのなら20メートル以内は目標に近づくのが普通である。

「では、行きます！」

そう言つて、アリスは両手で自動拳銃を構えた。足を広げ、両腕を前へ伸ばしている。「アイソサリースタンス」と呼ばれる基本的な射撃姿勢だ。

真剣な表情を浮かべ、アリスは息を止める。そして、引き金を軽く引く……前に、アリスは小さく声を上げた。

「あ、忘れてました」

一旦姿勢を解くと、拳銃の上部についているカバーをスライドさせた。自動拳銃の場合、マガジンに入っている弾薬をチェンバーへ装填するため、自動拳銃上部のスライドを動かす必要がある。スライド後部のコッキングセレクションという部分を掴み、銃を前に押し、同時にスライドを後ろに引く。完全にスライド出来たら手を放す。こうするとバネの力でスライドが前進し、マガジンから初弾をチェンバーに送り込んで、チェンバーが閉鎖される。同時に撃鉄も起き上がるため、これで何時でも撃てる状態となる。「あー、ローディングしていなかっただ」

ミカが呟くと、モモイが複雑そうな表情を浮かべて答えた。

「ごめん、一通り撃ち方は教えているんだけど……そう言えば、アリスがどういう状態でホルスターに入れているか、確認していなかっただ」

「へえ……」

ミカが返事をしている間に、アリスは再びアイソサリースタンスで構えた。

「撃ちますー!」

引き金を引いた。しかし、発射されない。代わりにカチンという音が空しく響いた。

「あれ……? アリスは失敗してしまいました……」

一瞬だけ怪訝そうな表情を浮かべたアリスは、すぐに悲壮感溢れる表情になった。泣きそうな子供を連想させる表情を見て、ミカは見ていられなくなった。完全に初めて拳

銃を撃つ幼児のリアクションだった。なら、きつと原因も似たようなものだろう。

「動作不良だね……アリスちゃん、今、空撃ちの音が聞こえたよね？」

ミカは安心させるようにパタパタと両手を振りながら、ゆつくりとアリスに近付いていく。そんなミカを見つめ、アリスは無言で頷いた。そしてミカを追いかけるようにモイもアリスに近付いていく。

「アリス、姿勢そのまま！ 絶対に銃口を覗き込んだりしちやだめだよ！」

「あ、はい！」

「初めて撃つ、空撃ちの音はしたけど弾は発射されない……単純、きつと撃発の失敗だね」

「多分、そうだね……アリス、大丈夫！ すぐに解決するよ」

マルファンクシオン（銃の動作不良）は、基本的に「シンプル（単純）」、「コンプリケイテッド（複雑）」、「カタスロフィック（致命的）」の3段階に分かれる。このうちカタスロフィック・マルファンクシオンは工具を使い時間をかけなければ解決できない故障を指す。当然、戦闘中に簡単に解決できるものではない。このため、その場で対応できるのはシンプルとコンプリケイテッド・マルファンクシオンとなる。

シンプル・マルファンクシオンの中でも、初心者的人為的ミスで起こりやすいのが「フェイラー・トウ・ファイア」と呼ばれるもので、引き金を引いても空撃ちとなる症状

だ。その理由はスライドを引いたにもかかわらずチェンバーが空になっている場合か、チェンバーに弾薬が送り込まれていても、弾薬に不具合が生じていて不発だった場合が多い。

「アリスちゃん、まずはマガジンの底を左の手の平、というより親指の付け根くらいところで叩いて。このミスは基本的にマガジンの装着がしつかりされていない時に起こるんだよ」

「ハ、ハ、こうですか？」

アリスはミカに言われたとおり、マガジンの底を左手を使ってしつかりと叩いた。

「うん、そうそう。そしてもう一度しつかりとスライドしてね。この時銃を回転させて、エジエクシヨンポート（空薬莖を排莖する部分）を下に向けて……落ちないってことは、そもそもチェンバーが空だったね、これは」

ミカの指示に従い、アリスはもう一度スライドさせた。これは「タツプ&ラック」と呼ばれる、拳銃のマルファンクシヨンが発生した時の基本的な対処法だ。マガジンをタツプ（叩く）して、スライドをラック（引く）することからこう呼ばれている。

「多分、最初から上手くマガジンが装着されていなかったんだね。特にアリスちゃんみたいにパワーがある子だと、銃を壊すのを恐れて逆によわーい力でやっちゃって起こりがちなマルファンクシヨンなんだよ」

「そうなのですか？」

「え、そうなんだ……」

「うん、私も小さい時によくやってたなー。油断しているとすぐに空のマガジンとか握り潰しちやつて……」

「成程……！　アリスは理解しました」

「えっ？」

後頭部を搔きながらあははと笑うミカを見上げ、モモイは戦慄した。何それ知らない、と顔で言っていた。そんなモモイと違い、アリスはふんふんと頷くと真剣な表情でもう一度構えた。

「今度こそ、撃ちます……！」

引き金を引くとともに、轟音が響いた。



「もしもし、ユズちゃん。……うん、こつちでも見付かったよ。今、病院に搬送されたところ」

才羽ミドリは去り行く救急車を眺めながら、スマホを強く握りしめつつ抑揚のない声で伝えた。仄暗い色の瞳が、ひたすらに前を見つめ続けている。

「まずいね、これ。チヒロ先輩やウタハ先輩の睨んだ通りみたい。そつちは？　うん、う

ん……。ねえ、本当に大丈夫？ 無理はしなくて良いからね。……。うん、そうだね。先生のために。……。うん、大丈夫。それじゃあ、ユウカへのメール、お願いね」

ミドリは通話を切ると、気怠げに息を吐いた。そしてくるりと救急車が向かっていった方向に背を向け、未だにこの場に留まっている群衆の中を縫うように歩き出した。

状況は思ったより逼迫しているようだ。どうにも、見境が無くなっているように感じる。

先程救急車で運ばれていったのは、1体のロボットだった。ぶつぶつとうわ言を呟きながらレストランを訪ね、そして中で腕を振り回して暴れたらしい。通報を受けたヴァルキューレが駆け付けたところには倒れこみ、意識を失っていたとのことだ。

駅ビルマニオライの時と同じだ。恐らく、同じものを使ったのだろう。

少し、面倒くさい。本格的にブラックマーケットを掃討する必要があるのかもしれない。そう考えると、急いだ方が良さだろう。はしたないが、やむを得ない。先生が見ていないとはいえ、こういうのは習慣となってしまうからあんまりやりたくないのだけだ。

そんなことを考えつつ、ミドリは適当に見つけた屋台でアランチーニを3個購入し、手早く食べて一緒に買った烏龍茶で胃の中へ流し込んだ。焦ったようにアツアツのアランチーニを立ったまま食べるミドリに通行人は怪訝そうな視線をチラチラと向ける

が、そんなことを気にしている場合ではないのだ。

ブラックマーケットと本格的に事を構えるのであれば、シャーレもある程度準備が必要だ。6人程度の当番だけでは些か心許ない。単純に視界に入った悪人を片っ端から倒していくだけなら、先生の指揮があれば6人くらいでも何とかなるかもしれないが、そんな単純な作戦になるとも思えなかつた。

「お姉ちゃん達、大丈夫かな……」

今日はモモイとアリスが、聖園ミカに指導をお願いする日だ。ちょうど近くの公園に集合予定だと聞いていたが、果たして何をしているのやら。

一瞬2人と聖園ミカにもヘルプを頼むことを考えたが、すぐに思い直した。そういつたことはユウカの仕事だ。ユウカのことだし、今頃手が空いている部員にヘルプ要請を送っているのかもしれない。それに今、姉のところには聖園ミカがいる。

別にミドリはミカに恨みを抱いていない。ミドリの敵はあくまで、先生に直接危害を加えたアリウスだ。ミカが先生を補習授業部の顧問にするよう働きかけたのは事実であるが、それでミカを糾弾する気には、ミドリにはなかつた。自分たちの都合で先生を振り回して、その上先生に頼り切つたのは、ゲーム開発部も同じだろうと思っているし、ミカはすでにトリニティより処罰を受け、先生との間で和解も済んでいる。思うところがないわけではないが、アリウスに比べれば些細なことだ。

そう、問題はアリウスだ。先生を意図的に傷付け、あまつさえ殺害しようとした連中だ。自分でもよくないことだとは思いますが、ミカの顔を見ると、アリウスへの憎悪が膨れ上がってしまいそうだった。だからミドリは、聖園ミカにあまり会いたくなかった。

先生と色々話をしたし、シャーレ部員とも話し合いをしたが、ミドリはシャーレがアリウスを追わないことに本心では未だに納得できていない。何も自分たちが直接制裁をしたいなどという贅沢なことは言わない。ただ、せめて連邦矯正局送りになるとか、然るべき罰を受けるのが道理というものではないか。自分たちの手で捕縛できれば文句はないが、この際、ヴァルキューレ公安局でもなんでもいい。連中に社会的制裁が下されるだけで十分だ。

シャーレには、そんな考えを持つ部員が少なくない。それでも先生の願いを受け入れ、行動に移していないだけだ。

先生はミドリに、アリウス分校がいかに酷い環境だったかを教えてくれた。それを聞いた時、ミドリの心の底に湧き上がってきたのは、アリウスへの同情ではなかった。そんなものは最初から欠片も存在しない。

ミドリが真っ先に感じたのは、安堵だった。ああ、この話をしたのが、目の前に座る先生で良かった。もし、先生以外に「アリウスの行いは到底庇えないが、アリウス生徒の境遇には同情の余地もある。報復することなんて許されない」なんて言われたら、ミ

ドリは即座に愛銃を構えて、発言者の顔に交換用のマガジン全てを消費するまで撃ち込んでいたかもしれない。

その次に、ミドリは胸が張り裂けそうになるほどの怒りに襲われた。先生の前でアリウスに同情するかのような悲しげな表情を浮かべることが出来た自分は、ミレニウム一の女優になれるのかもしれない。そう思わなければ、やっていけない程だった。

ミレニウムに戻った後も、ミドリは喉が枯れるまで叫びたい衝動を抑え込むのに必死だった。ふざけるな、アリウスが悪い大人に支配されていたから……そんなものが、先生を殺してもよい免罪符になるといふのか。冗談じゃない。アリウスの生徒がこの世の地獄に叩き込まれたのが、先生の責任だともいふのか。ほんの少し前まで、キヴォトスの外で暮らしていた先生に危害を加える行為を、アリウスの生徒が幼い時から味わってきた悲劇のために、仕方がないと思えといふのか。なんて、理不尽。なんて、不合理。

そんなことを言う者がいるなら、全員シャーレ部員の前に連れてきてほしい。そう言い放った5分後には、ぼろ雑巾よりひどい有様に成り果てているだろう。

そんなことを考え、ミドリは密かに泣いた。声をあげずに泣いて、心の中だけで怒り狂い、そして怒り疲れて気分が落ち着けば、ため息をつく日々が続いた。このドロドロの汚泥のような感情を、ゲーム開発部の仲間や先生に知られたくはなかった。

もしもアリウスに会ったら、そんな醜い心が溢れ出てきそうな気がする。だから、ミドリはアリウスに会いたくないと心底思っている。にも拘らず、アリウスの連中は何を考えているのか。ミサイルで先生とその他生徒たちを吹き飛ばそうとした次は、シャーレ部員の頭の血管を吹き飛ばそうとしているのか。

捕まりたくないのなら、誰もいないようなキヴォトスの果ての無人島にでもへばりついていけばよいものを、ブラックマーケットなんぞに出入りしているとは。本当に、腹立たしい。シャーレ（ニッパ）が簡単に捜査に入れるような場所を這い回るなんて。見つけてほしいのか、あの女は。

ブラックマーケットが表の世界の住民が気軽に入れるところではないのは事実である。しかし、それは一般住民が基準だからこそなのだ。こちらは連邦捜査部「シャーレ」である。能力ある人材には不足していないし、今更ブラックマーケットへの侵入を躊躇うような者もない。グッズ欲しさにブラックマーケットへ気軽に行く部員だっている。もしもあの女がブラックマーケットにいてことでシャーレの目から銃口から逃げられると思っているなら、アリウスは思っていたよりも遥かに無能な連中だ。

ミドリはいらいらしながら、手早く済ませた昼食のゴミを、道に置かれているゴミ箱に捨てた。そして、先程よりもやや速足で歩き始めた。

ゴミが捨てられる音を聞くのは好きだ。こんな風に、捨てることが出来れば良いの

に。憂鬱な気分が少し晴れるのを自覚しながら、ミドリはポケットから再びスマホを取り出した。それを操作し、もう1人の任務中の仲間に電話をかける。

彼女もきつと、同じことを思っているだろう。エデン条約調印式の事件のせいでシャーレが創設以来の大混乱を迎え、その混乱が落ち着くまでの過程で、彼女とはずいぶん仲良くなった。ゲーム開発部の仲間以外で、彼女ほど気の合うシャーレ部員はいないのかもしれない。

3秒ほどコールが続いて、相手が出た。

「あ、もしもし……ハルカちゃん、ごめんなさい、忙しい時に」

ミドリはうつすらと笑顔を浮かべ、穏やかな声で話しかけた。

「もうユズちゃんから聞いたよね、例のこと。……うん、そうだね……ねえ、ハルカちゃん」

ミドリは立ち止まってゆっくりと振り返り、ゴミ箱を見つめた。ちようど、ゴミ収集の機械が近寄り、ゴミ箱の中身を大型のバケツに移しているところだった。その光景を笑顔で見つめながら、ミドリは電話相手に向かって明るい声で言った。

「もしブラックマーケットに乗り込むことになって……あの女に会ったら、ハルカちゃんは、どうするっ?」



その後モアリスの拳銃の訓練は続いた。アリスが学習能力が高いというのは本当のようで、ミカが教えたことをどんどん吸収していった。

たった数時間で実践的な技術を次々と習得していき、正午を過ぎたころには拳銃の使い方はマスターできた。

「凄いや、アリス！」

「いやー、呑み込み速いなー」

「ありがとうございます！」

モモイとミカの称賛を受け、アリスは照れながら微笑んだ。

「これもミカのお陰です、ありがとうございます！ アリスは、これで新たな魔法を身に付けました！」

両手を上げて喜ぶアリスを見て、ミカもつられたように微笑んだ。

「うん、じゃあそろそろ私の戦い方を……と言いたいところだけど、もう結構お昼過ぎちゃったし、そろそろご飯にする？」

「あ、そうだね。えっと、確か近くの屋台に——」

モモイが頷こうとした瞬間、轟音が響いた。銃声だ。しかも、連続して響いている。

「うん……？」

ミカたち3人が互いに視線を向け合っていると、またしても轟音が響いた。今度は銃

声ではなく、爆発音だった。こちらでも連続して響いている。しかも、だんだん近づいてきている。

ミカたち3人がいる射撃場横の池の向こう側の方から響いているようである。池の向こう側には森が広がっているが、その森からもくもくと煙が上がっている。

「穏やかじゃないね、戦闘かな？」

「何でしょう、誰かが爆炎魔法を使っています。……これは、まさか敵との強制エンカウントの予感が……」

アリスが緊張した顔で爆発音が響く方向に顔を向けた時だった。

池の向こう側で爆発が起きた。何かが吹き飛び、そして池に落ちていく。同時に煙も広がっていった。どうやら高威力の特殊手榴弾が爆発した様だった。

暫くして煙が晴れていくと、森の方からこちらに向かつて誰かが駆けてくるのが見えた。

「あれ……？ あの人って……」

モモイが気付き、そして声をかけた。

「おーい、ハルカーー！」

その声を聞き、駆けてきた少女は初めて池を挟んでミカたち3人がいることに気付いたらしい。ぐると彼女の首が動き、紫色の瞳がモモイを捉え、アリスへ動き、そして、

ミカに固定された。少女にじっと見つめられているのを、ミカは感じ取った。

ゲヘナ学園1年生伊草ハルカはミカを見つめると、口元が三日月形に見える笑みを浮かべた。

シヤールレ部員と一緒⑤

伊草ハルカはじつとミカを見つめたまま、構えていた愛銃のローディングを行った。ねばつく様な視線に、ミカは思わず息を飲む。ハルカの紫色の瞳が、段々と光を失っていつているように見えた。

スツとハルカの足が動いた瞬間、池に水飛沫が上がり、池の中から何かが飛び出した。それは腕だった。ロボットの腕がバシャバシャと水音を立てて動いている。池に落ちたのはロボットだったようだ。次に水面からロボットの顔が現れた。ロボットは必死そうな顔を浮かべて畔ほとりへと近づき、池から上がろうとする。

「あ」

ミカが呟いた瞬間、池から上がろうとしたロボットの顔にハルカの爪先が突き刺さった。再びロボットは池に沈む。あまりに惨い追撃である。しかも、ハルカは相変わらずミカを見つめたままだ。哀れにも沈んだロボットには、視線すら向けていない。

「……相変わらずバイオレンスだなあ。おい、ハルカあ！ 死んじやう、死んじやう！」

モモイが口に両手を添えて大声をあげてハルカを止めようとした。声が届いたのか、

ハルカは漸くミカから視線をずらし、モモイを見た。そしてモモイを見たまま、再び必死になって水面から顔を出したロボットに銃口を向ける。

「大丈夫です、ちゃんと埋めますから!」

返事と共に、ハルカのショットガン「ブローアウェイ」から轟音が響いた。

「あ、こりゃ駄目だ。暴走いっものだね」

「アリス、知ってます! あれはオーバーキルというものですね」

「……………どうするの?」

頭を抱えるジェスチャーをするモモイと、真剣な表情で前方の惨事を見つめるアリスを見て、ミカが小首を傾げてハルカを指差した。

「あー、うん……………多分悪い奴を倒しているところだから大丈夫。ハルカは暴走しすぎと追撃しすぎと周囲を巻き込みすぎなどところがあるけど、敵じゃない相手を過剰に叩きのめすタイプじゃない……………可能性がまだちよつと残っているから……………大丈夫」

それは大丈夫と言わないんじゃないかな。心の中でそう呟きつつ、ミカはそつと腕を下ろした。

◆ 結局、水底に沈んだロボットは沈めたハルカ当人の手によって救助された。

「ま、またやってしまいました……………先生にやりすぎは良くないって一昨日言われたばか

りなのに……。うう、死にたい……。死にたい……。生まれ変わったら、先生の私室に置いてある雑草になりたい……」

どんよりとしたオーラをまといながら俯くハルカ。そうは言いつつも、背負っていたバッグから取り出したロープで手際よく気絶したロボットの手足を縛っている。さりげなくロボットの機能を停止に追い込む対ロボット用レーザー銃で更なる追い打ちをしてから縛り始めるあたり、実に手際が良かった。

「いや、それハルカが先生にプレゼントしたやつじゃん」

池を回り込んでハルカの元にやってきたミカたち3人を代表して、モモイが呆れたような視線を向ける。

「ええ、先生がとても大事にしてください……。ふふ、ふ……。せ、先生がお休みになれる時は、常に私が先生に捧げたものが、せ、先生のお傍に……。ずっと……。ふふふふ……。えへへへ……」

何この子、怖い。ゲヘナ生徒ということ抜きにしても近付きたくない感じがする。卑屈そうにニヤニヤ笑うハルカを見て、ミカは普通に引いた。何が怖いって、こんな表情で恐ろしく不気味なことを呟きつつも、一向に手を休めずにロボットのボディチェックをし、ロボットの手荷物とかも調査しているのが怖い。

ハルカはロボットの手荷物から数枚のカードを抜き取り、それをスマホで撮影して高

速でスマホを操作していった。無意味なまでに洗練された動きである。さらにロボットの持つていた護身用かと思われる自動拳銃もチェックし、弾薬もマガジンも全て抜いた。そして自動拳銃をまじまじと見つめ、スマホで撮影して自身のバッグに入れた。さらに手荷物から何かを見つけて引っ張り出すと、目を細めて笑った。

「……はい、任務を遂行しました」

ニヤリと笑ったハルカはすつくと立ち、改めてミカたちに視線を合わせた。

「お久しぶりです、モモイさん……そして……ええと、2ヶ月ぶりですね、アリスさん」

「はい！ 前にクラブの交流会で会った以来ですね、ハルカ」

「はい、どうもです。……最後に、初めまして、聖園ミカさん。ゲヘナ学園1年の伊草ハルカです」

ハルカはぺこりと頭を下げ、再びミカをじつとりとした瞳で見つめた。そのおどおどしたような表情を見て、ミカは見覚えがあるような気がして僅かに眉を顰めた。そして、すぐに思い出した。ハルカの目は、以前市民ホールで初めてミヤコに会った時、ミヤコが浮かべていた目と同じだった。表情から感情を読み取れることが出来るというのに、目だけ全く何の感情も籠っていない。目の前の存在を観察するような目だ。

「……トリニティ総合学園3年生の聖園ミカだよ☆。よろしくねー」

取り敢えず普通に挨拶することにする。目の前に立たれているというだけで、無性に

嫌悪感が湧いてくるが、胸の中で自分を叱咤してそれを堪えた。トリニティ上層部にゲヘナ生徒と対立して先生に迷惑をかけないと断言しているし、シャーレに所属した以上は乗り越えなくてはならないことだ。幸いなことに、ハルカの方はミカがトリニティ生徒ということで露骨に嫌悪感を？き出してぶつけてくる様子はない。但し、嫌悪感とは違う人形のような無機質な瞳がミカを捉え続けているが。

ガチャン、と音がした。ハルカが愛銃をリロードする音だった。

「……はい、よろしくお願いいたします。お会いできて、嬉しいです」

ハルカは穏やかな声でそう言うと、小首を傾げて笑った。ギチャリという音が聞こえてきそうな、表情筋を無理やり動かしたような笑顔だった。

「……」

こちらも笑顔を返しつつ、ミカは内心で舌打ちをした。何時でも何処でも気が付けば周囲で銃撃戦が発生してもおかしくないキヴオトスでは愛銃は常にローディングが済んだ状態で持ち歩くのが常識だが、その一方で敢えて他者に見せつけるように行われる銃のローディングやリロードの仕草、そしてその音はキヴオトスにおいて一種の「警告」として使われる。当然、初対面の相手との会話中にリロードを行うなど非常識な振る舞いである。

実際、ミカの隣に立っているモモイは、ギョツとした表情を隠すことも出来ずにハル

力の愛銃を凝視している。この手の常識に疎いであろうアリスはきよとん顔でモモイを見ているが。

「……あ、すみません。つい、やっちゃいました」

ハルカは誤魔化すように目を伏せ、わざとらしくローディング・ゲート（装弾口）から先程リロードしたショットシエルを取り出した。それを仕舞い、ハルカはモモイへ視線を動かす。

「そんなことより、その……どうしたんですか、こんなところで」

「いや、こっちのセリフなだけど……」

顔を顰め、モモイはハルカを見上げた。それを見て、ハルカは目を見開いた。

「ミドリさんから聞いていませんか？ 今日、私はミドリさん、ユズさんとD・U・での任務に参加しているんです。ブラックマーケットから流出しているであろう違法製品の追跡ですよ。……聖園ミカさんは直接見ているんですよね？ 喫茶店ムエットの件で」

「あ、そういうえば……そっか、ミドリがハルカと一緒に言っただけ。ごめん、忘れてた」

バツが悪そうに後頭部を掻くモモイを横目に、ミカがハルカへと話しかけた。

「違法製品？ ムエットに火炎瓶を投げようとした……」

「先生へ、ですよ」

これまで聞いたことのない鋭い、低いハルカの声がミカの耳を貫いた。

「あれは、先生への攻撃です。先生が巻き込まれる可能性が少しでもあるのなら、それは先生への攻撃です。誰が、何と言おうと……。聖園ミカさん、それが、シャーレです」

スツと細められた紫色の瞳が、ミカへと向けられた。まるで幼子に諭すかのような口調に、ミカは閉口する。しかし、確かにそうだと思ひ直した。実際、あの時はナツが必死になって、先生を火炎瓶を持ったロボットから遠ざけようとした。そして自分も、先生のために戦ったのだから。

「……そうだね。それで、先生へ攻撃しようとしたロボットと関係が？」

「ええ、そうです」

ハルカはそう言うと、先程未だに気を失っている足元のロボットから奪った荷物の内の一つをミカへと見せた。それは一見、小口径のライフル弾に見えた。

「5. 56×45ミリ弾？ いや、何か……ううん、銃弾じゃないね」

モモイがずい、と顔を近付けてハルカの手の中の銃弾のようなものを見つめた。外見はキヴォトスでは広く流通している一般的な、言い換えれば大して目を引く様なものではない小口径高速弾である5. 56×45ミリ弾に見えた。しかし、じつと見つめてみると違和感が生まれてくる。

「はい、違います。これは、こうすると……」

ハルカは説明しながら、銃弾の弾頭部分のところを摘まみ、軽く捻ってから持ち上げる。キュポン、というマジックの蓋を外したような音がして、弾頭部分が取れた。その中には、まるでUSBメモリのように端子が露出している。

「? 初めて見る端子ですね。パソコンやスマホ、ゲーム機のものでもありません」
アリスの指摘に、ハルカは頷いた。

「はい、そうです。キヴォトス標準規格のものではありませんし、ミレニアムや一部の自治区のみ独自の規格でもありません。但し、一部の地域では流通しています」

それを聞いて、ミカは腕を組んでハルカの持つそれを睨んだ。

「まさか、ブラックマーケット?」

「……流石ですね、聖園ミカさん。その通りです……。これは、互助会の連絡網にもまだ流されていない情報です。あ、勿論先生にはすでにユウカさんがお渡ししておりますが……。先日の互助会からの連絡、確認していますか?」

「……この前に、ヒビキたちがブラックマーケットへ情報収集任務に行った件? それとも、駅ビルでヴァルキューレが捕まえたロボットたちの機械脳に、異常なデータが検出されたこと?」

「ああ、そういえばそんな連絡が来てたね」

「あ！ アリスも思い出しました！ 確か、先生が火炎瓶の攻撃に巻き込まれそうになったというニュースが来た次の次の日に、そんなニュースが回ってきてました……」

モモイが険しい表情で唸ると、ミカが顎に指先を当てながら頷き、アリスもシユバつと片手をあげた。それを見て、ハルカは一度大きなため息をつき、再び話し始める。

「……ええ、2つとも関係あることです……。その、私もこういつたことの知識は無く、任務の前にミレニアムに寄つてウタハさんから聞いただけで……詳しくは説明できないんですが、何というか……要するに、これを専用のソケットパーツを取り付けたロボットの人に接続すると、人間でいう脳内麻薬がロボットの機械脳で発生、増殖するらしいんです」

「脳内麻薬……多幸感みたいなものが出てくるのか？」

ミカが小首を傾げると、ハルカは首肯して銃弾みたいなものにキャップを取り付け、仕舞った。

「はい、そういう触れ込みを出しているみたいですよ」

「触れ込みい？ ヘンな、含みのある言い方じゃない？」

「……ええ」

モモイが低い声で言う。それに同じく低い声で返事をして、ハルカは再び大きなため息をついた。

「……その、実際にブラックマーケットではこういうのがロボットの人間向けに広く流通しているそうなんです。人間でいうお酒みたいな扱いらしいですね。普通、この手のものは多幸福感に包まれたり、酩酊……って呼ぶのでしたか？　こう、気持ちよくなってストレスが減っていったりしていくものが多いそうです。

これも、一応はその効果もあるらしいんですが。実際は、これも何ていうのか……催眠、とはまたちよつと違うのかもしれないですが、他人からの命令に従いたくなるようになる効果があるそうなんです」

「……絶対厄介な代物じゃん」

「ええ……本当に、うんざりですよ」

ハルカはそう言うと、どんよりとしたオーラと苛立ちの炎が混ざったような、表現し難い光を目から放った。ゴリゴリと奥歯が砕け散りそうな歯ぎしりの音が鳴る。

「そんなもの、そんなものをここに……D・U・に！　D・U・は先生のための、先生の居場所なのに！　こんなところにこんなもの持ち込まれて！　ああ、ああ！　あああ！　！」

「は、ハルカストップ、ストップ！」

嫌な打撃音が連続して響く。恐ろしく低い声をあげて足元に転がっているロボットの頭を何度も何度も踏みつけるハルカを、モモイが必死になって止める。ふんじばって

地面に転がしているだけでも第三者から見れば犯罪臭しかしい光景だというのに、さらに顔面連続フットスタンプは絵面が酷すぎる。昼とはいえ冬の公園なので周囲を散歩している一般住民は殆どいないが、それでも惨い光景なのは変わらない。しかしモモイの努力空しく、身長差が10センチ以上ある相手を取り押さえることなど無謀であった。ロボットの頭がどんどんひしゃげ、見る影もなくなっていく。

「あー、ハルカちゃん？」

見かねたミカがそつとハルカに手を伸ばそうとする。ミカの呼びかけは当然のよう
に無視された。

「消えてください、死んでください、先生の前からいなくなってください、そして二度と先生の前に現れないでくださいお願いしますから！ どうしてよりによってD・U・なんですか、他のところで売ればいいじゃないですか！ ふざけているんですか先生への嫌がらせですか!? 殺されたいんですか殺されたいんですねそうじゃないとおかしいですよわかりました、殺します絶対に殺します八つ裂きにして吊るして殺します、どうして、どうして先生に迷惑をかけるようなことをするんですか、先生に何をされたと言うんですかあ！ は、排除します……先生の敵は！ 絶対に、全て、確実に、排除します！ 肉片1つ、螺子1本、何も残しません！ 何さつきから黙りこくっているんですか、聞いてますか!? 誰が、誰が、誰が先生の邪魔をしていいと言った、言ってみ

ろ！ うわあああああつ！！」

「ハルカちや——」

瞬間、銃声。ハルカの側頭部に、銃弾が撃ち込まれた。ハルカの腰に抱き着いていたモモイが口をあんぐりと開けた。

「ちよちよちよ、ちよつとお！」

モモイの絶叫を聞きながら、啞然として、ミカは横に視線を向けた。アリスが力強い笑顔を浮かべながら、両手で拳銃を握っている。空薬莢が地面に落ちた音が、周囲に響いた。

シャーレ部員と一緒⑥

「ハルカは混乱のバッドステータスになっていました。これは早急にパーティメンバーが攻撃して、解除しなければいけません！」

至近距離でシャーレの仲間の側頭部に9ミリ拳銃弾をぶつ放したアリスの最初の供述がこれである。あわあわとハルカに抱き着いたままのモモイが、アリスに何と声をかけたらいいのか脳内で複数の自分と会話を繰り返している間に、ハルカが動いた。

拳銃弾が直撃しつつも、ハルカは倒れるどころかふらつきもしない。ただ、流石に口ポットに無限顔面フットスタンプは止めていた。

「……痛いじゃないですか……」

ぼそりと低い声で言い、ハルカの首がぐるりと動いた。ニコニコと笑っているアリスを見下ろし、銃弾が当たった部分をカリカリと掻く。そしてゴキツと首を鳴らし、ふう、と息を吐いた。

「あ、いや……ありがとうございます。私、またやってしまったね。すみません、お話の最中に……はーああ……死にたい死にたい……」

そのまま何事もなかったかのように、自身に抱き着いているモモイを気にすることも

なくアリスとミカへ向き直った。

いくらキヴォトスの生徒といえども、普通は頭に銃弾を撃ち込まれれば気絶か脳震盪を起すものだが、ハルカは平然としている。脳震盪どころかダメージを受けた様子もない。何だこの子見た目華奢なのに頑丈だな、とミカは内心呆れていた。もしナギサが今のミカの心の中を覗いていたら、「ミカさん、貴女もう常に鏡と向かい合って生活した方が良いんじゃないですか？」と言うに違いない。

「すみません、少し頭がカツとなりました」

「あ、うん……」

「よし、ハルカのバッドステータスが解除されました！」

ミカが指導したためか、地味に手慣れた手つきでリホルスターをしたアリスが両手を空へと突き出した。

それを見て、若干憔悴した表情を浮かべたモイが漸くハルカの胴体に回していた腕を解いた。

「ああ、すみませんすみません……失敗から何も学ばない愚図ですみません……。私のせいで、皆さんの貴重なお時間を浪費してしまいますね。本当にすみません……」

首をゴキゴキと鳴らしつつも、ハルカは気絶したままのロボットの頭に蹴りを入れて

ゴロリと転がした。触れていたくないものをどけるような仕草だった。

見るのも憚られるほどに無残なこととなったロボットの顔から、ミカたちはスツと目を逸らした。怒り狂っているように見えたハルカであったが、命を奪うよりも適度に甚振ることを優先していたらしく、意外と大怪我には見えなかったが、それでも絵面は極めて悲惨である。

「ええと……続きを話しますね」

「う、うん」

ミカが頷くと、ハルカは咳払いをして再び話し始めた。

「それで、ヴェリタスの方々が調べたところによると、このロボットを催眠状態にする……いえ、洗脳と言ってしまうでしょうか。洗脳可能な弾薬^{カートリッジ}型の道具は、売人たちから『スクーナー』と呼ばれているそうです」

「スクーナー？」

「はい、もともとこの手の道具はそれぞれブランド名といいますか、コードネームみたいなものが製造元と売人組織によって決められていたのですが、これはスクーナーと呼ばれるされていることです。夢の世界に旅立つための帆船^{スクーナー}というのが由来だそうですね」

「ネーミングセンス、趣味悪っ」

嫌そうな顔で吐き捨てるモモイを見て、ハルカはこくりと首肯した。

「というか、もうそこまでわかつているの?」

「私もユウカさんやウタハさんから聞いただけですが、そうらしいですね。色々とブラックマーケットを突つついたんだと思います。多分ですが、ブラックマーケットでもそんなに隠していいのではないかと。そもそも売り物ですから隠しては売れませんし……勿論、実際には購入者にこれを使用すると洗脳されるなんて言ってはいいのですが。ただ多幸感に包まれストレス発散ができるものとして売っているようです」

「だよねえ。……そのロボットも売人なの?」

ミカが転がっているロボットを指差すと、ハルカは荒々し気に息を吐いて再び頷いた。

「はい、販売のマーケティングは所謂ダークウェブ……ブラックマーケットを本拠地とするアングラな、一般とは切り離されたSNSで行われているようです。キヴォトスではこういった物は表の世界でなかなか手に入りません。依存性がありますからね。」

同時に少しずつ口コミだとかで表の世界に漏らしていった、興味を抱いたもの相手に現地で売るわけです。事前に取引の日時や場所を指定して、ですね。この手の道具はこういう風に売るのが多いそうです。珍しくはありません。……このスクーターが、普通の違法製品であれば」

「普通の違法製品って? その言い方だとつまり、スクーターは普通ではないってこと

だよな？」

意図的に奇妙な言い回しをしたハルカに向け、モモイが怪訝そうな表情を向けた。

「はい。このスクーナーには使用者を他人からの命令に従いたくなくなるように洗脳する効果があります。他のよくある違法製品とは危険度が違います。それを、普通の違法製品と同じようにアングラなSNSを通じてばら撒いているのです。

製造元は、何でわざわざ洗脳効果があるものを生み出し、量産して、売り捌いているのか……」

そこまで言って、ハルカは首を横に振った。もううんざりだとも言いたげに、つまらなさそうに地面に転がっているロボットを一瞥する。

「ユウカさんの推測では……つまり、サンプルデータの収集も兼ねているのではないかと。……実験ですね」

「実験……つまり、スクーナーは試作品……というより、発展途上、未完成でことかな？」

「そう、考えられます」

ミカが低い声で言うと、ハルカが大きいため息を吐いた。

「そもそも不特定多数にバラまくのであれば、洗脳効果があつたところで役に立ちません。例えば数十体のロボットの人を一か所に集めて一齐に使用させて、そしてその場で

命令してコントロールするとかなら兎も角……こうしてD・U・にあちらこちらに売り捌いて洗脳したとして、どうやって命令を出すのかという話になってしまいます。何も購入者が買つてすぐさま、売人の目の前で使用するとも限らないでしょう。それ以前にどんな命令を下してどんなことをさせるのか、というのもあります……」

「確かに。……多分、ムエツトの時は予め何人か集めて、適当に口実を作つて一斉に使用させたにしても……それですら、別に脅威にはならなかったからね」

ミカは喫茶店ムエツトの出来事を思い出していた。火炎瓶や手榴弾を投げる、拳銃を撃つくらいは単調な動きしかできず、最後には勝手に動けなくなったロボットたち。彼らがスクーターで洗脳状態になつていたとして、その状態のロボットが複数人集まつたところでアレだ。大したことが出来るように思えなかった。

適当に売り歩いたところで、あんな状態のロボットがあちこちに現れるだけだ。現れたところでだから何？ という感じが否めない。

単純にテロでも起こしたいなら、こんなことをせずにお金を払つて傭兵や不良軍団でも雇つた方が遥かに手取り早いし簡単だ。わざわざこんな道具を製造しておいて、傭兵などを雇う金が不足しているなどということはないだろう。

「確かに、何かの実験つて言われた方が——」

「うん、その方が分かりやすいかも」

「はい。仮にそうだとすれば……余計に、許せません」

ミカとモモイの返事を聞くと、ハルカが顔を俯かせた。強い力で愛銃を握り、僅かに体を震わせている。

「モモイさん、アリスさん、聖園ミカさん……わかりますか、この屈辱が。こんな実験、ブラックマーケットの掃き溜めの底でそこら辺の不良でも捕まえてやっていけばいいじゃないですか。それをわざわざ、ブラックマーケットの外で……D・U・で、やられているんです。先生が住んでいらつしやるD・U；、シャーレが始動して以来、役に立たない連邦生徒会とヴァルクューレ共に代わつてずっと先生が護り続けてきたD・U；、それが今、徐々に徐々に奴らの実験場になつてきている。」

違法製品の売り場に使われる方が、まだマシです。そんなものは、別に珍しくもないですから。お酒、煙草、違法改造された銃火器、闇ルートで出回った高額の高額転売商品、希少な商品……ブラックマーケットからD・U；に運ばれたものは、決して少なくはないでしょう。ですが、これは駄目ですよ。誰かは知りませんが、これは駄目です」

ハルカは顔をあげた。先程のように歯を噛みしめ、唇からは僅かに血が垂れている。目は血走り、紫色のオーラが瞳から放たれているかのようだった。

僅かに後退るモモイと真剣な表情で腕を組むミカを睥睨し、ハルカますます強い力で愛銃を握った。

「だから、奴らを潰します。まずは売人からです。まずは製造元、つまり黒幕の手足を挽ぎ取ります。何本あろうが、全て挽ぎます。

次は、このスクーターを製造している工場や施設を破壊こわします。黒幕の内臓を抉り出します。勿論、従業員も施設のデータも何もかも潰します。別のところで同じように作られてはイタチごっこになってしまいますから。できれば殺したいところですが、無理なら二度と両手足が動かせないようにして、言葉を話せなくする程度で良いでしょう。自力で作れず、他人に製造方法を教えることも出来ないならそれで十分だと思われます。

最後は、黒幕を狩り出します。恐らく何人、何十人かの組織だと思われませんが、丁寧に確実に処理をします。メインディッシュ 脳たちは丹念に潰さないといけません。……聖園ミカさん」

「え」

突然話かけられ、ハルカの物騒な台詞回しに内心ドン引きしていたミカが咄嗟に変な声をあげてハルカの顔を凝視した。

そんなミカの横にいたモモイは、物理的にハルカからどんどん離れていつている上に、完全に涙目になってプルプルと身を震わせている。一方で、アリスは全く動じておらず真剣な表情を崩すこともなく、終始無言であった。意外にも、アリスはハルカの憎悪の籠った声にあまり感じるところはないようだ。真剣な表情を浮かべているアリス

の瞳に怯えや戸惑いの色はなく、頭の中で情報を組み合わせているような理知的な雰囲気をもとっていた。

自分と目を合わせたミカを見て、ハルカはぐにやりと笑った。人形の顔を火で炙って溶かして作ったような、不気味な笑顔だ。

「まだ先生からの正式な指示は来ておりませんが、ユウカさんからこの情報を回された私たち、そして一部のシャーレ部員はもう動き始めていますよ。……頑張りましょうね。貴女が入部してから初めての、時間がかかる事件ですよ。そのうち、大規模な任務部隊も編成されるかもしれません」

そう言つて、ハルカは目を細めた。

「シャーレ部員となつた以上、私も貴女も先生の盾で、銃で、手足です。その時、もし一緒に緒する機会があれば……よろしく願いますね、聖園ミカさん」

卑屈そうに軽く会釈したハルカだが、その目は笑っていないかつた。

◆ 才羽ミドリの愛銃「フレツシユ・インスピレーション」はスナイパーライフルである。スナイパーライフルと聞くと大型で超遠距離から狙撃する銃がイメージされがちだが、「フレツシユ・インスピレーション」は中々遠距離の狙撃を得意とする「バトルライフル」と呼ばれるタイプのライフルだ。バトルライフルとは、簡単に言えば遠距離専用の大型

弾薬（フルロード弾）を使用するアサルトライフルのことで、フルオート射撃も可能である。本格的なスナイパーライフルと比べると射程が短いアサルトライフルよりは長く、フルオート射撃で近接戦闘もある程度こなせるのがミドリの愛銃である。

故にミドリは超遠距離からの狙撃というものは出来ず、中々遠距離程度の狙撃を得意とする。それも瞬時に複数の標的を一撃で仕留めていく緻密な連続狙撃が、彼女の得意技である。

このため、ミドリはスコープを覗けば即座に標的との距離を把握できる能力を持っている。もつとも、その能力が発揮されるのは中距離で複数人の敵と戦う場合に限られる。なにもわざわざ、じつくり狙える時にまで「早撃ち」に拘る意味はない。

「……^{ターゲット}標的、4ミル。距離は500メートル……」

シャーレの権限を使って侵入したペンションの天窓から銃身を突き出した状態で、ミドリは独り言を呟いた。脚立の上に乗っている状態だが、体幹は安定している。お気に入りの狙撃用スコープを覗き、ミドリはレティクル（スコープに刻まれている十字などの線）を標的のロボットへ合わせていった。このレティクルはマルチエックスと呼ばれる、十字の中心部の少し前まで太めの線、中心部分だけ細い線が刻まれているタイプのレティクルとなっている。この線が細いと、夜間で十字の中心に標的を合わせるのに苦労する。ミドリのスコープは蓄光機能があつてレティクルを光らせることができるの

だが、故障時に備えて夜間でも問題なく狙うことが出来るタイプのレティクルを採用しているのだ。

ちなみにレティクルの十字は「ヘアクロス」とも呼ばれる。これは大昔のスコープには実際に髪の毛を張り付けて照準をつけていたことに由来する。

「ミル」というのは狙撃に使われる角度を示す単位である。円周を表す単位としては「度」があるが、1度が360分の1なのに対し、ミルは1ミルが6400分の1となる。1度は17・8ミル、1ミルは0・0573度である。

何故狙撃でミルという単位を使うのかといえば、1ミルは1000メートル離れた場所から幅1メートルのものを見た時の角度だからだ。

例えば敵をスコープで覗いて、スコープの目盛りでは敵の肩幅が1ミルに見えたとする。そして実際の敵の肩幅が50センチと仮定した場合、50センチのものが1ミルに見えるということは、つまり敵との距離は500メートルと推測することが出来る。

勿論相手の肩幅でしか測れないということはない。身長でも距離を測ることが出来る。ミドリは今、スコープで覗いているロボットの身長は170センチ程度だと推測した。角度は凡そ4ミル。つまり、距離は500メートルだ。

「ゼロインは、300メートル……もう少し、上。風速は4メートル……」

素人は勘違いしがちであるが、スコープ（望遠標準器）というのは取り付けたからと

いって命中精度が上がるといふものではない。スコープで狙ったところに当たる様に調整するから命中するようになるのである。ある距離で標的の中心に向かって撃ち、命中するように調整することを「ゼロイン（零点規正）」と呼ぶ。発射された弾丸がどのような弾道を描くかは風速、偏流などで大きく変わるので、都度都度ゼロインをする必要があるのだ。

実際はもつと早く狙うことも出来るのだが、幸い標的はほぼ動いていない。ここは確実に仕留めよう。多少時間がかかったとしても、何の問題もない。逃がしてしまう方が問題だ。

そう思いつつ、ミドリは感情のこもっていない瞳でスコープ越しに敵を見つめた。

「……」

引き金を引く。銃声が響く。プライマーのトリシネートが燃える臭いが鼻孔に入る。トリシネートはプライマーの燃焼に使われる爆薬のことだ。

よく文学的な表現として、銃を撃った時に「硝煙の臭いがする」ということがある。この硝煙の臭いというのがプライマーのトリシネートの臭いである。よく発砲した時の発射薬の臭いと誤解されることがあるが、現代の薬莖の発射薬は「無煙火薬」であり（無煙というのは黒色火薬より煙が少ないという意味なので、字面に反して煙が出ないわけではないのだが）、硝煙の臭いは出さない。

実弾を発射した時に臭うこの鼻にツンと来る臭いは、銃を撃つ以外には感じるが少ない独特の臭いだ。その臭いをミドリの脳が感知した瞬間、ぱたりとロボットが倒れた。

周囲に他に通行人はいない。D・U.の中でも、この辺りはペンションなどの宿泊施設やアスレチック公園が多いエリアだ。姉のモモイがアリスを連れて出かけていった公園からも、然程離れていない。

さて、回収だ。

ミドリは素早く脚立から降りて、転がった空葉莢を拾いポケットに突っ込んだ。愛銃を肩にかけなおして脚立を運びつつ、くぁ、と小さな欠伸を零す。昼食を食べたお陰か、少々眠気が出てきた。眠気覚ましも兼ねて、ミドリは少し大きな声で独り言を呟いた。

「よし、一人目!」

手早くスマホを操作しつつ、ミドリはスタスタと歩き出した。ペンションのオーナーにシャーレのIDカードを見せながら頭を下げ、それでも立ち止まることはなく歩いていく。

外に出ると、冬の日の光がミドリを照らした。

「う~~~~ん、順調、順調」

背伸びをして、ミドリは晴れやかな笑顔を浮かべながら空を見上げた。

ヴェリタスに追跡されていることすら気付いていない哀れな獲物は、ユズとハルカが仕留めたのを除いてもう僅かだった。このまま順調にいけば、先生の所へ遊びに行く時間もとれそうだ。自分の機嫌が良くなってくるのを自覚しながらも、ミドリは鼻歌を歌いながら、倒れたロボットの方へ歩き出した。

シヤールレ部員と一緒⑦

「ハルカのクエストのリザルト報告は、どうするんですか？」

アリスが転がっているロボットを見下ろしながら指差した。その口調はひどく淡々としており、ロボットに向けている視線も感情が籠められていない。アリスもまたハルカの話の聞いて、目の前の売人やスクリーナーの製造と流通を担っている者たち、そしてその背後にいる者たちをシヤールレの敵と認識した様だった。

そんなアリスを見下ろし、ハルカは若干首を傾げて虚空を見つめた。数秒考えこんだ後、ハルカは口を開いた。

「ええと、私が直接ヴァルキューレにこのロボットを運ぼうかなと思っています」

「それはまた、どうして？　　こういうった組織的犯罪だとヴァルキューレ公安局の仕事だよね？」

ミカが尋ねると、ハルカは瞳を動かしてミカを見つめた。そしてまた数秒黙った後、再び話し始めた。

「そうですね……順を追って話させていただきますね。まず、ユウカさんが把握している限りですが、本日D・U・のこの地域で活動しているスクリーナーの売人は全部で4

体。全員ロボットです。このうち最初にユズさんが捕らえてヴァルキューレに引き渡しています」

「ユズ、先生のことにかけては凄く本気出すからねー。最近では先生と一緒にバイトしてて人混みへの耐性も着実に付けていつているようだしね。人混みに慣れてしまえばユズは無敵だよ」

「はい！ ユズも順調にレベルアップしていつています！」

モモイが嬉しそうに言うのと、アリスも何度か頷いた。

「そして、私がこの人を捕縛しまして——と、失礼します……」

ハルカのポケットから通知音が鳴った。ポケットからスマホを取り出したハルカは高速でスマホを操作し、ニヤアツと口を歪めてミカたちに視線を戻した。

「——今、ミドリさんも1体捕らえたそうです」

「つまり、あと1体」

「ええ、そうですね。売人の方は、ですが」

「方は、ですか？」

またしても含みがある言い方をするハルカを見て、アリスが小首を傾げた。そんなアリスの目を見つめ、ハルカはため息をつきながら低い声で言った。

「……ええ。このスクリーナーを売り捌いている組織の規模や正体は現時点では不明で

す。もしかしたら売人たちは組織の末端ですらない、外部の者かもしれません。ですが、今この地域で売人以外の者が活動している可能性はゼロではないかと思われま

す。実はユズさんとミドリさんが、それぞれスクーナーの被害者と思いきロボットの暴走を目撃しています。今のところヴェリタスの方々は取引の瞬間を確認しておりませんが……今日捕らえた売人の動向は、数時間前から確認が取れていました。だからヴェリタスの方々が捕捉するより前に取引を終えた可能性もありますね。

暴走したロボットのの方々がどの売人から買ったかは不明ですが、問題なのは今日暴走したということです。

スクーナーは所持したとしても何の効果はありません。使用しなければ無害です。スクーナーの効果時間がどれくらいかはまだエンジニア部の方々が調査中ですが、そもそも本来、この手の多幸感を得られる道具の効果は長続きしません。最初から効果時間が短めに作られているんです。

幾ら多幸感が得られるとはいえ、1日中ぼーつとしてしまうようでは、それこそ丸1日休日でもなければ使えませんからね。効果時間が然程長くないからこそ気軽に使用でき、コンスタントに売れる商品となります。中毒性があるとはいえ、使用者がもれなく中毒者になる程でもないのです」

「そうなんだ……? よくわからないね」

「ですよ、私もよくわかりません。生徒はお酒とか煙草とか、こういった中毒性や依存性のあるものとは無縁ですからね……。」

私も前にアル様に聞いたことがあるのですが、ブラックマーケットで流通している煙草とかも依存性が強いものは身内でしか使用せず、商品としては流さないらしいんですよ。いくら商品として量産体制が整っているものでも、使用者が1度の使用で廃人おわりになつてしまうようなものなら、商品としては失敗です。商品は継続的に売り続けていられるものこそ価値がありますからね。

それにブラックマーケットには、ブラックマーケットのルールがあります。ブラックマーケットで屯している闇の住民も、ブラックマーケットで商売をしている人たちから見れば立派な消費者で、労働者なのですよ。

ましてや表の世界に向けて、1回使用したら廃人に成り果てるようなものを大量に売り捌くことなど、流石にブラックマーケットの悪党共もできないでしょうね。それはやりすぎというものです。そんなことになったら、流石に連邦生徒会共も重い腰を上げるでしょうから」

モモイもアリスのように首を傾げた。それを見て首肯し、ハルカはペラペラと話し続ける。不気味な笑みを浮かべながら、ひたすら喋りまくるその姿はかなり怖い、もうミカたち3人は慣れてきていた。

「何それ、今回はやりすぎじゃないってこと?」

「ああ、すみません、適当なことを……。他意はない例え話です。……私には、連邦生徒会共の考えなんてわからないですから」

モモイが不快そうに片眉をあげると、ハルカは若干肩を竦めて首を振った。しかし、すぐにまたペラペラと話し始めた。

「すみません、それで……。兎に角、スクーターの効果時間はあまり長くはないと思われま
す。つまり、購入者が使用した後、大して長くない効果時間の間に誰かが購入者に近付
き、何かを命令した。そういうことになります。売人が販売役と命令役の両方をこなし
たという可能性もなくはないですが、購入した時点で購入者と売人は顔見知りになっ
ているはず。購入者はスクーターに洗脳の効果があることなんて知らないのですから、購
入した後も売人が自分に近付いてきたら不審に思うでしょう。

ちなみにヴェリタスの方々が捕捉し追跡を開始して以降、売人たちが購入者の人たち
と接触したと思われる光景は確認できていません」

「……そういえば、追跡って具体的にどういう風じ?」

モモイが尋ねると、ハルカは目を見開き慌てたように補足の説明をした。

「ああ、説明を忘れていました……。街中の防犯カメラのハッキングと、ドローンによる
偵察の組み合わせです」

「成程ね。ドローンって？」

ミカが尋ねると、モモイが複雑そうな表情を浮かべつつミカから視線を逸らした。そして、口元をもごもごさせた後にハルカへ問いかけた。

「きつと、あれだよな？ ユウカが先生護衛用にエンジニア部に発注して作ったやつ」

「はい、それです。今回はそれをヴェリタスに貸しているみたいですよ」

首肯するハルカを見て、モモイが頭を掻きながら小声で「やっぱりか」と呟いた。

「ええ、そんなの作っていたんだ……」

「うん、ユウカって自分のお金は、割と躊躇いなく一気に使うタイプなんだよね。投資とか諸々で凄いい稼いでいるし。最終的に何かすつごく高性能なドローンに仕上がったって聞くよ。私も実物見たことないんだけど」

若干引きながらモモイを見たミカに、モモイはため息をつきながら説明した。ミカが引いたのはドローン開発費をポンと出したことではなく、そんなものを発注していたことと自体なのだが、モモイは気付いていないらしい。彼女も順調にシャーレに染まっただけだ。

ちなみに件の護衛ドローンはエデン条約の事件の発生後、発狂状態が収まっていなかった頃のユウカが後先考えずにポケットマネーの一部をエンジニア部に突っ込んで作られたものだった。そしてエンジニア部もエンジニア部で精神状態が狂乱そのもの

だった頃にユウカの説得に押し負けて、これまた後先考えずに開発したという経緯を持つ超武装飛行ドローンである。お陰でシャーレの権限がなければ、到底人口密集エリアの上空の飛行許可が下りないような代物となっていた。あまりに武装装過ぎて天下のシャーレと言えども気軽に運用できるものではなく、連邦生徒会が見て見ぬふりができるD・U・を除けば飛行できる地域が限られているため、先生の護衛に投入出来る機会が少ないという完全に本末転倒なものとなっている。

流石にユウカ、エンジンリア部双方が反省したのか1機製造されたのみで、2番機や後継機が作られることはなかった。とはいえ運用コストが高く運用できる空域が限られているだけで性能自体は高く、使わなくては維持費を食うばかりなので、今回引つ張り出されてきたようである。

引いているミカに視線を向けつつ、ハルカは説明を続けた。

「そして、この売人ですが。私がユウカさんから貰った情報を元に近付いていくと、いきなり逃げず、何度かこちらに問いかけようとしていたんです。まるで、『もしかしたら味方かもしれない』と思っているような素振りでした。結局私の殺気を見て逃げ出したので、追いかけることとなりましたが。……これ、私の駄目なところでした。どうも殺気を隠すのが苦手なんですよね……」

だろうね、と内心頷きながら、ミカは表情に出すことなくハルカを見つめた。あんな

不気味な笑顔でショットガンを抱えながら近づいてこられたら、普通に逃げ出すと思う。

「……また話が逸れました、本当にすみません……。ええと、それで……実際のところはこの人に聞いてみないとわかりませんが。もし私がさっき言ったように、本当にこの人が私を見て『もしかしたら味方かもしれない』と思ったとすれば——」

「他に仲間がいるということだね。ハルカちゃんはロボットじゃないから、購入者だと思っただけというのでは考えられない。そもそも事前に取り引場所とか決めているはずだしね。他の売人もしくは別動隊の仲間だと思った、と考えるべきだね」

ハルカの言葉を引き継いでミカが話し出すと、ハルカはこくりと首肯した。

「はい、そしてその場合、この売人は他の売人や別動隊の背格好や顔を知らなかったとも考えられます。」

仮に別動隊だとして、その目的は何か……洗脳そのものか、或いは洗脳したロボットの観察か、或いは……売人が捕まった時の口封じ役、もしくは奪還役。

ここまで説明しておいて何ですが、推測に推測を重ねている状態です。ですが、用心するに越したことはないかなと。ですので、もう私が自分でヴァルキューレにもつていこうかな、と考えました」

そう言つて、ハルカは転がっているロボットを指差した。

「実際、聖園ミカさんは駆ビルでPMＣのようなロボットと接敵したのでしよう。そのロボット兵士たちの役割が先生に火炎瓶を投げようとしたロボットたちの回収だったことは、公安局の取り調べの結果明らかになっています。

「今回もそういう役割のロボット兵士たちが何処かに潜んでいるとも限りませんから」
「……ちよつと待つて。それ……ユズとミドリも狙われるかもしれないってことじゃないの？」

顔を青ざめさせていくモモイに向かって、ハルカは小首を傾げながら言った。

「はい、そうですね。ですが、それでさらに手掛かりが増えるのなら、しめたものでしよう。その辺りは、ユウカさんも考えているはずですよ」

あつさりと言つてのけるハルカに、モモイはゴクリと喉を鳴らした。

「え、まさか……」

「私程度が考え付くことです。ユズさんもミドリさんも承知の上ですよ」

モモイとハルカの会話を、アリスとミカは黙つて聞いていた。アリスはハルカの瞳を見つめながら、ミカは腕を組んでハルカとモモイの2人の顔へ交互に視線を向けながら黙りこくつていた。

会話を聞きながら、ミカはふと違和感のようなものを覚えてアリスへ顔を向けた。アリスは口を閉じ、澄んだ色の瞳でハルカの光を遮るような昏い紫色の瞳を見つめてい

た。

そんなアリスの瞳の色に違和感を感じたような気がしたが、その違和感はすぐにミカの頭の中で形となることはなく散っていった。霧もやにすらならず消え失せたそれを頭の中で手繰り寄せようとした時、独特の通知音とバイブ音がミカの耳に飛び込んだ。

ミカのスマホからではない。この場にいる全員のスマホからだった。4人がほぼ同時にポケットからスマホを取り出す。聞こえてきたのは互助会の緊急通知の音だった。

スマホ画面に表示された文字列を見て、真っ先に声をあげたのはモモイだった。

「……ミドリが詳細不明の武装集団を発見、集団は大型車両と重機関銃等を有する……」

その声にハツとなったミカは、咄嗟にスマホから目を逸らして前を見た。そして、アリスの吸い込まれそうな水色の瞳と目が合った。



天童アリスは考え、学習する。目を覚まして以降、彼女は多くのことを学んできた。ゲーム開発部の仲間たちから学び、先生から教わり、ミレニアムの生徒たちと交流し、そしてシャーレの同志たちを観察してきた。

言葉を学び、ゲームの面白さを学び、勉強をし、仲間との絆を学び、そして己の存在

意義と自分の進むべき道を、自分がなりたい姿を知った。多くのことを理解し、知識として吸収していった。学びと思考に停滞はない。故に、アリスは今日もまた考えている。

今日は聖園ミカより多くのことを学んだ。そしてハルカと会い、ハルカの言葉を聞いた。レベルアップには多くの知識と経験が必要だ。あらゆるものがアリスの学習のための糧となる。

そして、アリスは考える。今、このD・Uには先生の敵がいるようだ。看過できない事態だ。自分のレベルアップや新たなスキル取得は大事だが、仲間の安全はそれ以上に優先される。特に、先生の安全は。

アリスは思い出す。先生が襲撃を受け、重傷を負ったというニュースが飛び込んだときのことを。

先生が容易く命を奪われかねない存在であることを、アリスは改めて心から理解した。それはとつとつに認識していたはずだった。先生の生命力、耐久力が他の生徒と比べて明らかに劣っており、武器も持たず自衛もできないことは明らかであった。考えるまでもない事実。その事実を突き付けられ、アリスは打ちのめされた。

あの時のアリスは考えていた。目の前でユウカが泣き叫んでも、モモイが崩れ落ちて座り込んでも、ミドリが髪を掻きむしりながらむせび泣いても、ユズが震えながら蹲っ

ても、ただ考えていた。

何故、こんなことになったのだろうか、と。

考え、考え続け、アリスは結論を下した。その場に先生の敵がいたからだ、と。古聖堂でのアリュス分校、ミレニアムでの自分。先生を傷付けた、傷付けようとしてしまった存在が先生と近くにいてしまったことが原因だ。

いてはならない存在がいた。そんなことはあつてはならないことだ。では、解決するにはどうすれば良いか。

答えは極めて単純だ。敵を倒せば良い。倒せば敵はいなくなる。敵がいなくなれば、先生の安全は守られる。

だから、敵は倒す。レベルアップのためでも報酬のためでもなく、先生のために倒す必要がある。

アリスは深呼吸をして、意識を切り替えた。鍛錬クエストは一時中断だ。討伐クエストに移行しなくては。

アリスは拳を強く握りしめた。自分は本当のシャーレ部員としては未熟だ。しかし、キヤリーされてばかりではいられない。自分の力で、先生の敵を打ち倒す。

現実にはコンテニューは出来ない。だからこそ、敵は確実に倒さなければならないのだ。どんな手段を使ったとしても。

ゲームと違い、現実にはコマンドの選択肢は幾らでもあるのだから。アリスの水色の瞳に、強い光が宿った。

シャーレ部員と一緒に⑧

自ら捕らえた売人をヴァルキューレ公安局に引き渡そうとしたハルカと違い、才羽ミドリは気絶させた売人の荷物を確認すると即座にヴァルキューレに連絡した。ロボット1体を運ぶだけの力はミドリも持っているが、如何せん背丈が小さすぎるので運びにくいからだ。ミドリが倒したロボットの身長は170センチ程度。一方でミドリの背丈が143センチである。腕力が足りていたとしてもこれを運ぶのは容易ではない。故に、ミドリは逡巡することもなくヴァルキューレを呼び、到着したヴァルキューレの生徒に売人を引き渡していた。

ミドリは売人を乗せたヴァルキューレのパトカーを見送りながら、スマホを使って互助会の連絡網に手早くメッセージを送信した。

スマホをポケットに仕舞うと、スタスタと歩き出す。相変わらず、周囲には誰もいない。

「……売人たち、本当に気付いていないのかな？ 越境した時点で、自分たちがマークされてきたことに」

ミドリは空を見上げ、独りごちた。

通常、ヴェリタスと言えども顔も名前もわからない、「スクーターを持ち移動している」だけの情報しかない者だけを瞬時に探し出し、追跡し続けることは困難だ。しかし、ブラックマーケットから出てくるということさえ分かっていたら、特定はそう困難ではない。

通常、キヴオトスにおいて自治区と自治区の間の境界線ポルダーラインは、各学園や連邦生徒会の行政が及ぶ範囲以外の意味は持たない。組織的な武力侵攻でもない限りは、市民や生徒は自由に越境が認められている。このため越境する場合も特に審査は必要なく、其々の境界線には関所も壁もなにもない。

ブラックマーケットもまた同様で、隣接する自治区との間に壁もフェンスも審査も検問も何もない。しかし、ブラックマーケットを監視するシステムが何もないというわけではない。

実際は連邦生徒会と各自治区の黙認によって意図的に作られた犯罪者や社会不適合者のためのエリアでもあるのだが、あくまでブラックマーケットは表向きでは「本来は連邦生徒会が管轄する土地だが、不幸にも犯罪組織に実効支配されてしまった土地」なのだ。誰もが首を傾げるような建前であっても、建前は建前なのである。

故に、連邦生徒会は形の上ではブラックマーケットの回復を諦めてはいない、という

ことになっている。このため、ブラックマーケットの周囲には連邦生徒会による監視網が築き上げられている。ドローンや監視塔などを使用したもので、ブラックマーケットと隣接している複数の自治区と合同で監視体制を構築している。形式上のものでしかないというわけではなく、実際にブラックマーケットの様子を定期的にチェックしたり、ブラックマーケットの犯罪者たちと隣接する自治区の住民や生徒との間で武力衝突やトラブルが発生するのを防いでいる。

ブラックマーケットはその名の通り「市場」としての姿も持っている。あらゆる犯罪組織、企業群が製造した違法や不法な商品の取引が行われている場所だ。当然、人の出入りや商品の流通が盛んであり、ブラックマーケットには電車、車両、航空機が頻繁に出入りしている。

当然、それらのルートは連邦生徒会によって常時監視されている。それさえ分かっていたら、ヴェリタスによって連邦生徒会の監視システムを乗っ取ることも可能だ。

「こんな時くらい、連邦生徒会には役に立ってもらわないと……」

ミドリは呟いて、ため息をついた。シャーレもまた連邦生徒会の組織なので、連邦生徒会にきちんと申請すればブラックマーケットの監視を担う部署から必要なデータを取り寄せることも出来なくはないだろうが、時間がかかりすぎる。どう考えても後手後手の対応になるだけだ。だからこそ、こんな強引な手段を取らざるを得なかった。仕方

がないと言いたいところだが、先生は真相を知れば顔を顰めるだろうし、怒るかもしれない。ユウカは一体何と説明するつもりなのやら。

先生の敵を減らすためだからやむを得ないというのが本音だが、それを先生に堂々と言う勇氣はない。悪いことを平気でするタイプだと思われるのは少し嫌なのだ。これまでのゲーム開発部のやらかしの大半は先生に知られているし、何なら積極的に先生をやらかしに巻き込んだこともあるのだが、それは全力で忘れようとしているミドリである。

せつかく売人を捕らえて少しは晴れやかな気分になりそうだというのに、何だかまた憂鬱になってきた。大きくため息をつくとき、ミドリは最後の売人がいるであろうエリアに足を向けようとした。その肩に、ポンと手が置かれた。

「……ユズちゃん？」

「ミドリ、ちよつと……」

ミドリが後ろを振り向くと、そこにはミレニアムサイエンススクール1年生花岡ユズが立っていた。ユズはミドリとモモイ、アリスが所属するゲーム開発部の部長である。

ユズは極度の人見知りで、人混み等が大の苦手だが、最近は先生とコンビニのバイトをするなどして順調に克服していつている。それでもかなりいっぱいいっぱいなのか、冬だというのに額に汗をかき、若干挙動不審な感じでミドリの肩に手を置いていた。

ミドリが振り向いたのを確認したユズは、ミドリに向けてスマホの画面を見せた。それを覗き込むミドリ。そのスマホには、写真が表示されていた。

「……………これは？」

「わたしが捕らえた売人の写真なんだけど……………」

スマホに映っていたのは、煤焦げたロボットが仰向けに倒れている写真だった。のっぽでウインドブレードカーのような服を着込んでいる。

ユズの持つグレネードランチャー「にゃん、s ダツシユ」から発射された^{グレネード}擲弾の直撃を受けたのか、ロボットが倒れている地面の周囲も黒焦げになっている。40ミリグレネード弾の威力は極めて高い。グレネードランチャーは多種多様なグレネード弾を発射可能であるが、おそらく高性能炸薬弾を浴びたと思われる。

怪訝そうな表情を浮かべたミドリの耳元で囁いたユズは、指先を歩道の隅に向けた。2人は同時に首肯し、スタスタとそちらに向かって歩いていった。

「……………ユズちゃんも捕らえた売人、つまり一番最初に捕まった売人だよな？ もうヴァルキューレが運んでいったって聞いているよ？」

「うん、それでね……………この人の上着なんだけど……………」

ユズは素早くスマホを操作すると、写真が拡大され、ロボットの胸部辺りがクローズアップされた。そして上着の胸ポケットの上に刺繍されたものが拡大されていく。そ

れは企業名の様だった。企業名の下には、アルファベットのZの下に逆さにしたAをくつつけた風に見えるロゴマークが書かれていた。

「……ゼルコヴァPMC?」

アルファベットを読み上げ、ミドリはユズの瞳を見つめた。

「うん、ついさつき、ユウカ先輩に送ったんだ。わたしも写真をよく見て気付いたの。怖くて、人混みが多いところではスマホをじっと見つめていたから」

「ユズちゃん……」

ミドリは複雑な表情を浮かべた。人混みの中を歩きスマホで進む時点でどうかと思うが、そもそも売人を捕捉し捕らえる任務をしているというのに、一時とはいえスマホを見つめながら歩き回るのはどうなのか。ツツコミを入れそうになったミドリの口は、ただ息を吐いて閉じた。いくら克服していつているとはいえ、精神的にかなりキツイ思いをしているのは変わらないわけだし、それを責めるのは酷だろう。

「……それで、そのゼルコヴァPMCって企業がどうかしたの?」

「売人がわざわざ企業のアウターを着ていたのが気になって。ユウカ先輩にお願いして調べてもらったんだけど……どうやら、ブラックマーケットのPMCみたい」

「へえ……」

ミドリは眉を顰め、ユズのスマホに映っているカーキ色のウインドブレーカーを睨み

つけ、頭に叩き込んだ。

「PMCね……」

「そう。それでこのPMCなんだけど……車両護衛が専門のPMCなんだって」

「車両護衛？」

ユズの補足説明を聞き、ミドリは腕を組んで考え込む姿勢をとった。

「うん。ブラックマーケット、そしてその周辺の自治区に物資や商品を運ぶ車両を護衛するのが主な仕事なんだって。だから、装輪型・装軌型の装甲車両とかをたくさん持っているみたい。結構な規模の会社だよ」

「装甲車……」

ミドリは呻いた。各自治区の組織や企業が装甲車両を保持しているのが珍しくもない。キヴォトスでは、公道を装甲車両が走っていたところで大して注目されることもない。それはD・U・も同様だ。D・U・の治安維持機関とえばヴァルキューレだが、ヴァルキューレ以外にも企業が保有する装甲車両が多く走行している。さらに武装を外した中古の装甲車両が一般市民向けに販売されることもある。

「……もしかして、その会社が今回の件に関わっている？」

「アウターくらいなら社員じゃなくても用意できるだろうから、売人がゼルコヴァPMCのアウターを着ているからって理由で疑うのも安直な気もするけど……でも、可能性

は低くはないと思う。

ブラックマーケットの企業って結構堂々としているから、普通に企業のロゴとか隠さずに密輸や密売やっていることも多いってユウカ先輩から聞いたこともあるし……」

ユズの返事を聞いて、ミドリはそういういえば前に自分もユウカから聞いたことがあるな、と思った。人差し指で眉間をつつき、記憶を引っ張り出す。

「ああ、そう言えば私もそんなことをユウカから聞いたことがあるよ。ブラックマーケットの流儀では、こういうのは堂々としていた方が良いつて話」

ポン、と小さく両手を叩いたミドリは顔を上げ、ユズに向かって微笑みかけた。

多くの組織が様々な取引を行うブラックマーケットでは、下手に素性或組織を隠したり偽装したりする方が、相手の不評を買う場合が多い。商売や契約において信用が大事なものは、裏世界も同じなのだ。堂々とすることは名を売るという意味でも大事だし、本当の姿を曝すことは相手を（ポーズの上では）騙そうとしていないということ、こちらも危険性を抱えて仕事に取り組んでいる、ということアピールするという意味がある。

ミドリたちにはわからない感覚であるが、闇の世界では「相手と取引をするために、こちらにも相応に危ない橋を渡っている」と言外に伝えることを指して「誠意ある姿」と解釈される場合があるらしい。後ろ暗いことなどしたことがない（自己分析）引き籠もり

気質のミドリたちには、理解し難い流儀である。

ミドリもユズもシャーレによるブラックマーケットへの攻撃作戦や侵入作戦に参加したことはなかったが、今後のために備えて交流会で参加した部員から話を聞いたことがある。ミドリが思い出したのも、その時の話だった。

「そうだよ。それで、もしPMCが売人たちと協力関係にあつたり……或いは、PMCがスクーターを販売している組織に雇われていたりとかしていたら、ちよつと一人じゃ対応できないかなって思つて……。ユウカ先輩に相談したら、ミドリと合流してつて言われたの」

「ああ、そういうことね」

漸く得心が言つたミドリは首肯すると、につこりと微笑んだ。

「じゃあ、ハルカちゃんも呼んで3人一緒に最後の売人の所に行く？ それとも、さらに増員を待つた方が良いかね？」

「うーん……こういう時に増員呼ぶのはユウカ先輩の役目だよ。ユウカ先輩が手配して増員を呼ぶとしたら、先生に連絡して当番の生徒とかバイトの子たちに来てもらうか、今D・Uにいるシャーレ部員をかき集めるかのどっちかになるよね……。どちらにしても、時間がかかると思うよ。」

ユウカ先輩がどう判断を下すかもわからないし、必ずPMCと遭遇したり、ましてや

戦闘になるわけじゃないと思うし。取り敢えず、先にハルカちゃんと合流すべきだと思う」

少し唸ったユズがそう返事をする、ミドリは再び首肯した。

「じゃあ、私からハルカちゃんに連絡を——」

そこまで言つて、ミドリは口を閉じた。後ろから車の走行音、それもかなり独特の走行音が聞こえてきたからだ。それは、カタピラを装備した車両の走行音だった。2人は同時に目を見開き互いの表情を確認した後、これまた同時に音が聞こえてきた方向へ顔を向けた。

力強いディーゼルエンジンの音と共に、ゆっくりと近付いてきた車両を視認し、ユズとミドリは2人揃つて口をぱかりと開けた。

それは2台の車両だった。まず前方を進んでいるのは、無限軌道カタピラを装備した大型の装甲車だった。傾斜の付いた独特のシルエットを持つ長方形型の車両だ。

「APC（装甲兵員輸送車）だ……」

ユズが小声で呟いた。

それはキヴォトスでは大量製造されている一般的なAPCだった。製造開始はかなり昔であるために装甲性能に若干の不満があるものの、安価で故障が少なく、改良がしやすい設計になっていたこともあって改良が重ねられつつ現在でも販売が続い

ている代物だ。所謂「よく見るAPC」である。

このタイプのAPCは乗員2名に加え、後部兵員室に最大11名の搭乗が可能となっている。そして車体上部のキューポラ（車内から外が覗けるように少し盛り上がっているハッチのこと）部分には、12・7ミリ重機関銃が装備されている。

APCは歩道で立っているミドリとユズを気にする素振りも見せず、エンジン音を高らかに道路をゆつくりと進んでいく。黒や白、灰色を混ぜた独特な都市迷彩で塗装された車両を間近で見つめ、ミドリとユズは同時に声をあげた。APCの車体側部には、「ゼルコヴァPMC」のロゴマークがしっかりと描かれていた。

ユズとミドリは見つめ合い、同時に頷く。そして、並んでAPCが過ぎ去った方向へ速足で歩き出した。ユズがスマホのカメラを起動し、APCを撮影する。

その後ろから、4WD（四輪駆動）の大型トラックがゆつくりと走ってきた。こちらにも都市型迷彩で塗装され、APCと同じロゴマークが描かれている。但しこちらは非装甲ソフトスキンの車両だった。こちらもしりげなく、ユズが撮影している。

2台の車両が視界から消えていくのを確認すると、ミドリが即座にスマホで電話をかけた。

「もしもし、ユウカ。……ええとね、今、ゼルコヴァPMCのものらしき車両を2台見つけたんだけど。……うん、私とユズちゃんがいるところにドローンを寄こして。それ

と、今からハルカちゃんと合流しようと思うんだけど。……そうだね、見つけた車両のうち、1台はAPC。乗員と1人が乗れるタイプ、12・7ミリ重機（重機関銃のこと）を装備。もう1台は大型トラック、ソフトスキン、積載物は不明。あ、ユズちゃんから写真届いた？……うん、東部公園の方に向かって走っていった。……了解。どうするかは任せるけど……あ、そうだね……他には……あー、うん……了解」

ミドリは通話を終え、ふう、と息を吐いた。そして、憂鬱そうな表情を浮かべてユズへ視線を向けた。凡そ察したのか、ユズの表情が引き攣り、同時に顔色がみるみるうちに青くなっていく。気持ちはわかる。わかるが、仕方がないのだ。これも先生のためなのだから。

「……取り敢えずドローンを向かわせるつて。あと、先生には連絡だけするけれど当番をこつちに割^きられるかわからないから……説明が面倒くさいなあ、複数通話投影モードにしておけばよかった……一先ずは近くにいるシャーレ部員に片っ端から応援を呼ぶつて。一番近くにいるのは、ハルカちゃんと、お姉ちゃんと、アリスちゃんと……聖園ミカさん」

「み、聖園……ミカ、さん……」

ユズの顔は青を通り越して白くなっていた。唯でさえ慣れていない人とのコミュニケーションが苦手だというのに、相手がよりにもよって初対面の、しかもあの聖園ミカ

である。おまけに場合によつては合同で戦闘をすることになるかもしれない。

そんなユズには心底同情する。できれば、ユズにはさつさと済ませて先生の元へ遊びに行くという計画がおじやんになるかもしれない自分に同情してほしい。

そう思い、ミドリは大きくため息をついた。

まだまだ、午後に差し掛かったばかりである。冬とはいえ、十分日は高かった。

シヤールレ部員と一緒⑨

「お疲れ様、ハルカ。そしてお休みのところごめんさい、モモイ、アリスちゃん、ミカさん」

複数通話投影モードにしたハルカのスマホからは、ユウカの姿がホログラムで出力されていた。現在、ミカたち4人はハルカのスマホを中心に円陣を組むように向かい合っている。

スマホの複数通話投影モードにすると、通話相手の全身がホログラムで表示されると同時にスマホの近くにいる全員に通話が届くようになる。ユウカは現在、椅子に座っているようだった。あくまでユウカしか表示されないのが、ホログラムのユウカはまるで何もない空中に腰かけているように見えるが、複数通話投影モードだと誰がやつてもこんな具合になるため、全員気にしていない。

「ユウカちゃん、お久しぶりー☆。それで、事情はさつきからずっと流れてきている互助会の通知で把握しているけど……」

代表してミカが聞くと、ホログラムのユウカは顔を顰めて腕を組んだ。

「ええ。ゼルコヴァPMC……つい先ほどから該当する2台の車両を追尾しているわ。

ミドリが倒した売人が移動していたルートを通って暫く停車。現在はゆっくり貴女たちがいる公園の方に向かっているわね。

つまりゼルコヴァPMCの車両2台は、今度はハルカが捕縛した売人の移動ルートに向かつて進んでいるということね」

「真っ黒じゃん」

「真っ黒ね」

間髪入れずに発言したモモイに向けて、ユウカは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

「グレーどこの話ではないわよ。到底、無関係とは思えないわね。ゼルコヴァPMCは、スクーターを販売していると思われる組織……長いから、取り敢えずこの場では組織『X』と呼びましようか。Xと協力関係にあるか、或いはゼルコヴァPMC自体がXか、そう考えるのが妥当でしょう。調べた限りゼルコヴァPMCはそここの規模だけ、スクーターなんて製造、販売するための設備とかを独自で保有しているとも思えないから、おそらくゼルコヴァPMCはXと協力関係にある企業の一つと考える方が無難だと思う」

「ごめんね、本題からは外れちゃうけれど……スクーターを製造・販売している組織は、目星がついているの？」

ミカの問いに、ユウカは考え込むかのように指先を顎に当て、数秒後に話し始めた。「……幾つか候補は上がっている状態だけど、特定にまでは至っていないわ。ブラックマーケットの内部にはスクーターなどの違法製品や酒、煙草を製造している企業が複数あるから、現在はそれらを洗っている最中。ブラックマーケットにはブラックマーケットの流儀や秩序がある。こんな使用者を洗脳するようなもの、一企業が独断で好き勝手に製造してばら撒いているとも思えない。……実行犯はブラックマーケットの大規模犯罪組織である可能性が高いわね。他には……おそらくだけど、ブラックマーケットの背後にある大企業連合が幾つか関わっていると思う」

「では、それらを倒せば良いのですか？」

平坦な声で事も無げにそんなことを言うアリス。そんなアリスを見て、ユウカはふう、と息を吐いた。

「……それについて議論するのは、まだまだ先のことよ。それより、今は……」

「こつちに向かってきているゼルコヴァPMCの車両をどうするか、ですね」

何時もより鋭い声で言ったハルカに、ユウカは首肯した。

「そうね。十中八九ゼルコヴァPMCは黒だろうけど、明確な証拠はないのよね……」

「ユウカちゃん、もう一つ聞いても良い？」

ミカが言うのと、ユウカは頷いて視線をミカへと移した。

「前に駅ビルのマニオライに現れたPMCっぽいロボットたちは、ゼルコヴァPMCじゃないんだよね？」

「ええ、違うわ。あの時に捕縛した兵士風のロボットたちが前に所属していたPMCはすでに倒産していて、今は少人数で傭兵グループを形成していたから、ゼルコヴァPMCには所属していないわ。実態は傭兵というより何でも屋に近いし、尋問の結果、依頼主のことはほぼ何も知らなかったようね」

「今回、Xはその何でも屋のような人たちには頼んでいないってこと？」

ミカに続いてモモイが尋ねると、ユウカは再び考え込むようなポーズをとった。

「どうかしらね。前回の失敗から反省をしてやり方を変えてきたのか、或いはゼルコヴァPMC以外にもXが雇っている連中や、Xの組織の者がまだD・Uの何処かにいて、私たちが発見できていないだけか。可能性は十分あると思う」

「……先生から、何か指示は来ていますか？」

今度はハルカが低い声で尋ねた。怒涛の連続質問だが、ユウカは慌てる素振りも気も悪くする様子も見せず、答えていく。

「現在、先生はオフィスで当番たちとバイトの指揮をとられている最中よ。私たちの状況はすでに先生に伝えたわ。先生からはゼルコヴァPMCが黒と確定してはいない以上、あまりこちらから戦いを挑むべきじゃないと思うと言われたけれど、戦闘の許可自

体はいただいているわ。つまり向こうが撃ってきたら戦闘して良いということね。追加で確信が持てれば先制攻撃をしてもOKとの許可もいただいているわ。

ハルカには作戦前に説明したけれど、今回の任務は先生の許可を得て私が指揮をしている売人捕縛の任務よ。ブラックマーケットを出入りしている人たちの中からD・U・に向かい、スクーターらしきものを持ち歩いている人たちをピックアップし追跡、取引などを確認して証拠を得たら攻撃、そして捕縛。

一方で先生はそれとは別件の仕事をされていて……タイミングが悪いことに、今日の当番6人のうち3人が、D・U・北端エリアで依頼をこなしている真つ最中。内容の説明は省くけど、数回は戦闘をするであろう任務で、彼女たちはそこから動けないわ。

残りの3人はオフィスにおいて、2人は事務仕事、もう1人はバイトの正義実現委員4人の監督をしている最中よ。この3人はいざとなればこちらにヘルプに來れると先生から言われているけれど……」

「今、ここにいるのが4人。ミドリとユズが合流して6人。そこに3人加わったとして9人……そのくらいの数だったら、PMCの団体にも余裕をもって対抗できそうだよね。PMCは11人乗りのAPCと大型トラックって言ったよな？」

APCにロボットや自律戦闘機械オートマタが11体乗っていたとして、運転席と助手席に乗っているとと思う2体を加えて13体。トラックにも2体乗っていると考えると合計15

体……」

モモイが唸る様に言うと、アリスがシユバツと片手を挙げた。

「つまりアリスたちのパーティが1人につき1体と半分を倒せば勝ちですね！ これは勝ち確です！」

「……自衛戦闘ならOKなんだつてば。あと、そう単純な話でもないのよ……。最低でも相手は12.7ミリ重機を所持しているわ。トラックの積み荷も不明。Xの動きからして、D・U・で然程自重する気があるとも思えないし、無反動砲や群体式ドローンでも積んでいるかもしれない。APCに搭乗しているであろう兵士の携行火器も不明。相手の戦力に関する情報が少なすぎるのよね」

アリスの戦う気満々な、しかもひどく楽観的な言葉を聞き、ユウカは思わず頭を抱えながら腹の底から絞り出すような声で言った。指摘を受けてしよんぼりと肩を落とすアリス。そんなアリスを慰めるように、モモイがアリスの肩をポンポンと叩いている。

なお、「1体と半分」という謎発言には誰もツツコミを入れていない。モモイは華麗にスルーを決め込んでいるし、ミカは分かりやすいと逆に感心していたし、ハルカはアリスの言葉に背中を押されたかのように、卑屈に笑いつつも闘争心で瞳をぎらつかせている。

新人と戦闘狂と加減を知らない無垢な子と馬鹿しかない結果がこれである。ユウ

力は別の意味で頭を抱えた。

それに便乗してミカもアリスの頭を撫でる。自然に撫でられているアリスは花が咲く様な笑顔を浮かべながら、ヒップホルスターから拳銃を取り出しローディングをした。ユウカの言葉を受けても、戦闘の準備はしつかりするつもりらしい。戦闘が発生する可能性が皆無ではない以上、行為としては決して間違っていないはずなのだが、首から上とその下の所作のギャップの酷さに、ユウカは倒れそうになった。しかし気力で耐え、ミカに意見を求めるように視線を向ける。

それを受け、ミカは小首を傾げて発言した。

「こんな状況じゃあ、頭数だけ揃えたところで仕方がないと思うなー。戦闘になるからわからないんだし。新手の敵が現れるかもしれないから、オフィスにいる当番3人はこのままオフィスに待機で良いんじゃないかな。……そう言えば、今日は当番以外にオフィスに来ている生徒はいないの？」

「流石の意見ね。そうね……」

想像よりも遥かにまともな意見に、ユウカは安堵のため息をつきながらミカからの問いに答えた。なお、ミカが当番3人の増援が要らないと断言した本当の理由は、相手が15体だろうが150体だろうが自分1人で倒しきれるとごく自然に考えているからだということ、ユウカは知らない。知ったら完全に突っ伏していたかもしれない。

ハルカのように表情や態度に露骨に出さなだけで、ミカは割と戦闘狂の部類である。しかも戦いを好み進んで喧嘩を売りまくるといふタイプではなく、自分がキヴオトスでも最強格だと自覚しているので積極的に戦いを避けようとしないうし、売られた喧嘩は普通に買うという一番厄介なタイプの戦闘狂である。それに見合う實力を持つている上に、条件反射的に相手に殴りかかるわけではないためにかえって性質が悪いタイプであった。哀しいことに、そんなミカの気質はユウカたちにはまだ知られていない。

現在はナギサから頼まれて、シャーレの任務以外では極力戦闘を避けているから、というのもミカのバーサーカーっぷりがバレていない理由の一つである。

「数人カフェに来てくれるけれど、もしもの時に備えてオフィスから動かないように私からお願ひするつもりよ。当番3人が貴女たちの増援としてオフィスから離れるのなら、尚更カフェに来てくれる部員たちは動かさないわ」

「だよねえ……。まあ、取り敢えず……」

考え込むように虚空を一度見つめたミカは、次いで3人とホログラムのユウカに順々に視線を向けて両手を軽く叩いた。

「百聞は一見に如かずって言うしき、合流予定の子たちと一緒にゼルコヴァPMCの様子を見てみない？ 戦闘を仕掛けるかどうかは、その後で決めることにしようよ」



結局ミカの提案にハルカ、モモイ、アリス、そしてユウカが賛成したため、通話を終えて4人はゼルコヴァP.M.Cを待ち構えることにした。車両を追跡しているドローンからの情報を受け取りつつ、ミカたちは公園中央の池の水上四阿あずまやまで移動した。射撃場のすぐ横に設置されているこの四阿は近くに植えられている百鬼夜行自治区生まれの桜に合わせてか、百鬼夜行自治区風の檜皮葺ひわだぶきの屋根を持つ木造という趣溢れる造りとなっている。中にはこれまた木製のテーブルとベンチが3セット設置されている、なかなか広めの四阿だ。幸いなことに、中や近辺にはミカたちを除き誰もいない。

「あーあ……お昼ご飯は暫くお預けだねー」

ベンチに腰掛け、モモイが不満げに呟いた。口調からは全くやる気が感じられないが、手はよどみない動きで愛銃のチェックをしている。小声でぶつぶつ呟きながら、モモイは背負っていたリユックからドット・サイトを取り出して愛銃に取り付けた。

「す、すみません。私は早めにいただいてしまいました……」

「あ、ごめんごめん！ そんなつもりはなかったんだけど……」

申し訳なさそうに軽く頭を下げるハルカを見て、モモイは慌てて首を横に振った。そんなモモイを見て、アリスは声をかけた。

「あ、モモイ！ 新しいアイテムですね！」

「え、あー、このドット・サイトのこと？ へへん、この前ゲーム開発部の動画配信で再

生ランキング上位になった記念に、ユウカに貰ったんだ！ 低倍率スコープ機能もある最新の標準用光学機器！ 正確に言えばドット・サイトというよりは、ドット・サイトとスコープの中間みたいなものかな？」

「へえ、それ知っているよ。確かミレニアムの生徒が立ち上げた付属機器製造企業が造った製品だよね」

興味を持ったミカが口を挟むと、モモイが胸を張りながらミカに視線を移した。

「そうそう、ミレニアムには珍しく、最新の製品じゃなくてそこその性能のものを頑丈に作って安価で売っているコンセプトの企業。安価と言っても最新で高性能の機器に比べての話だから、そこそこ値が張るんだけど、プレゼントなら関係ないよね！ 折角貰ったから、今日使ってみようかなって。よいしょ……ちよつと試射してくる」

モモイはそう言う立ち上がり、愛銃を担いでスタスタと歩いていった。ドット・サイトはレンズの表面に浮かんだ光点を標的に合わせることで狙いを定める。当然、着弾点と光点が重ならなければ役に立たないため、前もって細かな調整と試射が欠かせない。

「確かに……あれば装備しておいた方が良いでしょうね。ここは閉鎖されているわけでもない普通の公園ですし、敵の背格好も不明ですし……」

「ああ、ターゲットIDには便利だよ。サブマシンガンとシヨットガンにはあんまり

関係ない、というより気にしたって仕方がないし」

ハルカがボソリと言うと、ミカは苦笑しながら答えた。それに反応し、ハルカも同じように苦笑した。「ターゲットID」とは目標を識別する行為のことを指す。群衆に紛れている敵や、無関係な市民が逃げ惑う中標的を正確に射抜くための行為であるが、キヴォトスでは一般通過市民や生徒を巻き込んで大規模銃撃戦が発生することが少なくないので、あまり重視されていない。しかしシャーレは一応は連邦生徒会直属の組織なので、堂々と民間人の巻き込み上等というスタイルで行動するわけにもいかないのだ。

とはいえ、一般市民でも銃弾を浴びて気絶程度で済むキヴォトスにおいて、ターゲットIDは結局のところ、市民の犠牲を防ぐ行為ではなく弾薬の無駄な消費を避けるための行為というのが一般認識である。故に、「狙撃」が可能なアサルトライフルやスナイパーライフル、ハンドガンの射手しか重視しないのが実情だ。弾丸をバラ撒くサブマシンガンと粒をまき散らすショットガンの射手は心がける程度のことしかできず、結果としてヴァルキューレのような治安維持組織の者もガン無視することが多い。このためキヴォトスの一般市民では、サブマシンガンやショットガンの射手は民間人を平気で巻き込む輩だとイメージすることが結構ある。事実なので何も言えないやつである。サブマシンガンは兎も角ショットガンは余程銃口に近い位置にいないと巻き込まれないし、一粒弾スラッグという巨大な弾丸を1発のみ発射する特殊な弾丸を使えば、近距離での「狙

撃」も不可能ではないのだが。

ちなみに本来、キヴォトスの法律ではPMC社員は社名やロゴが刺繍された共通の制服や、装甲服アーマーを着用することが義務付けられている。これらを外から視認できるように着用していないPMC社員、例えば私服の下にPMCの社員証を見えないように首から下げた場合などでは、PMCの社員として認められず、社員として活動していたとしても、PMCを保護するキヴォトスの法律が適用外となる。つまり「PMC社員」ではなく「武器を携行した一般市民」として扱われる。このため大抵のPMCは、専用のアーマー等を着用して堂々と任務を行っている。

しかし、ブラックマーケットで主に活動しているゼルコヴァPMCのロボットがどういふ服装で任務を行っているかは不明だ。会社名が描かれたAPCとトラックで移動している以上、少なくとも表面上はこそこそ隠れずに法を守る気はあるようだが、先生の敵の良心に期待するほど、シャーレ部員は馬鹿ではないのだ。

ハルカとミカが乾いた笑い声をあげていると、四阿に向かって足音が近付いてきた。素早くハルカがその方向に銃口を向けるも、すぐに下ろした。

「ハルカちゃん、私だよ！」

「はあ、はあ……」

「ミドリさん、ユズさん」

「あ！ パンパカパーン！ ミドリとユズがパーティに合流しました！」

走ってきたのは才羽ミドリと花岡ユズだった。

「はあ、はあ……ゆ、ユウカ先輩から……き、はあ、ききい、はあ、聞きました……」
「ユズちゃん、一旦落ち着いて……。ゼルコヴァP M Cの車両は……まだ来ていないね。
公園の近くで停車してる……」

「はあ、はあ、ひ、久しぶりにぜん、全力疾走……した……。エリドウの時よりも、
は、はし……ひゅごふう！」

「ユズちゃん、黙って深呼吸！」

汗を流して大きく息を吐くユズの背中を、ミドリがゆつくりとさす。暫くこの場に
いる3人が無言で見守っていると、ミドリとユズは四阿の中に入ってきた。そしてゆつ
くりとベンチに腰かけているミカの前まで歩いてきた。まずはミドリがぺこりとお辞
儀し、緊張したような表情でミカを見た。無情にもユズの服の袖をしっかりと掴み、強
い力で引張っている。横に立っている、というよりは立たされているユズは、まるで
断頭台の前に立った死刑囚のように震えている。

こんな態度をとられては幾らなんでも腹に据えかねそうなものだが、あまりにも酷す
ぎる態度なので、ミカの頭の中では怒りよりもユズへの心配の方に軍配が上がった。故
に、ミカは無言で不憫なものを見つめるような瞳でユズを見つめるのみだった。

「……初めまして、聖園ミカさん。ミレニアムのゲーム開発部、才羽ミドリです。モモイは私の姉です。そして、こちらがゲーム開発部部長の花岡ユズです」

「かひゆつ……は、はなおか……花岡、ユズです。よろしく……ひ、ふひゆう、お願い申し……上げます。……こひゆ」

汗を流しながら深呼吸を繰り返していたユズは、傍から見ると病気にしか見えないほどに変な呼吸を繰り返しながら、小刻みに震えながら頭を下げた。

「あ、うん。初めまして、聖園ミカです」

おふざけゼロで普通に挨拶を返し、ミカはユズをまじまじと見つめた。蛇に睨まれた蛙というより、蛇に丸飲みされて死へ向かっていく蛙のような表情でガタガタ震えているユズを見て、その横で平然と頭を下げているミドリへ視線を移す。

ミカの視線を受けて彼女の言いたいことを理解したのか、ミドリは感情が籠っていない表情で淡々と答えた。

「初対面の相手には、大体こんな感じの人なので……大丈夫……じゃないですけど、お気になさらず」

「いや、無理しなくても良いんじゃないかな……?」

ミカがユズを見つめながら小声で言うのと、ミドリは困ったような表情を浮かべて首を傾げた。しかし、ユズの袖を掴んだ手は一向に離れない。

「可哀そうですけど、同じシャーレ部員への挨拶は、大事ですから……ちやんとやらないと」

このメンバーで大丈夫なのだろうか。

勝利に絶対の自信を持っていたミカはふとそんなことを思うも、口に出すことなく曖昧な笑みを浮かべながら頷いた。

シャーレ部員と一緒に⑩

D・Uの東部公園は手前に駐車場があるが、そこからさらに車道が伸びており、坂を上つていった先にある中央広場まで繋がっている。そこから先は車道がなく、歩道と遊歩道、階段しかない。

中央広場は文字通りの広々とした空間で、隅には大型の野外ステージが設置されている。ヒーローショーや区が主催するイベントの会場として利用されているエリアだ。そこからさらに階段を上った先に中央の池とミカたちが待機している水上四阿、射撃場、さらにその上にアスレチック広場と天体観測用の広場がある。それぞれの広場は階段のほか、森や梅、桜が植えられたスポットを通る遊歩道で結ばれている。各遊歩道にはところどころに休憩用の四阿や茶室、そして小さな広場などが設置されている。全部散歩をしながら回るとすれば、1時間程度はかかるだろう。D・U全体を見渡しても上位に入る広めの公園だ。

ハルカが売人を発見したのは中央の池より森の中の遊歩道を進み、階段を下つていった先にある花見用の小さな広場であった。もし、ゼルコヴァPMCの2台の車両の目的地が売人が移動していたルートあたりだとすれば、車両に籠って中央広場で待機して

いるか、車両から降りて歩いてくるかのどちらかということである。

「あの人たちの目的は何だろう。……やっぱり、売人たちの回収、かな？」

ミカは四阿の天井に向かって息を吐きながら、Pコートを脱いでベンチの上に畳んで置いた。それは独り言に過ぎなかったが、この場にいる他の5人全員の耳に届いた。なお、モモイは既に試射と調整を終えて四阿に戻ってきている。

「移動ルートから推測すると、その可能性が高いと思います……」

ミドリがミカの方を振り向いて頷くと同時に、ユズが叫んだ。

「ゼルコヴァPMCの車両2台が、公園駐車場に入りました！」

ユズが持つスマホには、公園上空を飛行しているであろうユウカのドローンのカメラ映像が表示されていた。全員がそれを覗き込むと、APCとトラックがゆつくりと公園駐車場に入っていくのが分かった。しかし2台は駐車場に停車せず、そのまま通過し中央広場へ繋がる車道へ入っていった。

ドローンのカメラが中央広場の方へ向く。どうやらユウカも遠隔操作をしているらしい。

「どうする？ 中央広場の方に行ってみる？」

「うーん……映像を見る限り、中央広場には数台車が止まっているけど、歩行者は見えないね。私たちが行ったらすぐ気付かれそうだけど……」

「待つてください、中央広場でロボットたちが下車する可能性もあります。……一先ずここで待機しましょう」

「確かに、クエストクリアには待ちの姿勢も重要です！ わかりました、此方が人数では不利な可能性がある以上、ステルスモードで行くのですね」

モモイの声にミドリとハルカが答え、それにアリスが続いた。結局ハルカの意見が総意になり、全員が四阿で待機することとなった。

2台の車両は中央広場まで進むと、すぐに停車した。そして、APCのハッチから一斉に数体のロボットが下りてきた。続々と降りてきたロボットは、最終的に合計9体。全員都市型迷彩のアーマーを装備したロボットだ。カービンモデル（取り回しがしやすいように銃身を短くした銃のこと）のアサルトライフルを装備している。

「……カービン持っているね」

「流石に軽機（軽機関銃のこと）は持ち込まなかったかな？」

「暢気に言っている場合じゃないですよ……」

モモイとミカが小声で話し合っていると、挟まれている格好となっているユズが情けない声で言った。表情は完全に青ざめている。

アサルトライフル射手が9体。加えてAPCには12、7ミリ重機。他にも戦闘員や火器があるかもしれないというのに、判明しているだけでこれである。なかなか侮

れない戦力だ。

ロボットたちは円陣を組んだりAPCからタブレットを取り出したり、何かを組み立てたりしている。そしてロボットのうち1体が何かを放り投げた。それを見て、ミドリが顔を顰めた。

「あつ、まずい……手^{ハンド}投げ^{ローンタイプ}式のドローンだ……」

ロボットの手から放たれた小型ドローンは、高速で空を翔けながら歩道の方へ飛んで行った。ユウカのドローン、つまりスマホに映っている映像を撮影中のドローンに比べると飛行高度ははるかに低い、ちよつと先を確認する程度の能力は十分備えている。この手の高速飛行ドローンの中には機関銃などを搭載したタイプも珍しくはないのだが、今ロボットが投げたのは非武装でより小型なタイプのドローンだった。

彼らの動きは、完全に敵地へ侵入する前のそれだった。つまり、前方に敵が待ち構えていることを前提とした行動である。

「……明らかに、敵との遭遇、戦闘を前提とした動きだね」
「そうですね……」

先程よりも表情が硬くなってきたミカが言う、ハルカがそれに応えて低い声で言った。ハルカはそのまま周囲をぐるりと見渡し、全員の同意を得るかのように少し大きな声で言った。

「やはり、あの人たちの目的は売人たちとの合流、或いは売人たちの回収で……合流予定だった売人たちがどこにもいないため、警戒しているのではないでしょうか」

「うーん、そうかもね……」

ハルカの意見を聞いたモモイが首肯し、腕を組んで唸った。

「わかりました。つまり、先制攻撃はしにくいということですね」

「アリスちゃん……先制も何も、まだ敵かどうかもはつきりしていないんだよ。確信を持ってなきや先制攻撃はダメだって」

妙に戦う気満々なアリスのキリツとした表情にジト目を向け、ミドリはため息をついた。そしてミドリは視線をカメラ映像に戻し、今度は呆れたように低い声で言った。

「うわあ、あんな格好で9体ゾロゾロと公園を歩いてる。すつごく目立つよ、あれ」

映像では、ドローンから送られてきた情報を分析し終わったのか、ロボットたちが歩道を歩き出していた。確かに、これは目立つ。しかも公園の歩道は周囲に木々が植えられているため、白や灰色の都市型迷彩が一層目立っている。

9体のロボットは先頭に2体、中央に5体、後尾に2体のグループに分かれてゆっくりと進んでいた。おそらく中央グループのさらに真ん中にいるのが指揮官だろう。この手の行軍は前衛、側衛、後衛を設けるのが基本中の基本である。

「ドローンがこちらに来たら、どうします？」

「普通にしていればいいんじゃない？ 射撃姿勢で待ち構えているわけじゃないんだし
さっ」

ハルカの問いに、ミカが即答する。公園の四阿で、生徒たちが駄弁りながら愛銃の整備をしているなど、キヴォトスではごくありふれた光景だ。トリニティ生徒とゲヘナ生徒とミレニアム生徒が一緒にお喋りしているのは異様といえど異様だが、決して異常とは呼べないだろう。珍しいが、不自然ではない。

そして突然ドローンが接近してくればそちらに視線を動かすのは当然だし、接近してくるドローンを観察する行為もこれまた何もおかしくはない。

「そうですよね。確かに、そうですよね」

「自然に行きましょう……全力で自然のスタイルにチェンジします！」

「アリス、それ不自然だよ、すごく」

引き攣った表情で頷くユズ。既に顔は緊張で固まり、ゴクリ、と唾を呑む仕草は到底リラックスしているようには見えない。ガッツポーズをとっているアリスも同様だった。ため息をつきながらツツコミを入れているモモイは2人に比べればまだマシだが、全体的に口調が真剣モードになっている。

一方でミカはテーブルに頬杖をつき、足を組んでにこやかな表情を浮かべている。それでいて、自然な動きで外の景色に視線を向けた。ドローンが飛んでくるであろう方向

だった。

それを見て、ミドリは思わずおお、と声を上げた。成程、これがキヴォトスでも上澄みの実力者というものか。覇者の風格だ、と心の中のスケッチブックに急いで描き込んだ。ミカの戦いなど見たことはないが、ユウカが仕入れた情報によるとトリニテイきつての武闘派だという。あの剣先ツルギと同等以上と聞いたときはツルギがあんなの一つの学校だけで複数いてたまるかと思つたものだが、戦いが起こる可能性が高い状態での自然体な仕草と、纏っているオーラのようなものが高い説得力を形成していた。

ミドリが感心していることなど気付かず、ミカは時折整えられた自身の爪を見ながらさり気なくドローンの襲来に備えていた。

約1分後、キーンという飛行音を上げ、小型ドローンが木々の合間を突き抜けて四阿の前まで飛んできた。キヴォトスではよく見られる浮遊型ドローンだ。中央にカメラを装備している。

「あれ、何だろう?」

モモイが少々大きな声で呟きながら、小首を傾げてドローンを見つめる。なかなか様になつている演技だ。横にいるアリスも開いた口を掌で覆い、驚いているポーズをしている。やりすぎ感が否めないが、クサイ演技と即判断されるほどでもない。隣にいるハルカが微妙そうな表情を浮かべているが、あからさまにアリスを気にしている様子でも

ないのでこれまた合格点だ。モモイにつられ身を乗り出してドローンを見つめているミドリも、突然現れたドローンに興味を示したように見えるだろう。冷や汗を流してドローンに視線を固定しているユズがやや不自然な態度だが、顔色が悪すぎて警戒というよりはドローンを怖がっていると思われそうだった。そしてミカはつまらないものを見たかのような表情を浮かべつつも、ドローンの動きを目で追っていた。

ドローンはまずは四阿の近くを一通りカメラに収めてから高度を下げ、四阿に近づいてきた。ちょうど立ったミカの視線と同じくらいの位置である。そして四阿にいる6人にカメラを向けた。ミカ、ミドリ、モモイ、ハルカ、ユズ、そして最後にアリスにカメラを向けた。そのままドローンはピタリと停止した。カメラの方向がアリスを真正面に捉えた状態で固定される。

「……あれ？ 何だかアリスを見ている気がします」

「本当だね、どうしたのかな？」

首を傾げて律儀にカメラを見返しているアリスにの方向に、モモイが顔を向けた。モモイの目が不思議そうな表情を浮かべているアリスを視界に収め、そして少し下も視界に入れる。

「あ」

モモイが大きな声を上げた。ほぼ同時にアリスに視線を向けていたミカ、ミドリ、ハ

ルカ、ユズも気付いた。そして、最後にアリスが気付いた。

アリスの首からは、ミレニアムの学生証と共にシャーレのIDカードが下げられていた。ミレニアム製の難燃性カードホルダーに入ったIDカードが、音を立てずに風で揺らぐ。

「……………あ」

自身の胴体を見下ろしたアリスが声を上げると同時に、ドローンが向きを変えて高速で四阿から離れていった。

「……………うわーん！ アリス、ステルスモード失敗してしまいましたー！」

アリスの泣き顔はドローンのカメラに収められることはなかったが、そんなことは何の慰めにもならなかった。気まずい空気が流れる。

「あー……………うん……………いや、うん。私から普通にしていれば良いじゃんって言ったから……………うん、面目ないね、ごめん」

フォローするようにミカが言った。口調と態度はかなりあっけらかんとしている。態と明るくしようとしているのが丸わかりだが、アリス以外誰も気にする素振りも見せずに首肯した。誰もがミカのありがたい雰囲気崩しに乗った。

「……………でも、別にシャーレだつて知られたくらいでどうつてこともないんじゃないかな……………。そもそもシャーレ部員^{わたくしたち}って顔も名前も隠していないし、シャーレ公式放送とか見

ている人なら知っているよね……。わたしはあんまりそういうのに出てないから、知られていないと思うけど……」

か細い声であわあわしつつも精一杯アリスを慰めようとユズが言うと、これまたアリス以外の全員が頷いた。

そして、ユズの言葉に間違いはない。シャーレの部員は入部前の時点で他校にまでその名を轟かせている者が少なくない。ゲーム開発部と便利屋68は他の自治区には殆ど名前が知られていないが、それでもシャーレの一員としては古参組であり、シャーレの情報を積極的に集めているのであれば知っているくらいの名度はある。そもそもシャーレは連邦生徒会の公的機関であり、特殊部隊でも秘密組織でもないため、活動方針や実績、所属部員等の情報は普通に公開されている。

「確かに、そうですね。寧ろシャーレと分かった以上はこちらとの衝突を避けようとするのでは……」

ハルカが小首を傾げながらそう言うと同時に、全員のスマホが鳴った。メールの通知音だった。

「あ、ユウカからだ。……ゼルコヴァPMCのトラックに動きあり……?」

ミドリがメールを読み上げると同時に、甲高い音が響いてきた。同時にユズがスマホの画面を見て絶叫した。

「トラックの荷台から、何かが射出されてる！ 幾つも、数が多い……これは……！」
甲高い音はどんどん近付いてきて、次第に大きくなってくる。

「あ」

モモイが声を上げて空を指差した。向こうの木々の合間から、高速で小さい物体が無数に接近してくるのを、全員が視認した。

「スウォーム群体式ドローンだ！」

ミドリが叫ぶと同時に、全員が荷物を持って四阿から飛び出した。そしてそのまま同じ方向へ向かって走り出す。一番脚が速いミカを先頭に、ハルカ、モモイ、ミドリ、アリス、ユズの順番で脱兎の如く走っていく。

スウォームドローンは高度なネットワークで相互リンクしている小型の集団飛行型ドローンのことである。手榴弾程度の威力がある小型爆弾を内蔵しており、互いに連携しながら自律航行し、標的に向かって突入する。手榴弾程度の破壊力ではキヴォトスの生徒を戦闘不能に追い込むのは困難だが、手榴弾と違って高速で追尾してくるうえに大抵数十機で運用されるため、十分脅威といえる。

「ユウカの推測のせいでフラグが立ってたあ！ もー、ユウカのせいだよお！」
「そんなこと言っている場合じゃないでしょお姉ちゃん！」

「こ、これ、さっきの私の台詞のせいですか!? ごめんなさいごめんなさい！」

双子とハルカのじゃれ合いを聞きながら、ミカは振り向いてドローンの群れを見た。優れた動体視力を持つミカは、高速で椋鳥むぐどりの群れのようにこちらに向かつてくるドロンの数が50を超えていることを一瞬で確認する。そしてもう一瞬だけ考え、刹那で決断する。逡巡はしない。それ未満である。

「うーん、これじゃあ袋叩ガントレットきにされるねえ。……よし、アリスちゃん、対空砲撃！」

その声にハツとなったアリスはミカに向かつて頷くと、その場で足を止める。つんのめることもなく素早く背負っていた「光の剣：スーパーノヴァ」を構え、迫りくるドロンの群れを睨みつける。

「この光に仲間を護る意思を込めて——」

静かに、しかし力強いアリスの声が響くと同時に、「光の剣：スーパーノヴァ」の砲口で光が収束していった。それを見て、泣きそうな表情になっていたユズが真っ白になった顔をアリスに向けつつ足を止めた。

「ま、待ってアリスちゃん、公園の真ん中でチャージ砲撃は……」

「アリスちゃん、気にせずやっちゃって☆」

「はい！ 仲間は決して傷付けさせません！」

「聖園さああん!?!」

悲鳴に近いユズの声に普通に自分の声を被せながら、ミカはウィンクしながらサムズ

アップをキメた。ちなみに全力で走りながら、である。そのままユズの空気を切り裂くような叫びもスルーしつつ、ミカは走りながらユウカ宛にメッセージを送った。

「……なーんか向こう側、自重する気なさそうだし……こっちも捨てよ☆」

「光よ！」

ミカが呟いたと同時に、青白い光がドローンの群れに向かって発射された。結果から言えば、これがD・U・東部公園における一連の戦闘の号砲となったのである。

シヤールレ部員と一緒⑪

D・U・東部公園での戦闘は、少なくともシヤールレ部員一同にとっては心理的な意味で奇襲を仕掛けられた格好となった。誰もがゼルコヴァPMCとの衝突の可能性を視野に入れていたが、こうも果断にそれなり以上の規模での先制攻撃を受けることになるとは、誰も予測していなかった。ミカたち6人のみならず、ドローンのカメラを通じて状況を観察していたユウカも然りである。

そしてスウォームドローンが大量に射出されていくのを見たユウカが慌てて先生に連絡を取っていた頃、アリスによる迎撃が行われた。初手で放たれた大技（レールガンのチャージ砲撃）を見て先生との通話中に椅子から転げ落ちそうになったユウカが、この戦闘における最初の犠牲者といえるのかもしれない。

それは兎も角、発射された青白い砲撃は公園に来ていた民間人の一部に目撃されながら、ドローンの群れの中へ飛び込んでいき、多数のドローンを瞬時に撃ち落とした。小さい爆発が無数に発生し、火の玉となって落下していく。スウォームドローンは小型ではあるもののそれなりに頑丈に作られているはずなのだが、アリスの砲撃の前では大して役に立たなかった。

図らずともずば抜けた長射程と破壊力を誇るレーザーガンの強みが実証された形となったし、幸いなことにゼルコヴァPMCのドローン以外には一部の木々が薙ぎ倒されるくらいしか被害が出なかったのだが、6人が喜ぶのはまだ早かった。

ドローンの群れは一瞬パニックになったように四散しようとするも、すぐに再び集まり、まるで巨大な一本の矢のようにミカたちに向け高速で飛んできた。ドローンを管制している相互ネットワークは未知の攻撃を受け、群体を分散しようとしつつも、すぐに四方に飛び散ったところでその分タイムロスが発生し、標的に反撃する猶予を与えることとなる可能性に思い至ったのだろう。或いは、二撃目はこないと考えたのかもしれない。当然、そんなことはなかったのだが。

「ミドリちゃん、中距離でドローン迎撃できる?」

「はいー!」

「おっけー。じゃあアリスちゃんはそのまま対空砲撃を続行、撃ち漏らしたやつをミドリちゃんが迎撃、それも越えてきたドローンは残りの私たちで対処しよっか」

「わかりました!」

最初にアリスに指示を飛ばしたお陰か、流れでそのままミカが矢継ぎ早に指示を出した。肉声でしかも早口での指示だったが、まだ携行兵器での射撃は始まっていなかったことと、6人が固まって移動していたことで、その声は全員の耳に届いた。ミカの声を

聞き、全員が足を止めた。どの道闇雲に逃げたところで、ドローンに追いつかれるに決まっていたので、全員がミカの指示に同意した。

ミカからの指示を受けたアリスはすぐにチャージを開始し、ミドリはその場で右側の足をたたみ、その上に正座するように腰を下ろした。ニーリング（膝射）の一つで、ニーリングとシッティング（座射）。座りながら射撃するポジション）の中間に位置する射撃姿勢である。

当たり前だが、射撃は動きながら撃つよりも立ち止まって撃つ方が命中精度が高くなる。そして立ちながら撃つよりも、シッティングやプローン（伏せ撃ち。うつ伏せになりながら撃つポジション）で撃つ方が命中精度がさらに高くなる。

敵はドローンで、待っていても向こうからこちらにやってくる。態々こちらから向こうに行く必要はない。ミドリの愛銃「フレッシュ・インスピレーション」は一般的なアサルトライフルよりも射程が長いので、尚更だった。

「ターゲット標的が多数残存……もう一撃です。……信念を胸に、思いを光の剣に——光よ！」

アリスが次の砲撃を放った。発射時の衝撃波を感じ、その場にいる全員が腰から下に力を入れる。再び発射された青い光は、正確な軌道で生き残ったスウォームドローンの群れに飛び込んだ。ドローンは青白い光を視認した直後に分散したが、それでも全てが逃れることはできず、またしても空に幾つか光の花が咲いた。爆音が響き、ドローンの

破片が燃えながら雨のように落ちていく。

初撃に比べれば、明らかに撃墜数が少なかった。それを見たアリスは歯を食いしばり、再びチャージを始める。そんなアリスの後ろ姿を見ながら、ミカは息を軽く吐いて視線を空へ向けた。

「残りは……30くらいかな？」

暢気に呟き、ミカは顎に手を当てた。生き残ったドローンは高度を上げ、上空からミカたちに襲い掛かろうとしていた。低空飛行で接近し、標的の近くで急上昇して高速で突っ込む。爆弾を内蔵した自爆ドローンがよくやる動きである。

アリスの砲撃の範囲を概ね把握したのか、ドローンは空中で幾つかの小グループに分散し、複数の方向から同時にミカたちを攻撃しようとしていた。その光景を見て、ミカは小さく舌打ちをした。

「これは危ない、突破されるかもね。用意しとこうか」

「うん！」

「ユズちゃん、取り敢えず私の後ろに隠れといて。盾にしては小さめだけど、無いよりは良いと思うからさ」

「え、いや、それは——」

「は・や・く☆」

「は、はいいい……」

ミカの号令を受け、ハルカとモモイも銃を構えた。モモイのアサルトライフルは兎も角として、ミカのサブマシンガンとハルカのショットガンは射程が短すぎて対空射撃には全く不向きであるが、手持ち無沙汰で突っ立っているよりはマシである。グレネードランチャーを持つユズに至っては、対空射撃をすることすらできない。

それにおそらくスウオームドローンには、既に偵察用ドローンで撮影されたミカたちの映像がインプットされているだろう。ミカとハルカとユズだけこの場から離れたところで、一部のドローンが群体から離れて3人を攻撃するだけだ。

対空射撃というのは誘導兵器でも使わない限り、弾幕を形成してこそ意味がある。こちらがバラバラに離れるよりも、全員が一か所にまとまって一斉に射撃した方が、まだ効果は高いだろう。

ミカに急かされたユズが、ミカの背中に隠れるように身体を丸めて伏せた直後、アリスが動いた。

「心に宿した、一本の強き槍——光よ！」

アリスはチャージが完了した愛銃「光の剣：スーパードヴァ」を発射した。小グループに分かれたドローンの群れの中から、一先ず目についたグループを標的に選んだようだった。それで良い、とミカはアリスに向かって首肯した。今は時間との戦いだ。

「よし、始めますー!」

青白い光に包まれて小グループの一つが消し飛んだ直後、ミドリが正確無比な連続射撃を開始した。次々と発射される弾丸は、迫りくるドローンを次々と撃ち落とした。高速で飛び回る小さなドローン相手に、恐るべき射撃精度である。ミカは思わず目を見開き、感心したかのようにミドリに視線を向けた。

そして、すぐにアリスに声をかけた。ここまでドローンの群れとの距離が近付いては、連射ができずにチャージする余裕もないアリスの「光の剣：スーパードヴァ」にこれ以上の出番はない。

「アリスちゃん、こっちに! アリスちゃんも私が守るよ!」

「はい、今行きますー! ミカ!」

アリスが「光の剣：スーパードヴァ」を背負い、勢いよくミカの近くに飛び込んだ。それと同時にモモイが射撃を開始する。

飛翔するドローンは次々と空中で爆発し、破片がパラパラと降り注いでいた。しかし、それでもまだ10機ほどが残っている。

「じゃあいくよー。アリスちゃんもユズちゃんも、動かないでね☆」

丸まっているユズの背中と、うつ伏せの状態で顔だけミカの方に向けているアリスに微笑みかけたミカは、真剣な目でドローンを睨んだ。愛銃を両手で構え、銃口を空に向

ける。

「それじゃ、やっていこう☆」

直後、ミカの愛銃「Quis ut Deus」の引き金がひかれた。轟音とともに無数に発射される弾丸。

「え——」

それを視界の隅に入れていたハルカは、思わず目を奪われて瞠目した。発射された弾丸はほとんどバラけず、全てが吸い込まれるように同じドローンに撃ち込まれていった。アサルトライフルの弾薬よりも小さいサブマシンガンの弾薬だが、こうも連続で叩き込まれれば大きな威力となる。一瞬でドローンは爆発四散した。それを確認するよりも前に、すでにミカは次のドローンに同じように無数の弾丸を浴びせていく。

サブマシンガンによる、連続の精密射撃だった。特別なアクセサリも技術も使用しない、力づくで反動を抑えての精密射撃。ターゲットに一瞬で大量の銃弾を叩き込み、即座に次のターゲットに狙いを移す。続けざまに3機のドローンを落とす、4機目に狙いを定めた直後、その機が爆発した。

「これで……！ よし、次！」

撃ち落としたモモイがぐるりと顔を動かし、ついでに他のメンバーの顔も確認し、ポツリと呟いた。

「あれ？ 終わった？」

沈黙。全員が空をぐるりと見渡し、代表してミドリが返答した。

「……終わったみたいだよ、お姉ちゃん」

結果はドローン全機撃墜。地上で爆発したドローンは一機もなかった。まさしく最良の結果である。

「……ふう、それじゃ次、行こっか☆」

汗一つ流さずに周囲に向かって微笑んだミカを見て、全員が同時に頷いた。出番が全くなかったハルカとユズが複雑そうな表情を浮かべていたが、それでも敵の先制攻撃は完璧に対処することが出来たのである。次は、反撃の時間だった。



ユウカのドローンは相変わらず公園上空を飛行し続けており、カメラ映像は問題なくミカたちのスマホへ転送されていた。代表してミカが戦況をユウカに伝えつつ、ミカたちはそろそろと前進していった。

ゼルコヴァPMCの兵士たち9人は、ドローンによる先制攻撃が完了次第、こちらに追撃を仕掛けてくるかと思われた。しかし実際はそうではなく、或いは攻撃が不発に終わったことを何らかの手段で認識して追撃を中断したのか、行軍を一時中断し、射撃場と池があるエリアと中央広場を結ぶ歩道と階段の辺りで待機しているようだった。

とはいえこちら側も待機してはどうかしようもないので、ミカたちはドローンの映像を確認しながら、ゆっくりと前進することにした。

このまま進めば、階段の一番上からゼルコヴァP.M.Cを迎え撃つことが出来る。階段上での迎撃といっても、階段と歩道には遮蔽物も何もない状態なので、大してアドヴァンテージが得られるわけでもない。しかし、それでも防弾性能など皆無な水上四阿や、池の脇にある何もない広場で迎撃つよりはずっと良い。

階段上でこちらが戦闘を仕掛けるとして、今更奇襲になるとも思えない。向こうがどれほど情報を得ているかは不明だが、スウォームドローン50機でシャーレのメンバー6人を戦闘不能に追いつくことが出来たと楽観視する可能性は低いのではないか。

つまりは、双方が警戒している状態で、間に遮蔽物がない場所で行われる銃撃戦となる。このような戦闘は、敵の銃弾を防げずに避けることしかできないため、最終的には相手が全員気絶するまでしこたま銃弾を叩き込めた側が勝つ。つまり手数が多い方が、より多くの命中弾を得た方、またはより耐久力が高いメンバーがいた方が勝つわけである。クレバーな戦略などまるでない、銃器の性能かフィジカルでゴリ押しできた方が勝つ戦いだ。

それを悟ったらしく、モモイがうんざりしたかのように呻いた。

「気乗りしないなあ。……ユズ、発煙弾とか持つてる？」

「ごめん、今日は持ってきてきてない……。任務では基本、街中で周囲に誰もいないタイミン
グでの襲撃を想定していたから。HE（高性能炸薬弾）と、念のためにHEDP（多目
的榴弾）を幾つか持ってきているだけだよ。売人を捕まえることを想定していたから、
煙幕弾や散弾は持ってきてない」

モモイの多分に愚痴を含んだ質問に、ユズが汗を流しながら答えた。

ユズの愛銃「にゃん's ダッシュ」はグレネードランチャーである。グレネードラ
ンチャーとは、早い話が爆弾を投射する武器である。アンダーバレル（ライフルに取り
付けるタイプ）とスタンドアロン（単体で使用するタイプ）があるが、ユズの愛銃は後
者となる。擲弾とは要するに飛ばす爆弾の総称みたいなもので、キヴォトスでは手で投
擲する場合は手榴弾、発射機で投射する場合はグレネードと呼ばれることが多い。

グレネードにはいくつか種類があり、中には煙幕弾や催涙ガス弾、信号弾、照明弾な
どがある。しかしグレネードは銃の弾薬よりもかなり大きく、嵩張る。例えばユズの愛
銃が使用するグレネードは40×46ミリ。前者が口径、後者が薬莖の長さである。比
較すると、モモイの愛銃「ユニーク・アイディア」が使用する弾薬が7.62×51ミ
リである。見ての通り、全然違うサイズである。サイズも重量も異なるため、携行でき
る数も大きく変わってくる。

グレネードランチャーは豊富な種類の弾薬を投射できるのが強みであるが、実際は取

捨選択して1〜2種類の弾薬を携行するのが普通であるので、この点に関してユズには全く落ち度はない。

「うーん、じゃあいつそのこと、森の中にでも入って回り込んでみる？ どうせ先生の指揮もないから、空から見るところにいる意味もないし。ユウカのドローンが援護は、期待できないよね……」

「おそらくは。今の状況ではあのドロローンの装備は公園の中では使えませんよ。多分、まだ民間人も避難していないですし——」

モモイがそう言いながらミカの方を向くと、ミカではなくハルカが返事をした。

その直後、公園の各所にある避難警報のサイレンが鳴り始めた。ヴァルキューレが管理しているD・U・中に配置された警報システムが仕事をし始めたらしい。流石にスウオームドローンまで使われた、到底些細な喧嘩トランプルとは呼べない規模の戦闘だからか、ヴァルキューレが動き始めたようだった。

「あ、ユウカからまたメールだよ。また車両の方で動きがあつたみたい」

ミドリがそう言うと、全員立ち止まった。そしてドローンからの映像を映しているユズのスマホを覗き込んだ。

映像では、APCとトラックがゆっくりと動き出していた。そして、2台の車両は一気に速度を上げ、ミカたちが待機しているエリアと繋がる歩道へと乗り込んでいった。

「……へっ?」

間抜けな声をあげたモモイを尻目に、2台は歩道をはくしん驚進して階段の方へ迫っていた。歩道には石畳が敷かれていたが、APCのカタピラとトラックの大型タイヤによって見るも無残な姿に変えられていた。確かにこの公園の歩道はそここの幅があったが、当然のことながら車両の通行など想定されていないため、十分な横幅があったわけでもない。しかし、傍から見ただけが一向に意に介していない様子でどんどん進んでいる。

「……本当に自重しない人たちだねえ!」

そんな光景に、とうとうミドリがキレた。若干涙目で天に拳を突き上げている。隣にいる姉のモモイは慰めることもできず、未だに間抜け面を曝したままスマホの画面を凝視していた。こちらはこちらで、完全に思考が停止している。さらにその横にいるアリスは「その手があったか!」みたいな表情を浮かべて両手をポンと合わせている。

「成程、相手はショートカットをしていますね。良い裏ワザの使い方です!」

「よくないよお! 絶対ダメなこと! 論・外!」

感心したように何度も頷くアリスに向かって大声を上げた後、ミドリは空に向かって両腕をぐるぐるんと動かしている。八つ当たりされている空とお天道様からは、当然何の反応もない。

「……ま、まあ、先生は百鬼夜行で、戦車でジャンプしたと聞いてるし、歩道を走るくら

いは……」

「え、何それ」

何故かユズが敵のフォローをし、それを聞いてミカがユズの顔を真顔で見つめた。なお、ミカは知る由もないが、それをやらかしたのはミカが目の敵としているゲヘナ バンデモニウム・ソサエティ 万魔殿の棗イロハである。切羽詰まっていた状況だったとはいえ、便利屋68も真つ青のアウトローな行為である。

「……あの、法律違反はよくないかと……」

「で、ですよね、伊草さん……」

ハルカの至極真つ当なツツコミに、ユズは苦笑しながら首を振った。なお、法律違反にかけてはハルカは他者に説教できる立場ではない。何せハルカは、あちらこちらに爆弾を仕掛けては起爆させること（勿論無断である）をよくやっているし、そもそも彼女が所属する便利屋68は存在自体がゲヘナの校則違反である。

しかし幸いなことに、ハルカにツツコミを入れる者は誰もいなかった。只管^{ひたすら}ブーメランが乱舞するだけだから、というのも大きいかもしれない。

「……おーけー。取り敢えず、また前提が変わってきたし……歩きながら、作戦会議しよっか」

何故自分が音頭を取っているのだろう。

そんなことを考えながらも、ミカは全員の顔を見渡した。

シヤールレ部員と一緒⑫

ミカたちがスウォームドローンを全て撃破していた頃、早瀬ユウカは焦っていた。

事前に先生の許可を得たうえでD・U.におけるスクーナーの売人捕縛任務だったが、その最中に突如現れたゼルコヴァPMCという組織、そして彼らによるシヤールレ部員への問答無用の先制攻撃。それも50機程度のスウォームドローンを使用した大規模な襲撃である。たまたま近隣に一般市民はいなかったし、スウォームドローンは事前にターゲットをインプットされた誘導兵器であるとはいえ、公園のど真ん中での暴挙に、ユウカは少なからず動揺した。確かにミカたちに自重する連中かどうか怪しいというニュアンスの言葉を語ったし、ユウカ自身ある程度覚悟はしていたのだが、敵はユウカの想定以上にやらかしてきた。

最悪だ。

ユウカはミレニアムサイエンススクールのセミナー執務室で頭を抱え、髪を掻き集めた。

「な、何てこと……みすみす部員を危険に曝してしまうなんて……」

歯を食いしばり、ユウカはドローン操作用のノートPCの前で声を荒げた。

現時点で一般市民に被害が出ていないのは僥倖だし、既にヴァルキューレによる避難警報も出た。しかし、ミカたち6人が先生の指揮も援軍もなく、こんなことを平然と仕出かす連中と相對しているのは問題だ。しかもユウカの要請で作戦に参加しているハルカとミドリ、ユズと違い、ミカとアリスとモモイはプライベートで公園に来ていたのになし崩し的に巻き込まれた形だ。

売人捕縛作戦は4人中3人を捕らえることに成功しているが、そんなことは何の慰めにもならない。先生が折角ユウカに指揮を任せてくれたというのにこの様だ。ゼルクヴァPMCは、ユウカ指揮の作戦中に言わば外部から殴り込んできたようにも見えるのだが、それを言い訳にすることはできない。そもそも「敵」の全容や正体が不明な現段階では、突発的に新たな敵戦力が現れてシャーレ部員を攻撃してくるということは想定しておくべきであった。

いや、実際に想定していた。だからこそ、ゼルクヴァPMCを警戒したのだ。しかし、まさか話し合いも何もせずはこちらがシャーレと認識した途端にこんなことをしてくるとは。

甘かった。これに尽きる。嘆きつつも反省点が次々と浮かび上がり、この先すべき行動についても冷静に思考している自分の脳内に嫌気すら覚えてくる。

独り言を呟き、ユウカは苛立ちをかき消すかのように乱暴な仕草でコーヒーカップを

叫った。一気飲みするには少々温度が高い液体が己の喉奥に注がれていくのを感じたが、それを気にする余裕はない。

「……一先ず、先生に状況は伝えなければ……ああ、何て様……！」

己を叱咤しつつも、すぐさまユウカは先生に交戦開始を伝えた。幸いにも、先生との通話中に椅子から転げ落ちることはなかった。アリスの砲撃を見て変な声が喉の奥から出て、頬を赤く染める羽目になったが。

現在、先生はD・U・北端エリアで戦闘をしているシャーレ部員3人の指揮をしている。先生が持つ指揮管制用ドローンもそちらに駆り出されている。指揮管制ドローンは合計3機がシャーレオフィスにあるが、間が悪いことにそのうちの1機はミレニアムでエンジンア部による定期メンテナンスを行っている最中である。このためもう1機を慌てて公園上空まで飛ばしたが、先生といえども二方面での同時戦闘指揮は簡単に出来ることではない。不可能ではないだけで十分先生の指揮能力が高いことを実証しているのだが、それでも1機で行う時のようにスムーズにはいかないだろう。

しかし、それでもドローンの得た情報をレンズを通してミカたちに送信することはできる。指揮管制用ドローンが公園上空に到着するまではどうしてもある程度の時間がかかるし、ドローンが公園上空に辿り着いても、先生が状況を把握してからでなければ指示を出せないの、先制攻撃を許した後でドローンを飛ばしたところで遅すぎるのだ

が、何もしないよりはマシだと先生は判断したのだろう。

自分の判断と指揮の結果、先生が後手後手の対応を取らざるを得ない状況になっていく。そう考え、ユウカは切齒扼腕した。情けなさど先生やミカたちへの申し訳なさで、心の中で炎が燃え盛るのをユウカは感じた。

現在、ユウカがコントロールしている重武装ドローンの装備は使えない。このドローンには誘導爆弾スマートボムや対レーザー誘導弾、対地誘導弾などが搭載されているのだが、いくら避難警報が出ているとはいえ街中の公園で気軽に使用できるものではない。それに現時点で、既にミカたちとゼルコヴァP M C双方の距離はさほど離れていない。ドローンの兵装は何れも広範囲の標的を撃滅することが出来るミレニアム製の強力な代物ばかりだ。この状況で使用すれば、ミカたちにとって超至近着弾となる。いくら精密爆撃が可能な兵器ばかりとはいえ、衝撃波は着弾地点から無差別に広がる。ミカたちが巻き込まれるリスクに目を瞑ってまで使用するほど、状況は逼迫していない。つまり、現状では何の役にも立たない。

「み、見ていることしかできない……」

ここまで来れば、ユウカに出来ることはドローンの映像を通して得られた情報を、ミカたちに伝えることくらいだ。

シャーレオフェイスには部員たちが待機中だが、それらを指揮するのは先生の役目だ。

それに戦闘が始まっている以上、今更駆けつけることも出来ないだろう。障害物も何もない公園で、援軍到着まで持久戦をさせるわけにもいかない。

あの6人でこの自重を放り捨てた連中を対処してもらわねばならないのだ。

ユウカは低い声で唸り、モニターを睨みつけた。



「ユウカ先輩から連絡です。先生がドローンを飛ばしたそうですので、レンズを付けてくださいと。但しドローンがここの上空に到着するまではもう5分ほどかかるそうです」

スマホを睨みつけたユズの声を聞き、全員が異口同音に返事をした。そして、一斉に「レンズ」を目に付けた。新たな装備を装着したアリスが謎のポーズをとりながらキメ顔で元気に叫んでいるが、全員スルーしている。多分、いつものことなのだろう。

現在、ミカたちはそろそろと前進しながら、敵の攻略方法について意見を交わしていた。

ゼルコヴァPMCはAPCとトラックの到着を待つて攻勢に出るつもりなのか、それともミカたちが無傷なのを知って待ち構えているのか、まだ階段の下側で待機していた。

「……このままでは向こうに重機を搭載した装甲車とトラックが合流します。運転手が

降りてくれば、敵歩兵の数も増えると思われれます……」

数秒スマホの画面を見つめていたユズは、か細い声で呟いた。既に警報は鳴り止み、数分ごとに避難指示の自動音声スピーカーから聞こえるのみとなっている。このため、ユズの呟きは他の5人の耳に届いた。

心配するほどのことでもないんだけどな。

そう考えるも、ミカはそれを口には出さない。突然奇襲を受けて始まった戦闘の最中だが、ミカの思考は至って冷静である。驕りでも何でもなく、ミカはあれくらいの敵ならば自分1人で殲滅できると考えている。しかし、ミカの実力を知っている者はこの場にはミカしかいない。自信満々に「私がいれば大丈夫☆」といつても、何にもならない。

だからこそ、建設的な話しかする気はない。

「それで、どうしよつか。階段の上の方を陣取って、先生の指示を待つ？ それとも、その前に仕掛けちゃう？」

「そうですね……」

ミカの声を聞き、ハルカが呟いた。虚空に視線を向け、顎先に指を当てている。自信無さげな声色ではあるが、ハルカは実戦経験が豊富な戦闘のプロである。古参のシャーレ部員であり、戦闘も汚^{ダテ}れ仕事も請^{ダテ}け負う便利屋68の平社員でもある。ゲーム開発部の面々より遙かに戦闘に参加する機会が多い。

そしてハルカ自身、高い戦闘センスと実力を持つ。自分を肉盾代わりにすることに躊躇がなさすぎたり、隙あれば特攻したがつたりと悪癖もあるが、戦闘能力はシャーレでも上位に入る。

「……先生の指示よりも前に、ちよつと、交戦^{ウツ}も悪くないのではないのでしょうか？ 私たちは、敵の全貌を把握しておりません。もしかしたら、スウォームドローン以外にも秘匿された兵器を所持しているのかもしれませんが。」

どうせ敵の装備の詳細を確認できなければ大雑把な攻撃計画しか練ることはできませんし、威力偵察を試みるのもアリかと。このまま敵に時間だけ与えるのも良くないと思いますし、プレッシャーを与えるのも大事だと思います。

先生の命令は絶対ですが、先生の命令が届くようになるまでにはまだ時間がかかるでしょう。何よりあんな連中に先生のお手を煩わせるのは業腹なりません。一刻も早く排除しなければ……。1割ほど意識がある状態で確保できれば十分ではないかと思えます。あとは解体^{バラ}してしましましょう。……ゼルコヴァPMCはブラックマーケットに本拠地があるそうですし、バラしてそこに送り返してしましましょう」

「ひょこ……」

卑屈そうに笑いつつも、吐き捨てるように放たれた苛烈極まりない言葉に、ハルカの背中を見つめていたモモイが震え上がった。なお、隣にいるミドリは歯を食いしばりな

がらコクコクと激しく首肯している。憤懣ふんまんやるかたない、と言いたげな表情を浮かべるミドリに、モモイは気付いていないようだった。

「威力偵察」とは、敵の殲滅を目的としない小規模な攻撃を仕掛けることで、敵情（敵の装備などの情報）の把握に努める偵察行動のことである。

「成程、この状況ではドローンによる偵察も斥候もあまり意味はないだろうし……仕掛けてみるのも、確かにアリだよね」

全くもって冷静そのものの声でミドリがそう言った。表情は激怒を腹の底に抑え込んでいるような有様だったが。

「う、うん、賛成！ 落花生らつかせいに打ち倒さなきゃいけない理由もないし、まずは小手調べに仕掛けるのも良いよね。受けてばっかじゃフラストレーションが溜まるよ」

モモイが元氣良く片手を上げながら言うと、隣のミドリが舌打ちを我慢しているような表情を浮かべてモモイを睨んだ。

「……お姉ちゃん、それを言うなら一気呵成いっきかせいでしょ。変に難しい言葉を使おうとしないで。爆弾持たせて階段から蹴り落とすよ？」

「すみませんごめんなさい許してください」

氷のように冷たい声にビクリと肩を震わせ、モモイは涙目で返事をした。任務モードのミドリは姉の粗相に厳しいのである。姉妹に向けるものとは思えない温度のない視

線の前に、モモイはあつさり姉の威厳を放り捨てた。第三者視点からすれば、そんなものは最初から無かつたとも言えるが。

「……ふーん、えっと、ユズちゃんとアリスちゃんは？」

姉妹漫才は自然に見なかつたことにしたミカがくるりと誰もが見惚れるくらいに華麗にターンし、笑顔でユズとアリスに視線を向けた。

「そ、そうですね。威力偵察か……どうせなら、敵装備の確認だけでなく一部破壊を狙つてみては……どうでしょうか……。12・7ミリ重機を乱射されるかもしれませんが……まずは重機を破壊したいです」

ユズが緊張のあまり若干声を上ずらせつつも、しつかりと考えながら返答した。まだミカと普通に会話するのは困難なようだが、それでもコミュニケーションそのものを放棄するつもりもないようだ。私情で作戦行動に支障をきたすのは避けたい様子だった。

一方、アリスは力強く首肯すると、ミカに向かってやる気に満ち溢れた顔を向けた。「はい！ ボス攻略には段階を踏み、徐々に削っていくのもよくある事です。何より、敵にダメージを与えない限りは勝利は得られません！」

「成程ね。……じゃあ、私が行つてみるよ。皆は援護をお願いしていい？……あ、でもハルカちゃんの愛銃はショットガンだし、遠距離での援護は難しいかな……」

ミカが全員の顔を見渡しつつ、一度頷いて宣言した。そして、その後眉を下げてハルカを見つめた。ミカに視線を向けられたハルカは苦笑し、卑屈そうに笑いながら首を横に振った。

「問題ありませんよ。これがありますので……」

ハルカはそう言うのと、徐おもむろに上着のボタンを外してそこに腕を突っ込んだ。そして、何かを引つ張り出す。それを見て、ハルカ本人とアリス以外の面々が顔を引き攣らせた。

それはベルトに繋がれた、大量の手榴弾だった。手榴弾にはいくつか種類があり、代表的なものが「破片手榴弾フラググレネード」と「衝撃手榴弾コンカッショングレネード」である。破片手榴弾は周囲に広く破片を撒き散らして広範囲を攻撃するタイプで、衝撃手榴弾が爆風（つまり爆発時の衝撃波）で狭い範囲を攻撃するタイプである。

ハルカが大量に持ち込んでいるのは後者の衝撃手榴弾だった。破片手榴弾と違って効果範囲は狭いが、言い換えれば接近戦でも問題なく使用できる。また、破片手榴弾の破片は装甲や防盾などで簡単に防御できるのに比べ、衝撃波で標的を打ち倒す衝撃手榴弾は装甲服を着たロボットや障害物越しの相手にも相応のダメージを与えられる。

効果範囲が広すぎる故に市街戦では使いどころが難しい破片手榴弾に比べ、街中での接近戦でも味方を巻き込む可能性が低い衝撃手榴弾は、基本的に市街地で活動することが多いキヴォトスの生徒にとっては使い勝手の良い基本装備みたいなものとするら言え

る。そのためハルカが持ち歩いているのは別におかしくはないのだが、問題は量だった。ぱつと見ただけで、10個以上は携行しているように見える。

「これを投げて、援護します。ご心配なく、こう見えても、手榴弾や爆薬を使うのは手慣れていますので」

そう言いながら口元を三日月形に歪め、喉の奥から笑うハルカはかなりの迫力があつた。

「……ハルカ、ひよつとして、他にもいろいろと持ち歩いてる？」

モモイが恐る恐るといった風に尋ねると、ハルカはあつさりと頷いた。

「ええ、C4を幾つかと、破壊筒パンガローも持っています」

「何と戦う気なの!？」

平然と答えるハルカに、モモイが思わず大声でツツコミを入れた。

障害物や敵車両など様々なものの爆破に使用して色々と潰しが効くプラスチック爆弾C4は兎も角(それでも売人捕縛任務に使い道があるのかは疑問だが)、地雷処理や鉄条網突破などに使用されるバンガロール破壊筒は、街中の何処で何に對して使うつもりなのだろうか。そして、この細身の身体に一体幾つの危険物を仕込んで持ち歩いているのだろうか。もはや歩く火薬庫状態である。

モモイのツツコミを聞きつつ、ミカはもうこの子を突っ込ませて全部起爆させればよ

いんじゃないかな、と洒落にならない外道なことを考えてしまっていた。勿論、口に出したりはしない。

なお、ハルカは先生からの指示があれば嬉々として特攻してその身もろとも敵を倒そうとするし、先生からの指示がなくても特攻しようとする超ド級の問題児であるということ、ミカは知らない。

「……あー、ハルカちゃん？ その手榴弾、幾つかアリスちゃんに渡してもらっていいかな？ 流石に『光の剣』は接近戦をしている味方への援護には向いていないよ」

代わりにミカの口から飛び出たのは、至って現実的なお願いであった。ミカの言う通り、アリスのレールガンは貫通する上に砲撃そのものが広範囲で、敵陣を前に動き回るミカへの援護には向かないだろう。

ハルカは頷くと、手榴弾を幾つかアリスに渡した。再びアリスが謎のポーズをとった後、手榴弾を上着のポケットに突っ込んでいくが、これまた全員スルーしている。

「では、わたしのグレネードランチャーで先制攻撃を行います。そしたら聖園ミカさんが飛び出して行って……重機を狙いつつ、敵の出方を伺う。わたしたちは援護射撃。

……これで、良い……ですか？ 聖園ミカさん」

額の汗を拭いつつそう言ったユズに、ミカはにこやかに微笑んで頷いた。

方針が決まり、反撃が始まる。

◆ ドローンの情報によると、既にAPCとトラックはゼルコヴァPMCの兵士たちと合流していた。APCの重機関銃は階段上、つまりミカたちの方角を向いており、射手も取り付いている。

ミカたち6人は腰を落とし、そろそろと進んだ。

「……」

先頭にいたミカが腕を水平に伸ばして元に戻す動作を繰り返した。「散開して」のハンドサインだ。それを視認した5人が一斉に散り、それぞれ階段上から身を乗り出せる場所に陣取った。

まだレンズには何の情報も出力されてこない。先生の指揮管制用ドローンが公園上空に到着するまで、もう少しかかりそうだった。

さて、そろそろいつてみようか。

につこりと微笑んで周囲を見渡したミカは、スツと片手を上げた。彼女の動きに、5人の視線が集中する。

ミカは少し離れたところに待機したユズに向かい、親指と人差し指を突き出す指鉄砲の形を作った手を掲げるように見せ、指鉄砲を撃つように手首を上げた。「攻撃、開始」のハンドサインだ。

首肯したユズは愛銃を宙に向け、引き金を引いた。グレネード弾が発射される。空に飛びだしたグレネード弾を視認し、ミカは勢いよく駆け出した。

シヤールレ部員と一緒⑬

駆け出し、猛スピードで階段を下りるミカを見つけたゼルコヴァP M Cの兵士たちは、動揺したように一瞬身体の動きを止めた。彼らは階段からシヤールレが攻撃してくる可能性を当然のように考慮していたようで、A P Cとトラックを遮蔽物にするかのよう配置し、その周囲に11体のロボットが展開していた。車両を運転していた兵士が合流したようで、A P Cの重機に取り付いている射手を合わせれば、ミカが視認できているだけで12体の兵士がいる。

彼らの思考と行動がフリーズしたのは、ミカの突撃と同時にユズのグレネードランチャーからグレネード弾が射出され、どちらを先に対処すべきか逡巡したからか、或いはミカの単騎突撃が意外過ぎたからか。どちらにせよ、みるみる近付いてくるミカを目の前にして1テンポのロスは、あまりにも致命的であった。

「え——」

「や、こんにちは☆」

取り敢えず、目についたから。そんな雑な理由で第一の犠牲者となったロボット兵士は迎撃はおろか、恐怖を感じることも出来ず、獰猛な狼に食い殺されるように、至近距

離から顔面にサブマシンガンの掃射を浴びた。たちまち吹き飛び、同時にグレネード弾が兵士たちの群れの真ん中に命中する。

「は、始めやがった!」

「——奴らだ、シャーレだ、シャーレが……」

「撃て、撃てえ!」

A P Cのキューポラの部分に装備されていた12.7ミリ重機関銃に取りついていてた射手が叫ぶと同時に、重機から轟音とともに大口径の弾丸が連射された。12.7ミリ、すなわち50口径(直径0.50インチ)の猛撃が、ミカを狙う。このタイプの重機には引き金がない。代わりに「押し金」とでもいうべきパーツが2つの木製グリップの間にある、グリップを握り「ハ」の字型の押し金に親指を押し当てると銃弾が発射される。全長1.5メートル以上ある巨大な銃だが、グリップを両手で握って動かすので、取り回しにそれほど難があるわけではない。そして数珠繋ぎにされた銃弾のベルトが装備されており、毎分500発の発射速度を誇る。

大口径の12.7ミリ弾を全身に多数撃ち込まれれば、キヴオトスの生徒とてあっさりと気絶する。きわめて脅威度の高い相手だ。ミカも身体が頑丈なだけで痛覚がないわけではないので、あまり重機の弾丸を浴びたくはない。なのでミカは即座にバク転し、重機の射撃から逃れた。

「や、始めたのはそっちでしょ？……つとと……」

目の前を曳光弾が飛び去って行くのが見えた。独特の風切り音が耳を叩く。当たったら痛そうだなあ、とそんなどうでもよいことが頭に浮かぶ。

後ろから銃撃音、グレネード弾の発射音。

「ミカ、今、助けます！」

「えっ」

アリスの声。思わず振り返ったミカは口を開けた。

アリスがジャンプしている。思いつきり敵にその身を晒していた。そして空中で体を捻らせると同時に、力強く手榴弾の安全ピンを抜いた。

基本重量140キロ以上のレールガンを背負い、ホルスターに自動拳銃も装備し、ポケットに幾つかの手榴弾を突っ込んでいる状態でこのジャンプ力である。

本当にこの子パワーがあるなあ、とミカは感心した。感心するだけである。決して褒められるような行動ではない。隣でライフルを撃つモモイが、この世の終わりのような表情で空中でキリリと勇ましい表情を浮かべている仲間を見上げていた。そんな状況でよそ見しつつも、しっかりと射撃は続けているあたり、モモイも立派なシャーレ部員である。

「光よ!!」

「光関係ないよね!？」

条件反射のようにツツコミを入れたミカなど気にせず、敵味方全員に聞こえるような大声で叫んだアリスは、手榴弾を勢い良く投擲した。通常、手榴弾はオーバースローで投げるのが基本であるが、アリスが力任せにぶん投げた手榴弾は、まるで野球のシンカーのように独特な軌道で、しかも高速で敵陣に突っ込んでいった。

普通にグレネードランチャーで投射するよりも飛距離が長い。ミカは心底、ユズに同情した。確認していないが、きつとモモイとは別の意味で世界の終わりみたいな表情を浮かべているに違いない。愛銃アイデンティティの存在意義の崩壊は、戦闘を専門としない部活の生徒であつても心にクると思う。自分は感じたことはないから、想像するほかないが。

ミカは心の中でユズに合掌する程度で済んだが、敵にとっては到底その程度では済まない。何せ相手のうちの1人が自ら全身を晒すようにジャンプしたと思つたら、手榴弾をロケット弾のような速度でぶん投げてきたのだから。

敵陣のど真ん中で起爆した手榴弾に、何人かの悲鳴が響いた。

まあ、援護としては悪くないよね。

アリスに説教をするのは後にして、ここはアリスが作った隙を有効活用させてもらうべきだ。ミカはそのまま敵陣へさらに突っ込んでいき、APCの車体上部に飛び乗った。

手榴弾が対戦車擲弾のような速度で突っ込んで来た光景の脳内処理が未だに追いついていないのか、重機のグリップを握ったまま静止していた重機の射手は、目の前まで接近していたミカに向かって、のろのろと顔を上げた。

可哀そうな標的に、ミカは慈愛の女神のような美しい微笑みを見せた。

「……………え？」

「やつほ☆、どうしたの？ 可愛いミレニウム生徒にでも見惚れちゃったかな？」

その言葉とともに、ミカの振り上げられた足が重機に落ちた。派手な音を立て、重機の銃身が折れた。

「……………あ、あ——」

「あ」

絶叫しようとした射手だったが、重機を踏み潰した後、間髪入れずに薙ぎ払われたミカの足が、射手の側頭部に突き刺さった。射手の下半身はAPCの車体から飛び出し、公園の森の中へ高速で突っ込んでいった。先程のアリスが投げた手榴弾よりも遥かに高速だった。

「あー、ごめんね、蹴りやすそうところに頭があったから……。ううん、貧乏性がまだ抜けてないなあ……………」

もはや姿も見えなくなった重機の射手に向かって小さく会釈し、ミカは愛銃をくるく

る回しながら、もう片方の手で気まずそうに頬を搔いた。

エデン条約の事件の際に、ミカはアリウスのバシリカで聖女バルバラと聖徒会の軍勢相手に、休息も補給も無しに何時間も戦い続けていた。あの時は只管に弾薬を節約する戦闘方法に徹していた。つまり可能な限り愛銃は使わず、聖徒会はなるべく格闘術で対処していたのだ。最後辺りは本当に弾薬が尽きかけていたので、バルバラ相手にもほぼ素手で戦っていた。

お陰で拳や蹴りで倒せる場合は、無意識にそちらで倒してしまう悪い癖がついてしまった。あの事件以降、シャーレ以外では戦闘を自重しているのもあって、すっかり癖が抜けなくなっている。

現状、弾薬はたっぷり持ち歩いているし、そこまで必死に格闘術に拘る意味もないのだ。昔ほど贅沢にお金を使えなくなったミカであるが、シャーレでの活動は基本的に先生から弾薬が支給されるし、サブマシンガンの銃弾を多少ケチったところで然程節約にはならない。

乙女としては、無意識なのに格闘術を使ってしまうこと自体が問題だ。ロールケーキ生活のせいで体が鈍っていたら、別の悩みが生えてきた。人生とは悩みごとの連続である。

「まいったなあ、先生に野蛮な子だと思われたくないんだけど……」

思わず腕を組んでため息をついてしまう。戦闘中に考えることではないことは分かっているが、これは喫緊の悩みである。自分に向かつて撃ち込まれたライフル弾を背を逸らして躲しつづ、ミカは低く唸った。

手遅れかもしれない可能性が微粒子レベルで存在している気がしないわけでもないが、開き直つて先生の前で素手で戦車の主砲を引きちぎったりするにはまだ早い、気がする。こういうのは、自製の気持ちこそが大事である。多分。

一先ず気持ちを切り替えて、ミカはAPCの中に飛び込んだ。

「……………な、なんだ——」

中にいた兵士と目が合うが、即座に振り抜かれたミカの拳の餌食となった。金属が拉ひしゃげる音が響き、運転席に叩きつけられた兵士はそのまま動けなくなる。

「ん〜これは……………車内で撃つと跳弾が怖いから、仕方ないよね☆」

跳弾なんて数発当たったところで少し痛い程度なのだが、そんなことには目を瞑り、ミカは車内をぐるりと見渡した。他に敵はいない。先程倒した車内に残っていた敵は、重機の弾薬補給と戦況の報告役を兼ねていたらしい。彼が立っていた場所の近くには、大型のタブレットが転がっていた。そのほか、車内には弾薬を除けば何もなかった。

この様子では、敵側はスウォームドローン以外には隠し玉がないようだ。他にも軍用トラックがあるが、積載スペースを考えるとスウォームドロンの射出装置と管制装置

以外に大した武器を載せられるとも思えなかった。携行式の小型対戦車ミサイルや対戦車擲弾、携行無反動砲でも持っていていれば少々厄介だったが、見る限りはそれもないようである。

杞憂だったようで、何よりだった。

さて、それが分かれば長居は無用。APCも不要である。ミカはAPCの中から飛び出し、APCの前で着地した。

「……まあ、八つ当たりってことで☆」

そう自分に言い訳しつつ、ミカはAPCの車体に向け、拳を振りぬいた。その場にいる全員が身を震わせるほどの轟音とともに、APCが浮いた。車体がへこみ、数秒浮いたAPCは、10メートル以上後ろの地面に無様に落下した。

何気なく横を見ると、呆然としたように静止しているPMC兵士と目が合った。

「あ、ごめん」

ミカが呟いたと同時に、ミカのハイキックが兵士の顎に突き刺さった。

同時に、軍用トラックが爆発して横転した。ユズの発射したグレネード弾が直撃したらしい。

直後、階段の上から叫び声が響いた。

「と、突撃——！」

それはミドリの声だった。ミカが視線を向けると、ハルカ、アリス、モモイ、ミドリが階段を駆け下りてくるのが見えた。

どうやらあまりに順調に敵戦力を減らし続けていること、そして敵にスウオームドローン以外に切り札がないであろうことから、威力偵察ではなく殲滅へ切り替えたらしい。

愛銃のレールガンを背負ったままのアリスは、ミカが敵陣の中にいることを考えているらしく拳銃を構えていた。

真っ先に突っ込んで来たのはハルカだった。何の迷いもなく敵に真正面から突撃すると、怯んだ相手に至近距離からショットガンを連射した。それを見た敵がハルカに向かいカービン銃を連射するが、ハルカは被弾を物ともせず倒れた相手に再度連射。

そして恐ろしい形相を浮かべ、次の獲物へ飛び掛かった。

「し、死んでください死んでください、どうか、金属片一つ残さず先生の前から消えてください！」

喉から血が噴き出ているのではないかと疑いたくなるほどの、鬼気迫る絶叫だった。哀れにもハルカの標的となった敵兵は絶叫し、倒された。明らかに敵は被弾する前から悲鳴をあげていた。身体よりも先に精神が戦闘不能になつたらしい。

「……………け、けほつ……………さあ、まだ生きている方は何処ですか……………」

「ドローンのお返しだよ、それぞれー!」

「お姉ちゃん、その1体を! 私はこの1体を仕留めるから!」

瞬く間に2体を仕留めたハルカは被弾した腹部をさすり、猛禽類のように鋭い瞳を周囲に向けた。それを見てほかの兵士はたじろごうとしたが、それすらできずに次々と被弾した。

モモイとミドリのリイフル弾を浴びて倒れる者、アリスの拳銃弾を浴びてよろめいた後、ユズのグレネード弾で吹き飛ぶ者。瞬く間に立っている敵の数は減っていく。

ミカがハルカたちの援護をしようと動き出すまでに、殆どの敵は無力化されていた。それを確認し、ミカは安堵の息を吐いた。

なかなか良い調子だ。他の部員たちの動きも、十分満足できるものだった。自ら戦闘は得意ではないと称していたゲーム開発部の面々も、蓋を開けてみれば決して足を引つ張っているわけではない。正義実現委員会の精鋭部隊よりも強いのではないか。

彼女たちはミカの足を引つ張るどころか、的確に援護していた。だからこそミカは単騎で敵陣に突っ込んだにもかかわらず、ほぼ被弾していない。全力で自分の存在をアピールして手榴弾をぶん投げたアリスはどうかと思うが、あれはアリスが破天荒の道を行くというタイプだったのではなく、単純にセオリーというものを知らない無知さに原因があるというのは明らかだった。そんなものはこの先、いくらでも是正していくこと

が出来る。

ハルカも想像以上に仕事ができるタイプだった。ゲヘナ生徒であればトリニティ生徒に思うところがあってもおかしくないだろうし、自分は先生に迷惑をかけたというのに、ハルカは作戦の際は普通にミカと会話していたし、ミカの考えに合わせてくれた。

先生の大切な生徒が傷付くのを座視するわけにはいかないと気を揉んでいたが、本当に杞憂だったようである。

「……ん？」

そういえば、なんか普通に自分がリーダーシップをとっていた気がするけど、あれ、良かったのだろうか。文句なしで自分が一番新入りだというのに。

音頭を取った挙句に、自然にハルカとゲーム開発部の子どもたちの戦力を評価している。噛みついてくるタイプの子がいないとはいえ、これは良くないかもしれない。

思わずタラリと汗が流れると同時に、最後の敵が倒れた。

相手を仕留めたハルカが顔を上げ、ミカと視線を交わした。殺意にぎらついていた目を細め、ハルカは卑屈そうに笑った。

「……終わりましたね、聖園ミカさん」

そんなハルカに笑顔を返そうとしたミカの表情が、すぐに引き締まった。ミカの視界

の隅に公園の地図が表示され、携帯マガジン数や愛銃の残弾数も映し出された。先生の持つ指揮管制用ドローンが到着したのだ。

ギリギリ先生のドローン到着が間に合わなかった……そう考えられないのは、何故だろう。嫌な予感が頭の中に芽生えるのを感じ、ミカは素早く愛銃のマガジンを交換した。

「あ、先生だ！ えへん、先生ー！ 来てくれたけどさ、もう全部おわ——」

モモイが太陽のような笑みを浮かべ、そして直ぐに真顔になった。同時に、全員が緊張した表情を浮かべた。

彼女たちの視界に、字幕が表示される。

「……スクリーナー使用者の暴走を警戒……？」

ミドリが字幕を読み上げた瞬間、少し離れた場所で、何かが爆発したような音が響いた。同時に、ミカは小さく舌打ちをした。

どうやら、敵には隠し玉が尽きていても、使える駒は残っていたようだった。

「……そういえば、売人ってまだ一人捕縛できていなかったよね……」

独り言を呟き、ミカは爆発音が聞こえてきた方向を睨みつけた。

シヤールレ部員と一緒⑭

直後、ミカの視界に表示されている公園のマップが変化した。サイズがより大きくなり、1つの青い光点と5つの緑の光点の他に、3つの水色の光点が出現した。1つの青い交点がミカ自身、5つの緑の光点がシヤールレ部員である。そして水色は民間人を表しているはずだった。

しかし、ミカは顔を顰め、視界に浮かぶ水色の光点を睨みつけた。その光点は公園の中から出ようともしておらず、殆ど動いていないように見えた。

「すでに避難警報も出ているのに……これって……」

モモイが独り言を言った直後、別の字幕が表示された。

「……この3人を警戒せよ……ね。今回、先生は字幕で指示をくれるみたいだね」

ミカが読み上げながら周囲に視線を向けると、ミドリがミカに向かって頷いた。

「そうみたいですね。確か先生は元々別方面で戦闘の指揮をしていたという話ですから、そのためだと思います。前もこういうことがあったんですが……一つのエリアで複数の部隊を指揮するのと違って、それぞれ別エリアで同時進行の作戦を指揮する場合は、言葉ではなく字幕表示で簡潔に指示をした方がやりやすい、と先生が話していたの

を聞いたことがあります」

さもありません、である。先生の持つオーバーパーツ「シツテムの箱」はキヴオトス一の性能を持つといっても過言ではないが、端末自体は一つなのだ。そして、それを使いこなせる先生の身体も一つだけである。

「成程ね。……じゃあ、この水色の光点がある場所に行ってみよっか☆」

「ちゆ、中央広場ですね」

ミドリに笑みを返したミカに、今度はユズが答えた。ユズの言う通り、水色の光点は全て現在地からゼルコヴァP M Cの車両が通ってきた歩道を進んだ先にある中央広場に集まっていた。というより、先生が中央広場にいる避難する様子がない市民を怪しんでピックアップした、と言った方が正しいのだろう。

「パンパカパーン、アリスは新たなクエストを受注しました！ これは連続討伐クエストですね！」

「と、討伐はちよつと言いが……。ええと、待ち受けるんじゃないかってこつちからいくの？」

「お姉ちゃん、そうするほかないんだよ。……だよね、ハルカちゃん」

「ええ、これはゼルコヴァP M Cが相手の時よりも厄介ですよ」

まだまだ気合十分といった具合にポーズをとるアリスを尻目に、不安げに眉を下げる

モモイを慰めるようにミドリが言い、そしてミドリに話しかけられたハルカがため息をつきながら首肯した。

気怠そうに頬を掻き、ハルカはスタスタと早歩きで歩き始めた。態度に反し行動は迅速である。

「相手の目的が見えません。ゼルコヴァPMCはシャール私たちへの攻撃が目的だと即座に判断できましたが……スクーナーを使用して命令を受けた者たちが、どんな行動をとるか……放置できませんし、ここで待っていても仕方がりません。

さつさと片を付けないと、ヴァルキューレが合流してきたら面倒なことになります。いちいちヴァルキューレの人たちと連携をとるのは面倒ですし……」

ヴァルキューレを邪魔者のように扱うハルカだが、誰もそれに反論はしなかった。相手が大人数の軍勢でもなければ、ヴァルキューレが加勢にやってきて頭数が増えても、大してできることはない。市民たちの避難に尽力してもらおう方が遥かにマシだ。

「……それもそうですね。先生、駆け付けてくるだろうヴァルキューレには、周囲の封鎖と市民の誘導に専念してもらえよう、お願いできますか……?」

ユズがボソリというと、すぐに「字幕」で了承と表示された。

「そっか、先生からの指示が音声じゃなくて字幕で来ていても、レンズを装備していれば私たちの声は先生に聞こえるもんね」

「え、ええ。それに、字幕の方が良い場面もありますから」

「そうなの?」

ミカが感心したように微笑むと、その笑顔を見てユズが苦笑しながら答えた。まだ汗を流しながらであるが、それなりにミカとも普通に会話できているようになってきた気がする。土壇場で一緒に戦闘をした、というのが荒療治になっているのかもしれない。

「字幕の方が良いって?」

ミカが尋ねると、今度はミドリが答えた。

「あ、ミカさんってまだ経験したことがないのでですね? レンズを通して聞こえてくる先生の声って、頭の中に響く感じだから騒音とかも気にならずにクリアに聞こえるんだけど……逆に言えば、他の声が聞き取りにくくなるんですよ。銃声とか大きな音は聞こえるんだけど、他の音や声が聞き取りにくくなるって結構不便なので。……先生の声は、すごく心地良いんですけど」

両手を頬に当てて頬をうつつすらと赤くし、とろけたように目を細めるミドリ。それを見て、そう言えばシロコも癖になるとか言っていたな、とミカは思い出して気まずそうに目を逸らした。

完全にドラッグが何かをキメているようにしか見えない。見かけがシャーレ部員の中でも幼く見えるミドリがやることで、絵面の酷さが5割増しになっている。

そして、そんなミドリに誰もツツコミを入れていないのがさらに酷い。隣のモモイは何を思い出しているのか、ミドリよりもずっと頬を赤く染めて俯いているし、ユズは先程よりも激しく汗を流しながら何かをぶつぶつと呟いている。ずんずんと先頭を進むハルカも、頬を染めてもごもごと口を動かしていた。いつも通りニコニコと微笑んでいるだけのアリスと「わーお」と言いたげに目を丸くするミカだけが、逆に異質な様である。

「へえ、そ、そうなんだね……。ええと……。まあ、取り敢えず、仕事を終えないとね☆」
 今日は先生の声を聞けなくて残念だなあ。そんな桃色の思考を追い出すように、ミカはいつもより高速で愛銃をくるくる回した。風切り音を出すサブマシンガン「Quis ut Deus」は、今日もミカに振り回されていた。

◆ 雑念を忘れ去りたいようなペースの速足で中央広場にやってきたミカたちの視界に飛び込んできたのは、極めて異質な光景だった。既に一度見たミカだけが平然としていたが、他の5人は目を見張ったり息を飲んだりしている。

中央広場には3体のロボットが立っていた。中央広場の真ん中あたりを陣取るように立っており、互いにある程度の距離を保って立っている。

そう、立っているだけである。時折顔を俯かせては上げたり、僅かに身体を揺らした

り、思い出したかのように何歩か歩いたりしているが、基本的には立っただけだった。歩道を歩いてやってきたミカたちのことを一瞥することすらなく、まるでミカたちに気付いていないかのようだった。

そしてロボットたちは3体とも、両手に武器を持っていた。何れも片手にリボルバー拳銃、もう片手に手榴弾を持っているようだった。よく見るとロボットは腰のベルトに幾つか手榴弾を吊り下げており、弾薬用のポーチも腰に装備していた。

中央広場の隅の地面は黒焦げになっていた。先程の爆発音は、ロボットがそこに手榴弾を投げた音だろう。まるで、ロボットの動きのテストをしたかのようなのだ。

「これは……」

駅ビルマニオライで見た異様なロボットたちとよく似た光景だ。ミカは目を細め、ロボットが持つリボルバーを睨みつけた。一見、マニオライにいたロボットたちが装備していた、雑に塗装されたりリボルバーと同じに見えた。

あの時、シャーレオフィスで先生に写真を見せられたのが役に立った。ミカはため息をつき、他のメンバーの顔を見渡した。

「駅ビルの時のロボットと似た感じだね。多分、武器も一緒」

「消しますか?」

即座に低い声で呟いたハルカ。慌てたように、視界に「まずは接触して」の字幕が浮

かんだ。

「……では——」

ロボットを睨みつけたアリスが拳銃を構えた。何度も練習しているお陰で、かなりドロウが様になっている。

さすがのアリスも、この場で「光の剣：スーパードヴァ」を使おうとはしなかったようである。そもそも外見が「なんか大きい大砲みたいなもの」でしかない特異すぎる武器である「光の剣：スーパードヴァ」は、威嚇や牽制には全く向いていない。そもそも今回の相手は武器の知識があるとも思えない民間人、それもスクーナーの影響下にある可能性が高い相手である。故にアリスはすぐに、この場では拳銃の方が有効と判断しただけだった。それは間違っていないのだが、そもそも銃器で威嚇しながら近付こうとする行動自体が宜しくなかった。

「あ、アリスちゃん、ストッパー！」

横にいたミドリが慌ててアリスを止めた。

「え、何故ですか、ミドリ」

「アリスちゃん、こういう状況ではシャーレから銃口を向けちゃいけないんだよ。ほら、あのロボットの人たち、銃と手榴弾を持っているけど、こっちに突き付けてきたりはしていないでしょ。手榴弾も安全ピンを抜いていない。つまり、敵対行動は一切していな

いんだよね」

怪訝そうな表情を浮かべるアリスに、ミドリは早口で説明した。少し焦っているように見える。忌々し気にロボットを一瞥し、アリスに向けて強い口調で言った。

「アリスちゃんも、しっかりファイルを読んだでしょ。ほら、ROE（交戦規定）だよ」「あつ」

どうやら思い出したらしく、アリスはすぐに真剣な表情で拳銃を下ろした。そのまま素早くホルスターに拳銃をしまい、数歩後ろに下がる。それを見ながら、ミカは僅かに眉を顰めた。

生徒同士では気軽に銃撃戦が勃発するキヴオトスであるが、武器を携行しているとはいえ一般市民にいきなり発砲すれば、相応の罰が下される。それでも説教や罰則程度で済まされるのが超銃社会たるキヴオトスなのだ。

シャーレは超法規的機関であるが、それは全ての法を無視できるという意味ではないし、倫理に縛られないという意味でもない。シャーレ部員といえども、武器を持っていただけの市民においてそれと先制攻撃をするわけにはいかない。

とはいえ何事にも例外事項というものが存在しているので、正確に言えば、法規的な意味では市民への先制攻撃も出来ないわけではないのだが、やりすぎではシャーレという絶対的権限を持つ組織への反感を高めるだけだということ、先生が可能な限り抑え

るように部員に求めている。

あくまで先生による「命令」ではなく「意向」に過ぎないのだが、それはシャーレ部員にとっては鉄の掟に等しい。余程の理不尽でもない限り、シャーレ部員が先生の意向を無視することはないし、それに市民相手に無差別に暴れまわる組織というイメージを抱かれれば、シャーレの顔たる先生の面子に傷が付く。シャーレ部員の行いで先生の顔に泥が塗られるなど、あつてはならないことである。

「せめて向こうがこっちに銃口を向けてきたら、対処はできるんだけどねえ」

ミカたちが会話をしている間、ロボットたちはミカたちに拳銃を向けるどころか、視線すら向けることはなかった。すぐ目の前で話していたわけではないし広場中に響くほどの大声を出していたわけでもないのだが、然程距離が離れているわけでもないの、会話の内容は聞き取れなくとも、銃を装備した生徒の集団が話し合っていることくらいは分かるはずだ。にもかからわずミカたちの存在をまるまる無視し、動じることなく只管突っ立っているその光景はかなり不気味である。

異常な光景に、モモイの表情がどんどん青ざめていった。

「……プレイヤーが話しかけるまで立っているだけのNPCみたいだ……」

「……お姉ちゃん、せめてホラーに例えてよ……そんな比喻は色々アウトだよ。もうそうにしか見えないじゃん……」

「わ、わたしもそう見えてきた……。アリスちゃんに感性が近付いたのかな……」

「朱も交われれば赤くなるってやつ？ ゲーム開発部先輩の私や部長のユズが影響を受けちゃうと逆な気がするけど……」

「お姉ちゃんがそれ言う？ アリスちゃんの話し方は10割お姉ちゃんのせいじゃん」

「いやいやいや、何度も言うけどそれは責任転嫁ってやつでしょ！ 確かに私が始めたけど……途中からミドリもユズもノリノリで——」

「なるほど、つまりこの人たちがエネミーかNPCかわからない、ということですね！ うーん、アリスは鑑定魔法を持っていません、どうすればよいのでしょうか……」

「……はあぁーっ」

ゲーム開発部のやり取りを聞いていたハルカは大きく息を吐いて首を振った。乱暴に側頭部を掻き、小さく舌打ちをする。明らかに苛立っている様子であり、紫色の冷たい光を放つ瞳からは、徐々に色が失われていった。

「……確か、銃を構えるのも、あまり良くないでしたよね……。では、私が行きます。私、頑丈ですから……。これ以上、先生の敵の近くで何もせず立っていたくありません……」

そう言うと、ハルカはスリングを肩にかけて愛銃を背負った。そして、周囲が止める間もなくスタスタと歩き、ロボットのうち一番手前で立っている1体に近付いていっ

た。

「あ、伊草さん——」

「いや、多分これが正解かな。全員、銃を構えちや駄目だよ」

動揺するゲーム開発部一同をミカが止めた。そして、じつとハルカの背中を見つめる。ハルカは堂々とロボットに近付き、ロボットの目の前で立ち止まった。

目の前にハルカが立つてもなお、ロボットは突っ立ったままだった。俯き、銃口をハルカに向ける様子もない。

「……」

ロボットを睨みつけ、ハルカはポケットからシャーレのIDカードを取り出した。シャーレのロゴマークが描かれたカードを、ロボットの虚ろ目の前に突き付ける。

「……あの、こんにちは、連邦捜査部『シャーレ』です。少々、お話をお伺いしたいのですが——」

「……」

「あー！」

ハルカを見つめていたモモイが声を上げた。

「ロボットがハルカの声に即座に反応したのだ。正確に言えば、ハルカが「シャーレ」と発言したことで視界に飛び込んで来たシャーレのIDカードに反応したように見えた。」

先程までの行動が嘘のように、素早く腕を上げてリボルバーをハルカに向けた。

すぐにハルカも動いた。身体を逸らして射線から離れると、ロボットの顔面に肘を叩き込んだ。

「わーお、えっぐ☆」

面白そうに笑いながらミカがぱちぱちと拍手をする。それを見て、ミカの隣にいたユズが口元をヒクつかせた。先程パンチで装甲車を吹っ飛ばしたミカがそれを言うかと思ったが、言葉として口から出す度胸などない。

肘鉄をくらったロボットは吹き飛ばされ、持っていたリボルバーと手榴弾が宙を舞った。ハルカは素早く両手でリボルバーと手榴弾をキャッチし、手榴弾をしまい、後ろを振り返ることなく、リボルバーをミカたちに向けて放り投げた。

「……あ、おーらい、おーらい……っつと」

狙って投げたのだろうか、リボルバーはモモイの真上に届き、背伸びしたモモイがしっかりとキャッチした。

「キャッチしたよー!」

モモイの声を背中で受けつつ、ハルカは素早く吹き飛んだロボットののもとに走り、両肩を抑えて拘束した。

「先生、壊してもよろしいでしょうか?」

そう言つて虚空を眺めるハルカだが、すぐにしゅんとなつて「すみませんすみません」と小声で呟いた。

先程まで冷徹にきらめいていた瞳には、怯えや恐れが感じられた。

「……あ、ひよつとして、先生の声とか字幕って……」

ミカがポンと手を合わせると、隣に立ったままのユズがおずおずと言つた。

「あ、ご存じなかつたですか？ レンズを通して先生が私たちに音声や字幕で指示を出す場合、全員に送ることも出来ませし、特定の対象に送ることも出来ます。」

多分、先生は伊草さんだけに聞こえる声か字幕で注意をしたんでしょね。伊草さん相手だと、よくある事です」

「え、よくあるんだ」

「伊草さん、結構暴走しがちな人なので……」

ユズは苦笑し、そつとミカから視線を逸らした。精一杯フオローしているつもりのだが、滝のように汗を流しているし声も小さく、殆ど逆効果である。

「ふーん……」

これだからゲヘナの子は。

自然とそう言いそうになつて、ミカは慌てて口を閉じて両頬に手を添えた。不思議そうに自分を見上げるユズを気にする余裕もなく、ミカは内心で己を叱咤する。

相変わらずこういう思考をしてしまうのだから、本当に自分も救えない。大体、暴走してしまふことについては自分も他者に偉そうに説教できる立場ではない。そう胸に言い聞かせ、ミカは首を激しく横に振った。

「み、聖園さん？」

「あ、うん！ 何でもないよ、何でも！」

あはは、と笑って誤魔化しつつ、ミカは残る2体のロボットを見つめた。仲間がハルカに拘束されているというのに、何の反応もない。時々顔を上げ下げしたり、ふらふらと体を揺すったりしているが、特にリアクションを見せる様子もなかった。

一応、モモイやミドリが愛銃を向けることはしていないものの残りのロボットたちを注視^{マーク}しているようだが、もはや敵というよりエイリアンか幽霊を見るような視線を向けている。モモイに至っては心配になる程に顔から色が抜けていた。

これは駄目だ。相対するだけで精神に悪い。さっさと終わらせるに限る。

仕事中に余計なことを考えた自分を戒めるかのように、ミカは速足でロボットに向かって歩き出した。

小さく息を吐き、ポケットからシャーレのIDカードを取り出す。相変わらず、ロボットたちはミカたちに銃口を向ける気配はない。そのお陰でこんな状況なのに先制攻撃が出来ないし、問答無用で殴ることもできないのだから、連邦生徒会直下の機関

という肩書は厄介である。

今のミカは自分でこれでもかと汚した自分の看板だけでなく、先生の看板も護らなくてはいけない立場にあるのだ。今更ながらそんなことに思い至り、気付かなかった自分の間抜けさにため息が出た。

ゴキン、と嫌な音が響いた。音がした方にミカが視線を向けると、ハルカがダラリとしたまま動かなくなったロボットの足を引き摺り、モモイたちの方に向けて歩き出すところだった。その瞬間、ミカとハルカの目が合った。ハルカはぺこりとお辞儀してモモイの元へ向かっていく。変なところで常識的な少女である。

「……………あ、じゃあ……………残りは、私が」

「あ、アリスも行きますすー！」

ミドリが意を決したように歩き出し、その後を追うようにアリスも動いた。ゴクリ、と息を飲んだモモイとユズは動かず、ロボットたちを睨み続けている。

ミドリとアリスは歩くというよりほぼ駆け足で、最後のロボットに向かつていった。

「……………」

ミカは足を止めた。どうも、嫌な予感が頭の中に芽生えてきた。そのまま成長し、己の脳内を不快感が満たしていくのを幻視する。同時に言語化できない違和感が生まれ、肩にかけて愛銃のスリングを握った。

そんなミカを見て不審に思ったのか、ミドリとアリスもミカに顔を向けて立ち止まった。

「……………あれ？」

ミカは違和感の正体に気付いた。2体のロボットは突っ立ったままだ。微動だにしない。そう、先程までは歩き回ったりしないものの、首を動かしたり身体を左右に揺らしたりはしていたのに、まるで凍り付いたかのように動かない。

「……………これは、よくないかも」

そうミカが呟いた瞬間、2体が同時に腕を上げた。2丁のリボルバー拳銃が、ミカに向けられる。銃弾を躲そうとミカが足に力を入れた瞬間、立て続けに2発の銃声が響いた。

ゆつくりと、2体のロボットが倒れた。

「お、おおー……………」

歓声とも驚嘆ともつかない声を上げたのはモモイだった。

ミカが後ろを振り返ると、拳銃を構えたアリスが立っていた。

「……………あ、これで、最後の銃弾ですね……………」

アリスは拳銃の銃口を覗き込み、暢気そうに呟いた。

シャーレ部員と一緒に⑮

3体のロボットを倒した後、ミカたちは先生より戦闘の終了及びシャーレオフィスの撤収を指示された。

まだ捕えていない売人が1体残っているのではないかとミカは一瞬だけ思ったが、そのことで先生に意見を具申する気にはなれなかった。そんなことは先生も承知の上であるはずだ。しかし先生が撤収を優先したのなら、何か理由があるのだろう。

他のメンバーも同様のことを考えているのか、誰も異を唱えることなく、黙々と6人は撤収準備に取り掛かった。

幸いなことに、先生からの指示が降りた直後にヴァルクューレの車両の群れが公園に突入してきたので、ミカたちはヴァルクューレの生徒たちに簡単な引継ぎ作業をして、即座にシャーレオフィスに向かった。

そして、シャーレオフィスの入り口に到着したミカたちの目の前に飛び込んできたのは、オフィス前に我が物顔で停車していたパトカーだった。ヴァルクューレ警察学校のパトカーである。

「……あ」

モモイが声を上げてパトカーを指差した。ちやうどパトカーから降りてきたのはヴァルクューレの生徒と、別の制服を着た少女だった。降りた後、ヴァルクューレではない制服を着た少女は後部座席から何かを乱暴に引っ張り出し、地面へ捨てるように落とした。

どちゃりと派手な音を立てて顔から地面に叩きつけられたのは、小柄で丸っこい形をした寸胴のロボットだった。全く動かず、完全に気を失っているように見えた。

「おーい、ミュージーーン！」

「パンパカパーン！ アリスは遠距離魔法使いのミュとのエンカウント条件を達成しました！」

モモイとアリスが同時に声をかけると（アリスはどちらかというと自分自身に言ったようだったが）、少女はビクリ、と肩を震わせて小さく悲鳴をあげた後、ゆっくりと振り返った。SRT特殊学園1年生の霞沢ミュだ。

ミュは近付いてくるミカたちを見て小さく会釈をすると、ロボットの片足を掴むとスタスタとミカたちの方へ歩き出した。もう片方の手で愛銃を握り、若干俯きつつ片手でロボットを引き摺っているその姿は、まるで死神を彷彿とさせる凄みがあった。

少し遅れて、ヴァルクューレの生徒が慌ててミュの後を追って走ってきた。ヴァルクューレの生徒を気にすることもなく、ミュは困り果てたように眉を下げつつ、か細い

声でぼそぼそと喋りだした。

「シャーレの皆だ、話しかけてもらえた……。やっぱり先生にお願いしてパトカーで送ってきてもらって正解だったんだよね……。1人じゃ気付かれもせずにシャーレオフィスの玄関で踏まれて先生用のドアマットになっちゃうから……」

俯きながら殆ど聞き取れないくらいの小声で独り言を呟きつつ、ロボットを引き摺りながらゆっくり近づいてくる少女。普通に恐怖である。

ミカは思わず頬を引き攣らせたが、他の5人は気にも留めずにスタスタと歩いてミユに近付いていく。ユズすら怪訝な表情を浮かべつつもドン引いてはいないようである。

おそらくあれでも平常運転なのだろう。ハルカと似通っているものの、別ベクトルで雰囲気怖い生徒である。ハルカのように倒した相手への憎悪や激しい怒りこそ明確に発しているようには見受けられないものの、雑にロボットを引き摺り歩く様は、相手をマトモに扱うことを徹底して拒絶しているであろう彼女の心中がひしひしと伝わって来ていた。

ミユはミカたちの目の前までやってくると、今度は大きく会釈した。ミユの後ろにはヴァルクユーレ生徒がやってきてお手本のような奇麗な敬礼をするが、口を開くことはなかった。このヴァルクユーレ生徒は特に会話に加わるつもりはないらしい。

ミユは小さく息を吐いた後、僅かに口角を上げて弱り切ったような僅かに可笑しいよ

うな微妙な表情を浮かべ、挨拶をした。独り言よりかは遥かに声量が大きいですが、それでも一般的な話し声より小さい声だった。

「あ……こ、こんにちは……。お疲れ様です、その……差し出がましい様ですが、ええと、お手伝いさせていただきました……」

「えっ」

出会い頭にいきなりそんなことを言われて目を丸くしたミドリは、声を上げた後ミユが引き摺っているロボットを見下ろした。

「あつ、それ、最後の売人！」

「えっ！」

慌ててユズがスマホを取り出し、画面とロボットを交互に見比べた。

「……ほ、本当だ……。流石はミユさん……」

「ああ、霞沢さん、ありがとうございます！ お役に立てず……すみません、当番ではありませんでしたよね、お手を煩わせてしまいました……」

ユズとハルカが立て続けに称賛してぺこぺこ頭を下げると、ミユは後ずさりつつ慌てて首を振った。

へえ、お手柄だ。

ミカは感心し、目の前の少女をしつかりと観察した。おそらく、少女は狙撃でロボッ

トを仕留めたのだろうと当たりをつける。彼女が背負っているライフルには、地味な色の布がぐるぐると巻かれていた。「パーラップロール」と呼ばれるこの布は、狙撃手が身を潜める際に銃を偽装するときを使うものだ。大体朽ちた木の枝に偽装するために使用することが多いのだが、偽装の他にも光の反射を抑えたり消音の効果もあるため、街中での狙撃にも十分な効果を発揮できる。それを巻いていることから彼女がスナイパーだということは容易に想像がついた。

「い、いえ！ 私、オフィスのカフェで休憩していたのですが、先生からのご指示で公園の方に行つて……そして、ヴェリタスの方々に援護してもらつて、この人を見つげられんです。……私、時間があればカフェで待機しているので……。今日はサキちゃんが当番だったから、時間があ——」

そこまで言つた後、ミュはミカの方に視線を向けた。墨を溶かしたような黒いオーラを放つ瞳がミカを捉え、パチリと一回瞬きをした。

「……あ、聖園ミカさん……ですね。その、初めまして……」

先程よりさらに小声で、ミュは僅かにミカの顔から視線を逸らしつつ頭を下げた。

「……SRT特殊学園1年の、霞沢ミュと申します。……多分、私なんかすぐ忘れるでしょうけど……」

「え、う、うん。こんにちは、聖園ミカだ——」

慌てて会釈して挨拶を返すミカ。しかしそんなミカの挨拶を遮って、ミュは再び話し始めた。

「私、ゴミだから。先生には助けをいただければいいのに。駅ビルの喫茶店で先生が狙われて、攻撃を受けたと聞いた時にはD・U・にいたのに。現場の駅ビルの近いところになっていたのに。なのに先生を護ることも出来なくて。影が薄すぎるから肉盾にもなれない小石以下の私は、やがて先生からも忘れ去られてこの世界から消えていくんだ……。」

でも、それが私への罰なんだ。役立たずのゴミ箱に入るのもおこがましい私なんか、ゴミ収集車のお世話になる価値すらもないんだ。その辺で打ち捨てられて、じくじくと腐り落ちて、来世ではゴミになることも出来ないんだ。

せつかくこんなゴミ未満の私でも、先生に会えたのに。先生の傍に出来るのかなって分不相応な期待を持った結果がこんな罰なんだ——」

只管に黒く染まっていく瞳。弱弱しくか細く情けない声なのに、まるで地獄の奥底から響いているような、聞く者の心を蝕むような恐ろしさがあつた。

いや、怖い。ミカは思わず閉口し、困ったように首を傾げて隣にいるモモイを見つめた。ミカの視線に気付いたモモイはミカを見上げ、処置無しと言いたげに首を左右に振って肩を落とした。どうやら本当にいつもこんな感じらしい。

そんなミカとモモイの無言のやり取りを見て、ミドリがミカに近付き、言いづらそうに小声で言った。

「ミュさんはシャーレに入室した時からこんな感じですよ。あの人はエデン条約調印式の時にはシャーレに入室していませんでしたから、ええと、あの事件が原因ではないです。……今は皆、先生が攻撃されるかもしれない可能性に機敏になっていますが、あの人はまだマシな方です」

「……あー……うん、そうなんだね……」

ミカは眉を下げ、ため息をつきたくなるのを堪えてミドリから視線を外した。

どうやらミドリは、ミュの言動がエデン条約の事件がトラウマになっているせいだとミカが考えたのではないかと誤解した様だった。

つまりはミドリがそんな誤解をしてしまうくらいには、シャーレにおいてエデン条約調印式の先生の負傷がトラウマとなっている生徒がいるのだろう。

これまで出会ってきたシャーレ部員の言動からしてわかり切っていたことだが、改めてそれを突き付けられた気分だった。

ミカがそれ以上何も言えないでいると、ハルカが小走りでミュに近付いていった。

「……霞沢さん……その……」

ハルカは少し焦ったような表情を浮かべ、ポンポンとミュの肩を叩いた。

「あ、あまり、ネガティブなものもよくありませんよ?」

「あ、ごめんなさい、ありがとうございます……」

「えっ」

「えっ」

ミュがハルカに顔を向けると同時に、モモイとミドリが揃ってハルカを凝視した。2人の目が「え、貴女が言うの?」と言いたげに開かれている。ミカは声をあげなかったものの、口を開けてハルカの背中を見つめた。

「そ、そうですよ……」

次にユズがミュの傍に近寄り、ハルカと反対方向からミュを慰めようと背筋を伸ばして両手を振った。

「ほら、霞沢さんは小石以下なんかじゃないですよ! すつごく先生のために働いているじゃないですか! もっと大きな、ええと、石……いや、岩……いやいや、いわ巖いわくらいですよ!」

「ユズちゃん、他人のこと励まし慣れていないにも限度があるよ……。ミュさんは別に無機物になりたいわけじゃないでしょ……」

頭を抱えながら、ミドリがため息交じりにツツコミを入れた。憐れむような視線をミ

ユではなくユズに向けている。両手でガッツポーズを作って汗を流し、必死に言葉を探している部長に対してあんまりな対応だが、実際、あの言い様はゲーム開発部の面々すら擁護不能であった。

三つ子の雛鳥が互いの傷を舐め合っているみたいだ。

思わずそんなことを考えてしまったミカは、慌てて頭を振ってその想像をかき消した。



「……それで、どうしてそのロボットをここに連れてきているんですか？」

ミユが落ち着いた後、ミドリが漸く本題に入れる、といった具合に安堵の息を吐いてロボットを指差した。

「あ、はい。この人は、ちょっとヴァルクユーレから借りてきました。今、ミレニアムに部員の皆さんが集まってきています。先生から許可をいただいて、この後ミレニアムにこの人やスクーターを服用した被害者の方、ゼルコヴァPMCの人を連れて行って、お話をしてもらおうつもりです」

ミユはそう言うと、目を細めて自分が足を掴んだままのロボットを見下ろした。感情の込められていない昏い瞳が動き、無様な姿のロボットを捉える。

本来、シャーレは捜査と犯人（被疑者）の捕縛までを行い、取り調べや矯正施設への

護送はヴァルキューレなどの各地域の治安維持組織に任せることが多い。それらを含めて全てシャーレが単独で行ってしまうと治安維持組織の面子に関わるというのもあるが、シャーレに取り調べのノウハウを持つ人材があまりいないことや、取り調べなどにリソースを割く余裕が殆どないことも大きな理由である。

「……今回の件は、特例です。流通しているもの、スクーナーは一種の違法プログラムのようなもので、対象はロボットに限られません。効果や仕組みを調査するには、専門的な設備と技師による分析が欠かせません。なら、そういったものが揃っているミレニウムでやる方が良いでしょう」

そう言つて、ミュはヴァルキューレ生徒を一瞥した。淀んだ瞳を向けられたヴァルキューレ生徒は、無言を貫きつつもバツが悪そうに頬を掻く。

治安維持機関であるヴァルキューレには、当然の如く科学捜査やロボットが対象の違法プログラムやソフトウェア等の各種解析・分析を行う専門部署があるだろうが、万年予算不足のヴァルキューレと最新設備と技術者が集まったミレニウムサイエンスクールを比較する方が酷だろう。

「……他にも理由はありますけど。例えばミレニアムの方が、色々と動きやすいですの
で」

ボソリとミュの口から放たれた言葉に、ミカは思わず納得した。

ミレニアムサイエンススクールは、今や実質的にはシャーレの外部機関と化している。何せ生徒会であるセミナーの中心人物のうちの半数、セミナーの持つ武力集団「C&C」全員、さらには高度な技術者のみが所属するエンジニア部とセミナー非公式のハッカー集団であるヴェリタスの全員、挙句の果てにはミレニアム史上僅か3人しかない学位「全知」を獲得した超が付く天才ハッカーである明星ヒマリがシャーレに所属している。

この他ゲーム開発部全員、特異現象捜査部の和泉元エイミ、トレーニング部の乙花スミレがシャーレに所属しており、もはやミレニアムの重要人物や実力者でシャーレに所属していない者が希少である。

最近はトリニティ総合学園も同様に上層部の生徒が続々とシャーレに入部しているが、それでもミレニアム程シャーレと強固な同盟関係を結んでいる学校は存在しないといても過言ではないだろう。なお、全校生徒がシャーレに所属し、シャーレの支援がなければ存続すら危ういアビドス高校は特例中の特例である。

早瀬ユウカをはじめ、シャーレに徹底してのめり込んでいった結果がこれである。三大校の中でもっとも迅速にシャーレとの協力体制を構築することができる環境が整っていた上（何せセミナーのユウカがシャーレの最古参部員である）、シャーレと組むメリットを最も享受できる学校なのだからある意味当然ではあるのだが。

シャーレによつてキヴオトスの混乱が（連邦生徒会長失踪直後と比べて）収まったこととで一番得しているのは、キヴオトス中に技術や製品を提供・輸出することで莫大な利益を得ているミレニアムをおいてほかにない。どんな優れた技術を開発しても、平和（キヴオトス基準）になつて流通網が整つていなければ利益には繋がらない。健全な技術の発展と成功には、武器や兵器だけが売れていても意味はないのだ。

先生とミレニアムを結びつけるのは、生徒が持つ先生への好意だけではない。先生とシャーレの存在がミレニアム、ひいてはキヴオトス全体の利益になるからこそ、ミレニアムは先生と確固たる相互協力関係を確立しているのである。

ミレニアムにとつてはミレニアム自治区以外の安寧秩序（キヴオトス基準）も大事だった。買い手の懐と心が満たされていなければ、ミレニアムの製品と雖も売れないからである。……決してそれを言い訳にして、ユウカたちが先生にのめり込んでいるわけではない。恐らくは。

「ですので、色々と融通が利きます。全部、シャーレわたしたちのやりたいように。全て……すべてを、お話してもらいます。

そういうわけでこれから運ぶのですが……ミレニアムに護送するためにヴァルキューレの人員とパトカーを手配してもらいましたので。ゼルコヴァPMCや売人の人たちは、一部だけ借りてミレニアムに送ります」

ミュウがそう言うのと、全員が得心がいったと頷いた。

意識を失った状態のロボットをミレニアムへ運ぶ程度であれば、ミュー人でも十分可能であった。少数精鋭特殊部隊の一員として、ミュウも様々なスキルを取得している。車の運転程度はこなせるし、何なら無人タクシーを使うという手もある。つまり後ろのヴァルキューレ生徒は、ヴァルキューレの体面的な問題でミュウにくつついてきているだけなのだろう。道理で全く会話に加わってこないわけである。当人も自分が空気同然のおまけであると認識しているのだ。しかし空気のような存在でも、いるのといないのとでは全然違う。こういうのは、形だけでも同伴しておいた方が後々便利なのだろう。

「いつの間にそんな話に……」

「えっと、ユウカさんがすぐに先生に許可を取ってヴァルキューレに話を通してくれましたよ。私も先程聞いたばかりなんです」

ミドリが感心半分呆れ半分といった感じで言うと、ミュウは小首を傾げて答えた。

「それで、捕縛したこのロボットをD・U・からミレニアムへ運ぶには、先生が認め^{した}たシャーレ正式の書類が必要でして、それを頂きにオフィスに寄りました」

「成程、ミュウの遠征クエストですね！ 頑張ってくださいー！」

「あ、ありがとうございます」

最後まで黙って聞いていたアリスが何度か頷き、笑顔を浮かべながらばちばちと小さ

な手で拍手をした。それを受け、ミュははにかむように地面に視線を向けた。

「……それでは、私はこれで。あ、聖園ミカさん」

「えっ？」

いきなりミュに話しかけられ、ミカは戸惑いつつもミュの顔を見た。ミュは目尻を下げたまま、僅かに口角を上げた。

「もしかしたら私のこと、忘れてしまうかもしれませんが。また、すぐにお会いできるかもしれません。その時は……宜しくお願いします」

「……えっ」

「私が言うのも何ですけど……皆さん、お疲れ様でした」

告げるだけ告げた後、ミュは大きく会釈してミカたちに背を向け、ロボットを引き摺りつつ歩き出した。

「あ、そっか。……もう、今日の任務は終わりだよね」

ユズが呟く声がミカの耳を震わした。

そうだ、これで一先ず今日唐突に飛び込んで来た仕事は終わったのだ。

今更そう考えたミカは、ふう、と息を吐き、モモイとアリス、そしてユズとミドリとハルカの顔を見渡した。

「じゃあ、先生に報告して……そして、ハルカちゃんとか、食べた人もいるかもしれない

けど」

ミカはにっこりと微笑んだ。

「お昼ご飯、食べに行こっか☆」

その言葉に、全員が同意した。

ある日の便利屋68①

伊草ハルカは事務所を見上げ、小さく息を吐いた。

任務を終え、シャーレオフィスで先生に挨拶し、ミカたちと遅めの昼食をとったハルカは、その後のんびりと歩きながら帰途についた。なお、徒歩なのは単純に電車賃を節約するためである。

ハルカの所属する便利屋68はゲヘナ学園非公式の部活であり、無法集団であることと諸事情（主に金欠）によりしよっちゅう事務所を移転している。現在は便利屋68の4人全員がシャーレに所属していることと、先生が便利屋68の経営顧問に就任していることからシャーレオフィスからさほど離れていないエリアに事務所を構えることが多い。現在、便利屋68はD・U・南部のスラム街の一角にある某ビルの3階に入居していた。

ブラックマーケットに限らず、キヴォトスではスラム街や治安維持機関の管理下になりエリアが無数に存在する。ここもそんなスラム街の一つで、ヴァルキューレの生徒が立ち入ることはほとんどない。その代わり真つ当な行政・医療サービスが受けられるエリアではないので、そんなに多くの者が出入りしているわけでもなく、ビルの前は閑散

としていた。

スラム街といっても、この辺りはそれなりの高さのビル群や倉庫が並ぶエリアである。廃棄ビルの割合が多いし「表の世界」と異なり銃撃戦や爆破後の修復が必要最低限しか行われていないために上空から見下ろすとボロボロのビルが点在している静かなエリアといった具合で、スラムというよりはゴーストタウンという印象が強い。

そんなエリアで愛銃を背負い、高級感あふれる白い箱が入った袋を両腕に抱えながらキョロキョロと周囲を見渡しつつ歩いてきたハルカは、ビルを数秒見上げた後に階段を上がっていった。3階まで上がるとドアをノックし、少し開けて中の様子を窺う。

「た、ただ今戻りました」

「あ、おかえりー」

真つ先にハルカに気付いたのは、ソファに寝転んでスマホを眺めていたゲヘナ学園2年生の浅黄ムツキである。いつも通りの無邪気そうな笑みを浮かべ、上半身を起こしてドアの隙間から顔を出すハルカを見つめた。

「あ、おかえり、ハルカ」

次に気付いたのはゲヘナ学園3年生鬼方カヨコだった。カヨコはムツキが寝転んでいたソファとは反対の方向に置かれていたソファに腰を下ろし、本を読んでいた。カヨコは腰を上げるとハルカの方に近付き、「お疲れ様」と穏やかに労う。

「皆さん、仕事は終えられていたのですね」

「うん。今日の仕事はちよつとした運び屋だったからね。幸い、特に戦闘も無し。数時間で終えて戻ってきたよ」

ホツとした表情を浮かべてハルカが事務所の中に入ると、カヨコが頷きながら小首を傾げた。

「ところで、それは？」

カヨコの細められた深紅の瞳が、ハルカが抱えている袋を捉えた。

「あ、その……これはですね、先生から頂きました。最近、D・U・シラトリ区にオープンしたケーキ屋さんの人気レモンケーキだと。危険な任務に参加してくれたお礼だつて……」

「わー、美味しそう！ いいねいいね、アルちゃん呼んで食べようー！」

元気良くソファから飛び降りたムツキがキラキラとした瞳で箱を見つめると、そのまま事務所奥の「社長室」というプレートが張られたドアの前まで歩き、ドアを無遠慮に開けた。

「アールちゃん！ ハルカちゃんが先生からお土産もらってきたよー！」

「あら、そういえばもう良い時間よね。皆でおやつにしましょう！」

社長室の奥から聞こえてきた返事がハルカの耳に届いた。ハルカは微笑み、レモン

ケーキを皿に乗せていった。

「……はあ、まったく、あの人は……」

高級洋菓子にテンションを上げるムツキに対し、ハルカが抱える箱を見つめたまま僅かに眉を顰めたカヨコは、ため息をついて首を反対の方向に傾け、視線を天井へと向けた。

「ハルカや私たちは最初から先生のために働いているのに。当番の時は給料だって貰っているし、当番じゃあない時の活動だって銃弾の補充くらいは受けているのに、いつもいつも差し入れとかお土産とか……まったく……」

不満そうな台詞に反して、口調はひどく穏やかだった。独り言を呟くと、カヨコはハルカに向けて指でケーキをソファに挟まれたローテーブルに置くよう指示すると、自分は食器棚の方に向かって人数分の食器を取り出した。

「おかえりなさい、ハルカ」

「はい、アル様！ 無事に完遂してきました！」

嬉しそうに笑うムツキを従えながら、便利屋68社長を務めるゲハ学園2年生陸八魔アルが優雅に歩いてきた。アルはペこりと頭を下げたハルカの頭から爪先までを凝視して、全く怪我が見られないことを確認すると、満足そうに首肯した。

そしてハルカがテーブルに置いたレモンケーキを見てフツと格好つけた笑みを浮か

べた後、「良いセンスね、流石は先生」と呟き、「こういう時には……あれに限るわね」と気取った様子で柵からガラス製のティーポットと茶葉の入った缶を取り出した。

この事務所に転居した祝いに先生がアルにプレゼントした、百鬼夜行自治区が誇る高級の新茶である。茶葉をティーポットに入れて冷水を注ぎ、20分ほど待つ。季節は冬だが少し年代物のピルの中は暖かく、冷たい新茶で喉を潤すのも悪くない環境であった。……実際は、電気代を抑えるためにお湯を沸かすのを可能な限り避けているだけであるが。

「……そろそろいいかしらね。それでは頂きましょう。ふふ、ちよつとしたティーブレイクね」

「緑のお茶だけどねー。この場合もティーブレイクで良いのかな?」

「良いんじゃない? トリニティでもないんだし、紅茶に拘らなくても良いでしょ」

「あ、アル様が仰る通りで良いと思います!」

ソファに揃って腰かけた4人は手を合わせ、いただきますと呟く。ちよつとした仕事を終えたメンバーを労わるための小休止。

便利屋68の事務所は、今日も平和であった。



「……それで、スクーナーとかいうものをD・U・で売り捌いていた売人は、見つけた人

は全員捕まえられたってこと？」

もきゆもきゆと口に含んだレモンケーキを咀嚼しつつ、ムツキはハルカから聞いた話を頭の中で整理していた。

「ええ、ヴェリタスの人たちが追跡できていた人たち4人は、全員捕縛しました」

「面倒なことしてくれるよねー。最初ユウカちゃんが集まっていたのを見た時は、早くも先生に攻撃を仕掛けた人たちが叩けるのかとちよつと期待しちゃったのに。そんな面倒な道具を作っていたなんてー……」

ケーキを飲み込み、ムツキは考え込むように虚空を見上げた。

「わるーい人たちを捕まえて叩いてしまえば簡単だと思っていたんだけどなー。これ、やっぱりブラックマーケットの上が関わっていると思う？」

ムツキの視線を受け、カヨコは新茶が注がれたガラスのコップをテーブルに置いて首肯した。便利屋68のメンバーで最も頭が切れるカヨコは、主に作戦前の計画立案や敵情分析などで便利屋68のブレーンとして動いている。積極的に自分の考えを述べることはせずにアルたちを見守っていくスタンスであるが、聞かれたことは即座に答えるし、アルからの指示がなくとも情報収集や分析はしっかりと陰で行うタイプである。

「間違いなくそうだと思う。ブラックマーケットの秩序側からの指令や暗黙の了解も無しに、こんなあからさまに連邦生徒会から危険視されるであろう違法製品を大量製造し

て、それもブラックマーケットの外……D・U・で売り始めるとも思えない。

こんな製品、開発はおろか大量製造だつてそれなりの規模の製造設備が必要なはずだし、そもそもこんな危ないもの、上の許可もなく製造したら徹底的に潰される筈。

しかも喫茶店ムエットの時は元P・M・Cの何でも屋を動員して、今回では本物のP・M・Cまで動員している。ブラックマーケットの一犯罪集団の幹部の独走や、小規模犯罪グループのリーダー風情でどうにかできる規模の犯罪じゃない。

それにハルカがユウカから聞いたように、まるでサンプルデータの収集や実験を繰り返しているように見える行動も気味が悪いね。最悪、利益が出なくても良いと考えているようにも感じ取れる。スクーターの製造とばら撒きに全てを賭けて取り組んでいる、という感じでもない。……実行犯は兎も角、指示している連中には余裕……いや、遊びがあるような気さえしてくる。不気味で得体が知れないな。嫌な相手だね」

「その通りよね……」

カヨコの流れるように口から紡がれた分析を聞き、アルは小さく唸った。

「何れにせよ、先生を狙っただけじゃなくて民間人を騙して、洗脳するなんて危ないものを適当にばら撒いて……。不特定多数の一般人を巻き込む所業。本当に、心底……気に入らないわ」

アルは怒りを表情からにじませつつも、慎重に言葉を選ぶようにゆっくりと語った。

なお、思ったままに言葉を口に出さないのは、それをやるとアルの隣でアルを見上げて
いるハルカが暴走するからである。言っても言わなくても暴走するのがハルカなのだ
が、どうせなら自分が原因ではない暴走の方がマシだろう。アルの胃腸的な問題で、で
ある。

「依存性や中毒性の高いお酒や煙草を売る方がまだマシね。あれらは危険性もある程度
知られているし、買う側だってリスクはある程度承知しているだろうから。でも、これ
は多幸感を得るためのものと謳っているだけで、実際は洗脳の道具。……腹立たしいわ
ね」

悪の優美さが欠片もない、恐るべき以上に唾棄すべき犯罪だった。

「……ユウカさんが言っていました。それもそうなのですが……ばら撒いたのがD・
U・なのも気に入らない、と」

「つまり？」

ムツキが面白くなさそうに唇を尖がらせて聞くと、ハルカではなくカヨコがボソリと
言った。

「……敢えて連邦生徒会のお膝元、そして何より先生が暮らしているD・U・でやって
いるってこと。実際、連邦生徒会の目が届かない田舎や辺境の自治区とか、スラム街と
か……わたしたちシャーレに気付かれずにこういうことが出来る場所は、キヴオトスには幾らでも

あるから。……成程、確かに気に入らない」

感情を意図的に排除した、風のように静かな声だった。

「……単に実験というだけじゃなくて、他にも目的があつてD・U・でやらかしたつてこと？」

ムツキが表情を消した。ガラス玉のような瞳を向けられたカヨコは、苛立ちを紛らわすかのようにレモンケーキにフォークを突き刺した。

「連邦生徒会長が失踪して以降、連邦生徒会の権威は減るばかり。でも、唯一評価を上げ続けている組織がある。……連邦捜査部『シャーレ』。つまり、シャーレ……ひいては先生こそが、連邦生徒会が完全に存在感をなくしていない大きな理由。」

連邦生徒会長の失踪という、連邦生徒会を目障りに思っている連中からすれば、まさに千載一遇のチャンス。そんなチャンスをものにしたい連中からすれば、機能不全に陥ることも現状維持に精一杯になることもなく、着々と成果を積み上げている先生は、実に邪魔なんだろうね」

「あー、そういうことかあ」

ムツキはソファの背もたれに身を預け、足を組んで天井を見つめた。そして淡々と、何てことのないかのように呟いた。

「うん、私も気に入らないな。凄く」

平坦なムツキの声を聞いて、ハルカも顔を俯かせた。しかし、すぐに顔を上げて3人を見つめた。

「……あ、そうでした」

「どうしたの？」

「任務の途中で聖園ミカさんに会いました。そして、一緒に戦闘もしました」

「……へえ、あの聖園ミカさんと」

カヨコが視線の先をハルカに固定し、ティーポットに手を伸ばした。溶けかけの氷が僅かに残ったコップに緑茶が注がれていく。カラン、と氷と氷がぶつかる音が、事務所全体に響いた。

「くふふ、そっかー。わかっていただけけど、本当にシャーレに入ったんだねえ」

無邪気な子供のような笑みを浮かべ、ムツキが両の手の平に顎を乗せて身を乗り出した。

「どうだったかしら、聖園ミカは」

アルが尋ねると、ハルカは顎先に指を押し当てて数秒考えこみ、話し始めた。

「……凄い、強い方だと感じました。膂力りよりよが私とは比較にならない程強いですし、状況を判断する力も備えているように見受けられました。射撃の腕も高い方です。

試しに威力偵察を提案してみたらあっさりと単独で先陣を切っていただけましたし、

積極性も度胸も持ち合わせていらつしやいますね。多分、もともと単独で複数の相手に戦うことに躊躇いが無いといえますか、慣れているのでしょうか……。

先生からはゲヘナに良い感情を抱いているわけではないとお伺いしておりますが、いきなり殴られたり罵倒されたりはしませんでしたね……」

「まあ、私たちはゲヘナでも精々風紀委員会くらいしかマークしていない無名のグループだし。トリニテイのティーパーティーでも、精々木っ端の不良くらいにしか思っていないんじゃない？」

カヨコが若干自嘲しつつ、全く気にしていないようにレモンケーキを頬張ると、その正面にいたアルが胸を押さえて僅かに仰け反った。

「ぐ、む、そうね……。まあ、トリニテイの正義実現委員会に目を付けられるのも嫌だから、それで良いんだけど……。唯でさえ、風紀委員会にマークされているのに、これ以上はごめんよ」

「確かにね。正実（正義実現委員会のこと）の剣先ツルギって人、ものすつごく強いもんねー。前にシャーレ演習でお腹に回し蹴り食らった風紀委員会のスナイパーちゃん、壁5枚くらい突き抜けてて吹き飛ばされてたもん。あれはいったそーだったなあー」

ムツキが口元を抑えて思い出し笑いをすると、ハルカもつられて苦笑した。ゲヘナ風紀委員会の面々が聞けば、無名の少数精鋭軍団だからこそ性質が悪いんだと苦い表情を

浮かべそうである。

ひとしきり苦笑した後、ハルカは再び話し始めた。

「ええと、総じて感想ですけど……思っていたより理知的に振舞っている実力者、という感じがしました。頭が悪い印象も受けませんでしたし、敵に回すと相当厄介なタイプだと思います。空崎ヒナさんと同じですね。ヒナさんと違って庇う部下もない分、より難敵かもしれません」

「うわー、あれと似た感じかー……。うーん、いざとなつたら対処しないといけないけれど、一筋縄ではいかなそうだね」

「キヴォトスでも上位の実力者って話、本当なんだね……。なんでそんな人が政治家やっていたんだろう。トリニティの考えることはよくわからないな……」

ムツキが肩をすくめてお手上げとばかりのジェスチャーをすると、同時にカヨコが頭を抱えて背中を丸めた。そして大きくため息をつく。

「……そうね……」

そんな社員を見つめ、アルはレモンケーキを口に入れて咀嚼した。

そして考える。しかし、それは既にゴールが見えている思考だ。先生を護るため。大事な経営顧問を助けるため。自分たちはいざとなれば、全てを賭けてでも先生を護らなければならない。

アウトローにはアウトローなりの護り方というものがある。相手を危険分子か否か調べるのも、相応の手段がある。

「チャンスはきつとあるわ。それ程遠くない未来に……ね」

飲み込むと同時に、アルはゆっくりと立ち上がった。

「聖園ミカ。貴女が先生の敵になることはないと思うけど。まさかの時に備えるのも、私たちの役目なのよ」

窓に向かつてつかつかと歩いていく。冬の空と灰色のビル群を眺め、アルは腕を組んだ。

まさか、あんなことが起こるとは思わなかった。

そんな格好がつかないにも程がある理由で、自分たちは大切な人を失いかけたのだ。あんな失敗は、二度としたくない。

「……いつか貴女とあったその時は、確かめさせてもらおうわ。アウトローとクレーダー^あに^な相応^たしい方法でね」

ある日のシャーレ③

その日、シャーレ当番のミレニアムサイエンススクール2年生生塩ノアは、業務を終えた後、カフェでのんびりとホットミルクを啜っていた。

すでに夕刻を過ぎており、ノア以外の当番は帰宅しているか、オフィスの居住エリアで休んでいる。シャーレ部員の中には休日の前日に当番を申請するか、或いは当番の前日に時間を作ってオフィスに泊まる生徒も結構いる。

一部の部員がやりすぎて多忙のあまりシャーレオフィスに滅多に泊まり込みが出来ない部員（風紀委員長の空崎ヒナなど）が猛抗議した結果、互助会を代表してユウカが色々と「レギュレーション」を設定して、オフィスへの泊まり込み日数に制限を設けたために、毎日泊まり込む生徒がいるわけではないのだが。

実に羨ましいことだ。

ノアは時折天井を見上げ、上の階にある生徒が休憩しているであろう部屋に羨望やら恨み節やらがらない交ぜになった視線を向けつつ、自分以外誰もいない空間で熱々のホットミルクを味わっていた。

セミナー書記として多忙なノアには、何日も連続でシャーレオフィスで過ごせる暇が

あまりないのである。同じセミナーでも早瀬ユウカは才羽モモイが「通い妻」と表現するほど頻繁にオフィスに通っているが、何故か自分はユウカ程先生と一緒に時間が取れていない気がする。理不尽だ、と言いたいところであるが、実際は自分より早く先生に落ちたユウカは、自分より早く先生と一緒に過ごすことを前提とした生活に慣れていったのだろう。より正確に言えば、先生と一緒に過ごす生活に自分の日常を適合させていったのだろう。

キヴォトス三大校の一角である巨大学校の生徒会の業務を全く疎かにすることなく、甲斐甲斐しく先生の手伝いが出る親友を、ノアは割と本気で尊敬していた。一番凄いののは、自分の生活の中心が先生となつていふことを、当のユウカが全く自覚してないことである。

そんなことをつらつらと考えていると、ノアの耳が足音を捉えた。顔を上げると、見知った顔がそこにあつた。

「やあ、ノア」

「こんにちは、ウタハ部長」

ミレニアムサイエンススクール3年生白石ウタハが、つかつかとノアの方に向かって歩いてきた。ウタハは秀麗な顔に笑みを張り付け、椅子に腰かけたノアを見下ろしつつ口を開いた。

「部長は止とどめてくれないかな。あくまで今の私はエンジニア部部长ではなく、シャーレ部員としてここにいるのだから」

「ふふ、そうですね。すみません、ウタハさん」

ノアは片手で口元を覆った。

ウタハはミレニアムサイエンススクールが誇るマイスター集団であるエンジニア部の部長であり、自身もまた優秀なマイスターである。ある意味では全知の明星ヒマリと同等かそれ以上にミレニアムの技術を支える重要人物なのだが、本人は気さくで畏まった対応を取られることを苦手としていた。

「今日は、どうされたのですか？」

「色々と先生に用事があったね。預かっていた指揮管制ドローンのメンテナンスが終わったからその返却と、あとは例のレポートの提出とか、色々だよ」

ノアの質問に、ウタハはドリンクサーバーでホットミルクを用意しながら答えた。先生が好物の砂糖たっぷりホットミルクは、シャーレカフェ人気ランキング不動の一位を誇る飲み物である。

ウタハの返事を聞き、ノアは目を細めた。

「例の……あの、2日前のですか」

「その通り。いや、まさかドクターの真似事をする事になるとは思わなかったよ」

ノアの真正面の席に腰かけながら、ウタハは苦笑した。長い脚を組み、ゆっくりとホットミルクを啜る。

2日前、ミレニアムにスクーターを服用した被害者、ゼルコヴァPMCの兵士、スクーターの売人がそれぞれパトカーで輸送されてきた。ユウカやノア、そしてエンジニア部は数時間かけ彼らから話を聞いたり身体検査を行い、スクーターについて調査を行った。その結果を、先程先生に提出してきたのである。

「本場に助かりました。突然の依頼だったのに迅速に対応していただき、感謝します」
ノアは会釈し、ウタハに微笑みかけた。

「なに、ユウカと一緒に先生からも頼まれたからね。先生のためなら何てことはない。ロボット住民の身体検査はあまり経験がなかったが、何事も経験だよ。慣れてしまえば、お手のものさ。それに……」

ウタハは一度口を止め、一口ホットミルクを飲んだ。飲み込み、再び話し出す。

「あのドリルも、役に立っただろう？ 正直、私も使い所に困っていたんだ」

若干眉を下げつつ、ウタハは小首を傾げながら言った。それを見ても、ノアは微笑みを浮かべたままだ。

ウタハが語った「あのドリル」とは、エンジニア部作業室の隅に置かれていた細いドリルのことである。エデン条約調印式の事件の後に、エンジニア部の猫塚ヒビキが短時

間で作り上げた代物だった。

「真夜中に作業室で仮眠とついていたヒビキが、気が付いたら寝ながら涙を流してて……起こそうと近付いたら急に起き上がって、そのまま凄く速さで作った物だよ。『先生のお腹に穴を開けた人たちに、同じ痛みを味合わせる』って呟きながら作ってたね。あまりにも鬼気迫っていたから止めることも出来なくて……結局、どうしたものかな、と」
ウタハは僅かに眉を下げ、ふう、と息を吐いた。マグカップをテーブルの上に置き、腕を組む。

先生の受けた痛みを返してやる。シャーレの部員として抱いて当然の考えだが、流石にアレはない。確かにキヴォトスの生徒の肉体に銃弾を貫通させるのは困難だが、だからと言って「じゃあドリルで風穴を開けてやろう」という発想はどうかと思う。

おまけに完成したのは、戦車の装甲版やトーチカはおろか、ミレニアムの地下シェルターに穴を開けられる代物である。しかも小型の人工知能まで搭載されており、誰がどう見ても拷問器具にしか見えない拘束台もセットで作られている。やろうと思えば使用者の音声による遠隔起動や操作も可能な仕組みだ。つまり使用者は、対象を間近で眺めつつ、音声でドリルを動かしたり停止させたり、ドリルのスピードをコントロールすることができる。ヒビキは一体、何を考えながらこんな仕様のものを作り上げたのだろうか。

無論のこと、ウタハだつてアリウスには怒りも恨みも抱いているし、目の前にアリウスが現れたら怒りで我を失う予感しかしないが、流石にあんな物を大真面目に作り上げた後輩が見せた、闇を溶かし込んだような虚無の眼には、正直かなり戦慄した。

それでもヒビキを諫めることはしているあたり、ウタハはアリウスに対して冷静でいられている方である。少なくとも、ウタハはアリウスに報復するための道具など作っていない。

例えばヴェリタスの小鉤ハレは、アリウスを心の底から憎悪していた結果、少し前まではヒビキの発明品がマシに見えるほど酷い物を複数製造している。しかし現在のハレは、先生を護るための各種道具を揃えることに興味が移っているようだった。それでも時折、ハレはアリウスへの恨み節を呟いたり射撃場に籠ったりして後輩の小塗マキを骨の髄まで怖がらせているのだが。

それは兎も角ヒビキの発明品にしては珍しくBluetooth機能も自爆機能もない一切の無駄を排除した、殺意と憎悪のみ込められた禍々しいドリルは、使われることもなく作業室に放置されていた。それでもヒビキは自分の発明品が可愛いのか、はたまた使うことを諦めていないのか、定期メンテナンスは欠かさず行っていた。

ため息をついて目を瞑ったウタハを眺めつつ、ノアは笑顔で答えた。

「ええ。ご存じでしょうけど……ユウカちゃんが有効活用してくれましたよ。あのドリ

ルとユウカちゃんの愛銃を使ったら、ゼルコヴァPMCの人も売人も、すぐに話してくれました。問題は信憑性の確認ですが、それはこの先、ヴァルキューレが行う尋問との整合性の確認やブラックマーケットへの調査などで明らかにするほかないでしょう」

だろうな、と内思いながらウタハは目を開き、笑顔を浮かべるノアの顔を見つめた。ウタハは兵士たちへの尋問を行った現場には居合わせていなかったが、ユウカが渡してきた尋問時の録画映像を後から見たので、尋問の光景は知っていた。

拘束台とドリルを見せつけられて、さらにユウカのサブマシンガンの銃口を眉間に押し当てられた挙句、あんな怒りと憎しみをドロドロになるまで煮詰めたような瞳で睨まれた上に、おどろおどろしい声で脅迫までされれば、訓練を受けた兵士でも耐えられなだろう。見ていただけのウタハすら、若干背中に冷や汗をかいたほどである。地獄の底から響くような声は、ホラー映画も裸足で逃げ出すほどのものだった。

勿論、だからと言って同情などはしないが。あの連中が行った攻撃で、先生が負傷する可能性があったのだ。先生を意図的に狙っていなかったとしても、そんなことは関係ない。キヴォトスの住民なら、流れ弾や誤爆の恐ろしさは誰でも知っている。先生の近くで火炎瓶を投げようとしただけでも、到底許せる話ではない。

一瞬僅かに顔を顰めたウタハはホットミルクを啜り、理知的ながらも冷たい光を放つ瞳をノアに向けた。

「そうだね、色々話は見えてきたようだけど……肝要なのは、裏付けだ。慎重に進めていこう。このままでは、事件が起こるのはD・U・だけでは済まなくなる可能性が高い。いや、もう起こっているのかもしれないね」

ウタハの目を見つめ返し、ノアは笑みを崩して真剣な表情を浮かべた。そして片手を頬に添えて静かに息を吐く。

「全くもつてその通りです。全容はまだ掴めていませんが、早く先生に——」
「おや、先客がおりましたか」

口調こそ丁寧だが、極僅かに苛立ちを含んだように感じられるノアの声は、突如割り込んで来た第三者の声に遮られた。

ノアとウタハが声が出した方に視線を向けると、小柄な生徒がカフェの透明な自動ドアを通り抜けてきたところだった。

「ああ、これはこれは……久しぶりだね、イロハ。そういえば、貴女は今日当番だったね」
「お疲れ様です、イロハさん。今日はもう、休まれたのでは？」

首だけ後ろに向けたウタハが微笑み、片手を上げて歓迎の意を示した。ノアも同様に笑みを浮かべつつ小さく会釈し、少女を出迎えた。

「これはどうも、ウタハさん。ノアさんも、先程ぶりですね」

2人に見つめられた少女、ゲヘナ学園2年生棗イロハは僅かに肩を竦め、ノアの質問

に答えることなく、ドリンクサーバーに向けて歩いて行った。

イロハはノア同様本日当番だったが、明日休日なので今夜はシャーレで寝泊まりする予定であった。しかしいつもと同様に万魔殿バンデモニウム・サエデーの制服を着込んでおり、外套がいでうも着用している。とても就寝準備に入った姿には見えない。

「不躱ですが、一緒しても？」

ホットミルクがなみなみと注がれたマグカップを乗せたトレイを両手で持ちつつ、イロハが2人に話しかけた。

ノアとウタハは一瞬だけ目を合わせ、同時にイロハの顔に視線を向けて首肯した。代表してウタハが声をかけ、自分の隣の席を指差した。ついでに椅子も引いてイロハを誘う。

「勿論だとも」

「ありがとうございます」

感謝が込められているとは到底思えない平坦で無機質な声でお礼を言いつつ、イロハはウタハが引いてくれた椅子に座った。被っていた制帽をさらに隣の椅子の上に置き、ホットミルクを静かに啜る。そしてすぐにマグカップをテーブルに置き、静かに話し出した。

「……先程のノアさんからの質問の回答ですが」

そこまで言って、イロハは藤色の瞳をノアとウタハに向けた。

「仮眠室でユウカさんから連絡を頂きましたね」

「ユウカちゃんから、ですか」

ノアは小首を傾げた。今日はユウカはシャーレ当番ではないし、シャーレオフィスに来てもない。セミナーの執務をしつつ、スクーター対策のために互助会のグループチャットでシャーレ部員の何名かと話をする予定だったはずだ、と親友のスケジュールを思い出しつつ、イロハの人形のような無表情を見つめ返した。

「ほら、そろそろアレが再開予定でしょう。次のアレはゲヘナで実施予定でしたので……私、ユウカさんから今回のアレの企画を頼まれていたんですよ。だから、色々やりとりをしていたんです。そうしているうちに頭が冴えてきてしまいました……」

明日は朝から先生の書類仕事をお手伝いして早めに先生をサボらせるつもりでしたし、そろそろシャワーでも浴びて部屋着に着替えようかとしていたのですが。全く、目が覚めてしまいましたよ。なのでホットミルクをいただこうかと」

「成程ね、しかし、アレとは……ああ、シャーレ演習か」

一瞬考え込んだウタハがすぐに納得し、マグカップをテーブルの上に置いて顎先に指を当てた。

「そうか……前回の演習から大分間が開いたからね。そろそろ再開しないと、か……」

自律戦闘機械オートマタの補充も終わっている頃か」

「……ええ」

低く、静かな声でウタハの言葉に相槌を打ちつつも、イロハは俯き、ゆっくりとホットミルクを一口飲んだ。その瞳は昏く、濁っているようにすら感じられた。まるで、今にも崩れ落ちそうな印象を受ける。

そんなイロハの仕草を見ても、ノアは笑顔を浮かべたままだ。しかしその内心は複雑で、小さな炎が幾つも胸の奥で生まれては混じっていった。

イロハもまた、エデン条約調印式の事件で心に傷を負った生徒の一人だった。不憫極まりないことに、イロハは自分の上司がアリウス分校と手を組んでいた挙句に、アリウスより送られた飛行船に爆弾を仕掛けていたために爆発と墜落に巻き込まれて自分も負傷している。

イロハは万魔殿バンデモニウム・ソサエティ議長羽沼マコトの側近のようなポジションに就いているが、身分としては議員の一人に過ぎず、マコトの暗躍に全く気付くことが出来なかった。ノアからすれば腹立たしいことこの上ないが、マコトの情報網もそれを活かすマコトの能力も本物である。

その結果がイロハ自身（とマコトと他議員数名）の負傷と、寝て起きたら先生が撃たれていたという衝撃である。

悲劇はさらに重なった。爆発した飛行船には調印式に参加した万魔殿バンデモニウム・ソサエティの議員全員が乗り込んでおり、奇跡的に無傷で済んだイブキを除いて全員が長時間気絶した程の被害を受けていた。とはいえ気絶した生徒も、アフロになった者（マコト）を除けば多少身体が焦げた程度で済んでいた。骨折などの重傷を負った生徒はいない。

これだけならば、飛行船墜落事故にしては僥倖といえるほど些細な被害に過ぎなかった。寧ろなんでこの程度の被害で済んだのかと、トリニティのみならずゲヘナ（というか、風紀委員）まで驚愕した程であった。

しかし、万魔殿バンデモニウム・ソサエティの議員の大半が同時に、しかも長時間気絶したことそのものが最悪であった。よりにもよって、マコトは万魔殿バンデモニウム・ソサエティの中核となる有力な議員全員を飛行船に乗せていたのだ。そのお陰で万魔殿バンデモニウム・ソサエティはマコトたちが気絶している間、実質的に機能停止に追い込まれた。主要議員がごっそり消えたゲヘナ自治区の本部も同様である。

このため、万魔殿バンデモニウム・ソサエティが調印式における諸戦闘の顛末を把握したのは、調印式的事件終結後より数時間後の話であった。

その結果、イロハは先生がアリウス分校の者に撃たれたという事実を、事件終結後になって漸く把握した。恥も外聞もなくキレ散らかすアフロ怪人マコトを美容院に叩き込み、のんびり万魔殿バンデモニウム・ソサエティ本部に帰還した後で、である。その時のイロハの狼狽ぶりは、周囲

の議員が唾然としたほどだったらしい。普段のダウンナーな雰囲気など放り捨てるほどにイロハは激怒し、同時に見苦しいほどパニックになったそうだ。

この顛末を聞いてしまえば、アリウスと共謀した万^{パンデモニウム・ソサエティ}魔殿に怒りを抱いたシャーレ部員も、イロハにだけは同情をせざるを得なかった。

元よりイロハは、マコトの独断専行に何一つ関わっていない。マコトの企みを見抜けずに、結果的にアリウスによる先生襲撃の助けをしたマコトを止められなかったのを糾弾するのは容易かったが、単にマコトの部下というだけでイロハを責めるのは不条理である。

それにマコトも、アリウスがよもや先生の殺害を目論んでいたなど想定外であった。マコト本人もトリニティと風紀委員会を狙っただけに過ぎず、先生を傷付けるつもりなどなかった。先生が調印式に参加する可能性は容易に想像できたはずなのに、アリウスに手を貸していた時点でシャーレ部員に言わせれば死刑^{ギルティ}ものだが、アリウスを吊した（文字通りの意味で）後なら兎も角、アリウスに報復せずにマコトに報復をするというのも道理ではない。そしてマコトを責める前に、イロハを責めるのは輪を掛けて道理がない。

ノアもまた同様だった。アリウス分校と組んだという点では万^{パンデモニウム・ソサエティ}魔殿を不倶戴天の敵に認定したい所存であるが、上司に振り回された上に乗っていた飛行船が爆破さ

れて、気絶して目が覚めたら先生被弾のニュースを聞かされたイロハには、憐憫を掛けずにはいられなかった。マコトについてはどうでも良い。アフロじゃなくてハゲになればよかったのに。

しかし、だからといってイロハにあからさまに同情を寄せるのも憚られた。イロハ本人は決して口にしていないが、彼女の怒りの矛先はマコトでもアリウスでもなく、自分に向けられているのではないか。ノアには、そう思えてならなかった。だとすれば、同情どころか下手な気遣いすらも逆効果だ。

そんなノアの思いを知ってか知らずか、イロハは抑揚を抑えた声で再び話し出した。「それで、折角ですので……次のシャーレ演習は、次の標的を潰す練習も兼ねたいと思いましてね。私も首を突っ込ませていただきました。既に、ユウカさんから今回の事件のデータはいただいていますよ」

「……成程、そういうお考えですか」

バンデモニウム・ソサエティ

感情が込められていない声を聞き、ノアは笑顔を浮かべたまま頷いた。イロハは万魔殿きつての頭脳派であり、そして常に冷静沈着だ。激情を抑えて静かに、そして着実に成果を上げる。

「はい。協力していただけますね？ 皆さんで力を合わせて、準備をしていきましょう。私たちの共通の目的のために。何よりも——」

「まだ熱いホットミルクを音を立てずに啜りながら、イロハは瞳を僅かに細めた。」

低い声が、騒音一つ聞こえないカフェの中を満たした。

シャーレ演習

シャーレ演習①

シャーレでは生徒が定期的に集まり、合同で訓練や戦術研究等が行われる。当初は部員同士の軽い模擬戦闘に過ぎなかったそれは、やがてドローンや自律戦闘機械オートバトルマシが投入されるようになっていき、部員と予算と先生の人脈が増えるにしたがって種類が増えて規模が大きくなっていった。そしてシャーレ始動より数カ月が経つ頃には、一月に一度の頻度で数十人の生徒が集まって行われる「シャーレ演習」という大規模な訓練が行われるに至っている。

このシャーレ演習は、もともと「これまで一度も一緒に任務を経験したことがない部員同士が組んで、即席チームを編成して訓練を行う」ということを目標に実施された。どんどん部員が増加していく中で、当番全員が互いに初対面という事案が何度か発生したことにより、兎にも角にも実戦前に最低限度の連携が出来る程度には訓練をしたいと部員たちが考えて先生に意見書を提出し、実施されたのである。

第一回目の演習は、ヴァルキューレなどが使用しているD・U・最大規模の演習場を借りて行われた。敵役としてオートマタを大量に用意してくじ引きで即席チームを複

数作り、敵集団を殲滅するまでの時間や技術を競いつつも、それを鑑賞したり映像を分析したりすることで互いに評価するという内容である。当時のシャーレ部員のうち、約三分の二が集まるというこれまでのシャーレで行われた各種訓練の中でも類を見ない規模のものであった。

シャーレという組織においては初めての規模の演習ではあったものの、準備が万全に整えられ、緻密に計画されて実施された演習である。先生も含め、誰もが成功を確信していた。

結果を言えば、演習は概ね成功した。先生が日頃頑張っている部員たちを労う意味も込めて、よりにもよって当日のサプライズで部員たちに演習結果による「ご褒美」を提示したことで、演習が辺獄リンポの現出と化した挙句にチーム対抗戦と名付けられたバトルロワイヤルとなったこと以外は。

ゲームではないので、当然の如くフレンドリーファイアも有効であった。敵役としたオートマタが戦闘開始数分で殲滅され、本番だと言わんばかりに部員同士の模擬戦闘（ガチ）にシームレスに移行していく光景は、先生からすれば悪夢であっただろう。

ともあれ部員全員が満足しているのです。きつと成功である。部員たちが喜んだのは、決して果て無き潰し合いに発展しそうになつたことに危機感を覚えた先生が、参加した部員全員にご褒美を約束したからではない。なお、参加できなかつた部員たちが暴動を

起こしそうになったため、先生は最終的に、あの手この手で全部員を労わっていくこととなった。

頭を抱えた先生がご褒美について再考しようとしたが、理詰めと感情の集中砲火（泣き落としとも言う）を食らったため、続く第二回以降のシャーレ演習も、先生からのご褒美付きという点は継続した。その結果シャーレ演習は、いつの間にか「部員皆でわちやわちややって先生からご褒美貰えるイベント」と化していた。演習場や敵役などは都度都度変わっていったが、先生からご褒美が得られる点と、「部員同士の連携を強化する」という目標は変えられることはなかった。

勿論、シャーレ部員たちが満足したのはご褒美の名の下、先生とデート等が出来たからだけではない。実際に得たものは大きかった。

強者であるシャーレ部員との模擬戦闘（ガチ）を行えたこと、それらの戦いを間近で見ることが出来たこと、実戦前に初対面の部員と一緒に模擬戦闘をする機会を得られたこと、何れも大きな収穫である。

しかし、エデン条約調印式の事件により先生が負傷すると、シャーレ演習の実施は一時中断した。先生の体調回復が優先されたこと、部員の過半数が精神に多大なダメージを負ってしまったことなどが主な理由である。

そんなシャーレ演習が、久しぶりに実施されることとなった。

「——というのが、シャーレ演習の歴史です」

「うわぁーお……」

隣に座る少女からその話を聞かされたミカは、思わず呻いて少女の顔を見返した。正直言つて、先生からご褒美（それも演習結果によって内容が変わってくる）を提示されれば、自分もやる気が満ち溢れるあまり隕石を落とす気しかなかったが、そんな模擬戦の皮を被ったガチ抗争が演習という名で行われていたとは。完全に初耳である。

演習当日。D・U・東部公園でミカたちが戦闘を行つてから10日後の日付である。予め今回の演習に参加の申し込みをしていたミカは、集合時間に間に合うように早朝に車に乗ることになった。

今回のシャーレ演習はゲヘナ学園自治区で実施される。トリニティ総合学園自治区とゲヘナ学園自治区は隣接しているが、トリニティとゲヘナを直接繋ぐ電車の路線はなく、電車移動の場合は態々別の自治区を経由してゲヘナに入るしかない。しかし物理的に境界線が閉鎖されているわけではなく、荒れ放題とはいえ一応舗装された車道と歩道は何本か通っているの、徒歩か車両で越境することができる。

電車移動が一番安全だが、他の自治区を経由する上に直通電車はないので乗り継いでいかなければならず、距離に対して呆れるほど時間がかかる。徒歩か車を選びたいとこ

ろだった。

しかしトリニテイとゲヘナの境界線近辺は、トリニテイ側、ゲヘナ側双方極めて治安が悪い。ゲヘナの場合は大抵の場所が治安が悪いのだが、トリニテイとの境界線地域は格段に治安が悪い。ティーパーティーにしろ、万魔殿バンデモニウム・ソサエティにしろ、自分の傍から遠ざけたい嫌なものを、憎い相手の近くに追いやるといふ姑息なハラズメントを長年に渡って行い続けてきた結果である。

そこで、早朝のうちにさつさと治安が特に悪いエリアを突き抜けることとなった。

トリニテイ側にしろ、ゲヘナ側にしろ、境界線近辺で活動しているのは路上での強盗を生業とする不良集団程度である。彼女たちは越境する一般市民や生徒を気ままに襲撃するが、早朝から熱心にエリア中に人員を配置し、全てを見逃さぬように徹底的な監視網を構築しているわけではない。所詮、欲望と娯楽のために強盗をしているだけの連中だ。強盗の主な目的は日銭稼ぎであるが、それしか稼ぐ手段がないわけでもない。強盗にエンカウントせず通り抜けるための隙は幾らでもあった。

故に、車に乗っているシャーレ部員4人は特に緊張する様子もなく、努めてリラックスしていた。キヴォトスでは治安が悪いエリアであろうとも、ただ車で通り抜けているだけでいちいち極度に気を張っていては身が持たないのだ。

「じゃあ、やっぱり今回も部員同士の模擬戦とかする感じなのかな？」

コンデイションが悪い道路のお陰で定期的に揺られつつも、大して気にしていない様子のミカは、隣に座る少女を見つめたまま尋ねた。

「そうですね。……メインではないかもしれませんが、可能性は高いと思いますよ」

ミカの隣に座っている少女、トリニティ総合学園2年生鷺見セリナは小首を傾げつつ、ミカの目をまつすぐ見返した。所々破損しひび割れもみられる道路を、それなり以上の速度で突っ走っている小さな車体は、時々ゴトゴトと揺られているが、ミカと同じようにセリナも特に不満には感じていないようで、微笑みながら医療道具が入った鞆と愛銃を両腕で抱えている。

「シャーレ演習は毎回企画する部員とそのお手伝いの方々……私たちは『演習実行委員会』と呼称していますが、その実行委員会の方々全て取り決め、先生の認可を得ます。つまり、先生が主導することはほぼありません。

実行委員以外の部員の方々は、演習の内容をほぼ把握しておりません。いつも、当日に開始直前で演習の具体的な内容を知られることが多いです。

これは、演習で想定されている作戦が、『先生が何らかの事情で作戦の指揮管制が不可能な状態で、緊急で行われる特別作戦』というパターンが多いためです」

「つまり、何をどういう風にやるのかは現地に行かないとさっぱりわからない、と」

セリナの説明を聞いて、ミカは髪の手を指で弄りながらため息をついた。

「その通りです。シャーレ演習は、基本的に『先生の指揮管制や各種支援が行われない戦闘』を想定しています。先生の指揮を前提とした訓練だと、私たちは先生のご指示に従っていれば良いだけの訓練になりますから。」

シャーレ演習は部員同士の連携を強化するだけでなく、先生の指揮がない状態で部員たちがどのように連携し、どのように行動するかを先生にチェックしていただくための演習でもあります」

そんなミカに前方、つまり運転席に座っている少女が話しかけた。前を見つめたまま、丁寧に運転をしているのは、トリニティ総合学園2年生の守月スズミである。

スズミはユウカと並びシャーレ最古参の部員であり、シャーレ演習には毎回欠かさず参加している数少ない皆勤賞メンバーである。今回、ミカが互助会のチャットグループに参加を表明したことで、ミカのサポートを自ら申し出てきてくれたのだ。今回、運転手役も自ら買って出てくれた。

スズミが口を閉じた直後、車が一回大きくバウンドした。

「……つと、失礼しました。ナビゲーションシステムより入手した事前情報よりも、道路の状態が遥かに悪いですね。弾痕も多いですし……ああ、あそこにも大穴があります……何者かが携行無反動砲でも撃ち込んだようですね……」

若干顔を顰め、スズミは息を強めに吐いた。口調こそ丁寧で穏やかだが、内心は些か

荒れている様子である。そして助手席に座る少女を一瞥する。

「ウイさん、大丈夫ですか？ 車での移動は苦手だとお伺いしておりましたが」

「……あ、いえ……。お気になさらず……」

助手席に座っている少女、トリニティ総合学園トリニティ総合学園3年生古関ウイは俯いていた顔を上げ、スズミの横顔に首を向けた。口ではそう言いつつも、一目瞭然なほどに顔色が悪い。

「せ、先生のためならば、この程度は何てことはないです。ゲヘナに行くのも初めてですが、だ、大丈夫です。体調も整えてきましたから……」

車酔いを起こしているのだと誰もが思うほどの顔色だが、意外にも吐き出される声は小声であるものの、しっかりと聞き取ることが出来る程度には滑舌が良い。快活とは到底見えないが、体調が悪くないのは事実らしかった。つまり、この顔色が彼女の素なのかもしれない。

「それにしても、意外かな。ウイ図書委員長が参加するなんて。そりゃ、私よりずっと前にシャールレに入部していたことは知ってたけどさ……正直、名ばかりの参加であんまり部員として活動していないと思っていたよ」

ミカがウイの後頭部に視線を向けつつおどけたように笑いながらそう言うと、ウイはミカに顔を向けることなく、窓から外の景色を見つめながら返答した。

「……あー……そう思われますか……ミカさん。いや、まあ、確かに当番の日以外でシャーレにお邪魔している日は、他の部員に比べると少ないかもしれませんが……。一応言っておきますけど、ちゃんと当番の仕事はしていますし、演習や合同訓練も時間があれば参加していますよ。

ああそれと、今は私のことは図書委員長と呼ばないでください。今の私は、シャーレ部員ですのぞ」

小声だが、はつきりとした物言いだった。それを聞いたミカは肩を竦め、苦笑しながら手をヒラヒラと振った。

ウイはトリニティの図書委員会委員長を務める生徒で、別名「古書館の魔術師」と呼ばれる優れた古書復元技術と管理能力を持つ。優秀かつ、歴史の解明と伝統維持に心血を注ぐトリニティにおいては欠かせない重要な生徒なのであるが、超の付く引きこもりで人嫌いであるため、滅多に古書館の外へ出ることがない。

お陰で一部の生徒からは伝説のように扱われており、幽霊だの人間に偽装されたAIだのティーパーティーが生み出した架空の人物だの散々な言われ様となっている。

但しシャーレ部員となって以降は以前の数倍（つまり常人の数分の一）は外出するようになつており、以前より目撃例が増えているようだった。

ミカはティーパーティー時代に何度かウイと顔を合わせたことがある。ウイは引き

こもりだが、脆弱でも臆病でもない。寧ろ我が強いタイプの子供である。そんな彼女が自らの生き方(?)を捻じ曲げてでもシャーレオフェイスに出入りしまくっているのは、どうやら真実だったらしい。

「……私の方も驚いていますよ。ミカさんの戦闘能力の高さは噂でしか知りませんが……それでも、他の部員の人たちとの演習なんて不要なくらいに強いつて聞いていますから」

「えっ、そうかなあ?」

ウイに言い返され、ミカは困ったように眉を下げた。確かに自分は単騎で敵の集団のど真ん中に突貫して暴れまわる戦略や、遠方から神秘の力を駆使して隕石を落として先制攻撃を仕掛けるといった戦略が基本ではある。それらを戦略と呼んで良い物かは自分でも疑問であるが、兎に角そうである。

そう、神秘の力での隕石落としてである。実はミカは神秘の力を使い、隕石を好きなタイミングで落とすことが出来る。比喻でも何でもなく正真正銘の隕石^{メテオ}である。ミカはこの隕石落としを隠し玉としているが、実際のところ、恐ろしく使い勝手が悪い力でもある。

ミカの隕石落としては、落下地点を精密にコントロールできるわけでもなく、下手をすれば自分も被害を受ける。おまけに落下までにタイムラグもあり、その間自分は神秘の

力の行使に集中していなくてはならないため無防備になる。しかも落下地点を中心に地面に大規模な隕石孔クレーターが出来るほどの破壊力があるので、滅多に使わない。ミカの記憶している限りでも、もう1年以上は使用していないはずである。当たり前だが、地下での聖女バルバラとの戦いでは使用していない。

お陰でミカの戦闘能力を把握している者たちすら、ミカの神秘の力が「強靱な肉体」だけでなく「隕石落とし」もあるということを知らない。トリニティですら、ミカの隕石落としの詳細を把握しているのはティーパーティーのセイアとナギサくらいである。トリニティのことは大抵把握している浦和ハナコさえも、ミカの隕石落としについては知らない。ミカ自身が殆ど他者に話していないので、無理もないが。

「別にミカさんを悪く言う意図はありませんが正直に言わせていただきますと、ミカさんの戦い方は味方を帯同してチームで多対多を戦うより、ミカさんのみで単独行動をして敵陣への突入と離脱を繰り返して、敵戦力の漸減せんげんを図るか、或いは敵陣のど真ん中に留まって敵を攪乱・分断させるかが、ミカさんに合っていると思います。

おそらく、先生もミカさんを使うとすれば、そうされるのではないでしょうか」

台詞回しは遠慮がちな様に装っている風を感じられつつも、淀みない言い様で淡々と言葉を吐き出すウイに、ミカは面白くなさそうに冷めた目を向けた。

この子、こんな風にずかずかと長い台詞を言ってくるタイプだったつけ。

そう思いつつ、嘸みつく気にもなれなかつたので、ミカは無言で手をぞんざいに振って不満そうに唇を結ぶに留めた。

その直後、車が先程よりも激しくバウンドした。

「…………と、と…………」

小声で独り言を呟いたスズミが素早くハンドルを操作した。言い方に反して表情は殆ど動いておらず、冷静そのものである。

「すみません、セリナさん。現在時刻は？」

「はい、7時45分です」

「ありがとうございます。…………そろそろ出発して1時間ですね」

前方から目を離さずにスズミが質問すると、セリナが即答した。セリナが抱えている鞆には懐中時計が括り付けられており、セリナはスズミが時刻を聞くよりも先に懐中時計の上ハンターケース蓋の開閉ボタンを押していた。

現代ではトリニティのような伝統と格式を拘る自治区以外は需要が少ないと思われるがちな懐中時計であるが、セリナのような医療に携わる者には懐中時計の愛好者が少なくない。特に面倒なハンターケース型懐中時計は、医療関係者から人気が高い。脈の測定などで時計が必要な場合、腕時計では手洗い時に手首の洗浄が出来なかつたり等不便だか

らである。

察しが良く即答してくれたセリナに、スズミは笑顔を浮かべてお礼を言いつつ、視線を上上げて空を見上げた。出発時にはまだ薄暗かった空は、今ではすっかり日が昇っている。

「対向車も後続車もほとんど見られませんが、道路のコンディションが想定を下回っているためか、予定より少々遅れていますね。この車自体は目立つものではないと思いますが……何せ他に車が見えませんかから、標的にされやすい状態です」

スズミは僅かに眉根を寄せてため息をついた。

ミカたち4人を乗せたこの車は、トリニテイのティーパーティー（正確に言えば、フィリウス分派が保有するゲヘナ自治区との境界線を警備する警邏隊^{けいら}）が保有する偵察、巡回用の軽装輪装甲車である。最低限度の装甲を持ち、パンクしても100キロ程度は走り続けることが出来るランフラットタイヤを採用している。本来はRWS（遠隔操作式の銃塔）を装備しているのだが、今回はゲヘナに乗り込むことを理由に取り外しており、車体もトリニテイ境界線警邏隊の所属であることを示すインシグニア（部隊マーク）は消され、民間モデルに見せかけるように派手なパール色に再塗装されている。

この日のために、ナギサからミカたちに貸し出された車両だった。

「やっぱり纏まって移動した方が良かったのでしょうか？ 他の車の方々も心配です

ね」

セリナが窓の外を眺めながらぼそりと呟くと、スズミがそれに反応した。相も変わらずコンディションが悪い道路に悪戦苦闘する素振りを見せずに慎重に運転しつつも、セリナの不安を払拭するように穏やかな口調で話しかけた。

「いえ、何が起ころかわからないですし、やはりバラバラにゲヘナに向かう方が正解でしょう。隣の自治区に行くためだけに、まるで隠密作戦のような行動をとらなくてはいけないのは気が重いです……」

「ゲヘナの万魔殿バンデモニウム・ソサエティに期待をかけるだけ無駄ですよ。あちらからゲヘナでのシャーレ演習を求めておきながら、越境するための便宜どころか情報一つ寄こさないくらいですから」

スズミと比べ、刺々しい口調と低い声でウイが顔を顰めながら言った。内心それに全力で同意したいミカだったが、喋りだすとゲヘナへの皮肉と罵倒があふれ出そうだったので自重し、手持ちの鞆から水筒を取り出して、トクトクとコップに注いでいく。

この車に乗っているのはミカ、スズミ、ウイ、セリナの4人だけであるが、今日のシャーレ演習に参加するトリニティ生徒はこの4人だけではない。この車の他に別の車が複数、出発時間や移動ルートを変えてゲヘナへと向かっている。この移動方法を提案したのは正義実現委員会副委員長の羽川ハスミであるが、彼女が心底ゲヘナを信用し

ていないのが良くわかる越境方法である。

そして万魔殿バンデモニウム・ソサエティ側から越境方法の指定も支援もこれといって特になかったの
で、結局ハスミの提案がそのまま採用された。

何か妙なものを運んでいるわけでもないのに、まるで密輸でもしているような気分になつてきたミカは、時々揺れる車体など気にも留めずに、コップに注がれた紅茶をゆつくりと呷つた。

出発前にナギサからもらつた、ナギサ愛好の紅茶である。まるで椅子テーブルとティーセットとともに移動していると思われがちで、そしてあながち間違いでもないナギサであるが、意外にも紅茶を水筒に入れて持ち運びすることに抵抗はないらしく、ミカや部下たちに紅茶入りの水筒を労いのため渡すことが結構ある。

「シャーレ演習の集合時間は9時。余裕は十分ありますが、気を引き締めていきましよう。そろそろゲヘナとの境界線に入りますよ」

スズミが丁寧に説明し、車の速度を僅かに落としたり。その声につられ、ミカは前を見つめた。

幼児が積み上げた積み木のような不格好なバラック小屋の群れが視界に飛び込み、ミカは思わずため息をついた。

シヤールレ演習②

「はい、越境しました。ここから先はゲヘナです」

スズミはそう言つて、何故倒れていないのか不思議なほどに斜めに曲げられている道路標識を一瞥した。錆と煤で汚れた境界線を示す標識は交通量が極めて少ない幹線道路に設置するには不釣り合いなほどに立派なものであり、そうだからこそ視界に入れるだけで憂鬱になりそうな雰囲気を感じていた。

「セリナさん」

「現在時刻、8時10分です」

「ありがとうございます」

スズミはセリナに向かつて礼を言うと、片手でハンドルを握りつつ、もう片方の手で運転席の脇に掛けてあつた愛銃のアサルトライフル「セーフティー」を手繰り寄せた。さらに席の下に仕舞つていた靴を取り出し、それを膝の上に乗せる。淀みない仕草で戦闘準備をしつつも、何てこともないかのようなひどく落ち着いた声で独り言ちた。

「さて、来るでしょうか」

「どうですかね」

ウイも愛銃のスナイパーライフル「ポリウムサプレッサー」を両手で抱え、スズミと同じように他人事のように返事をした。声からはやる気が感じられないが、細められた目からは鋭い光が放たれている。若干隈が残っているし顔色は不健康の極みといった具合であるが、それでかえって迫力が増していた。

「演習場は……境界線を越えて進めば、車だと20分もあれば到着するね」

「はい、境界線から然程離れていません」

ミカが窓を眺めながらため息交じりに言うと、セリナが即座に返事をした。ミカとしては誰かに返事を求めたつもりはなかったが、それでもセリナの即答がありがたかった。誰かと会話をしていた方が気が楽だ。

そう思ってしまうほど、気分は何処までも憂鬱だった。鉛色の雲を見上げつつ、ミカは愛銃を構える。

今更戦闘を恐れたりはいないが、ゲヘナ自治区で自分がゲヘナ生徒と戦うことになるかもしれないという可能性そのものが、ミカの心に小さな棘となつて食い込んでいた。

ゲヘナと戦争をする。自分がクーデターの時に掲げた計画。結局、先生に向かつて悪役面を作つて高らかに言い放つた癖に、宣言から数十分で頓挫した。いや、最初から計画として始まつてすらいなかったのかもしれない。

その後、こうして自分は戦争をするわけでもないのに、ゲヘナの道路を走る車に

乗っている。目の前に見えるゲヘナの風景は、優雅さの欠片もないバラック小屋の群れは、自分が本当に戦争を仕掛けていたら、まず間違ひなく消滅していたはずの風景だった。自分の計画では塵と化すはずだった街並みを、水筒と銃片手に車の中からのんびり眺めている。

ここで暮らすゲヘナの生徒たちにも、殺意どころか嫌悪すら湧かない。滅ぼさうなほど、到底思えない。寧ろ遅刻なんてしたくないからゲヘナ生徒は自分たちを無視してほしい、などと考えている。不要な戦闘などしている暇などない、と自然に考えてしまう。滑稽すぎて、もはや自嘲するのも億劫だった。

「言うまでもないことでしょうが……」

そんなミカの心境など知る由もないスズミが、片手運転で器用に道路に空いた穴を避けながら淡々と言った。声は平坦だが、不思議と冷たさは感じられない。先程と同様、流れるように戦闘を準備しつつも、リラックスした声だった。

鞆からスズミが取り出したのは、キヴォトスで一般的に流通している閃光弾スタン・グレネードだった。

「私たちのすべきことは、時間までに演習場に到着することです。仮にこのエリアで戦闘を仕掛けられても、反撃や敵の無力化よりも先に進むことを優先します。余程のことがない限りは車は止めませんし、降車して戦闘をすることはありませんので、そのつも

りをお願い致します」

スズミの声に、ミカを含めた3人が異口同音に同意を示した。スズミの言葉は口調こそ丁寧だが、実質的な命令だった。演習場に着くまでは、この4人のグループはスズミをリーダーとすることに全員が同意していたからである。無論、ミカも納得している。

スズミはトリニティ自警団の一員である。自警団はトリニティにおける非公認の治安維持組織という、トリニティでも異色の武装集団だ。トリニティ最大の治安維持機関である正義実現委員会がティーパーティーの直下組織であるが故に、時に敵対派閥のために動くことが出来なかつたり、ティーパーティー内部の意見対立によつて機能不全に陥りやすいため、これを補完する組織として設立されたのが自警団である。

そのように言えば聞こえはいいが、実際は有志が自警団を名乗つて知人友人と連絡を取りつつ、好き勝手に動いているだけの組織である。故に組織としての体裁をなしていないとすら言える「集団」であり、明確な指揮系統すら確立されていない。一応、自警団団員ごとに担当エリアを決めてパトロールをしていたり、場合によつては他の団員に協力するため連絡網程度は確保されているのだが、基本的にはそれぞれの団員が独自判断で誰からの命令も了承も得ずに動いている。当然非公認なので、自警団団員による不良生徒の取り締まりは「私刑」に過ぎない。それでも問題視されないのは、自警団の存在と活動はティーパーティーの認可を得ていないが「黙認」はされているからである。

トリニティにおいて派閥や政治的思惑など完全に無視できる存在であるため、場合によつてはティーパーティーの敵対派閥に躊躇なく協力し、正義実現委員会と対立はおろか、実際に交戦することすらある。敢えて悪く言えば、「正義実現委員会が頼りにならないから、こつちはこつちで好きにやらせてもらうぜ」という考えで生まれたのがトリニティ自警団なのだから、正義実現委員会と対立するのも無理もない話である。

言い換えれば、自警団は正義実現委員会と異なり、ゲヘナとの戦争など考える組織ではない。実際にゲヘナがトリニティ自治区に侵攻すれば立ち上がるだろうが、少なくともゲヘナとの戦争が起こったとしても、正義実現委員会のように真つ先に駆り出されることはない組織である。

このため同じ治安維持組織でも、自警団はゲヘナに対しては無関心な者が多い。そうだからか、スズミはゲヘナの街並みを無感動な瞳で見つめていた。

スズミの発言は全くもって正しいし、同意できる。しかし、まるで「ゲヘナ生徒に会つても喧嘩を売つたりするな」と念を押されているような気分になって、ミカは小さくため息をついた。明らかな誤解である。正確に言えば、卑屈な自分の心による曲解である。意図的にシャーレ部員の発言を、自分への文句に変換してしまう自分の脳にうんざりしつつ、ミカは胸の奥に立ち込めてきた感情を隠すためにスズミに問いかけた。

「ところで、道路は大丈夫？ コンデイションが悪いとかじゃなくて、IED（即席爆弾）

とかが仕掛けられていたりしないかな？」

「IED」は有り合わせの銃弾や砲弾、道具を使って作られる手製の爆弾のことである。手製であるが故に作動方式や破壊力はバラバラで、探知も予測も困難という厄介な代物だった。キヴォトスでは強盗が獲物の車が通行予定の道路に予め仕掛けておくことが多い。

車ごと吹っ飛んだところでこのメンバーならかすり傷を負う程度だろうが、足がなくなつて遅刻してしまうことは避けたい。ミカにとっては初めてのシャーレ演習なのだ。初回が遅刻など格好がつかないにも程がある。格好がつかないだけでなく、他の部員に迷惑がかかるだろう。是が非でも避けたい事態だ。

「無論、確証は提示出来かねますが、IEDや地雷は心配ないと思います。この道路はこのエリアで暮らす生徒たちも日常的に使用している幹線道路ですから、無差別に起爆する地雷や爆弾は設置できないはずです。

遠隔操作で起爆するIED等にしても、高速で移動する車を巻き込むには常時道路を監視し、適切なタイミングで起爆させる必要があります。予め私たちがここを通過することを把握した上で襲撃の計画を立てて用意しているのなら兎も角、たまたま私たちを見かけて即座に用意するのは難しいでしょう。

それにこの手の車両を狙うタイプの強盗の場合、狙うのは輸送トラックや現金輸送車

両が多いです。有り合わせの物で作る手製爆弾とはいえ、ローコストですがタダではないですし、小型の装甲車に使うのもつたいないと感じるのではないでしょうか。

小型の装甲車を足止めして襲ったところで、得られるのは乗員の持ち物くらいだと思いますよ。装甲車なら乗っているのは間違いないで武装組織に所属する生徒かPMC等で、一般住民の可能性は著しく低いですから、人質にとるのも大変だと思うでしょうし」

ミカの問いに、スズミは動じることなく即答した。

「成程ねー。じゃあ、考え得る襲撃ってどんなものなの？」

ミカが今更といえば今更な質問をすると、スズミは特に気を悪くする様子も見せず再度即答した。

「例えば厄介なのは、計画性のある強盗ではなく、計画性のない一方的且つ一撃のみの攻撃ですね」

「……あー、何となくわかった」

ミカは思わず背もたれに身を預け、ため息をつきながら車の天井を睨んだ。自分で聞いておいて酷い態度だとミカ自身わかっているが、把握してしまえば馬鹿らしいと思わずにはいられない。

「つまり、『取り敢えず目についたから対戦車擲弾なり無反動砲なりぶっ放しておくか』と考えて、しかも即実行するタイプの奴ってことだね」

「そういうことです。勿論、多少は利益が見込めると踏んで私たちを襲撃する強盗が現れる可能性もあります。」

スズミはそんなミカの態度を一向に気にせず、相変わらず淡々と答えた。

つまりは強盗のように日銭を得るために襲つてくる輩しかいないというわけでもないというわけだ。ただ視界に入った他人という理由で即座に撃つという連中もいるとか、性質が悪いにも程がある。

「ミカさんは意外に思うかもしれませんが、そういう人たちが出没するエリアはトリニティにもあります。寧ろ娯楽で他人を襲撃する人たちよりメジャーといえるかもしれません。」

声のトーンを低くしつつ、スズミが説明を続けた。

「珍しいわけではないのですよ、暴力の行使に理由を求めない、或いは必要としない人というの。強盗とかお金を稼ぐためでも生きていくために必要だからというわけでもなく、相手が気に入らないとか嫌いだからでもなく、ましてや主義に則っているわけでもなく、ただ何となく所持する武器を使ったがる人、です。」

「疲れているのかもしれませんがね。必要性や主義主張、感情に動かされて生きていくことに——」

ふう、と息を吐いて、スズミは滔々^{とうとう}と語った。それはミカに説明するというよりは、頭

の片隅に入れていたことを吐露するかのような話し方だった。

それを、ウイの鋭い声が遮った。

「スズミさん、前方……やや左です、屋根の上!」

「——つと!」

スズミが即座にハンドルを切った。車体が揺れ、ミカの横にいるセリナが姿勢を崩しそうになる。なお、ミカは普通に耐えつつキョロキョロと周囲を見渡している。

「攻撃ですか!」

「狙撃です、うまく避け、いや、外れましたね」

セリナの声に律儀に返事をしつつ、スズミが大きく息を吐いた。

少なくとも擲弾や砲弾が飛んできた様子はない。恐らくは小口径狙撃銃を用いた狙撃だろう。

いつの間にか、ウイが窓を開けて腰を浮かし、愛銃を外に向かって構えていた。意外と反応が速いなど感心しつつ、ミカはウイに向かって尋ねた。

「次弾、来そう?」

「多分大丈夫です。……先程の銃弾は、全然見当外れな方に飛んでいったと思います。これ、多分狙ってませんね。たまたま試射したんだと思います」

ウイが腰を下ろして座席に深く座りながら、億劫そうに言った。

それを聞いて、ミカは眉を顰めた。朝とはいえ、普通に通行可能な道路に向かつて狙撃用の長射程弾の試射とは。口からゲヘナへの罵倒が漏れ出そうになり、ミカはそれを抑えようと些か乱暴に水筒の中身をコップに注いだ。

「はた迷惑ですね。ハンドロードした銃弾でも試したのでしょうか」

「かもしれないね。探求熱心な狙撃手なんて珍しくもありません」

流石のスズミも眉を顰めながら恨めし気に前方を見ている。そんなスズミの声に、ウイは答えながら大きなため息をついた。

内心でスズミの意見に同意しつつ、ミカはコップの中身を一気に呷った。保温性に優れた無駄に高級な水筒の中身はまだまだ熱かったが、そんなことは気にならなかった。

隣のセリナが心配そうにミカを見つめていたが、ミカはそれに気付くことなく、大きく息を吐いて愛銃を構え直した。そして窓の方に顔を向け、バラック小屋の街並みを睥みつける。

「ハンドロード」とは、弾薬を購入せずに自分で空の薬莖に雷管、発射薬、弾丸を取り付け、弾薬（実包）を作ることを目指す。「プレス機」という専用の機械を用いて行われる。

新品の薬莖を態々購入して手製の弾薬を作る者もないわけではないが、大抵の場合には自分が使用したり清掃ドローンが片付ける前に拾い集めた空の薬莖を再利用することが多い。ちなみに、使用済み空薬莖を再利用してハンドロードを行うことを「リロー

ディング」及び「リロードする」とも言う。

ハンドロードをする理由は人によって異なるだろうが、主に2つに分けられる。まず、ハンドロードで作成した弾薬はローコストであるから、という理由だ。

超が100個でも足りない超ド級の銃社会であるキヴォトスでは、銃本体は勿論弾薬も相安い。しかもガンショップどころか、コンビニでも雑貨屋でも自販機でも買える。しかし、安価であつてもタダではない。シャーレや各自自治区の治安維持組織などの組織に所属していれば、仕事で使用した分は勿論私事プライベートで使用した分も申請すれば補給されることが多いが、そういった組織に所属していないのであれば、自分で購入する必要がある。

単純な話、弾薬カートリッジの価格は半分は薬莖ケースである。その薬莖を再利用すれば、弾薬代が安上がりになるのは当たり前である。簡単に言えば、コストを半分に抑えることが出来る。

キヴォトスでは落ち葉の何倍も多く落ちている空薬莖を清掃ドローンが回収し、リサイクルした薬莖を使用したリサイクル弾薬が新品の弾薬よりもさらに安価で売られているが、セルフでリローディングをすれば、それ以上に安価で弾薬が手に入る。

日銭を稼いでその日暮しをしている不良生徒の中には、食費どころか明日の弾薬を購入する費用も節約したいと考えている者も少なくない。キヴォトスでは中古のプレス機が安価で売られているのが普通なので、不良の集団が資金を出し合って1台のプレス

機を購入し、複数人で共有しているというケースがよくある。このため不良がりロードイングで手に入れた弾薬を携行しているのは、然程珍しくないことである。

次に考えられるのは、命中精度の高い弾薬を入手したい、という理由だ。

キヴオトスで溢れかえっている各種弾薬は、キヴオトス中に無数にある工場で日夜大量製造されている。勿論それらが粗悪品というわけではないが、自分で一つ一つ丁寧にハンドロードをすれば、自分の愛銃にぴったりの弾薬が手に入るのだ。当然ハンドロード、それも数百数千発の弾薬を丁寧になるとなると（キヴオトスでまともに生活をするのであれば、弾薬など湯水のように消費しなければ暮らしていけない）、膨大な時間がかかる作業であるので、ここまでやるのは相当な「病氣」の生徒くらいである。

しかし、例えば「切り札」として数十発程度ハンドロードで手に入れた弾薬を持ち歩く生徒、特に狙撃手はよくいる。

今回は、恐らく後者だろう。

つまり手製の弾薬の試し撃ちをしたところ、たまたま射線近くを、ミカたちの乗った車を通ったのだろう。

「仮にたまたまではなく最初から私たちが狙っていたとしたら、相当下手な狙撃手ですね。……次弾は、まだ来ませんか。私たちが狙っているにしろ狙っていないにしろ、もう遅いでしょう」

「確かに……即座に次の弾が来なかったということは、自動銃ではないか、そもそも私たちが標的ではないか、ですよね……」

安心させようとしているのか、スズミが穏やかな口調で言うと、セリナが全力で乗っかってきた。微笑みながら、少し大きめの声を上げている。

狙撃銃は主に「ボルト・アクション式銃」か「自動銃」に分かれる。自動銃は排莖、次弾装填まで自動で行うため、連射が可能である。

一方でボルト・アクション式銃はチェンバーを開閉する「ボルト」という部品を手動で前後に操作する銃である。

ボルト・アクション式の場合、ボルトには握りやすいようハンドルが付いていて、ボルトに蓋（栓）をする時はハンドルを下向きに固定しておき、チェンバーから空薬莖を排出する時はハンドルを上げてボルトを後ろに引っ張る。

このため連射も一応可能ではあるが、自動銃よりははるかに遅くなる。

とはいえ狙撃というのは基本的にじっくり狙って標的を一撃で仕留める場合が多く、複数の目標を一人で続けて撃つことは稀であり、連射性能など求められていないことが多い。特に遠距離からの隠密狙撃の場合、1発撃てば潜伏地点がバレるため、1発撃つたら即座に移動するのが基本である。

そしてボルト・アクション式の最大の利点は、自動銃の狙撃銃に比べて命中精度が高

いことだ。ボルト・アクション式は撃鉄が存在しない。つまり撃鉄がある銃の過程（引き金を引いて撃鉄のつかいを外し、撃鉄に撃針を打たせる）が存在しないのである。

ボルト・アクション式の場合は、引き金を引けばすぐに撃針が前進して、雷管を打って撃発が起こる。撃鉄が撃針を打つことがないので振動が発生せず、発砲時のブレを最小限に抑えることが出来る。これにより、命中精度が自動銃よりも高くなる。

このため、遠距離からの狙撃を目的とする狙撃銃はボルト・アクション式が多い。そして連射ができないボルト・アクション式であれば、走行中の車を一度外して再度狙うなど不可能だ。必死に素早く再装填したところで数秒はかかる。そして車はその数秒の間に十数メートル進む。勿論、狙撃手が一人しかいない場合の話だが。

「さて、これであるの狙撃手はもう脅威ではないでしょう。さあ、もうそろそろ——」
「あ」

またしてもスズミの声は遮られた。但し、今度遮ったのはウイではなく、ミカの呟きだった。

バラック小屋の屋根の上。バツと広がった煙のようなものが、ミカの視界に飛び込んできた。よく知っているものだった。

「——後方噴射！」

ミカが声を上げた直後、スズミが車を一気に加速させた。

続いてミカの視界に飛び込んできたのは、黒い物体。対戦車擲弾の弾体だった。それは発射筒から放たれて数秒飛んだ後、弾体中間部のブースターのロケット燃料に点火し、急加速してこちらに向かってくる。

数秒後、弾体はほんの数秒前までミカたちを乗せた車が走っていた場所に着弾し、爆発した。周囲に火の玉が飛び散り、薄汚れた街を明るく照らす。

「対人用の破片榴弾です！」

「便利なものをお持ちな様で！」

後ろを見ていたセリナが叫ぶと、スズミがハンドルを握りしめて珍しく悪態をついた。

前方からではなく、横からの攻撃。待ち構えていたわけではなさそうだった。

「——計画性のない奴だよ、これ……」

ため息をついて、ミカは再度愛銃を握りしめた。

シャーレ演習③

ゲヘナ学園自治区のトリニティ総合学園自治区との境界線近辺のエリアは、数本の幹線道路が作られている以外は空き地やバラック小屋、そして幾つかの施設で構成されている。

施設の大半はすでに放棄されて役目を果たしておらず、このエリアを牛耳っている不良や犯罪組織によって乗っ取られた状態にある。これらの施設はかつては風紀委員会 の駐屯地であったり老朽化したインフラ設備であったりいくつか種類があり、当然規模も見た目も構造もそれぞれ異なるが、建設当初から簡易的なものに過ぎなかったものが大半で、今や殆どが不良が雨風を凌ぐためだけの施設と成り果てているのが実情である。稼動状態にある極僅かな発電所等の生きている施設も、保守整備も修理もされていない状態にある。当然、稼働効率は目を覆うばかりだ。

おそらくゲヘナの行政側も、いざトリニティの侵攻や攻撃を受ければ真っ先に大きな被害を受けるであろう境界線近辺の地域を、本格的に整備・開発するつもりなどなかったであろう。それはトリニティとて同じである。

実質的に双方の行政側から放置され、見捨てられた土地。トリニティとゲヘナ、両者

の考えが合致することで必然的に生み出された空白地帯^{ブランク}。

行政側がこの地域に求めたのは、時間稼ぎのための盾なのか、有事になってくれたらトリニティ製の弾丸によつて不良たちを排除できるゴミ箱なのか。

後者かもしれないな、とミカはガタガタと激しく揺れる車内の中で、そんなことを暢気に考えていた。

その辺りは、ブラックマーケットと隣接自治区の境界線に似通っているのかもしれない。ミカはまだブラックマーケットに直接出入りしたことはないが、あの特別な「境界線」については聞いたことがあった。

ブラックマーケット、隣接するそれぞれの自治区、そして連邦生徒会。三者の思惑が入り乱れた——いや、三者それぞれが最低ラインで妥協した、というべきか——あのような境界線は、キヴォトス広しといえどもブラックマーケットの境界線だけだろう。

「まったく！ 発射の瞬間まで相手に悟らせずに済む場所として、ここは最適ですね！」スズミが顔を顰め、片手運転しながら窓を開けた。

幹線道路が通っている場所には流石に障害物はなく、穴が開いたりしている以外は問題ないが、周囲のバラック小屋は高さがバラバラで、遠くには小屋の上に小屋を積んだような妙な形の建物もちらほら見える。お陰で上からは狙い放題で、身も隠し放題だった。

「使いま、しようかつ?」

「あつ、待つてください!」

小声でスズミが閃光弾に手をかけつつ独りごちた瞬間、セリナが声を上げた。余裕綽々と言った体で愛銃を構えて座りつつも、外の状況を抜け目なく観察しているミカと違い、セリナはシートから身体が浮くの堪えながら必死に窓に噛り付いていた。ミカと比べて腕力や膂力はあまり高くないようだが、これは比較対象が悪すぎるだけである。

「こつちに向かつて、何か飛んできます!」

「……っ! ああもうっ!」

セリナの声に反応したスズミが即座にハンドルを切る。直後、後方に爆音。

「砲弾ですね……」

「ミサイルじゃないだけマシかな?」

小声で呟くウイに、ミカは同じく小声で返した。ウイは愛銃を構え、再度窓から半身を出して外の様子を窺っている。

「あー、今、ちらつと影が見えました。背を向けている……。一発撃つたら退散するタイプだと思えます。多分、面白半分のハラスメントかと……」

「……すみません、もっとスピードを上げますっ!」

ウイがそう言うと同時に、スズミが若干声を荒げつつさらに車のスピードを上げた。振動が激しくなる。足を組んで唸っているミカの横で、セリナは声を上げずに必死そうに座席を掴んで振動に耐えていた。シートベルトがなければ、体が浮いていただろう。

一方で、ウイは危なげなく身を乗り出して銃を構えていた。普段の生活からして想像もつかないが、意外と膂力があるようだ。インドア派に見えて、結構身体能力は高い方なのかもしれない。妙なところに感心しているミカと、車内に引つ込んで来たウイの目が合った。ウイは額から冷や汗を流していたが、表情に動揺は見られない。

ウイは一瞬だけミカの目を見た後、直ぐに腰を下ろして隣のスズミに声をかけた。

「駄目ですね、碌に相手を狙える状況ではありません。……スズミさん、ご自慢の閃光弾を下ろして運転に集中してください。それにまだ出番はないですよ。どこにどう投げるというのですか」

「う、そうですね……」

ウイの指摘を受け、スズミはふう、と息を吐いて閃光弾を膝の上に置いた。そして両手でハンドルを握り直しつつ、恨めし気にサイドミラーを一瞥した。

「セリナさん、相手は追ってきていますか？」

「いえ、一方的に撃ってきただけのようです。バイクとか車が追ってくる様子はありません」

スズミが尋ねると、セリナは即答した。身体が宙に浮くのを何とか防ぎつつ、セリナは後ろの様子を常に確認しているようだった。無意味だと判断しているのか、はたまた射撃の腕に自信がないのか、セリナは愛銃を構える素振りも見せていない。これが救護騎士団団長の蒼森ミネだったら、勝手に車から飛び降りて相手に殴りかかりそうである。どうやらセリナは、救護騎士団の中でも好戦的な方ではないようである。尤もミカは、好戦的な救護騎士団メンバーなどミネしか知らないが。

とはいえ愛銃を構えているだけで、戦おうとしていないのはミカも同じである。

射程の短いサブマシンガン持ちのミカでは、流石にこの状況でできることはない。追ってくるなら兎も角、たまたま目についたミカたちに向けて気まぐれに攻撃するだけなら、反撃したところで時間の無駄だ。

冷静にそう思考しつつも、ミカは苛立たし気にため息をついた。

「……面倒なことになってきたね。そのうちどんどん増えるかもしれないよ?」

鼻を鳴らしつつ、ミカはスズミの背中に声をかけた。その声からは刺々しさが感じられる。この事態にスズミの落ち度は全くないし、必死に運転している彼女に対してあんまりな態度といえた。それを自覚しつつも、ミカは冷めきった目でスズミの背中を見つめていた。

最初の狙撃と次の対戦車擲弾、そして最後の砲弾。車のスピードと攻撃された場所を

考えれば、それぞれの射手が別人だということは一目瞭然である。そして、これは三者が団結して行った襲撃というわけではないということも明らかだった。

ウイたちが推測していた通り、最初の狙撃は完全な偶然だろう。何も考えていない狙撃手の撃った弾丸の射線が、たまたまこの車と重なりそうになったのだろう。

一方で、その次の対戦車擲弾とさらにその次の砲弾は、完全にこちらに狙いをつけていた。恐らく直前にこの車に気付き、新しく手に入れた擲弾のテストでもしたかったのか、それとも何となく気に入らなかつたのか、或いは娯楽か暇つぶしか。わからないが兎に角計画性のない突発的な攻撃を行ったのと推測できる。

立て続けに行われた攻撃の犯人はそれぞれ別人。全員が統率の取れた行動をし、計画的にミカたちを襲ったわけではない。そんなことは自明の理だ。

重要なのは、複数人から立て続けに攻撃を受けていることそのものだった。つまり、自分たちの周囲には、突然見知らぬ相手に攻撃を仕掛けるような輩が複数人いるのだ。彼女たちが同じチームなのかは定かではないが、スラム街では同じ不良チームのメンバーが同じ地域に固まっていることが多いので、十中八九同じチームに属していると考えた方が良さだろう。

一部の例外を除き、不良チームは縄張りというのを大事にする。自分たちの拠点にできる場所や、武器弾薬、食料を安定して手に入れられる場所が限られているからだ。

「キヴォトスでは一匹狼の不良というのはまずくない。数人程度の少数精鋭チームも少数派だ。不良というのは大抵は数十人規模のチームを組んで行動している。結局のところ、ノリと勢いで犯罪行為を行うような物騒な世界では、規模と人数が物を言うのだ。」

そしてミカの経験からすれば、この手の不良グループは相手と武力衝突を始めると、徐々に徐々に参戦者が増えていき、最終的には全メンバーが参戦する。「一部のメンバーだけの暴走」というのは滅多に起こらない。

装備が限られ、戦術眼に優れた者や優秀な生徒が限られた不良軍団同士の抗争では、まず間違いなく動員できるメンバーが多い方が勝つのだ。このため一部でも不良軍団と交戦状態になった場合、一気に全員が参戦してくる可能性が高い。

先制攻撃を仕掛けたのはどちらなのか、被害がどれくらい出たのかは関係ない。多くの不良グループでは、戦闘が始まれば参戦するのが義務となっているのだ。それがキヴォトスで、不良軍団が生き残るための鉄則となっている。

つまり、参戦者が雪だるま式に増える恐れがあるのだ。有象無象の敵に狙われたところで今更何も恐れたりしないが、面倒臭さが跳ね上がるのは勘弁願いたい。それがミカの本音である。

「すみません、予想されたことだったとはいえ……」

「え、いや、そうじゃなくて——」

そんなミカに、スズミは律儀に申し訳なさそうに謝罪した。別に彼女の謝罪を求めているわけではないので、ミカは慌てて諫めようとする。しかし、ミカが口から出そうとした言葉は、スズミの声で遮られた。

「ですが、もうそろそろ大丈夫ですよ」

「えっ?」

ミカがそう言うと同時に、ミカたちが乗った装甲車の後方で爆発が起こった。さらなる攻撃か、と思ったミカは目を丸くした。

爆発の範囲は一部の道路だけでなく、装甲車の後方の道路一帯に及んでいた。しかもただの爆発ではなく、炎が立ち上り、天に向かって壁のように伸びていつている。まるで、装甲車と後方を分断するかのようだった。

呆然とそれを眺めていると、続いて後方のブラック小屋の一部にも火の手が上がった。炎の大蛇がブラック小屋の屋根を這い回るように、一瞬で炎が迸った。

「……援軍ですわね」

スズミがブレーキを掛けつつ大きく息を吐いた。装甲車は徐々にスピードを落とし、ていく。ミカたちを気遣っているのか、先程までの荒っぽい運転が嘘のような、絵にかいたような交通マナーを遵守したブレーキである。

ミカが窓から前方を見ると、前方の道路のど真ん中に誰かが立っているのが確認できた。複数人が立ち、横一列に並んでいる。そのうちの一人は片手を上げ、ミカたちの乗った装甲車を出迎えているようだった。よく見ると、彼女たちの後ろにはミカたちが乗っている装甲車よりもずっと大きいトラックが停車していた。

装甲車は、ちょうど少女たちの真ん前で停車した。スズミが即座にドアを開け、外に身を乗り出した。

「援護、感謝いたします。シグレさん」

「あはは、お役に立てたようで、嬉しいよ」

手を上げていた少女、間宵シグレはニコニコと微笑みながらスズミに近付き、スズミの肩をポンと叩いた。

「久しぶりに全力でボトルグレネードを投げたけど、割とイケたねえ。意外と遠くまで飛ぶものだ。樵きしりや大工の真似事をしているうちに、腕力が鍛えられたのかな？」

シグレはそう言うのと奇麗な白い歯を見せ、懐から取り出したボトルをこれ見よがしに揺らした。

「おっと、それよりも……無事で良かった。スズミ、ウイさん、セリナ……ああ、貴女が聖園ミカだね？」

穏やかな声で話しつつ、シグレの温度が感じられない瞳がミカに向けられた。シグレ

は態々回り込み、ミカが座っている席の横の窓をコツコツと軽く叩いた。ミカが窓を開けると、透き通ったような蒼と薄いピンク色で分かれた不思議な色の瞳が、ミカの顔を覗き込んだ。

「私は間宵シグレ。レッドウィンターの2年生でシャーレの部員だよ、よろしくね」

「あ、うん……」

ミカは会釈し、恐る恐る尋ねた。

「あの、道路とかバラック小屋とかに火を付けたのって貴女？ 大丈夫なの？ 小屋は難燃性の木材で作られているけど、この辺りにまともな消防設備は少ないよ？」

ミカの質問にシグレは目を瞬かせると、再び微笑んだ。

「ああ、大丈夫だよ。あれは私の神秘の力で燃やしているだけ。数十秒で勝手に火は消えるよ。延焼範囲も調整出来るから、目くらましにできれば十分程度に抑えているんだ。見た目こそ派手だけど、そんなに燃えていないよ」

「ああ、成程ね……」

やけに他の人たちも合わせて冷静だったはずである。ミカが後ろを振り向くと、確かに天に届かんばかりに暴れ回っていた炎は、跡形もなく消えていた。道路もバラック小屋も多少は焦げているようだが、周囲に燃え広がったりしている様子は見られない。

「この辺りは、もうスラム街の出口付近。もう少し進めば演習場だよ。シャーレのメン

バーが大量にスラム街に入り込めば、誰がどう見てもスラムの掃討作戦だし、ここを拠点にしている不良グループ全てを刺激してしまうから、援護はできなかつたけど……。出入口近辺をうろつくくらいなら許容範囲だろうね。

ちよつとヤンチャしちやつたけれど、これは、まあ……私のカンポットを落つことしちやつたことが原因ということ。ついうっかり車から落つことしちやつたみたいで、仕方ないよね。ミスは誰にでもあるよ」

そう言つて、シグレはクスクスと笑いながらスズミの元まで回り込み、ポケットから別のボトルを取り出して口を付けた。どうやらそちらには正真正銘、本当にカンポットが入っているらしい。

「ああ、ミスは誰にでもあるよね。先生とシャーレ部員がゲヘナに来るにもかかわらず、この辺りの不良が野放しにされていることとか、ね」

喉を鳴らしてボトルの中身を飲み干し、シグレは目を細めた。それを見て、スズミは眉を下げて苦笑する。

「あの、その辺りのお話は……」

「おっと、シャーレ部員が余所の自治区に派遣されるにあたり、その自治区の政治問題に首を突っ込んだり、自治区の行政に口を出すのは厳禁。次からは気を付けるよ」

スズミが諫めるよりも先にあつさりと自省したかのような言葉を放ち、シグレはくる

りと背を向けて歩き出した。

「さあ、集合時間まであまり余裕もないし、直ぐに行くわよ」

シグレとミカたちの会話を見守っていた他の部員がそう言うのと、それを合図にミカたちを出迎えた部員たちはスタスタとトラックに向けて歩いて行つた。どうやらシグレ以外のメンバーは、ここで暢気に挨拶をする気はないらしい。

自分がいるからじゃないよね？ そんな考えが一瞬頭を過り、ミカは慌てて首を振つた。隣に座っているセリナが怪訝そうにミカの横顔を見つめることにも気付かず、ミカは座席に座り直す。

そんなことをミカが考えてしまっていることなど知る由もなく、スズミはテキパキとドアを閉め、エンジンをかけた。

「では、行きましょう。もう少しですよ」

その声と同時に、装甲車はゆっくりと動き出した。



ミカは知らなかったが、どうやら先に到着していた演習参加メンバーのうち、少ない人数が演習場とスラム街の境界線付近に待機し、何時でもトリニティ側から演習場に行ってくるメンバーを援護できるように態勢を整えていたらしかった。

ゲヘナでシャーレ演習を実施するにあたり、その往来で一番危険な目にあう可能性が

高いのはトリニティ自治区からやって来る部員たちだというのは誰の目から見ても明らかであり、先生の指示もあって、演習参加メンバーの多くがトリニティの生徒たちよりも早く演習場に集まっていたようだった。

とはいえ、シャーレ部員が大挙してスラム街に殴りこんでは、最悪スラム街を拠点とする全ての不良グループとシャーレの全面衝突に繋がりがねないため、演習場に到着した部員たちによる援護は最小限に抑えるように事前に決められていたとのことだった。

そもそも境界線近辺で不良軍団による組織的な襲撃を受ける可能性は極めて低かったため、無意味にスラム街の不良グループを刺激することはないと先生は考えていたようである。

「お疲れ様でした」

スズミの劳いの声を聞きつつ装甲車から降りたミカは、キョロキョロと周囲を見渡した。周囲にはたくさんさんの車両が並んでいる。ミカの乗ってきた装甲車のように何のマークも描かれていない車もあれば、校章が描かれた車もあった。中にはシャーレのロゴマークが描かれた車も複数台あった。シャーレオフィスからこちらにやってきた生徒もいるようである。

先生と一緒に来たのかな。何それ大分羨ましい。

そんなことを考え、ミカはため息をついた。

よく見ると、一番多いのは万魔殿バンデモニウム・ソサエティとゲヘナ風紀委員会のマークが描かれた車両だった。ゲヘナの演習場で行われるだけのことはある。見ているだけでため息をつきたくなる光景だった。もうすでにについているのだが。

何かを確認しているのか、スマホを眺めていたスズミが声を上げた。

「皆さん、案内しますね」

そう言われ、ミカは大人しくスズミの後ろに続いた。駐車場には殆ど人氣が無い。どうやら到着した部員たちは、既に演習場に移動しているらしい。

しきりに首を動かしているミカに気付いたのか、ミカの後ろからセリナが話しかけてきた。

「既に到着された方々は、しょうしゃ廠舎に集まっているようですね」

「そうみたいだね」

若干うわの空で返事をしつつ、ミカは少し緊張したように喉を鳴らした。

今から自分は、数多くのシャーレ部員たちの前に、初めて姿を晒すこととなる。別に悪いことなど何もしていないし、そもそも自主的にここに来ているはずなのに、何故だか衆目の前に引きずり出されるような気分になってきた。

流石にこれ以上ため息をつくのは、傍から見ても陰気臭い気がする。なのでため息を堪えながら、ミカはスズミの背中を視界に捉えつつ、演習場に足を踏み入れた。

シャーレ演習④

「ゲヘナ学園自治区第8演習場」。それが、今回のシャーレ演習の開催場所に選ばれた演習場の名前である。ゲヘナとトリニティの境界線からほど近い街に位置しているこの演習場は、バンデモニウム・ソサエティ万魔殿が自治区内に複数有する演習場の一つである。

ミカはゲヘナの演習場に入るのは初めてだったが、演習場の造りはトリニティのものどさほど変わらないようだった。

正面門をくぐった先には駐車場やヘリポート、そしてその横には広大なグラウンドにマウト（市街戦訓練のための訓練施設のこと）、幾つかのしょうしゃ廠舎。

優美さなど全くないプレハブ建築の廠舎は3階建て以上の高い物から平屋型の物などバラバラで、先頭を進むスズミの足取りから察するに、一際大きい立派な廠舎が目的地のようだった。

ふと上を見上げると、その大きい廠舎の後ろにさらに大きな建物があった。まるで大きな校舎のような建物で、どうやら屋内戦向けの訓練施設のようだった。

スタスタと歩いていくミカたちの前から、数人の生徒が駆け足で向かってくる。全員ゲヘナ風紀委員会の制服を着込んでいた。すれ違いざまに先頭のスズミから順に、ミカ

を除いてウイ、セリナが風紀委員たちに目礼した。一瞬遅れて、ミカも風紀委員たちに目配せをする。された方の風紀委員数人は、同じように目礼したりペこりとお辞儀をして通り過ぎていった。

ミカを警戒する様子など微塵もない。実にあつさり、ミカの横を走っていった。

思わず、ミカはすれ違った風紀委員たちの動きを目で追っていた。慌てて視線を前に戻すと、今度は前から万魔殿バンデモンウム・ソサエティ直属の戦闘部隊である親衛隊の制服を着た生徒たちが見えた。

戦車跨乗タンクデサントをしている親衛隊員数人を乗せた戦車が、砂煙を巻き上げながら荒々しくミカたちに向かつて走ってくる。数人を乗せた上に、砲身によれよれの上着を数枚かけられた戦車は、近付いてくればくるほど愉快な乗り物に見えてきた。鋼鉄の猛獣の威厳など欠片もない。

戦車に乗った、だらしく足を伸ばしてペットボトルに口を付けて中身を呷っている親衛隊員と目が合った。スズミとウイとセリナが一斉に会釈した。ミカも慌てて目礼する。戦車に乗った親衛隊員は素早くペットボトルから口を離すと、手を振ってにこやかな笑顔を浮かべた。

戦車に乗った他の親衛隊員も会釈したり制帽を外して振ったりしている。ガンを付けられるかと思っていたが、意外とフレンドリーだ。今の自分はトリニティ生徒であり

つつも、シャーレ部員だからだろうか。戦車に遠慮なく寝そべっていたり、砲身に制服の上着をかけている姿は規律が厳守されているとは到底思えないが、それでも親衛隊員はゲヘナ生徒にしては空気が読める部類だと聞いたことがあった。比較対象が問題児どころかテロリストなので、いまいち分かりにくい。

当然と言えば当然なのだが、戦車はこれまた何事もなく、ミカの横を通り過ぎていった。

「……まあ、そりやそうだよね」

ボソリと独りごちた。幸いなことに戦車のカタピラの音のせいか、ミカの眩きは誰にも聞き取れなかったようだった。

今のミカは一般学生であり、シャーレの一部員に過ぎない。そもそもゲヘナで行われる予定のシャーレ演習にミカが参加を希望し、それが許可されたのだから、これが普通である。希望通り参加が認められた後に演習場にやってきたにも拘らずゲヘナ生徒に叩き出された方が、遥かに問題だ。肩透かしとまではいかないが、意外とあっさり自分がゲヘナの演習場に入ってこれていることに、今更ながらミカはホツとした。

とはいえ、あっさりしているのはミカ自身もそうである。ゲヘナ自治区のど真ん中を歩いていても、それなりの数のゲヘナ生徒が視界に飛び込んできても、意外と不快感はない。感情を制御できている、というわけでもないと思う。単に気力が削

がれ落ちているだけなのだろうか、と自己分析してみる。

まるで自分の意識が自分の身体から分離し、空中から覇気のない自分の背中を見下ろしているような気分だった。勿論、実際はそんなことにはなっていない。前を見ても、自分の背中とは似ても似つかないスズミの背中が見えるだけである。

ミカは唐突に自分の心が、ひどく凜いでいることに気付いた。

これから自分は、大勢のシャーレ部員の前に立つことになる。シャーレに入部し、先生のために活動するのなら避けては通れぬ道で、最初から覚悟していたことだ。少し緊張しているのだが、入部前に想像していた時よりも自分が落ち着いているように思えた。

ユウカをはじめ数少ない数のシャーレ部員と知り合って、敵意を向けられたり思いを語られたりして、ある程度慣れてきたのだろうか。それとも単純に、怒りや悪意を四方八方から受ける日々に、慣れたからなのだろうか。

流石に開き直ってきたわけではないと思う。先生が傷付いた遠因となった自分を責めることに疲れたくはないし、疲れてはいけなないとミカは信じていた。

思考の冷静な部分は、自分を責め続けることが贖罪ではないと囁いている。実際、先生に似たようなことを、もう何度も言われている。しかしそれでも、ミカは自分を責める心を失うのを恐れていた。それはこの先、ずっと抱いていかなければならないとすら

思っていた。

そんなことを考えていると、ミカの耳に穏やかな口調のスズミの声飛び込んで来た。

「おはようございます、朝からお疲れ様です」

「おはようございます。いいえ、委員である以上は当然の仕事です」

会話。片方は聞き覚えのない声。そして直後に電子音が鳴り、ミカの意識は思考の海から引きずり出された。気が付くとスズミたち3人は立ち止まっており、そして自分も立ち止まっていた。

スズミがシャーレのIDカードを変った形の機械に乗せている。

「……はい、確認しました。他の皆様もお願います」

機械が置かれた台の上で、バインダーを抱えつつもう片方の手でタブレットを持ち、その画面を見つめていた少女が顔を上げた。眼鏡の奥の黄色の瞳が、ミカに向けられた。

いつの間にか、ミカたちはある廠舎のすぐ前まで到着していた。扉の入り口にはデスクが幾つか並び、ノートPCや様々な機械がデスクに乗せられている。

スズミに続き、ウイがポケットからIDカードを取り出して機械に乗せる。再び電子音が響く。それを見て、ミカもIDカードを取り出した。次にセリナがIDカードを乗

せ、最後にミカがIDカードを乗せた。スズミたちのカードを乗せた時と同じように、電子音が響いた。

「……あ、貴女が聖園ミカさんですね。初めまして、アビドス高校1年生の奥空アヤネです。今回のシャーレ演習の実行委員でもあります。先日は、シロコ先輩がお世話になったようで……」

タブレットを見て一瞬目を丸くした少女、アヤネはもう一度ミカの顔を見つめ、ペコりと丁寧な頭を下げた。

ミカも直ぐに頭を下げた。

「あ、うん。寧ろ、私の方がシロコちゃんのお世話になったんだけどね。聖園ミカだよ、よろしく☆」

顔を上げて、パチリとウィンクをする。心の奥底の淀から目を背けるように。そんなミカの顔を見つめ、アヤネはパチパチと瞬きをすると、直ぐに苦笑した。

「はい、よろしくお願いたします。今日はシロコ先輩だけではなくて、セリカちゃんやホシノ先輩、ノノミ先輩も参加しているんです。つまりアビドス生徒全員参加なんですよ。実行委員なのは私だけですけどね」

ああ、とミカは首肯した。そう言えば、アビドス高校は在校生が5人しかいなかったことを思い出す。そして、その全員がシャーレ部員であるということも。しかも5人と

も、シャーレの中でもかなり古参のメンバーらしい。

「二応、アビドス対策委員会……あ、つまり全校生徒なんですけど、対策委員会全員、シャーレ演習は第1回の時から全員欠かさず参加しているんです。今回も、皆で頑張りますよ」

そう言つて、アヤネは気合を入れるように握り拳を作つた。

成程、頼もしそうだ。ミカはアヤネの表情を見つめ、笑みを返した。

「ところでアヤネさん、どれくらい来てますか?」

ずっと黙つていたウイがアヤネに視線を向けつつ口を開くと、アヤネは尋ねられるとは思つていなかったのか、少し慌てた仕草でタブレットを操作した。

「ええと……今回の参加予定人数は直前に少し増えて……54名ですね。シャーレ演習は回数を重ねるごとに参加人数が増加しておりますが、今回もまた前回の参加人数を上回っています。

参加を見送られた方は……演習や合同訓練には常に不参加のワカモさんはいつもですが……あとは、昨日発生したクーデターにより泣く泣く参加不能となつたチェリノさんやトモエさん、そして、ラー——」

アヤネの言葉を聞き、ミカは思わず目を見開いた。詳しい参加人数までは聞いていなかったが、自分を入れて54名も参加予定だったとは。ユウカに誘われた時は演習と

いつても20〜30人程度で行うものだと思っていたのだが。

ミカの驚愕を余所に早口で喋りだしたアヤネを手で制し、ウイが若干眉を下げつつ申し訳なさそうに少し声量を下げてもう一度尋ねた。

「ああ、すみません。私の質問の仕方が悪かったようですね。そうではなく……参加予定の人たちは、大半がもう到着されていますか？」

ウイの再度の質問に、アヤネは少し頬を赤く染めて回答した。

「ご、ごめんなさい。ええと、スズミさん、ウイさん、聖園ミカさん、セリナさん4名のご到着で……ええと、まだ参加予定の方で到着されていないのは、当初より遅れて到着予定だったヒナさんですね」

「つまりほぼ最後ですか。トリニティ組でも最後だったんですね」

小さく息を吐いてウイがもう一度尋ねると、アヤネは即座に頷いた。

「ええ。トリニティの方々は、皆さんを含めて全員到着されていますよ。皆さん、中で待機しています」

アヤネが首を曲げたので、ミカもつられてそちらに顔を向けた。廠舎の実用性しかない扉が、視線の先にあった。



廠舎の中に入った瞬間、一斉に他のシャーレ部員から睨まれたりするかもしれない。

内心、何となくそんな悲観的な予想をしていたミカだったが、実際はそんなことは全くなかった。

一際大きい廠舎の中は、講堂のようになっていた。とはいえトリニティ本校の大講堂のような超巨大且つ荘厳な建物なわけがなく、ステンドグラスなど気の利いたものは無い。簡素な造りの窓からは日の光が入り、安物の電灯しかない廠舎の中を明るく照らしている。

目を見張るほど広いわけではないが、50人近くの人間が集まっても大して狭苦しさは感じられない程だった。アヤネから聞いたとおり、何十人ものシャーレ部員たちが室内に集まっていた。出入り口の扉付近にいた何人かが入ってきたミカたちに気付いて頭を下げたり手を振ったりするが、大半の生徒たちはミカたちに気付く様子はない。勿論、一斉にミカに敵意がぶつけられることもなかった。

先頭にいたスズミは挨拶をした生徒たちに会釈すると、くるりと振り向いて残りの3人、正確にはミカに視線を合わせた。

「ええと、普段だったら開会式と言いますか、演習前に先生のちよつとした挨拶があるのですが……」

ミカに向かってそう言うと、スズミは周囲を見渡した。奥にある演壇の上には誰も立っておらず、生徒たち、つまりシャーレの部員たちはリラックスした様子で、スマホ

を見ていたり数人で固まって小声で会話していた。小声とはいえ会話をしているグループが幾つもあり、この空間そのものが大して広いわけでもないのに、周囲から聞こえて来る声はそこそこの雑音となっていた。

目を細めて周囲を観察してみると、会話に参加している大半の部員が真剣そうな表情を浮かべていた。頼もしさというよりは剣呑さが感じられる雰囲気だ。

「なんか、ちよつといつもと違う空気ですね……」

小声でセリナが呟いた。ミカがセリナの方に視線を向けると、戸惑ったような表情でミカの方に向き直った。初参加の自分だけでなく、シャーレ古参部員の一人であるセリナも同じように感じているらしい。

「これは一体……あの、ノドカさん」

眉間に皺を寄せたスズミが、出入り口近くにいた少女に声をかけた。声をかけられた少女は何故か望遠鏡を組み立てており、スズミたちに気付くとペこりと会釈した。

「あ、おはようございます」

「おはようございます。……唐突ですみませんが、何か、あつたのですか?」

「ああ、それが……」

スズミの問いに、レッドウィンター連邦学園2年生天見ノドカは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ、忌々しそうに演壇の向こうの壁に掛けられている万魔殿バンデモニウム・ソサエティの

マークが描かれた垂れ幕を睨みつけた。

「先生が、バンデモニウム・ソサエティ万魔殿に呼び出されて、そっちの方に一時的に出かけられてしまったんですよ。マコト、とかいう人に呼び出されたって」

「え——」

吐き捨てられるようにノドカの小さな口から飛び出した言葉に、ミカは声を上げて反応しようとした。しかし、まさにその瞬間に大きな音が室内に響いた。

「あー、あー、テスト、テスト……本日……ゲヘナ学園自治区西部は……南東の風、風力1、予想最高気温は12度……晴れ時々88ミリ砲弾、一部地域にはナパーム弾及びクラスター弾注意報が出ています……」

それはマイクで拡大された声だった。死ぬほどうるさいわけではないが、平均以上の音量である。奇襲攻撃を食らった耳をかばいつつ、ミカは眉を顰めて発生源の方を睨みつけた。

今の今まで気付かなかったが、いつの間にか演壇に少女が一人立っていた。ワイヤレスマイクを片手に持ち、感情が全く込められていないような平坦な声で喋っている。その表情はいかにもやる気なさげであり、気怠そうに周囲を見渡していた。

「えー、少し予定より早いです、うちの議長が先生を呼び出してしまったのでスケジュールに狂いが生じています。求められてはいないでしょうが、先生に代わりまして

挨拶をさせていただきますよ」

音量を調節しつつ、少女は問答無用な調子で早口でペラペラと話し出した。滑舌は良いが如何にもローテンションな話し方で、喋っている当人も殆ど表情筋を動かしていないように見えた。

突然始まった挨拶だが、部員たちは皆黙って少女の話を聞いていた。ミカも空気を読んで黙っていることとする。少女の声に威圧感はなく、反論を封殺しているわけではないようだ。諦めているのか、或いは押し問答するのは時間の無駄だと感じているのかもしれない。

「向寒のみぎり。霜が降り、銃身の収縮に頭を痛める季節となりました。年々降雪量が増している気がしないでもないここゲヘナ。まだまだ積雪の時期ではありませんが、雪が積もるとスノーモービルに乗ったひつたりやチンピラが出没しますのでご注意ください。

あー、それと、マコト先輩から『万魔殿バンデモニウム・ソサエティの威光を全シャレー部員に知らしめる勇猛無比な演説をぶちかましてこい』と言われましたが、面倒臭いのでやめます。簡潔に行きましょう、簡潔に。

本日こうして先生のために、休日も仕事も投げ捨ててお集まりいただきました皆様、おはようございます。今日も良き先生ライフをお過ごしかと思えます。退屈でしょうが、まずは私の挨拶に暫し耳を傾けてください。ご存じの方も多いでしょうが、この度

のシャーレ演習実行委員会委員長となりました、棗イロハと申します。シャーレ部員のゲヘナ2年生で、バンデモニウム・ソサエティ万魔殿の議員を務めております」

そこまで言つて、マイクを持った少女、イロハは一旦口を閉じて再び周囲を見渡した。そして、再び話し出す。

「……挨拶するとは言いましたが、そもそも長い挨拶は私自身嫌いなんですよね、聞くのは勿論する方も。というわけで、巻きでいきましよう。

今日も先生の盾となり、銃となるために日夜研磨している皆様。先生が暮らす箱庭キョウトスの平和のため、そして明日、先生と平穩に過ごす未来のため。そして演習後の先生からのご褒美のため。それぞれの夢を叶えるため、皆様溢れ出さんばかりの熱意と希望を胸に、この度の演習に臨んだことでしょう。今回は記念すべき、と言えるのかはわかりませんが、今までD・U・とミレニアム自治区で行ってきた中、初めてのゲヘナ自治区での演習となりました。色々不安に感じている方も多いと思いますが、ご安心ください。先生との交渉に次ぐ交渉の成果は上々です。私、久し振りに本気でネゴシエイトおねだりさせていただけました。とびっきりの物がございませう。最高の報酬をお約束いたしますからね」

ああ、感謝の言葉は結構ですよ。実行委員長の私にも役得はありますからね」

静寂を突き破るような歓声と拍手が部屋に満ち、ミカの耳を貫いた。

盛り上がるポイントはそこなんだあ、と思いつつ、ミカは態度に出すことなく、周囲

に合せて手を叩いた。自分もかなり嬉しかったし、ホイホイ乗せられて期待してしまっているからだ。今なら、あの万魔殿バンデモニウム・ソサエティ議員にも心の底から賞賛の声をかけることが出来そうな気がする。

それはそれとして、先程から止む気配がない歓声が怖い。乙女の集団を発生源にしている歓声とは思えない程度には怖い。「わあああああ」とはではなく「ウオオオオオ」とかそんな感じの、実に力強い歓声だった。空気がビリビリと振動する音が聞こえてくる気さえする。実態を知らない者が聞けば、関とぎの声かと勘違いしそうだった。理由が「先生から素敵なご褒美貰えるぜヒヤツホーイ」だとしても、物凄い迫力である。

それを一身に浴びたイロハは気怠そうに片手を振るものの、帽子を深く被って照れ顔を誤魔化すような仕草は実に自慢げだった。「もっと褒めろ」と全身で主張していた。殆ど表情を変えていないのだが、下手にドヤ顔をかまされるよりムカつく気がしたので、ミカは微笑みつつ細目でイロハを睨みつけた。

数秒後、静かになったのを見計らったイロハが再び話し始めた。

「というわけなのですが。……先生が万魔殿バンデモニウム・ソサエティ本部からお戻りになられるまで、暫し時間がかかります。なので……その時間を使い、今回のシャーレ演習の内容について、ざっと説明させていただきます」

そこまで言って、イロハはフツと微笑んだ。光を飲み込む昏い瞳が、集まったシャー

レ部員たちに向けられていた。



「こつち、積み終わりました！」

「よし、機関銃を配置しろ！」

「了解！」

演習参加のシャーレ部員が全員廠舎でイロハの挨拶を聞いている頃、演習場の入り口には十数人のゲヘナ生徒が集まっていた。少女たちは全員風紀委員の制服を着ており、統率の取れた動きで迅速に動いている。

ミカたちを乗せた装甲車が敷地内に入った頃にはごく普通だった演習場の正面門前には、幾つもの土囊どのおうが積み上げられて、複数の遮蔽物が出来上がっていた。

1人の風紀委員が、一番外側の遮蔽物の上に汎用機関銃を設置しながら、隣の風紀委員に話しかけた。

「ねえ、先生からの助言でこうしているらしいけど……本当に、この演習場が狙われるのかな？」

機関銃のチェックをしているポニーテールの風紀委員の質問に、隣で60ミリバズーカ砲を「えつちらおつちら」と口に出して運んでいた風紀委員がめんどくさそうに答えた。

「さあ？ まあ来ないに越したことはないしき、来なかつたら来なかつたで良いじゃない？ ハイプロファイルの訓練だと思えばさ。何時もの巡回パトロールに比べればらつくしよーらつくしよー」

両手に抱えていた複数のバズーカ砲を「よっこいせー」と間の抜けた声で言いながら下ろした内巻きワンカールの風紀委員は、そう言つて額の汗を拭う仕草をして座り込んだ。

「アタシら、基本パトロール組だし、ハイプロファイルなんて滅多にしないじゃん？ 何事も経験だよ。けーけーん。それでお給料もらえるんだし、文句ないって」

生真面目な生徒が多い風紀委員には珍しく（つまり一般的なゲヘナ生徒に近いと言える）口調は軽薄だが、内巻きワンカールの風紀委員はかなり向上心が強いタイプだった。しかも根っからのプラス思考の持ち主である。朗らかな笑みを浮かべる相方を見て、ポニーテールの風紀委員は羨ましそうにため息をついた。作業を中断し、内巻きワンカールの風紀委員の横に腰を下ろす。

警戒や警備のうち、相手からわかりやすいように目立つ位置に歩哨を置いたり、堂々と陣地を築城して自分たちの存在をアピールする方法を「ハイプロファイル」と呼ぶ。見えぬ敵に「ここに強力な警備が存在する」と認識させることで抑止力とし、安全を確保するこの方法は、風紀委員会に限らず各自治区の治安維持組織では基本となる警備行

動だ。

歩哨の位置や警備の様相を包み隠さず見せつけるのは敵に攻略方法を教えるようなものというデメリットもあるが、それでもある程度の相手の侵入を阻止する手段としては役に立つ。

「それに、今ここにはシャーレの主力メンバーの過半が揃っているじゃん？ ヒナ委員長とサシで戦えるキヴオトス随一の実力者の人たちも複数人来ている上に、アタシらも親衛隊も数十人来ているんだよ。もう要塞だよ、要塞。何が来ようと大丈夫だって」

能天気そうな発言だが、内巻きワンカールの風紀委員の言葉は事実でもあった。現在、この演習場の正面門は風紀委員が防備を固めており、その内側には親衛隊もまた防衛体制を整えている。そしてキヴオトス最高クラスの戦闘能力を持つ生徒が集められたシャーレの部員たちが大勢いる。今この瞬間、この演習場はキヴオトスで最も戦力が充実したエリアと化しているといっても過言ではないだろう。

しかしそれを指摘されても、ポニーテールの風紀委員の表情は晴れなかった。彼女は帽子の鏢を握り、小さく息を吐いた。

「来られることが問題なんだよ。何せ、先生が——」

「そこ、私語は慎め！」

「は、はいっ！」

後ろから叱責を受け、ポニーテールの風紀委員は反射的に立ち上がった。そして、テキパキと動き始める。それを見上げていた内巻きワンカールの風紀委員も、「よっこいせー」と間の抜けた掛け声と共に立ち上がり、己のやるべき作業へと戻っていった。

「先生がそのうち、ここに来るんだよね……。もし、先生のいる場所が攻撃を受けたりしたら……シャーレの人たちは……」

機関銃の銃弾のチエツクをしながら、ポニーテールの風紀委員は誰にも聞こえない小声で呟いた。頬から汗が流れ、顎先から地面に落ちていった。

シャーレ演習⑤

廠舎の中は、異様な熱気が支配していた。拍手と歓声が鳴り止み、ただただマイクを持ったイロハの声が響く。それ以外は、誰も言葉を発しない。

「今回の演習の想定場面は、シチュエーション至ってシンプルです。舞台は屋内戦。ブラックマーケット内での敵拠点の襲撃任務。先生の指揮が行われていない状態で敵拠点到侵入し、敵地にあるとあるものを回収する、というものです」

イロハが話し始めると同時に、イロハの横に立体映像が浮かび上がった。どうやらイロハと同じ実行委員会のメンバーが投影装置を操作しているらしい。立体映像で浮かび上がったのは、先程この廠舎に入る前にミカが見かけた大きな校舎のような建物だった。

「回収するものは敵組織の悪事の証拠が入ったファイルです。これより、これを『ファイル』と呼称します。皆様の任務はこのファイルの回収です。それが第1ステージ」

第1ステージ。早速想定外のワードが飛び出した。ミカは自身の表情が硬くなるのを自覚した。相変わらず、イロハの声以外は誰の声も聞こえない。騒めきは起こらず、空気が張り詰めるのみである。

「その後、皆様は予めこちらが指定したルートを通ってこの演習場の地下に移動。地下壕ブンカーを通じて敵の追撃と増援に対処し、ブンカー奥にあるとある区域まで移動。それがゴール。ブンカーが第2ステージですな」

イロハの説明と同時に、立体映像が大きく変化した。光の線が映された建物から伸びていき、地面の下へと潜っていく。同時に立方体を幾つも組み合わせたような建物が地面の下の部分に表示された。

この演習場にはそんなものもあるのか、とミカは声を出さずに驚愕した。しかし、直ぐに思い至る。この演習場は、ゲヘナとトリニティの境界線付近にある施設であり、言い換えれば最前線の駐屯地なのだ。平時は演習場として運用するが、有事の際は治安維持部隊の駐屯所や補給、後方支援のための臨時基地に転用されることを想定しているなど、別に珍しくもない。

そのブンカーとやらは、恐らく有事の際にトリニティの部隊に対して防衛線を構築するための施設なのだろう。或いはトリニティにある同類の施設を攻略するための訓練施設も兼ねているのかもしれない。現在立体映像で表示されているブンカーのマップは、ブンカーの全容ではなく一部に過ぎないのだろう。映し出されたブンカーの全容は見るからにちぐはぐで、あからさまに一部しか表示されていないようだった。隠す努力すらする気がないらしい。実際のブンカーはもつと広く、近隣の風紀委員会の駐屯地や

バンデモニウム・ソサエティ
万魔殿の秘密基地に繋がっているのではないか。

当然、複数の重要拠点と通じている秘密の地下エリアなど機密情報の塊であるはずだった。本来であれば、一部とはいえ他校、それもトリニティの生徒が大勢参加する演習に使うような施設ではない。

ミカは思わず周囲に視線を配った。真剣な表情で立体映像を見つめている生徒の中に、トリニティ生徒は何人いるのだろう。自分の周囲だけでも、スズミ、セリナ、ウイの3人がいる。トリニティの生徒がゲヘナの秘密軍事施設で訓練をするという、これまでのキヴオトスにおいては起こり得るはずがなかった事態。しかし、盗み見た限りでは、スズミたちの表情は特に変わることがないようだった。

衝撃を受けた、というほどではなかったが、世界の常識から爪弾きにされたような感覚に、ミカは周囲に悟られぬ程度に数秒目を瞑って脚に力を入れた。ここにいるのは、全員シャーレ部員なのだから、おかしいことなど何も無いというのに。

そう、ここにいるのは全員がシャーレ部員なのだ。先生のために、自らの意思で集まった者たちだ。所属校も、部活も何も関係がない組織。自分も含めて、いや、自分もこうなるべきなのだろう。

「作戦内容は以上です。ああ、例によつて敵に関する情報は何も渡しません。作戦は複数のグループに分かれて行います。同時に始まるか、時間差でスタートするか、それも

説明は無しです。

何時もの通り、演習の内容はこれだけではありませんからね。サクサク行きましよう」

淡々と説明を続けていたイロハが一旦口を閉じ、抱えていたタブレットを見た。感情を窺い知ることが出来ない瞳でじつとタブレットを見つめた後、小さく息を吐いて再び話し出す。

「作戦は6人編成のチームで行います。それで、チーム分けですが……各チームごとに控室を用意しました。全員のグループチャットに集合場所を送りますので、そこに集まってください。同じ控室に集まったメンバーが、一緒に作戦を行うチームです。

予め言っておきますと、今回のシミュレーションでは『シャーレオフィスを訪れたら突発的に作戦が始まった』という感じです。こう言っただけですが、最近シャーレに入部したばかりのメンバーを除いて、今更これまで合同で作戦参加も訓練もしたことがないって人、皆様殆どいないでしょう？　こういうのはちやっちやと決めてしまえますよ」

段々口調がぞんざいになってきてやしないか。そう思いつつ、ミカは僅かに眉を顰めてイロハを見つめた。何か癪に障る事でもあったのかもしれない。

イロハは僅かに小首を傾げ、再びシャーレ部員たちをぐるりと見渡した。

「ああ、そうそう……これは皆様ご承知おきされていると思いますが、演習場には至る所にカメラやマイクが設置されていますし、参加チームの付近には小型の撮影用ドローンが飛行しています。皆様の雄姿を先生にご覧いただくためにも、後々私たち皆で観賞するためにも、出来るだけ壊さないようにお願いしますね。ちなみに映像の一部は各学校のお偉方にも提供されますので、悪しからず」

それは演習参加前に、ユウカから一度教えられていたことだった。なのでミカは特に気にすることもなく、小さく鼻を鳴らすにとどめた。

それはシャーレに演習場を提供したりシャーレ演習に協力するにあたり、各学校がシャーレと行った取引の一部に過ぎないものである。

ミカもそうだが、大半の武闘派の部員たちは、自分たちの戦闘シーンが他校に流れることなど気にしていない。流されたところで不都合など感じないのだ。それは戦闘が専門ではない部員たちも同様である。

「だからと言って先生にカメラ視線でアピールするのはレギュレーション違反なので止めてください。媚びずに真面目にやりましょう。あと前回も問題になりましたが、先生にアピールした部員の顔を撃ちまくるのも止めましょう。顔面パンチやキックも絵面が酷いので止めて差し上げましょう。先生が泣いてしまいます。先生を泣かしたら私が虎丸（戦車）で顔を轢きますので、そのつもりで。」

そしてこれもいつものことですが、建物や施設を過度に破壊するのも厳禁です。私が面倒臭いことになりますので。上空から屋台落として建物を潰したり、水を召喚して部屋全てで水で満たしたり、キヴオトスラプターオオカモメとかキヴオトスジャベリンカジキマグロとか凶暴な生き物を召喚したりするのも過度にやりすぎないように。あんまり酷いと先生がマコト先輩から怒られますので。そうなたらマコト先輩が皆様にボコボコにされて面倒臭いので、やりすぎないようにお願いします」

どうやら隕石を落とすのも駄目らしい。まさか屋台が駄目で隕石はOKではないだろう。

それにしても、いくら先生にアピールしたからと言って顔面集中攻撃は乙女としてどうなのか。何でシャーレの部員たちは仲が良いのだろうか。そりや自分だって、目の前で誰かが先生に媚び媚びのアピールをしていたら、そいつの顔がパンパンに腫れ上がるまで殴る気もするが。

他にも色々突っ込みどころはある気がしなくもないが、ミカとしては気になったのはそれくらいである。

「それでは、説明は以上です。まだ先生はお戻りになりませんし、適当に進めてしまいませんか。皆様のご健闘を祈ります」

イロハはそう言うと、タブレットを指先で何度か叩いた。幾つもの振動音や通知音が鳴る。ミカは小さく息を吐くと、ポケットに突っ込んでいたスマホを取り出した。画面を見ると、地図とアルファベットの「F」の文字が表示されていた。自分はFチームと
いうわけだ。

「あ、Fです」

ミカの隣にいたセリナの独り言がミカの耳に入り、ミカはセリナの横顔を見つめた。

「え、セリナちゃんも?」

「あつ、ということとは、ミカさんもFですか?」

セリナが少し驚いたように目を見開き、ミカの方に向き直った。暫くミカとセリナは
見つめ合った後、同時にウイとスズミの方へ振り返った。

ウイは複雑そうに顔を顰めながらコクリと頷き、スズミはにこりと微笑んでスマホの
画面をミカたちに見せた。当然のように「F」の文字。

「…………え、私たち4人揃ってF?」

ミカは呟いて、近くに立っていた少女、ノドカに視線を向ける。ノドカは黙って首を
横に振った。

「きつと私たち4人が一緒に来たからじゃないでしょうか」

首を振るノドカに視線を向けつつ、ウイがボソリと呟いた。

「そういえばさつき、『シャーレオフィスを訪れたら』ってシミュレーション言っていたねえ。だから、一緒に来た人たちは一緒にチームとしたのかな」

ミカは思い出しつつ演壇の方を見た。いつの間にかイロハの姿は消えている。少し探してみると、部屋の隅で数人と話しているイロハが見えた。実行委員会のメンバーと何かを話しているようだった。

イロハの挨拶と説明を聞いていたシャーレ部員たちは、小声で話をしたり早速控室に向かったりしていた。

「成程、今までにないパターンですね。これまでの演習ではそういったことを考慮せず、適当にチーム分けをしていたのですが」

スズミが頬を掻きつつ静かに呟いた。戸惑っているわけではなく、予想外のことが起きたとちよつと驚いている具合であった。

「あ、皆さん、私も行きますね。一緒ではないですが、先生のために頑張りますよー！」
微妙な空気を纏ったミカたち4人を前に能天気そうな笑顔を浮かべ、ノドカが少し大きな声を上げてガッツポーズをした。

「私、これからもつとつと強くなって、先生のために頑張るんです！　そしてずっと先生のお傍に居て、先生を悲しませたくないから先生より長生きして、先生がお亡くなりになったら先生のお墓を用意して、そして先生のお墓の前で死んで、来世も先生のお傍

に居るんです！ ではっ！」

笑顔で手を振りつつ、ノドカはとんでもないことをそこその声量で言い放って、駆け足で去っていった。

あつけにとられたように無言でそれを見送るミカの傍で、ウイが小さな声で呟いた。

「……爽やかに喧嘩を売られましたね……」

か細いながら、地獄の底から聞こえるようなおどろおどろしい声だった。それを聞いて、ミカはそういえば、と頷いていた。

確かに、さらりと宣戦布告を受けたようなものである。先生と生涯を共にするのは私なのだから。

自然とそんな思考が頭を過り、ミカは誤魔化すようにわざとらしくクスクスと笑った。模範的なトリニティ生徒の仕草であった。



ノドカの宣言は周囲の者たちにも聞こえていたはずだが、特に耳目を集めることはなかった。それはノドカの普段の行いによるものなのか、或いは戯言と切って捨てられているからなのか、ミカにはわからなかった。そしてミカも、まずは演習のことに集中しようと思いを切り替えており、先程のノドカのことは意識的に思い出さないように努めつつ、スタスタと先陣を切って速足で歩いて行った。

そんな風に歩いていくミカに疑問を感じる様子もなく、スズミとウイとセリナの3人はミカの後ろに続くように歩いていく。見てくれば、ミカが3人のトリニティ生徒を従えているように見えなくもない。

先程までいた廠舎を出て、そこから目と鼻の先にある別の廠舎に入り、そのまま階段を上る。ミカたちに割り当てられた控室は、2階の階段から一番近い場所にある部屋だった。

一応、軽くノックしてみる。中からの応答はない。ドアノブを掴んでゆつくりとドアを開く。中には誰もいなかった。

「あれ、6人って聞いていたけど、まだ誰もいないんだね」
「後から2人来るのでしょうね。さて、誰が来るのか……」

ドアを開けたまま立ち止まっているミカの後ろから部屋を覗き込んだスズミが、部屋のあちこちに視線を向けつつ呟いた。4人はそろそろと部屋に入っていく、最後尾にいたセリナが行儀良くドアを閉めた。

部屋は12畳程度の小さな部屋で、中央にはテーブルとそれを囲むようにパイプ椅子が6つ置かれている。そして壁際にはずらりとロッカーが並んでいる。恐らく、演習参加者の休憩用のスペースなのだろう。実にシンプルな部屋だった。

テーブルの上にはご丁寧に、ケトルやコップ、そしてティーパックや何種類かの茶菓

子が置かれている。

「……紅茶ですか……」

少し不機嫌そうにウイが小さな声で不満を漏らす。とはいえ拒絶するほどではないようで、ウイは進んでケトルのスイッチを入れてテキパキと紅茶セットの準備を始めた。

「ウイさんは、紅茶が好みではなかったのですか？」

「私は、コーヒー派です。先生と同じですよ」

セリナが尋ねると、ウイは不機嫌そうな声のまま即答した。ちなみにウイと先生のコーヒーの好みは結構異なるのだが、態々それを口に出したりはしない。別に先生の好みのコーヒーをウイが全く飲めないわけでもない。その逆もまた然りなのである。

ウイの精一杯のマウントなど気にする素振りも見せず、セリナは微笑みながら自然にウイの手伝いに入った。そんな2人に頭を下げつつ、スズミは肩からかけていた鞆を下ろし、入っていたものを取り出しては床に並べていく。一方で、ミカは早々にパイプ椅子に腰かけてウイたちをぼーっと見つめていた。

そろそろお湯が沸こうかという瞬間、コンコンとノック音が聞こえた。

「はい」

セリナが返事をする、ドアが慎重に開いていき、小柄な少女が顔を出した。

「……いやあく、ごめんごめん、他の人と話していたら、少し遅くなっちゃったね」
目を細め、後頭部を掻きながら少女がスタスタと入ってきた。申し訳なさそうに会釈する少女に、セリナが丁寧な顔を下げる。それにつられるように、スズミとウイも軽く会釈した。

「お久しぶりです、ホシノさん」

「セリナちゃんにスズミちゃん、久しぶり。ウイちゃんも、先週のクラブで会ったばかりだけど、久しぶりだねえ。おじさん、トリニティのお嬢様軍団が眩しくて眼福だよ」
笑顔を浮かべ、アビドス高校3年生小鳥遊ホシノは片手をパタパタと振った。ホシノはゆつくりと部屋の中に入り、部屋全体を見渡した。そして、すぐに椅子に座ったままのミカに視線が固定された。それと同時に、ミカもホシノのオッドアイに吸い込まれるように視線を向けた。

「……は？」

「あ……」

ホシノの口が小さく開き、低い声が漏れ出たと同時に、ミカの口からもため息と驚嘆を混ぜたような声が飛び出した。

そして、暫しの無言。ホシノの砂漠の太陽のような黄金色と海のように深い青色のオッドアイが一瞬光を帯びたように、ミカには見えた。しかし、その光の色をミカの脳

が掴む前に消えてなくなった。自然と喉が鳴り、ミカの視線はホシノの顔から離すことが出来なくなった。

小鳥遊ホシノのことを、ミカは知っていた。アビドス高校にまだ生徒会があった頃から、トリニティのティーパーティーをはじめとする上層部がマークしていた存在。キヴォトスでも有数の実力者とされる少女。面識はないし、正直言って然程ミカの興味を引いていたわけでもないが、それでも顔と名前くらいは記憶していた。他人の顔と名前は覚えるのが苦手なミカですら記憶に残るほど、ティーパーティーが集めた小鳥遊ホシノの情報にはインパクトがあった。

「……あゝ……イロハちゃん……そういうことね。……え〜と、聖園、ミカ……うん、ミカちゃん？」

先に動いたのはホシノだった。無理矢理ミカから視線を離す風ではなく、寧ろ自然体のような動きで、困ったように笑いながらミカに近付いてきた。

そんなホシノを見て、ミカは緩慢な仕草で椅子から立ち上がり、ミカよりずっと小さいホシノの身体を見下ろす。ミカの動きに合わせて、ホシノは顔を上げてミカの顔を覗き込んだ。その表情に、敵意や警戒心はない。

「あ、あの——」

「アビドス高校3年の小鳥遊ホシノだよー。フランクに接してきてくれると嬉しいか

な。私もそうするからさ」

ミカの台詞を遮り、ホシノはスツと腕を伸ばして握手を求めた。その手を取り、ミカは首肯する。

「……うん、よろしく……ホシノちゃん。聖園ミカだよ」

ただの握手。セリナも、ウイも、スズミも、それを無言で見つめていた。ホシノとミカの挨拶以外は、誰も言葉を発しない。

静寂。それを破ったのは、ノック音だった。先程のホシノのノックと比べると幾分か力強い。

「どござい」

次に答えたのはスズミだった。首を回し、ドアを見つめる。スズミの返答を聞き、即座にドアが勢い良く開いた。

「待たせたわね！ さあ、今日も演習をがんば……」

にこやかな笑顔を浮かべて堂々と入ってきた少女は、目の前に飛び込んで来た室内の様子を把握すると動きを止めた。

「……え？」

「あ、アルちゃん。久しぶり〜」

ミカと握手したまま、ホシノがへらりと笑って少女を出迎えた。

歓待に答えることもままならず、陸八魔アルの笑顔のまま固まった顔は、ミカをしつかりと見つめていた。